新しい花園

フーシュマンド・ファテアザム著

神聖な領土内に一つの新しい花園が出現し、その周囲を、高きにある領土の住者と崇高なる楽園の不滅の住民が取り捲いていることを、確信の子らに宣布せよ。されば、汝ら、その地位に到達し、アネモネより愛の神秘を解きあかし、神の秘密を学び、その永遠の木の実より知恵を完成するよう努力せよ。

バハオラ

目次

一、精神を高めるということ
人生の目的
神を知ることは可能か
神の愛
宗教の一体性
宗教はくり返す
宗教は進歩発展する

二、神の顕示者
神の顕示者たち　(人類の大教育者たち)
クリシュナ
仏陀　(釈迦)
モーゼ
キリスト
モハメッド
バブ
バハオラ

三、聖約とは
アブドル・バハ
ショーギ・エフェンディ(守護者)
万国正義院

四、世界平和への条件
人間社会の調和
偏見の除去

真理の探究
世界共通語
男女の平等
教育の普及
科学と宗教の調和
極端な貧富の差の解消

五、顕示者から私たちへの提言
幸福
不滅の魂
天国と地獄
奇跡
道徳的倫理的教義

六、バハイの運営機構
運営機構
バハイの運営機構
精神行政会の選挙
地方精神行政会の任務
地方精神行政会の役員
精神行政会の活動（1）
協議
精神行政会の活動（2）
精神行政会の活動（3）
全国精神行政会
年次大会
地方精神行政会に関するいくつかの質問
バハイ基金

七、規律と義務

祈り
断食
仕事は礼拝である
神の大業の布教
清潔であること
アルコールの禁止
祝祭日
結婚
政府への忠誠
バハイになるには

第一章　精神を高めるということ

人生の目的

　農地と森林を比べてみたことがありますか。森林は木々が自然のままに伸び、通りぬけることもできないほど灌木類や蔓草がはびこっています。ところが農地は整然とした環境に囲まれ、耕やされた土地に運河や小川が網の目のようにあり、穀物畑や水田が広がっています。

　では、森林と農地の違いは何でしょうか。農地にはあらゆるものに秩序がありますが、森林には、それがありません。農地は注意が行き届き手入れされていますが、森林ではすべてが勝手気ままに雑然と伸びほうだいになっています。

　秩序のあるところには目的があります。

　人は目的もなく耕地を作りませんし、理由もなく運河を通したり、井戸を掘ったりはしません。こういうことをするには、すべて目的があってのことです。目的がなければ、私たちは田畑に手を入れずに風と雨と太陽にさらしたままにしておくでしょう。そうした農地はやがて野性の木々に覆われて森林に戻るでしょう。

　田畑には秩序があり、田畑には目的があります。

　宇宙に目を向けて見ましょう。あらゆるものに完全な秩序があると思いませんか。月もその一例です。決まった周期で月はその美しい姿を変えていきます。月はある秩序に支配され、ある法則に従って運行しているのです。その正確さ故に人間は古来より月を天空の暦と見なし、日にちを数えたのです。季節の移り変わりを伝える太陽の動きについても同じことがいえます。宇宙のあらゆる所に秩序があり、従ってこれらあらゆるものに目的があることが分かります。その秩序の素晴しさを思う時、宇宙は理由もなく存在するものではあり得ないことが直感できるのです。

　では、宇宙や人間の存在の目的は何でしょう。この問いに対するバハイの回答はこうです。人間の創造と存在の目的は、私たちに生命を与えた神を知り、神を礼拝することです。これがすべての出発点です。この認識を基礎にすべての達成があるのです。ランプの目的は光を灯されることです。フルートの目的は美しいメロディを奏でることです。私たちは明りの灯されないランプであってはならないのです、沈黙のフルートになってはならないのです。神を知り、神を意識しながら

前進するのが人間の生きる目的なのです。
バハオラは、次のような祈りの言葉を示しておられます。

「神様、あなたが私を造りたまいましたのは、あなたを知り、あなたを崇拝するためでありますことを証言いたします。いまこそ私の無力なことと、あなたの御力の大いなることを、また、私の貧しさと、あなたの御豊かさとを証言いたします。あなたの他に神はいまさず、あなたは危難の中の御救いに在し、御自力にて存在し給う御方に在します。」

私たちは沈黙のフルートではなく、神を讃えて鳴り響く美しいメロディのフルートになることができるのです。

神を知ることは可能か

人間の生命は、太陽より注がれるエネルギーによって保たれています。その光と熱のエネルギーによって私たちは生命を育むことができるのです。太陽の恩恵が届かないとなれば、地上のあらゆるものは死滅してしまいます。しかし、すべての命の源であるその太陽に私たちは接近することも、見つめることさえもできないのです。接近を試みるなら焼き滅ぼされてしまいます。太陽の光と熱に堪えるには私たちは弱すぎるのです。太陽は、その力や熱や光や生命を光線というかたちで私たちに与えているのです。光線が私たちを太陽に結びつけているのです。
万物の創造主である神は、私たちの想像が遙かに及ばないほど無限に偉大な存在です。人間にとってまさに神は「不可知の本質」なのです。では、人間は自分の努力だけで「不可知の本質」を知ることができるのでしょうか。太陽に接近すれば私たちは焼けこげてしまいます。太陽ですらそうなのに、どうして私たちは輝きにみち、最高なる存在である神に近づくことを望むことができるでしょうか。私たちは神に接近することはできません。しかし、神が私たちに近づくことは可能です。太陽はその力を光線によって私たちに届けてくれます。神の導きと栄光の光は仏陀やキリストやモハメッドやバハオラのような顕示者によって人類にもたらされてきました。神の顕示者というものは私たちを神に近づけ得る唯一の媒体なのです。顕示者の存在がなければ、私たちのこの世

界は暗く、私たちの生命は全く死に等しいものだったでしょう。神の顕示者を認識することによって人間は神を知ることができます。そして、顕示者を否定することは神を否定することになります。このことについてバハオラは次のように説明されています。

「神の知識への扉は、人間の面前で閉ざされてきたし、また未来永劫に閉ざされ続けるであろう。いかなる人間の理解力も神の聖なる宮廷には決して近づき得ないのである。しかしながら、その慈悲のしるし、そしてその慈愛の証拠として、神は人間に聖なる導きの昼の星、神の一体性の象徴を顕わし、これらの聖別された存在者の知識をして神ご自身の知識と同一であると定め給うと。彼ら（神の顕示者）を認める者は神を認める者である。彼らの呼び声に耳を傾ける者は神の声に耳を傾ける者であり、彼らの啓示の真理を証言する者は神そのものの真理を証言する者である。彼らより顔をそむける者は神より顔をそむける者であり、彼らを信じない者は神を信じない者である。彼らのすべてはこの世と天界を結びつける神の道であり、天地の諸々の王国にあるすべての者にとって神の真理の旗標である。彼らは人類間における神の顕示者であり、神の真理の証拠、そして神の栄光のしるしである。」（「落穂集」、２１番）

神の愛

神の顕示者の知恵は、私たちの心に神の愛を創り出します。神の愛は永遠の幸福の源です。愛こそは、バハオラが次のように言っているように、私たちが創られた理由です。

「おお人の子よ。我が無限なる生命と永劫不変なる本質の中で、我れ汝への愛を知った。それ故にこそ我れ汝を創り、汝の上に我が面影を刻み、汝に我が美を示した。」

神は私たちを愛し、そして私たちを創り給うたのです。神は私たちを愛し、これからもずっといつも愛し続け給うのです。神は、決して、私たちを救いのない場所に置き去りにはなさいません。神は時代時代によって、いつも私たちにお姿を現わしておいでになります。これについて、アブドル・バハは次のように言っておられます。

「神の愛の啓示が、いかに広大無辺なものか考えてみよう。この世界に現わされた神の愛のしるしは、まず「曙の光」としての神の顕示者である。無限に深い愛は、これら聖なる顕示者によって、人間に反映されたことを思いみよう。導きのかげで、人々は人間の心のめざめの為に、喜んでその生命を捨てた。そして十字架を背負った。人間の魂が最高の進歩をする為には人々はその限られた生涯中、言語に絶する呵責と困難に出会った。」

「人間が他人の為に、自分の喜びや快適な生活を犠牲にすることが、どんなに珍らしいことか。また、他人の為に、自分の眼を与えたり手足を切断する苦しみに堪える人が、どんなに少いか、よく考えてみよ。しかも、顕示者たちは、すべてその生活も血も投げ出し、生命も楽しさも犠牲にし、あらゆるものを人類の為に捧げつくした。「彼ら」の愛がいかに深いかを思いみよ。それが「彼ら」の輝かしい光でなかったら、それによって人間の魂は輝やき渡らなかったろう。

「彼ら」の愛がいかに力あるものであったことか…。これこそ神の愛のみしるしであり、聖なる実在の太陽の光線である。

「神は我らを愛し給う。神は、また、我らが神を愛しまつることを望み給う。」

バハオラがこう言われます。

「おお不思議なる幻影の子よ。我、汝のうちに我が霊の息吹を吹き込んだ。汝、我が愛する者となり得るために。なぜ、汝、我を捨て、我より他に愛する物ありと思うや。」

「神に愛される者になる。これこそはバハイの生涯にとって唯一の目標である。神を最もちかしい伴侶とし、また最も親しい友とし、たぐいなく愛するものとすることは、神の御前にあって最高の喜びである。神を愛するということは、すべてのもの、すべての人を愛することである。なぜなら、すべてが神のものだから。真のバハイたる者は完全な愛人になろう。神はすべての者を清い心で熱烈に愛し給う。神は唯の一人も憎み給わぬ。神は何人をも侮り給うことはない。なぜなら、神はすべての人々の顔に愛する者の顔を見、どこにでも神御自身の面影を見給うからである。神の愛は、宗派の別も、国別も、階級人種の別も、超越しているのである。」（バハオラと新時代）

もし、神の愛が私たちの心にあるなら、人間同志が愛し合うことは容易なことであります。アブドル・バハは次のように言われました。

「信徒たち同志の心にある愛は、精神が完全に結びついた極致から、もたらされたものである。この愛は、神の知恵を通して達成されたものであり、これによって、人間は彼らの心に反映している聖なる神の愛を知ることが出来るのである。たがいに相手の魂に映された神の美を見合って、その相似に気付き、愛し合うようになるのである。この愛はすべての人々を一つの海の波にするであろう。この愛は彼らを一つの天の星となし、一本の木の果実となすものである。この愛は、真実の融和の実現と真実の統合の基礎になるものである。」

次のような神のお呼びかけを思い出しましょう。

「おお実在の子よ。我を愛せよ。さらば我、汝を愛し得ん。もし汝、我を愛さずば、我が愛は決して汝に達し得ず。おお僕よ。これを知れ。」

宗教の一体性

過去のあらゆる宗教はその根源において聖なるものである。これがバハイの信条です。バハイになるということは、それまでに持っていた宗教を捨てるというよりも、神のすべての宗教の一体性を認めることを意味します。そもそも一つしかない宗教を、神は時代時代によって異なった形で人類に示されたのです。あらゆる時代の宗教を神よりもたらされた神聖な教えとして受け入れることによって、私たちは神への信仰を一層完全なものにすることができます。

一粒の種は根を生やし茎と葉を伸し、花を咲かせ、実をみのらせます。形がどう変ろうともその木は常に同じ木なのです。木はただ成長するだけで、その本質は変っていません。太陽を神の啓示と宗教になぞらえて見ましょう。季節によって太陽は地平線上の違った地点から上がります。多くの人々は、神の過去の啓示の太陽が昔その姿を現わした地点にだけ心の目を向けています。そして、太陽が再びその荘厳な姿を現わす時、過去とは違う黎明の場から昇る太陽に彼らは気

付かず、その光線に背を向けてしまうのです。しかし、天を照らす太陽に顔を向け、その光と熱の威力を実感すれば、それが、昔、他の地平線から上ってこの世を照したと同じ太陽であることが容易に判明するのです。

バハイは過去のすべての顕示者が、その地位においても目的においても等しいものであると信じます。どの国のどの時代の顕示者であれ、顕示者は皆、人類の存在の聖木の成長のために尽力する天来の庭師なのです。バハオラは次のように書いておられます。

「太陽を例にとって考えて見よ。もし太陽が今、『我は昨日の太陽である』といったとしても、それは真実を語っていることになろう。また時の経過を心に抱いて、過去の太陽とは違うといったとしても、それもまた真実を語っていることになろう。同様に、毎日毎日がまったく同一のものでしかないといったとしても、それはまさしく真実である。また、毎日それぞれ特定の呼び名や名称を持つために、同一でないといったとしても、それも真実である。その訳は、そのものがまったく同じであっても尚、人々はそれを別々な呼び方で呼び、その特質や特性に差異を見るからである。従って、聖なる顕示者たちがそれぞれ持っている個性や相違点や共通点について考えてみるならば、すべての名称や属性を創造された御方によって言及された、違っていて同一であるということの不可解な神秘を理解でき、あの永遠の美が、様々な時に御自身を違った名称や称号で呼ばれた理由について、不審に思っていた汝の疑問に対する回答が発見できよう。」（「確信の書」、37-38）

バハオラは、神の顕示者たちの間には特別な違いがないことを繰り返し断言されています。顕示者の名前は異なっていても彼らは同じ一つの真理を説き、同じ玉座に座し、等しく神の御前にある存在なのです。つぎのような言葉を通じてバハオラはすべての顕示者たちを信じることの重要性を私たちに説いておられます。

「おお神の一体性を信ずるものらよ。神の大業の顕示者たちの間に差別をつけようとする気を起したり、また、彼らの啓示に伴って表わされたしるしに区別をつけようとする気を起さないよう警戒せよ。これが実に神の一体性の真の意味である。もし汝ら、この真理を理解し信ずるものらであれば。その上、すべての神の顕示者のなす事業と行為は、いやそれのみか、彼らに関係

のあるあらゆるもの及び未来の顕示者が顕わすであろうものはすべて神より定められたものであり、神の意志と目的の反映であることを確信せよ。彼らの人格、言葉、メッセージ、行為、作法の間にわずかでも区別をつけようとするものは実に、神を信じず、神のしるしを否定し、神の使者たちの大業を裏切るものである。」（「落穂集」、24番）

宗教はくり返す

一年には決まった季節があります。まず、春があらゆる美に輝やいてやって来ます。それから夏と豊かな収穫の季節とが続きます。冬が来ると、やがて自然はその豊かな輝きを失います。しかし、どの年の冬の終りも、新しい春の始めに続くものであり、さらにまた、収穫の季節につながるものです。

太陽もまた、地平線上から毎日姿を現わし、次第に高く上り、頂点に達し、それからまた次第に下って没し去ります。太陽の姿が消えさると、地上のすべてのものは闇におおわれてしまいます。

世界中の蝋燭やランプもこの闇を追い散らすことはできませんが、太陽は必ず再び上って来ます。あの同じ美しさと、あの同じ輝きに満ちた太陽がまた上って来るのです。宗教も太陽と同じような周期をたどるのです。「実在の太陽」（つまり、顕示者）がその姿をこの地上に現わす時、それは栄光に満ちた「新しい日」、「新しい時代」の始まりです。人の世は光に満ち、すべての人々が暗い時代が過ぎ去ったことを喜ぶのです。「新しい日」は始まり、次第にその終焉に向かって進むのです。時代の流れとともに、どの宗教でも「天来の真理」が人間の作った教義に覆い隠されてしまう時がめぐって来ます。人間が神の教えの真髄を忘れれば忘れるほど、人間の精神生活は暗さを増していきます。人間が人間自身の教えを作りだし、自分の利己的な動機に合うように宗教を説くようになると、世界中が暗黒時代を迎えることになります。世の中から「実在の太陽」の光がまったく奪われてしまった後はどうなるのでしょうか。暗い夜の時代、人の世を照らすわずかな光源となるのはあちらこちらに灯される小さなランプや蝋燭にも似た聖人といわれる人々です。これらの小さな光は、次々とともし燃やされますが、世界はついに深い無知の眠りに陥いってしまいます。暗黒が頂点に達したこの時こそ「真理の太陽」が、再び地平線上に姿を現わし、この世に新たな輝やきをもたらす時です。過去においてはこの「真理の太陽」は仏陀やキリストやモハメッドを通して輝きました。現在の暗黒時代にも、また、「真理の太陽」は「神の栄光」であるバハオラを通して再び輝き出したのです。太陽が再び燦然と輝いている今、私たちは人工のランプにもはや満足していてはならないのです。かすかな蝋燭の光を守り通すために締め切った部屋に閉じこもっていてはならないのです。外では春の香りを運ぶ美風がただよい、「真理の太陽」が輝いているのです。めざめましょう。

バハオラはつぎのように宣言しておられます。

「我れまことに言う。この日こそは、人類が約束された者の顔を見、声を聴くことのできる時である。神の呼びかけは発せられ、その御顔の光明は人類に向けられたのである。 従って人は皆、自己の心の書よりあらゆる空虚な言葉の痕跡を消し去り、開かれた公平な心をもって彼の啓示のしるしを見、彼の使命の真を立証するものに向かい、彼の栄光の証を見つめなければならない。」 (「落穂集」、7番)

宗教は進歩発展する

アブドル・バハは次のように言われました。

「実在の種から宗教は一本の木となり、葉を繁らせ、枝を伸ばし、花を咲かせ、実をつける。時を経てこの木は衰え朽ちはてる。葉も花も枯れはて消えてしまい、木は裸に、実も枯れはてる。もし人々が、この老木の力は衰えず、その果実は無比なもの、その存在は永遠なものと主張するとしたら、それは正当な考えではない。実在の種が再び人類の心に蒔かれ、そこから新しい木が育ち、新しい聖果が世界を清新なものにしていくものでなければならない。このことにより、さまざまな宗教によって隔てられてきた民族や国民はやがて一つになり、模倣は捨てられ、世界的な規模で真の連帯が確立されるであろう。人類の間には戦争も争いもなくなり、すべての人々が、神の僕として睦まじくなるであろう。」

宗教を精神の学校に例えることができます。人類はそこで聖なる教えを受け、心身共に発展を遂げるのです。この学校の創立者は神です。人間がもし進歩と幸福を願うならば、この聖なる学校に通わなければなりません。まず最初は小学校に行きます。そこで親切な先生がアイウエオの基礎から教え始めます。そして、先生の丹精で親切な導きにより私たちの心が十分に成長すると、私たちは中学校に進みますが、そこにも先生がいて、私たちが小学校で教えられたことを基にして、しかもその上に更に知識の程度を高めて教えてくれます。こうして私たちの心はこの学校で

何人もの先生の導きのもとに成長して行きます。

異なる段階で教えるこれらの先生たちについて、私たちはどれが劣り、どれが優るといえるでしょうか。私たちは小学校の先生が好きだからといって、中学の先生を嫌って良いものでしょうか。私たちは小学校で教えられたことの方が、中学の授業より良かったといえるでしょうか。むろん、そんなことはありません。これらの異なる段階は皆、同じ学校のものです。先生たちは同じ教え方に従っているのですが、ただ私たちの年齢や能力がそれぞれの段階で違っているのです。六歳の時の私たちの能力は非常に小さかったのです。それ故、賢明な学校の創立者は、先生たちに、生徒の年齢や理解力に見合った知識を与えるように注意されたのです。私たちがその学校で教えられたことは、その年齢で受けることのできる最高のものだったのです。もし、いきなり高等学校のレベルから心の学習を始めようとしても、決して進歩することはできないでしょう。宗教でも同じです。神は一つであり、神の宗教の学校も一つです。違っているのは、時代の経過にそって向上していく人間の能力と理解力です。

神の顕示者たちは、神より人類に贈られた聖なる教師たちであり、すべての顕示者は同じ目的をもってこの世に現われるのです。それは、人間の精神的能力を高め、人類のあらゆる面での進歩を促進させるという目的です。人類は年代と共に啓発され、その能力もそれに沿って向上して来ました。つまり、人類の精神は段階的に進化し、顕示者たちは各段階に見合った知識と指導を人類に与えて来たのです。これが神の摂理なのです。私たちはこの進化の摂理に逆らっていつまでも過去の時代の教えや考え方に執着してはなりません。学校の例で言うと、昔の先生を想うあまり昔のクラスに止まっているとしたら、その行為はその先生を悲しませるだけで、真の愛情を伝えるものではありません。教師は私たちがどんどん進み、次の段階の教師たちから多くを学ぶことを望むものです。これはある教師の知識が、他の教師の知識に劣るという意味ではまったくありません。人類の教師である顕示者は、皆同じ高さの知識を有し、彼らの誰もが同じように賢明で、同じように重要な立場にあるのです。差異があるように見えるとすれば、それは各顕示者が各時代の人々の理解力に合わせた知識を与えたからです。神の顕示者たちはいつも、過去の顕示者を肯定し、未来の顕示者の到来を約束してきました。教師としてはあたりまえのことではないでしょうか。過去の教師たちの努力を賛え、その労をねぎらい、そして私たちが最善を尽くすならば次に出現する教師を通じて、より深い知識と導きを得ることができることを約束しています。

人類は「顕示者たちのリレー」についていかなければならないのです。バトンが次の顕示者にわ

たることを阻止することは誰にもできないのです。そして、はるか昔に走り終えた走者ばかりに注意を向けていては人類の進歩はありえないのです。人は、自分の生きる現代に適した教えをもたらす顕示者に向かい、より高く偉大な知識を授けられるよう努力しなければならないのです。

バハオラはすべての宗教の基礎は一つだと教えています。生徒たちは、学校のどの段階でも正直で真実に満ち親切であることなどを教えられます。より高い段階に進んでも、これらの基本的な法則は変りません。小学校でも、中学校でも、また高校でも、これら清らかな性質は常に賛美されます。それらは永遠の真理であり、あらゆる時代を通じて真実です。これらはすべての基礎をなすものです。しかし、基礎だけでは十分だとは言えません。この基礎の上に立って、時代が要求し、人類が必要とするものが打ち建てられなければなりません。これこそ神の宗教が果たすところで、神の宗教は不変の真理の同じ基盤の上に、人間の成長の段階によって、より高い知識と能力とを発達させるものです。しかも、そうしながら、なお且つ、前に現われた神の顕示者たちによって教えられた知識の基盤の上に、それぞれの法則をおいています。それは、あたかも中学で学ぶ代数が、小学校で勉強した初等算数を基礎にしているようなものです。

さて、今、私たちは人間の能力の新しい周期に生きています。ということは、私たちは今や新時代に生き、未だかってないほどの能力と可能性を持っているということです。この新しい時代に生きる私たちがより高度な知識を得て、より深い精神的な真理に向かうことができるのも過去の顕示者たちのおかげです。

第二章、神の顕示者

神の顕示者たち　(人類の大教育者たち)

　神の教えを携えた顕示者たちは世界各地に現われ、その教導の光を輝かせました。現代にその記録を残す主要な顕示者たちを年代順に並べると次のようになります。

名前	年代	生まれた国	聖典	中心的な教え
クリシュナ (ヒンズー教)	紀元前3000年	インド	バガバットギタ	超越
モーゼ (ユダヤ教)	紀元前1300年	エジプト	旧約聖書	正義
ゾロアスター (ゾロアスター教)	紀元前　570年	ペルシャ	アヴェスタ	公正
仏陀 (仏教)	紀元前　560年	インド	ピタカスラマンパダ	中庸
キリスト (キリスト教)	西暦　30年	イスラエル	新約聖書	愛
モハメッド (イスラム教)	西暦　622年	アラビア	コーラン	服従

バブ　　西暦1844年　　ペルシャ　　バヤン　　平等
（バビ教）

バハオラ　　西暦1863年　　ペルシャ　　ケタベ･アグダス　　和合
（バハイ）

次に、クリシュナ、仏陀、モーゼ、キリスト、モハメッド、バブ、バハオラの生涯について簡単に紹介します。

クリシュナ

クリシュナは牢獄で生れ、奇跡的に牢獄から逃れることができました。この話は、人間は自我というこの世の牢獄に生れ、努力と信仰を通じて自我の牢獄から解放されることができることを暗示するものです。他のすべての顕示者と同様、クリシュナは悪の勢力と対決し、それに打ち勝ちました。人間の傲慢と利己主義を象徴する悪の勢力はいかに強力なものであっても、最終的にはそれは真理の力を有する顕示者を押さえ込むことはできません。顕示者は神御自身の英知の門であり、顕示者の教えは人類に救済と進歩を約束するものであります。にも係わらず、人はクリシュナの教えを否定し、その教導を避けるのです。

クリシュナは人々が彼を理解できなかったことを残念に思い、顕示者が人間の形をして現われるために人々の反感を買うのだとこぼしました。いつの時代にも人は神について空想を描き、神の顕示者についても勝手なイメージを持ち、それに合致しないものをことごとく拒否してきたのです。このことをクリシュナはギタという書物の中で次のように言っています。

「あやまてる人々は、人間の形をもって現われた私を軽蔑し、万物の主としての私の気高い本性を理解することはできなかった。」（ギタ書9章11節）

私たちが神の顕示者を見出してその教えを受け入れる時、顕示者のすべての教えや命令に従わなければなりません。この真理をクリシュナは次のように表現しています。

「自らの意志と行動を我に委ね、我を最高の存在と認め、理解したことにおいて確固であれ。そして、心を常に我に向けよ。肩に掛かった義務を降ろし、我のみに安らぎを求めよ。悲しみ嘆くことをやめよ。我は汝をすべての悪より解放するためにある。」(ギタ書１８章、５７節、６６節)

神の顕示者としてクリシュナは、一つの新しい文明をこの世にもたらし、その教えを通じて人類を悪と悲しみから逃れる道を差し記しました。そして、次のような約束を残してこの世を後にしたのです。

「正義が傾き、不正がはびこる時、我は善を保護し、悪を破り、正義を建てるために再び現われる。まことに、我は時代を隔てて現われる。」(ギタ書第４章７節)

この約束がいかに成就したかは後で明らかになります。

仏陀　(釈迦)

釈迦はインドの北部のヒマラヤの麓を治める王家に生まれました。幼いころの釈迦はゴータマ王子と呼ばれ、父親に非常に可愛がられました。父はゴータマ王子に何でも与え、良い王に育つことを念願していました。しかし、ゴータマは俗界の富や喜びが本当の安らぎを提供するものではないことを知らされました。ある日、ゴータマは一人の老人を見ました。次に、病気に倒れた人を、さらには死んだ人を見ました。若き王子はこのようにしてすべての人間が悩みや死から免がれ得ないものだということを発見したのです。そこで彼は精神的幸福のみが、すべての人々を真に幸せにし得るものだということを直感したのでした。そこでゴータマは宮廷を抜け出し、精神的な真実を求めるために遠い人郷はなれた森の中に行き食物を断ち、楽を捨てました。しかし、身体を弱らせ、精神力もまた衰える苦行だけでは道は開かれませんでした。その後、釈迦は菩提樹の

下で初めて悟りを聞きました。その日を境に釈迦は人類を悩みから救うために、一大伝道を始めました。仏陀は人々に強欲を捨て、不正直をなくし、魂や心を清めるよう説得しました。苦悩のこの娑婆こそが、永遠な精神的喜びや幸福を得るために、自らを鍛える場所であると説かれました。

釈迦はその清い生涯において私たちに一つの貴重な模範を示されました。ある時、瞑想にふけっていると、俗界の富と五感の快楽を提供して釈迦を誘惑しようとするマーラが現われました。しかし、釈迦は悟りを開いたお方であったので、悪魔の誘惑の力に打ち勝ちました。それは精神の力の勝利でした。釈迦の素晴しい教えによって、世界中の数知れない人々が精神的な救いを得ることができました。

釈迦の生きた時代の人々は、自分で作った偶像を神と崇め、勝手に神の名においてお互いに争っていました。釈迦は、真実への道は争いを通じてではなく、顕示者の示す道における融和によってのみ探究できるものであると悟っていました。釈迦は人類の聡明な教育者でした。人々の争いを止めさせるために、真理の顕示者なる彼に、ただ従うよう人々に呼びかけた以外には、神についてほとんど語りませんでした。こういうようにして釈迦は神の名において敵対していた人々を統合することに成功しました。

亡くなる直前、釈迦は弟子たちに向って次のような重大な約束をされました。その弟子たちは釈迦が亡くなられると、この教えは次第に衰退に向かうのではないかと心配していたのです。

「私がこの地上に現われた最初の仏陀でもなく、また最後の仏陀でもない。時が来れば他の仏陀がこの世に現われるであろう。その聖者は最高の英知を有し、天賦の聡明さをもって行動し、吉兆を備え、宇宙万物に精通し、人々の無比の指導者、天使や人々の師となる者である。その者は私があなた方に教えたと同様の永遠の真理を述べるであろう。その教えの原点は栄光に満ち、教えの頂点は光に輝き、教えの究極は光輝にあふれる。教えは、その精神と形の双方において光り輝くものである。彼は私が今示しているような、全く完全で純潔な精神生活を伝えるであろう。私の弟子は何百という数であるのに対し、彼の弟子は何千という数となろう。」

この約束は残された信者たちに希望を与え、やがてこの世に再来するであろう栄光に満ちた仏陀から導きの光を受けられることを確信させたのです。

モーゼ

遠い昔、エジプトの王の支配のもとで奴隷としての悲惨な生活を強いられた人々がいました。彼らは祖国のイスラエルからむりやり連れて来られ、厳しい労働に従事していました。神の顕示者の力のみが彼らを苦悩から救うことができたのです。

そこでモーゼがこれらの人々の救済のために立ち上るよう神から命を受けました。彼はたった一人で世界最強と呼ばれるエジプトの国王に立ち向かい、奴隷たちの自由を勝ち取ることに成功しました。この奇蹟は、神の顕示者が出現する時、地上の如何なる力も抗し得ないような神の偉大な威力を授けられていることを物語っています。モーゼは助けもなく単独で、神の王国の福音を奴隷たちに伝えるために立ち上がったのでした。モーゼが自分は神の顕示者であると宣言した時、イスラエルの奴隷たちは苦難の時が終ったことを知りました。自由の身になった彼らはモーゼに従い聖地イスラエルに向けて出発しました。エジプト国王は権力実力をもってしても、イスラエルの民の脱出を阻止する事はできず、国王率いる軍隊は紅海で溺死してしまいました。

神の言葉の威力はイスラエルの人々の生活を一変してしまいました。奴隷に過ぎなかった彼らが、国を興し、やがて人類に知識や学問を広める役割を果たすにいたりました。各国の哲学者や教育者たちが、モーゼの門弟たちに知識を得たのでした。顕示者が現われる時には、単に私たちに精神的な幸福をもたらすばかりでなく、偉大なる知識や能力をも人類に付与されるのだということが、このことからも分かります。

モーゼは神の教えを十戒としてまとめました。その十戒はすばらしい掟です。神を愛し、神以外の何者を崇拝せず、父母を愛し、両親に従順であれと教えています。また、盗みをせず、他人を傷つけず、純潔で常に清潔であれと諭しています。これらの素晴しい教えの外に、モーゼは人々に次のように約束しました。「時が満つる時、万軍の主がすべての苦難を救うために現われる。」万軍の主が出現する時、イスラエルの民は幾世代もの流離の末に再び聖地に戻り、祖先の土地で再び結ばれるであろうとモーゼは約束しました。

万軍の主の到来は果たされました。バハオラは、昔の多くの聖典が約束した「神の日」が到来したと宣言されています。そして、世界各地に散らばっていたイスラエルの民は約束通り再集合し、イスラエルの国を建国しました。

キリスト

キリストのお話は非常に素晴しいものです。それは神の愛、人類の愛のお話です。

キリストが彼の使命を人類に宣言する前に、バブテスマのヨハネという聖者がいました。ヨハネは、神の顕示者の出現が間近であることを人々に伝えて回りました。しかし、人々は新しい教えの到来を恐れ、祖先から受け継いだ昔ながらの習慣や思想に満足していました。特に僧侶たちは新しい顕示者の出現によって自分たちの地位が失われるのではないかと、あからさまな反感を示しました。約束された顕示者は人々をすべての悲しみから救う、という福音を広めるヨハネを捕え、最後にはその聖者の首をはねてしまいました。神の顕示者の出現の準備を整えるために、ヨハネはこうして自分の命をも捧げたのでした。

さて、キリストは貧しい家に生まれました。父のヨセフは村の大工でした。キリストは子供のころから人々に対し善良で親切でした。そして父と一緒に大工として働いていました。しかし、青年になると、仕事を離れてこう言いました。「天の父の仕事に就く時が来た。」

キリストは荒野に行き、瞑想にふけりました。そして、孤独の日々の中で神より与えられた真の使命を発見したのでした。それ以降、キリストは神の福音を教え広めることに専念しました。ある時、キリストはユダヤ教の聖地に行きました。しかし、そこで見たのはお金の貸し借りや様々な商売に占領された寺院の姿でした。キリストは怒り、店を引き倒し、彼らを聖地から追い払ってしまいました。キリストは「ここは神の家です。あなた方は俗欲をもってそれを汚すべきではない」と言いました。宗教を物質的利欲の場としてはならないということをキリストは示したのです。

キリストは周囲を見渡すと、精神的に病み、精神的に死んだ状態の人が数多くいました。そこで、キリストはそれらの人を神の言葉の力で治療し生命を与えました。やがて、キリストの名声は高まりましたが、それを見た僧侶たちの妬みは増幅する一方でした。人々に新しい生き方を教えていたこの名もない若者が、自分たちの支持者を奪ってしまうのではないかと僧侶たちは恐れおののいていました。キリストが人々に向かって、自分こそが聖書に約束された精神の王であると宣言した時、僧侶たちは非常に腹を立てました。というのは、彼らの期待していた王は、権力とこの世の荘厳さを備えた人物だったのです。ところが、キリストは、一介の卑しい大工に過ぎなかったのです。しかし、キリストはこう言いました。「私はあなた方の真の王なのです。私は新しい王国の

主です。現存の俗界の王たちは、神の永遠の王国に比べたら取るに足らない存在に過ぎない」と。しかし、人々はこの言葉を信じようとはしませんでした。そして、僧侶たちは反対に立ち上がりました。結局、キリストは二人の盗人と共にはりつけにされました。十字架上にあってもなお、キリストは彼に敵対した人たちが許されることを神に祈りました。

人々は聖書の本当の意味を理解していなかったのです。神の顕示者を殺害しても、神の声を静めることはできません。そして、キリストの教えはやがて多くの国に伝わったのです。キリストがこの世を後にした時、彼を信じたのは一握りの弟子たちしかいませんでした。しかし、この無学で何の力もない漁夫や農民たちは、神の顕示者を受け入れることによって、すべてに優る力を得ました。彼らは世界中に遠く広く散らばり、キリストの福音を広めました。彼らの多くはキリストの教えのために命をも捧げました。大困難や剣の脅迫の下にあって、彼らはキリストの福音を異国の人々に伝え、神の王国がキリストによって地上に建設されたことを、声高らかに宣言しました。名もない農夫や漁夫たちでしたが、彼らは全世界の圧力の猛襲におおしく抵抗し、神の言葉によって国々を次から次へと征服したのでした。

キリストはクリシュナやモーゼと同様、時満つれば彼は天なる父の栄光の下に再びこの世に来るであろうということを、世の人々に約束しました。キリストは、「まだほかにたくさん言いたいことはあるが、それを理解させることができない」とその時代の人々に言い残しました。そこでキリストは、将来、偉大な顕示者が現われて、彼の言い果たせなかったことを人々に教えるであろうと約束しました。

バハイは、キリストが父の栄光の下に再び現われたという吉報を、キリスト教の兄弟姉妹に伝えています。「誠に父は来たり、神の王国において、あなた方に約束されたことが成就した。」これは、バハオラがキリスト教の指導者たちに送った言葉です。

モハメッド

砂漠に覆われたアラビアという国の話です。砂漠の厳しい気候のもとに住む当時の人々は、部族間の戦いに明け暮れていました。野蛮な習慣も多く、例えば娘が生まれると生埋めにしたり、女性を奴隷扱いしていました。しかし、如何に残酷でも、彼らもまた神の子であり、神の教育を受

けなければならなかったのです。今から千四百年ほど前、アラビアの砂漠に神の顕示者としてモハメッドが生まれました。

モハメッドは名もない一介の商人でした。彼はアラビアから荷を積んで、他の土地に売りに行くキャラバンの世話をしていました。神の顕示者の多くは普通の人でした。釈迦のように高貴な家柄に生まれた人々でさえも、王侯の生活を捨てて平凡な生活を送りました。これは、顕示者の威力と感化力はすべて神に由来することを示すためのものです。

ある日、モハメッドが、丘に登って祈っていた時、神からの霊感を受けました。モハメッドはまったく無学で自分の名前さえ書くことができませんでしたが、神の啓示を受けたモハメッドはコーランの聖句を著わし始めました。モハメッドはもはやキャラバンの世話人ではなく、神の教えを伝える使者となっていたのです。

彼は神の教えをたずさえて人々のところへ行きました。最初のうちは誰も彼の言うことに耳を傾けませんでした。自分たちで造った偶像を拝むことをやめて、唯一の真実の神を信ずべきだとモハメッドが主張すると、人々は彼に反対して立ち上がりました。しかし、モハメッドは「おお人々よ、私は神の使者です。私はあなた方を救い、真理の道に案内するために来たのです」と言いながらひたすら伝道をつづけました傲慢な人々はこの言葉に大変怒りました。最初の内はモハメッドを大目に見ていた彼らも、次第にモハメッドやその信徒たちを迫害するようになりました。けれども、１３年もの長い苦難の後にでも、モハメッドは、なおも慈悲深い唯一の神に顔を向け、その命令に服従するよう人々に求めました。人々はなぜ昔から祭って来た偶像を棄てなければならないのか分かりませんでした。その上、戦いに明け暮れる彼らにはモハメッドの呼びかけについて深く考える余裕もなかったのです。とうとうモハメッドに対して堪忍袋の緒が切れた彼らは、モハメッドと彼の少数の信徒たちを殺そうと決心しました。しかし、まだモハメッドの使命は終わっていませんでした。モハメッドは生まれ故郷のメッカを後に、メジナと呼ばれている町へ向いました。

神の教えの敵たちは、モハメッドと彼の信徒の一隊を殺害するために、大部隊を編成しました。モハメッドは神の教えを守り、信仰を得た人々を擁護するために追う手と交戦することを許しました。このようにして、光明と暗黒の軍勢が命をかけて戦いました。

モハメッドは聖なる羊飼いでした。自分の無邪気な羊の群れを、野蛮な狼の猛襲から護ってやらなければなりませんでした。最初は苦戦の連続でした。彼らの多くは、敵の激しい襲撃を防いでいる内に殺されてしまいました。

モハメッドと彼の信徒たちが強力な敵に囲まれた時、モハメッドは、「我々は神の聖霊と共にあるが、敵は精神的に死んでいるから、相手はすぐに崩壊する」と予言しました。この予言は的中したのでした。やがて周囲の大帝国もモハメッドに帰依し、その聖なる教えは新しい文明の土台を築くに至りました。一握りのアラブ人がもたらした神の言葉は、地球上の広大な範囲に住む人々の生活を変えたのでした。イスラム文化の黄金時代には多く異なった民族が、一大兄弟姉妹の如く結ばれました。彼らは唯一の神、慈悲深くあわれみ深い神に日々の祈りを捧げました。徳の生活と万能の神への従順を説いている聖なるコーランを彼らは唱えました。今日でも、なお世界中の何千万という人々が同じ祈りを唱え、同じ聖書を読んでいます。モハメッドは過去の多くの顕示者と同様に、偉大な神の使者が自分の後に現れるであろうと、信徒たちに確言しました。彼を通して天から下った神の教えは千年後には神のもとに帰るであろうと、モハメッドは言い残しています。その言葉の意味は、千年も経過するうちに、彼の教えの真髄は忘れられてしまうということです。次に、こうも言っています。「真の宗教の痕跡がこの世から消し去られた時、偉大なるラッパの鳴り響く音が聞えて来るであろう。一度ではなく二度。そして世界の人々は神御自身の御顔を拝るであろう。」ラッパの響きは、神の呼びかけを意味します。モハメッドが予言したように、現代において、神の呼びかけは連続して二度起こりました。イスラム教の啓示が終了してから千年が経過した時にバブが現れました。そして、バブのすぐ後にバハオラが自分の使命を宣言しました。人々を神の方へ呼び集め、神の偉大なる約束を思い出させたのはバブでした。そして、バブの直後に二回目のラッパの音が鳴り響、全人類に対し神の御顔を拝するように求めたのはバハオラだったのです。

バブ

バブとは門という意味です。バブは新しい時代、新しい世界秩序への門でした。バブが神から受けた使命について、人々に初めて語ったのはわずかに２５歳の時でした。シラズと呼はれるイランの南部にある美しい町でバブは生まれました。本名をアリ・モハメッドといい、イスラムの予言者モハメッドに直接つながる家の生まれでした。

バブの父親は、彼が生まれると間もなく亡くなったので、母方の叔父の世話になりました。子供

の頃彼は先生についてコーランを学び初等教育を受けました。しかし、幼少の頃から他の子供と違い、難かしい問題を質問したり、自ら回答を与えたりして長老たちをびっくりさせていました。他の子供たちが遊びに夢中になっている間に、彼はしばしば木陰などに行って祈りにふけっていました。

後に、バブが自分は神の顕示者であると宣言した時、彼の叔父も先生もバブの信者になりました。というのは、彼らは子供時代からバブを知っており、他の子供との相違を見ていたからでした。叔父は、バブによって現わされた神の大業のために殉教しました。

バブが神の使者としての彼の使命をまだ述べない頃、二人の有名な神学者がいて「コーランや聖なる伝承によると、約束されたお方がまもなく現われるであろう」と教えていました。この二人は、シエーク・アーマッドとその弟子のセーエッド・カゼムでした。多くの人々は彼らの言うことを信じ、その約束されたお方を受け入れる準備をしていました。

セーエッド・ガゼムが死んだ時に、彼の弟子たちは約束されたお方を探すために方々に分散して行きました。弟子たちの中にモラ・ホセインという若者がいました。モラ・ホセインは何名かの弟子を引き連れてイランの南部の町、シラズに向かいました。無論、その目的は約束されたお方を探しだすということでした。一行は４０日間を祈りと断食にあて、それからシラズへの道をたどって行きました。

彼らの祈りは答えられました。モラ・ホセインがシラズの町の門に近づくと、見知らぬ青年が彼を出迎えに来ていました。この青年はバブその人であったのです。バブはモラ・ホセインを自分の家に案内しました。そこで１８４４年５月２３日に、自分こそが約束されている者であると宣言しました。

モラ・ホセインはシラズの門の外でバブに視線を注いだその瞬間からバブに引きつけられました。しかし、バブの宣言を聞いたモラ・ホセインはバブに対し、約束された者であるという証拠を示すよう求めたのでした。バブは「神の顕示者が著す聖句こそが最強の証拠である」と答えました。バブはすぐに筆を手にとり目にもとまらぬ速度で書き始めました。そして、書きながらバブは澄んだ優しい声でその内容を唱えていました。バブの筆から洪水のごとく流れでる聖句を見て、モラ・ホセインはもはや何らの証拠も必要とはしませんでした。そして、モラ・ホセインは眼に涙を浮かべて神の顕示者の前にひれ伏し、バブの最初の信者となったのでした。バブは彼に「バーボル・バブ」、つまり「門に通づる門」の称号を与えました。バブの宣言が行われたその夜、それはまさ

に新時代の幕開けでした。バハイの暦もバブの宣言のあった西暦１８４４年を元年としています。

モラ･ホセインに続いて多くの人がバブを信じるようになりました。ある者はバブに直接面会し、ある者は彼の書物を読み、また他の人々は夢や幻影によって彼を認めるに至りました。

神の顕示者は太陽にたとえられます。太陽が上る時にはぐっすりと眠り込んでいる者の他は、精神の地平線上に現われた偉大な存在に気付くのです。眠っている者でも、遅かれ早かれ太陽が照っていることを知るようになります。

やがてバブの回りに１８名の弟子がそろいました。バブは弟子たちの一人一人に新時代の夜明けを告げるための使命を与えました。そして、バブ本人はイスラム世界全体に向けた宣言を行うため、イスラム教の聖地、メッカに向かいました。メッカでは、全世界から集まってきた何万もの巡礼者を前に、自分こそが約束された者であることを告げました。しかし、その宣言には誰も耳を貸しませんでした。宣言を終えたバブは帰路についたのでしたが、郷里のシラズを目前にして逮捕されました。それを仕掛けたのは、新しい教えの普及を止めようと団結した僧侶たちでした。まさに、彼らはバブの胸の中に燃える神の光を消すためであればあらゆる努力を惜しみませんでした。その日からバブは多くの苦難に耐えなければなりませんでした。宣言を終えてからは、バブは残された短い生涯のほとんどを囚われの身として牢獄で過ごしました。バブは極寒の山中の牢獄を点々としながらも神の教えを伝えつづけ、バブの忠実な弟子たちも命を犠牲にしても教えを広めることに全力を注ぎました。結局、どんな鉄鎖も、どんな牢獄も、神の言葉の伝播を妨げることはできませんでした。そして、短い期間に何千という人々が、バブの教えを受け入れてそのために生命をなげうちました。

バブに反対する僧侶たちがバブを殺そうと決心した時、バブはまだ３１歳でした。モラ･ホセインに最初に会ったその日から、バブは自分の殉教を予見していました。世界中の人々が神から授かったそれぞれ人生の目的を理解し、神に顔を向けるために、バブは自分の生命を喜んで捧げたのです。

殉教の日は１８５０年7月9日でした。その朝、執行官がバブを連れに来ると、バブは信者の一人に彼の最後の指示を書き取らせていました。執行官はバブに向かって「処刑の時が来た。兵士たちは命令を実行するために広場に整列している」と告げました。バブは答えて言いました、「弟子との話が終るまで待って下さい。」すると、執行官は「囚人には勝手なまねは許されない」と笑いながらバブを連れて行こうとしました。「この世における私の使命が完全に終わるまで、最後の

言葉を語り終わるまで、地上のいかなる力をもってしても私を傷つけることはできない。」これがバブの言葉でした。しかし、執行官は別に気にもせず、バブを広場に引き立てて行きました。最後までバブのそばを離れようとしなかったアニースという青年もバブと共に処刑されることになりました。

広場では７５０人の兵隊が銃を手に待ち構えていました。そこは大変な人だかりでした。二人の体はロープで吊り上げられ、アニースは自分の頭をバブの胸に置き、最後まで愛する師を守ろうとしていました。群衆がじっと見守る中、太鼓がたたかれラッパが鳴り響きました。ラッパの響きが消え去った時、恐ろしい命令が聞こえました。「撃て！」三列にならんだ兵士たちは狙いを定め、順番に銃を発射して行きました。広場全体が煙雲に覆われ、火薬の臭いが広場に充満しました。しばらくして煙が消え去った時、そこには大きな驚きがありました。バブの姿がそこから消え、彼の忠実な弟子は傷一つ負わずに立っていたからです。どう考えてよいのか、誰も分からなくなってしまいました。多くの人々は奇跡が起こってバブは天国に上がってしまったと言いました。兵隊たちもいまだかつてこのような不思議なことが起こったのを経験したことがありませんでした。「バブを探せ」と、執行官の指示が飛びました。そして、執行官がバブがもといた部屋に行くと、バブは前と同じ場所に平然として腰かけて、中断させられた弟子との話をつづけていました。バブは執行官に向かって笑みを浮かばせながら言いました、「これで私の地上での使命は終った。これでもうあなたの目的も果たされるでしょう。」

バブはもう一度広場に連れて行かれましたが、軍隊の指揮官は二度とバブに銃砲を向けることはできないと言って、早々に部下たちを退場させました。間もなく代わりの部隊が広場に呼ばれ、前回と同じような準備がなされました。「撃て！」の号令が再び広場に響き、今度は何百という銃弾がバブとその忠実な弟子の身体を貫きました。しかし、バブの凛々しい顔は銃弾によって傷つけられず、なおもなごやかな微笑を浮べていました。人類のために新時代の到来を宣言し、そのために生命を捧げた者の平安と幸福がその顔に現われていました。

バブは神の偉大な顕示者でした。そして、バブのすべての聖典に共通する点が一つありました。つまり自分のすぐ後にさらに偉大な顕示者が現われるであろう、という約束でした。バブはその人物を「神が現わすであろう者」と呼び、信者たちにその出現を見逃すことのないよう再三注意しました。「神が現わすであろう者」の出現の知らせを聞いたなら、他のすべての事を捨ててその教えに従いなさい、と指示していました。

バブは多くの祈りの言葉を書き残しました。その中で、心から敬愛する者、即ち「神が現わすであろう者」のために自らの生命を捧げたい、と神に嘆願していました。バブは祈りの中で、バハオラの教えにも言及しています。「バハオラの築く秩序に目を向け、主に感謝するものは幸いなり。」

バブの願いは成就し、約束は果たされました。バブの宣言から数えて１９年目にして、バハオラは、過去の時代においてすべての神の顕示者たちが、その到来を約束した者は自分であることを宣言しました。

バハオラ

１８６３年4月２１日、バハオラは世界に向けて宣言しました。「太古より、神のすべての予言者たちの究極の目的として、また最大の約束として、さらには使者たちが最高の希望として待ちこがれていた啓示が今や人類にその姿を現わしたのである。」この素晴しい宣言を行ったのは、バハオラがトルコ帝国の囚人として、当時最も荒廃した場所として知られていたアッカの牢獄に流される直前でした。

この宣言より約４６年前、バハオラはイランの宮廷の著名な大臣の家に生まれました。バハオラは子供の頃から、他の子供たちとは違っていることを誰もが認めていました。１４歳の時にはすでに宮廷中でバハオラの博学は有名になっていました。２２歳の時に父が亡くなり、政府はバハオラに父親の地位を継ぐように要請しました。しかし、バハオラはその天賦の才を政治や世俗的追及に費やすつもりはありませんでした。バハオラは宮廷の生活と大臣の職を棄て、神の道を歩むことを選びました。

バブがその使命を宣言した時に、バハオラは２７歳でした。彼は直ちにバブを神の顕示者として受け入れ、信者の一人になりました。しかし、二人は生涯会うことはありませんでした。政府や僧侶たちがバブの教えを弾圧した時、バハオラもその迫害の嵐に巻き込まれてしまいました。バハオラは祖国のイランで二度まで投獄され、また足の裏が血まみれになるほど鞭で打たれる仕打ちも受けました。

バブの宣言から九年後、バハオラは「暗黒の穴」と呼ばれる地下牢に入れられました。「暗黒の穴」には１５０人程の罪人がつながれていました。バハオラの首には重い鉄の鎖が捲かれ、自由

に頭をもち上げることさえできませんでした。ここでバハオラは恐ろしい苦難の四ヵ月を過ごされました。しかし、神の啓示を初めて受けたのもこの牢獄の中でした。ある夜、彼は夢の中で、四方から次のような言葉が鳴り響いて来るのを聞いたと書いています。「誠に我は、汝自身と汝のペンによって、汝を勝者とする。」

バハオラは我々のために、また人類の未来のためにこれらすべての困難を堪え忍んだのです。人類が偏見や差別や敵意の鎖から解放されるためにバハオラは牢獄での苦しみを受け入れたのです。

ついにバハオラは「暗黒の穴」から解放されました。しかし、財産は没収され、家族と共に祖国を追放されることになりました。冬の厳寒の中を、バハオラとその家族は隣国の都市、バグダットに向かって出発しました。雪に埋もれたイランの山岳地帯をひたすら歩きつづけました。防寒衣を準備する余地もなかったその旅は非常に辛いものでした。しかし、バグダッド到着後もバハオラの苦悩は終わったわけではありませんでした。バハオラの名声はすぐにバグダットとその周囲に広がりました、そして、多くの人々が彼の祝福を受けようと、この流刑囚の戸口にやって来ました。

バブの殉教によって師を失った信徒たちが導きを求めて各地からバハオラのまわりに集まって来ました。しかし、バハオラの名声を妬む者もいました。その中の一人に、バハオラの弟のヤーヤがいました。ヤーヤは兄のバハオラを追い落とし、自分を指導者の座に据えようと企んでいました。顕示者にそむくことによって、自分の破滅を招くということを彼は理解していませんでした。顕示者が現われる時には、彼に献身的に奉仕することを誓う者のみが、真の偉大な効験を得ることができるのです。バハオラの近親の者でも例外ではありませんでした。

ヤーヤの野望は信徒たちの間に分裂を来たしました。このことをバハオラは非常に悲しみました。ある夜、バハオラは誰にもつげずに、こっそりと家を出て遠く離れたクルジスタンの山中にこもってしまいました。この山中でバハオラは二年間生活し、その間祈りと瞑想にふけっていました。小さな洞穴に住み、食事もごく簡素なものですませました。あたりの村人たちは誰も彼の名前を知りませんでした。またどこから来たのかも分かりませんでした。しかし、暗夜に月が出たように、彼の光はクルジスタン中に照り渡り、あらゆる人が「この名も知れぬ者」の話を聞くようになりました。その間バグダットにいるバハオラの家族も友人たちも、バハオラの消息も得られず、傷心していました。ちょうどその頃、彼らは名も知れぬある聖人がいるということを風の便りに耳にしました。

その人は神から授かった天賦の知識を持っているという評判でした。バハオラの長男、アブドル・バハはこの聖人こそ敬愛する父上に違いないと直感しました。そこでアブドル・バハは使者を送り、家族や信徒たちが待ち受けるバグダッドに帰って来てくれるようバハオラに懇願しました。

こうして二年間を祈りと瞑想に過した後、バハオラはようやくバグダットに帰って来ました。家族や信徒たちは大いに喜んだものの、バハオラに敵対する僧侶たちはバハオラがバグダットに住むことを腹立たしく思いました。その訳はバグダットの近くにはイスラム教の聖地が点在し、そこを訪れる巡礼者たちがバハオラの魅力と人柄に引きつけられることを恐れたからです。そこで彼らは政府に働きかけて、バハオラをもっと遠い場所に移すよう請願しました。結局、バハオラは十年間滞在したバグダットの町を後に、トルコ帝国の帝都、イスタンブールに移されることになりました。バグダットを離れる直前の１８６３年の4月２１日、バハオラは初めて、神の顕示者であることを宣言しました。それまではバブの信従であった人々は、バハオラの宣言を期にバハイ（バハオラに従う者）となりました。

第二の追放先となったイスタンブールにおいてもバハオラの博学と人柄の魅力は多くの人々を引きつけてしまいました。「このままではだめだ。バハオラを地の果てに追放しなければならない。」バハオラの敵たちはこう結論づけました。第三の追放地となったのは、イスタンブールからボスポラス海峡を超えて、ブルガリアの国境の町、アドリアノーブルに決まりました。しかし、ここでも安心できず、四度目の追放令が言い渡されました。そして、一八六八年、バハオラとその家族は地中海に面した要塞の町、アッカに流されました。イスラエル北部に位置するアッカは「囚人の町」として悪名たかく、その環境の悪さにアッカの空を飛ぶ鳥は地に落ちて朽ちる、とさえ言われていました。アッカにおけるバハオラの苦難は、筆舌に尽くし難いものがありました。最初の二年間は独房に入れられ、人と会うこともできませんでした。しかし、バハオラはこの独房から世界の最も有力な王や支配者たちに、自らの使命について手紙を通じて訴えつづけ、「神の使者の言葉に耳を傾け、王中の王の教えに従え」と呼び掛けました。

バハオラは世界平和と人類の和合の旗を高々と牢獄の壁上に掲げました。そして、神の力に支えられ、地上のあらゆる勢力にも勝利することができたのです。バハオラの教えは何万という人々の心に影響を与え、長い間憎しみ合っていた民族や人々が神の言葉の威力によって一つの家族のように結びつくことができました。

バハオラは終身刑の罪人としてアッカに送られましたが、到着後九年目にしてその要塞の町を

出ることができました。バハオラの人徳にうたれ、誰もバハオラを止めるものはいませんでした。バハオラは余生をアッカの郊外に位置するバージで送り１８９２年5月２９日、７５歳にしてこの世を去りました。

バハオラの教えは、過去の多くの宗教が聖地と呼ぶ場所から世界の各地に広がりました。仏教の経典では、聖地は西方浄土、約束された阿弥陀仏の座と呼ばれています。ユダヤ人にとってそこは約束された土地であり、神の掟がそこから世界中に向かって、もう一度出される所であります。キリスト教徒やイスラム教徒もまた、幾世紀もの間彼らの聖地であったこの地に関して不思議な予言を多く持っています。バハオラがアッカに流された時から、過去の宗教の聖地はバハイ信教の聖地ともなり、バハイ世界の中心ともなりました。

- バハオラは偉大な神の顕示者であり、過去のすべての顕示者たちの予言を成就しています。各時代の聖なる宗教は、同じ方向に導き、同じ目標に向って教えています。過去の宗教は大きな川のようなものです。それらはすべて一つの大洋に流れ込みます。それぞれの川は、広大な土地に水を注ぎながら時を刻んできました。バハイ共同体はすべての宗教の信従たちで成り立っています。彼らは地上のあらゆる方角から集まり、今では一つの家族として互いに手を握り合い、一つの信仰のもとに結ばれ、「世界平和の達成」という一つの共通の目的のためにそれぞれが各々の生き方で貢献しています。

第三章、聖約とは

アブドル・バハ

バハオラは聖なる新しい世界の設計者でした。バハオラは人類統合のための素晴らしい設計図を示し、聖なる大計画の堅固な礎石を置き、それに必要な材料を選定しました。しかし、バハオラの昇天後、この素晴らしい設計を実現させるのは誰だったでしょう。設計図が完璧でも、有能な技術者の手に委ねなければ、建造物は崩壊するでしょう。如何に設計が完全であり、建物の基礎が堅固であっても、有能な技師によって適切に監督されなければ、その建物は建築家によって意図された設計とは全く違ったものができ上がるでしょう。

生前、バハオラはその聖なる計画の遂行を彼の息子のアブドル・バハの手に委ねました。バハオラはアブドル・バハを「聖約の中心」と定め、アブドル・バハの指導に従うよう信徒たちに指示しました。アブドル・バハという名前は「バハの僕」という意味です。アブドル・バハは偶然にも、バブの宣言が行われた同じ日、つまり１８４４年5月２３日、バハオラの長男として生まれました。

アブドル・バハがわずか八歳の時に、父バハオラはあの恐ろしい地下牢に投獄されました。幼少の頃からアブドル・バハは、彼の父のすべての苦難を喜んで共にしました。バグダットへの辛い追放の旅も父と共にしました。そして、アブドル・バハは生涯の五十年間を、牢獄や流浪に費しました。アブドル・バハがついに自由の身となった時には、彼はもう老人になっていました。しかし神の愛は生涯の最も暗黒な時においてさえも、彼をいつも幸福にさせました。アブドル・バハは深い精神的な幸福を持っていました。獄舎生活の最も苦しい時でさえ、彼の心の喜びは曇ることはありませんでした。

アブドル・バハは次のように言っています。

「幸福には二種類ある。物質的幸福と精神的幸福。物質的幸福には限りがある。その最高の持続期間も一日か一ヵ月か一年ぐらいしかない。それには結果というものがない。精神的幸福は神の愛によって人の心の中に現われるもので、人間世界の美徳と完成に我々を導くものである。それ故、神の愛の光によってあなたの心のランプを輝かせるよう、できるだけ努力しなさい。」

アブドル・バハは、バグダットで父バハオラを神の顕示者として認めて以降、すべてを犠牲にし

てバハオラの大業のために働きました。父を守り、その教えを確立するためにアブドル・バハは休むことなく奉仕をつづけました。その献身的な態度や力強さは、バハオラに会いにくる多くの信者たちの心を打ち、勇気づけました。そのため、アブドル・バハは万人の愛と尊敬を受け、「師」と呼ばれるようになりましたバハオラが亡くなり、「聖約の書」と呼ばれるバハオラの遺言が開封された時、そこにはアブドル・バハを「聖約の中心」と任命する言葉がありました。このことにより、アブドル・バハはバハオラの教えの権威ある解釈者として、また、教えの推進者としてすべてのバハイの先頭に立つことになりました。

「聖約の中心」の存在は、バハイを過去の宗教と区別する非常に重要な特徴です。過去の宗教は、その創始者の死後、分裂を避けることができませんでした。神の顕示者の亡き後、信者たちは誰に向かい、どの方向に進むか、はっきりした指針を与えられていませんでした。結局、誰もが神の教えを自分の理解に基づき解釈し、その意見の相違が分裂を起こして来ました。この分裂を決定づけるものとして、そこには醜い権力争いが常にありました。しかし、バハイでは事情が全く異なっていました。世界の人々の間からあらゆる不和と不統一を除くために現われたバハオラは、バハイの教えそのものに分裂が生じること避けるための最善の手段を講じたのです。バハオラは文書に明記して、すべてのバハイが教えに関する一切の事柄について指導を受くべき者としてアブドル・バハを指名したのです。この文書、即ち「聖約の書」は過去の宗教に共通する悲劇を予防し、バハイを分裂から救ったのです。

「聖約の書」はバハイの統一を保持しましたが、その和合を脅かすものがいなかった訳ではありません。アブドル・バハの権威に反抗したのは嫉妬に燃えるアブドル・バハの弟のモハメド・アリでした。最大の危機が訪れたのは、アブドル・バハがアッカの近くにあるカルメル山にバブの廟を建設しようとした時でした。バブの遺体は処刑の直後、信者たちの手によって運び去られ、半世紀にわって隠された後に、アッカに運ばれて来たのでした。そして、バハオラの指示に従い、アブドル・バハはカルメル山の中腹にバブの遺体を納める廟を建設しようとしていたのです。そこで弟のモハメド・アリは政府にこのような申し立てを行いました。「アブドル・バハは山頂に要塞を築き、政府に反旗をひるがえそうとしている。」事態を重く見たトルコ政府は調査団を派遣し、アブドル・バハの取り調べを行いました。モハメド・アリの影響下で調査団はアブドル・バハに不利な報告をまとめました。そして、調査団長を務める将軍はアブドル・バハを絞首刑に処するために帰って来ると言い残して、アッカを離れました。誰もが、アブドル・バハは処刑されるか再度追放されるか、

と思っていました。友人たちは、まだ時間がある内に聖地から逃れるように勧めました。しかし、アブドル・バハは応じず、次のように答えました、「私にとって、自由の身であることが投獄に等しく、監禁は解放そのものです。私にとって屈辱は栄光であり、逆境は贈りものであり、死は生命そのものなのです。」その間、アブドル・バハはいつものように大業への奉仕に懸命でした。普段通り、アブドル・バハは世界中のバハイに激励の手紙を書きつづけ、地元では病人を見舞ったり貧困者の世話に忙しく働いていました。

やがて調査団が戻って来ました。一行を乗せた船はアッカに向かい、陸からもはっきりと見える距離まで来ていました。しかし、突然船は進路を変えてアッカから遠のいて行きました。その日、帝都では政変が起こり、調査団はアブドル・バハのことをも忘れて一目散にイスタンブールに帰って行ったのです。

アブドル・バハを絞首刑にしようとした将軍は、まもなく政変に巻き込まれて戦死し、トルコ政府自体も崩壊してしまい、新しい体制が誕生しました。そして、生涯のほとんどを牢獄で過したアブドル・バハに自由の時がやって来ました。

多くの困難や苦しみに堪えつつ、バハオラの教えを広めて来たアブドル・バハはついに自由になったのです。そこで、最初に手がけたことは、諸国を回り、世界中の人々にバハオラの教えを伝えることでした。アブドル・バハは年もとり永年の牢獄生活で身体も弱っていましたが、西洋のバハイたちの招待に応えてヨーロッパやアメリカに旅行することになりました。

西洋を旅行中、アブドル・バハは何千という人々に、バハオラの教えについて語る機会を得ました。一日に何回も講演を行うことも珍しくありませんでした。バハオラの教えを受け入れた者も、そうでない者も、アブドル・バハの霊感に満ちた話を聞きに各地から集まってきました。こうやって、アブドル・バハは早朝から夜遅くまで、大業を教えるために多忙な時を過ごされました。アメリカでは、アブドル・バハは、西洋における最初のバハイ礼拝堂の礎石を置きました。シカゴにあるこの礼拝堂は、今では神の大業の栄光に捧げられた美しい建物となっております。ヨーロッパ及びアメリカにおけるアブドル・バハの旅行は、すばらしい成果を納めました。こうして、多くの国にバハイ共同体が設立されました。

アブドル・バハは、１９２１年１１月２８日、７７歳にして亡くなりました。アブドル・バハのお墓は、生前アブドル・バハが建てたバブの廟の一室にあります。

アブドル・バハは、神の教えの解説者であり、バハオラの書き残した聖典の解釈者であり、また

バハオラの教えの完全な模範でもありました。その素晴しい人柄と能力を賛えて、バハオラはアブドル・バハのことを「神の神秘」と呼びました。

ショーギ・エフェンディ（守護者）

アブドル・バハは約３０年にわってバハイ信教を指導し、その和合を守り、その教えを世界に広める努力をつづけました。そして、この土台を揺るぎないものとするためにアブドル・バハは自らの後継者を選び、「守護者」と呼ばれる後継者にこの神聖なる事業の継続を託したのです。その任命を受けたのはアブドル・バハの孫のショーギ・エフェンディでした。

ショーギ・エフェンディは、アブドル・バハの長女を母にもち、父方からはバブの血を引いていました。そのために、アブドル・バハは彼のことを「二つの波打ち寄せる大海からきらめき出た最も驚くべき、無比の尊い真珠」、または「二本の聖木から出た聖なる枝」などと呼びました。ショーギ・エフェンディはアブドル・バハの監督の下に育ち、将来負うべき任務の準備を着々と進めて行きました。ただし、アブドル・バハの存命中はショーギ・エフェンディの任命の事実はショーギ・エフェンディ本人にも、また他の誰にも明かされていませんでした。

アブドル・バハが亡くなった時、ショーギ・エフェンディは英国に留学中の２４歳の青年でした。彼の最大の希望はアブドル・バハに仕え、バハイの聖典をペルシャ語やアラビヤ語の原典から英語に翻訳することによってバハオラの教えを全世界に知らしめることでした。遠く離れた国でアブドル・バハの悲報に触れた時、ショーギ・エフェンディは非常に大きなショックを受けました。悲しみを堪えて聖地に戻るとショーギ・エフェンディは初めて、守護者という重大な責任を与えられたことを知りました。それからの三十六年間、ショーギ・エフェンディは大業の発展以外のことは何も考えず、その推進に日夜奮闘しました。

バハオラが示した世界秩序をどのようにして樹立するのか、アブドル・バハの示した世界的な布教計画をどのように展開するのか、その方法や方向性を定めたのはショーギ・エフェンディでした。この大いなる目標に向けて、ショーギ・エフェンディは長年の間、世界中のバハイを鍛え、古い時代の思考や習慣を捨て、バハオラの描いたビジョンにふさわしい世界観を育み、機構を打ち建てるよう指導しました。この時期、ショーギ・エフェンディの呼びかけ

に応えて、多くのバハイが祖国を後にして「パイオニア」として世界各地に散らばり、バハイ共同体の拡大に務めました。その結果、アブドル・バハの時代には三十五カ国にしか広まっていなかったバハオラの教えが、ショーギ・エフェンディの指導のもと、世界中のほとんどの国や地域に確立されるに至りました。また、同時期において、バハイの聖典が英語を始めとする世界各国の言語に訳され、バハオラのメッセージが全人類に着実に提供されていきました。

ショーギ・エフェンディの指導のもと、バハイ世界の中心とその聖地が隣接するアッカおよびハイファにおいても大きな進展がありました。アブドル・バハの手によって築かれたバブの廟を囲むように建てられた美しい大理石のドームは１９５３に完成し、つづいてバブとバハオラの聖典やその他の貴重な歴史資料を保存陳列する国際資料館が建てられました。これらの事業は、カルメル山上に今日そびえるバハイ世界本部の礎を築くものとなりました。

ショーギ・エフェンディが最後に取りかかった事業は「十年聖戦」と呼ばれる布教計画でした。その主な目的は、１９６３年までの１０年間で、世界中のすべての国や地域にバハオラの教えを樹立させることでした。ショーギ・エフェンディの呼びかけに応えて、多くのパイオニアが世界各地に散らばり、信教の拡大のペースが大きく加速されました。しかし、計画の中間点を前に、ショーギ・エフェンディは１９５７年１１月４日、旅行先のロンドンで突然亡くなりました。守護者の亡き後、十年計画を成功裏に導いたのはショーギ・エフェンディによって任命された大業の翼成者たちでした。バハオラの教えの普及と保護をその任務とする２７名の大業の翼成者たちの内、９名は常時聖地に留まってバハイ世界本部の仕事を継承し、残りの人々は世界中に散らばって、守護者の十年計画の完成に力をつくしました。

十年計画が終了した１９６３年は、バハイの歴史にとって一つ新しい道しるべとなりました。バハオラの宣言１００周年を祝うこの年、バハイの最高機関である万国正義院のメンバーが始めて選出されました。

万国正義院

バハイ世界の最高機関は万国正義院です。万国正義院は本部をハイファに置き、その九人のメンバーは５年に一度行われる選挙によって世界中のバハイの中から選ばれます。この選挙で

票を投ずるのは世界各地の全国精神行政会のメンバーたちです。

バハオラは現代に適した根本的な原則・規則と、神の教えを私たちに与えました。しかし、世界の状況や私たちの生活様式は絶えず変化しつづけます。それに沿ってだんだんと新しい社会的な規律が必要となって来ます。バハオラによれば、これらの新しい規律や規定は、常に神の導きの下にある万国正義院によって書き加えられなければならないのです。

万国正義院について、アブドル・バハは次のように言われています。

「その正義院は神の加護のもとにある。聖典に書かれていない問題についてその正義院が満場一致か過半数で決定するならば、その決定や命令は誤りのないものである。」

つまり、万国正義院の決定は神に導かれ、誤りのないものであるとバハイは信じるのです。従って、万国正義院の定める規定を、その時代の要求に完全に一致したものとして受け止めるのです。しかし、万国正義院はバハオラによって定められた基本原則を変更することはできません。この点については万国正義院の権限の範囲は、バハオラによって定められた原則を実行する上で必要な補足的な規定を定めることです。

例えば、バハオラの教えの一つに「極端な貧富の差の排除」があります。しかし、バハオラの書物にはこの原則をどのようにして実現させるかは明記されていおらず、具体的な方策を決めるのは万国正義院の仕事です。もう一つの例として上げられるのが「世界共通語」に関するバハオラの教えです。世界は共通の言葉を必要としているとバハオラは説いておられます。しかし、どの言語を選ぶかについては指示はなく、それは万国正義院の決定に委ねられています。このことについてバハオラは次のように書いておられます。

「....我が書簡を通じて、我は正義院の面々に次のように命じた。既存の言語の中から一つを選び、もしくは新たな言語を創り、同様に一つの字体を選択し、それを世界中の学校ですべての学童に教えよ。そして、このことにより世界を一つの国、一つの家族とせよ。」

バハオラによって示されたことを万国正義院は変更できません。同様に、万国正義院はアブドル・バハやショーギ・エフェンディによる解釈に変更を加えることはできません。ただ、世界の状況の変化に応じて万国正義院は自ら決定したことを変更することはできます。

アブドル・バハの遺訓の中に、次のように書かれています。

「すべての者は最も聖なる書（アグダスの書）に向かわなければならない。そしてその聖なる書に明白に記録されていないすべての事柄は万国正義院に照会されねばならない。この正義院が

満場一致または多数決で決定したことは、実に真理であり、神自身の御目的である。それより逸脱する者は真に不和を好む者であり、悪意を示し聖約の主に背を向ける者である。」

第四章、世界平和への条件

人間社会の調和

バハオラは私たちに人類の和合を説いています。人間は皆、等しく神の意志によって命を与えられ、その命には価値の優劣はないのです。すべてが神の子であり、すべてが一つの家族に属する兄弟姉妹なのです。この認識がバハイの求める人間社会の調和の出発点なのです。

和合の光がこの地上を照らすまで、人類は常に他との違いに注目し、自分を他に優る存在、もしくは他に劣る存在であると思いつづけるでしょう。人類は違いの原因にこと欠きません。ある者は皮膚の色で判断して来ました。白は黒を兄弟として認めず、黒は黄色を避け、黄色は白を軽蔑する具合に、憎しみと不信の輪は地上を覆ってしまっています。しかし、バハイの目にはこの皮膚の色の違いは美しいものとして映るのです。人類は地球という花園に咲く花なのです。同色の花に埋もれた花園よりも、多様性と変化に富んだ花園の方が美しいのではないでしょうか。心を魅くのは、多様なるものが互いにゆずり合って調和を作りだしている風景ではないでしょうか。そして、太陽は花園に咲くすべての花に等しくその光を贈るのです。同様に、神の愛の光は皮膚の色に関係なく、地上のすべての人々を区別なく育んでいるのです。神は私たちの皮膚の色がどうあろうと、また、私たちが世界のどこの出身であろうと、区別なく私たちすべてをその愛で覆っているのです。では、その愛を共有する私たちが互いを何故他人と見なすことができるでしょうか。愛の灯火は世界の人々の心の中に灯されています。ただし、その光は古くから伝えられて来た偏見や憎しみによって覆いかくされた状態にあるのです。その覆いが取り外されれば、和合の光は人類を包み込み、世界が一つの国であり、人類は一つの家族であることに人々は気づくでしょう。

バハイの書物の中から：

「おお、愛されし人々よ。和合の聖堂は建てられたのであるから、互いを他人視してはならない。汝らは皆、同じ木になる果実であり、同じ枝になる葉なのである」。

（バハオラ）

バハオラの教えの中に、人類は一つであるという教えがあります。人間はすべて神の羊であり、神は親切な羊飼いです。この羊飼いはすべての羊に対し親切です。これは、神が彼ら全員の創造者であり、彼ら全員を養い訓練し、かつ保護してきたからです。羊飼いはすべての無知なものがあれば、それを教育しなければなりません。もし幼いものがいればその成長を見守ってやらなければなりません。病気のものがあれば、介抱しなければなりません。憎しみや敵意があってはならないのです。無知なもの、病めるものも親切な医師が治療を施すがごとくに育まれなければならないのです。　アブドル・バハ

偏見の除去

国家的偏見であろうと、民族的偏見であろうと、宗教的偏見であろうと、あらゆる偏見は忘れさらなければならないと、バハオラは教えています。人々が偏見にしがみついている限りは、平和は確立されないでしょう。過去のすべての戦争、すべての流血の惨事の根底にはある種の偏見が横たわっていました。人は宗教のことで戦い、世界に破滅をもたらし、何百万という同胞の命を奪って来ました。このことについてアブドル・バハは次のように言っています。

「この偏見や敵意が、宗教が原因で起こったものであれば、宗教は友情の根元となるべきものであり、さもなければ宗教は効果なきものなのであることを知りなさい。この偏見が、国籍上の偏見であるとすれば人類は皆一つの国の市民であり、すべては一本の木から生じていることを考えなさい。国々はその木に茂る枝であり、一人一人の人間はその枝に成る葉や花や実なのです。にもかかわらず、種々の国家が設立され、それによる流血と破壊が絶えないのは、人間の無知と利己主義によるものなのです。

愛国的偏見についていえば、これもまた絶対的無知によるものです。何となれば、地球の表面は人類が共有する一つの祖国であるからです。人は地球のどの部分においても生きることができます。このことからも全世界が人間の生れ故郷であることが分かります。すべての国境や関所は人造のものにすぎません。神の創造には国境などのという境はありません。ヨーロッパは一つの大陸で、アジアも一つの大陸、アフリカも一つの大陸、オーストラリアも一つの大陸であるが、人々は利己的な理由で大陸を分割し、それぞれの国や領土を固有のものと考えたのです。ある

地域を彼らだけの国と考えたのです。神はフランスとドイツの間に国境を作りませんでした。そもそも両国は地続きなのです。初期の時代、人々は利己的な理由で国境や関所を設け、時のたつにつれてその国境がますます重要性を帯び、ついには深い敵意や、流血や、貪欲を起させるに至ったのです。この状態は無限に続き、愛国の心がこのような低次元に留まるならば、それはやがて世界の破滅の主因となるでしょう。正義を愛し、聡明なる人ならば、単なる空想によるこのような区別を肯定することはないでしょう。人は自分の生まれた土地を故郷と呼ぶ訳ですが、地球全体がすべての人間の母国なのであって、限られた土地だけが母国ではないはずです。要するに、我々はほんのわずかな期間この地球上に住み、やがては地中に埋められていくのです。結局、地球は我々の永遠の墓場なのです。この永遠の墓場のために血を流し、互いに争う価値があるでしょうか。否、そのような価値はまったくありません。神はその争いを喜びません。聡明な人もその争いを承認するはずはありません。

考えて見なさい。動物たちには愛国的な争いはありません。彼らは互いに最高の友情を示しています。例えば、東から来た鳩と、西から来た鳩と、南から来た鳩と、北から来た鳩がたまたま同時に一つの場所に到着すると、彼らは直ちに仲よく交わります。しかし、猛獣は違います。出会うやいなや、互いに襲いかかり殺し合いを始めます。猛獣たちは一箇所に集い平和の中に住むことはできないのです。」

真理の探究

ヒンズー教の家庭に生まれた子供はヒンズー教徒になります。両親がイスラム教徒だと子供たちもまたイスラム教徒になります。もし、彼らが仏教徒だと子供たちも仏教徒になります。なぜでしょう。世界の大部分の人々は、祖先をまねて行動しているのです。これは「盲目的模倣」です。これを改めない限り、人類の和合は達成できません。人々はそれぞれの模倣を巡って争っています。人は、自分たちは正しいが、他の人々は皆まちがっていると主張します。しかし、もし違う家に生まれていたら、いま自分が正しいと信じるものとまったく違う方向に進んでいたかも知れないのです。

バハオラは真理は一つだと教えています。もし世界の人々が「盲目的模倣」を止めて、真摯な

態度で真理を探究するならば、そこで得られた結論は、人類の和合を打ち建てる基礎となり得るでしょう。次のような例え話があります。ある家の子供は、様々な色のついた窓ガラス越しにいつも空を見ていました。そして、空の本当の色は何かということでいつも口論になっていました。空は赤いという子がいれば、緑だという子もいました。子供たちは自分の視野を阻むガラスの色で空について判断し、自分の見た色こそが正しいと信じていました。しかし、家を出て空を見上げれば、一目瞭然です。真理に触れる機会さえあれば多くの争いの原因は瞬時にして消滅してしまうのです。

バハオラは人々に対し、代々住み慣れた家を出て、空を見上げるよう呼びかけているのです。目の前から色ガラスを取り除けば、多くの論争の原因も取り除かれるのです。過去の習慣にとらわれることなく、人は自分の責任で真理を探究しなければなりません。そのことによって得られた真理は人類を過去から解放し、新たな融和への出発を可能とします。

このことについてアブドル・バハは次のように述べています。

「神の顕示者たちのもたらす宗教は、それぞれの名前や用語が異なっていても、実際には同一の教えなのです。その教えが地平線のどの地点から発せられたにせよ、人はその光を尊び、愛する者でなければならないのです。バラを愛する者は、そのバラがどこの土壌に育ったかは気にかけません。真理を求める者は、真理がどの方向にあってもそれに向かいます。ランプへの愛着は、その光を愛することとは違います。土への愛着は無意味であって、その土から生まれたバラを楽しむことに価値があるのです。果実を味わうことに意味があり、木そのものを愛しても無益です。逆に、どんな木に成っていようと、果実を味あわなければ何のためにもならないのです。どの口から発せられようと真理の言葉は認められなければならないのです。どんな本に記載されていようと、完全な真理は受け入れられなければならないのです。偏見を抱くならば、それは損失と無知の原因となります。宗教間、国家間、民族間の争いは誤解から起こるものです。種々の宗教の根底に横たわる原理原則を発見しようと調べて見るならば、それらは一致することを見い出すでしょう。つまり、宗教の根本は同じです。その真理には差異はないのです。この認識を持てば、異なる信仰をもつ人々も一致点を発見し、調和を達成することができるのです。」

「宗教の真理は、いつも同一であるにもかかわらず、人類は全く模倣と虚偽に陥っています。真理は迷信によって覆いかくされてしまっています。世界は暗黒に包まれ、宗教の光りは奪われてしまっています。暗闇のなかでは不和や争いが生まれます。宗教は人類の和合のためにあるに

もかかわらず、儀式や教義の違いから宗教間の不和が起こったのです。真の宗教というものは、人類間の愛と和合の源泉であり、徳の高い人格の根源です。しかし、人々はにせ物と模倣にしがみつき、和合に導く本物をなおざりにして来たのです。そのため、人類は宗教の光輝を失い、その光明を奪ったのです。人々は祖先伝来の迷信に従って生きているのです。この事態によって、人々は天与の真理の聖なる光を捨て去り、模倣と空想の暗黒の中に座しているのです。生命力の源となるべきものが、却って死の原因になってしまっているのです。知識の証拠であるべきものが、却って今では無知のしるしとなっています。人間性の崇高さの要素が、却って堕落のもとになっています。そのため、宗教家の領域は次第に狭められ、暗闇に包まれ、逆に物質主義者の領域が広められ前進しています。それは宗教家が模倣と、にせ物に執着し、宗教の神聖さと、聖なる真実性を無視していたからです。太陽が沈むと、こうもりが空を飛び交います。彼らは光りを嫌う夜行性なのです。同様に、宗教の光が失われた時に、物質にすべてを求める人々が現われて来るのです。彼らもまた夜空に舞うこうもりなのです。宗教が没落する時が彼らの活動時期なのです。世界が暗くなり、雲がすべてを覆う時、彼らはなおも陰を追うのです。」

「バハオラは東方の地平線から出現し、太陽の輝きの如くこの世に現われたのです。バハオラは聖なる宗教の真理を映し、模倣の暗黒を追い払い、新しい教えと世界の蘇生の基礎を築いたのです。バハオラの第一の教えは真理の探究です。人は自ら真理を探究し、単に祖先伝来の型を模倣したり、これに執着することは止めなければなりません。国々は真理を求めず、模倣に頼り、種々雑多な模倣によって生じる信仰の相違は、争いや戦いを生むに至ったのです。これらの模倣が存続する限り、人類の和合は不可能です。それ故、我々は光によって雲や暗黒を追いちらすために、真理を探究しなければならないのです。真理は一つであって、真理が多数あることも分割されることもあり得ないことです。もし、国々が真理を探究するならば、彼らは和合し統合するでしょう。バハオラの導きと教えによって真理を探究した結果、多くの人々は一つに結ばれ、今では和合と愛のもとに生きています。彼らの間にはもはや、敵意や闘争の片鱗さえ存在していないのです。」

世界共通語

世界中で誤解の原因の一つに、人々がお互いに言葉を理解できないということがあります。どの国も違った国語を持ち、自国を離れて外国に行くと、まったく見知らぬ他人の中にいることを感じるでしょう。

バハオラは世界の人々すべてを統合し、一つの家族のようにするために出現したのです。従って、バハオラは世界共通語の確立を唱えています。それは各人が自国語を学ぶとともに、世界中で決められた共通の言葉を学ぶということです。これにより、人々はどこの国に行こうと互いに理解し合えて、安心し合うことができます。

言葉の違いは、しばしば誤解を生み、危険な争いに発展することがあります。例えば、神の名前・呼び方を例にとって見ましょう。ヒンズー語では神をイシュワラ、アラビア語ではアラー、英語ではゴッドと呼びます。言葉の違いにとらわれる人は、ゴッドとイシュワラあるいはアラーとはまったく違う存在であると錯覚してしまいます。そして、お互いにこれらの異なる呼び方について争います。もし、人々が一つの世界共通語を学ぶなら、それは彼らが皆呼んでいる同じ創造主であることが容易に理解できるでしょう。このこと事態が、人々の間に多く存在する誤解を取り除くことになるでしょう。さらに、バハオラによると、世界共通語は世界のすべての国々の合意のもとで設定されなければなりません。今日の世界は共通語の必要性を痛感しています。バハオラの予見した全世界参加の国際会議でその共通語を決定する時期が近づきつつあるのではないでしょうか。

男女の平等

鳥は左右の翼を羽ばたくことによって空を飛びます。片方の羽を抜けば、残った翼がいくら強力でも鳥は飛べません。飛ぶには、二つの翼が必要なのです。

アブドル・バハは鳥を例に次のような説明をしています。

「人類は二つの翼を持った鳥によくにています。一方は男性であり、他方は女性です。両翼が強くてその共同の力で推進しなければ、その鳥は天に飛び上がることはできません。」

「神はすべての創造物を対に造られました。人間も、動物も、植物も、すべてこれらには両性があり、その間には平等があります。植物界にも雄木と雌木があり、両方とも同等の権利を持ち、同じ美を誇っています。敢えていうなら、実を結ぶ方の木は、実のならない木よりすぐれていると言えます。動物界においても、雄と雌とは同等の権利を持っています。そして、それらはその種族の発展にそれぞれ分担を担っています。さて、植物界、動物界においては、性の一方が他方に優るという問題は存在しません。しかし、人間社会に及んでは非常に大きな差異が見られます。女性はあたかも劣っているかのように扱かわれ、同等の権利や特権を許されないこともしばしばです。この状態は、自然がそうさせるのでなく、教育の結果によるものです。神は何ら区別していません。神の目から見れば、一方の性が他方に優るということはないのです。」

神は私たちすべてを平等な人間として創造しました。神にとって男女の違いは関係ないのです。愛情に満ちた親にとって息子も娘も同じように大事なのです。

このことについて、バハオラは次のように言っています。

「男女は両方とも人類に属し、神の評価においては同等である。神の創造計画においては、男女は互いを補なう存在である。神の目に映る人間の唯一の違いはその行動の純粋さと正しさである。創造主の精神に最も近く、最も似たものを神は好み給う。」

神の恵みは男性にも女性にも同様に与えられますから、私たちは両性の間に区別を設けてはならないのです。社会における男性の任務は、女性のとは違っているかも知れませんが、権利におては同じでなければなりません。女性の才能が、男性より劣っていると考えるべきではありません。過去においては、男女に同じ教育や機会が与えられませんでした。そのために、特に女性はその能力を十分に発揮することができなかったのです。

バハイ共同体が、毎年精神行政会のメンバーを選挙する時、その選ぶ基準となるのは各人の誠意と能力です。そこには男女の区別はありません。神が見るのは、人の心と性格であり、性別ではありません。私たちもそうでなければなりません。

「考えが純潔で、教養を有し、学術にすぐれ、博愛の行ないに厚い人はそれが男性であろうと女性であろうと、白人であろうと、有色人であろうと等しく認められるのです。そこにはいかなる区別もないのです。」　　（アブドル・バハ）

教育の普及

バハオラの教えの一つに、すべての子供は、男の子も女の子も教育を受けなければならないというのがあります。もし親が自分の子の教育を怠るならば、その親は神の御前に出た時、責任を負わなければなりません。これがバハオラの教えです。

「すべての父親には、読み書きをはじめ、聖なる書簡に示されているあらゆることについて息子や娘を指導する義務がある。命ぜられたことを怠る者については、もしその父親が裕福であれば、信託人らは教育に必要な費用を父親から徴収し、裕福でなければこのことは正義院に委ねられる。まことに、我は正義院を貧しいものや、困窮者の避難所とした。」

従って、子供の教育はすべてのバハイに課せられた義務です。親が子供の教育ができない場合は、教育を受けさせるよう精神行政会が親を指導しなければなりません。そして、貧困のために教育が受けられないのであれば、精神行政会は共同体の資金の中から、子供の教育費を出してやらなければなりません。バハオラの言葉から、子供の教育は神聖な義務であることが明らかです。そして、バハオラはこうも言っています。「自分の息子、あるいは他人の息子を育て上げる者は、我自身の息子を育てたに等しい。」自分の子供を正しく教育し、もしくは人の子供を育てることは、顕示者の子供を育てることと同等であるという訳です。

多くの伝統社会では、家の仕事が忙しいので子供を学校にやれないということがあります。しかし、これはバハイでは許されません。家事を手伝うことがいかに重要であっても、教育を受けることが優先されます。つまり、教育は神の法であるからです。同様に、伝統社会では女性の教育をおろそかにする場合があります。このことについて、アブドル・バハはこう説明しています。「男女の権利は同等であるが、教育においてもし順位をつけなければならないとしたら、女子を先に教育しなければならない。その理由は、女子は将来母となるものであり、母親は次の世代の最初の教育者であるからである。」

バハオラによると、教育はただ読み書きを学ぶだけではありません。子供たちが人類に奉仕し得るよう教育しなければなりません。自分の国のみを愛し、他国を疑い、蔑視するような教育を子供たちに与えてはならないのです。ドイツ人であったり、アラビア人であったり、日本人であったりする前に、世界の市民であることの意識を育むことが求められるのではないでしょうか。人類の和合へと向けて歩みだした今日の世界では、自分の民族、宗教、階級が世界で一番すぐれてい

ると信じさせるような教育は不要なのです。教育の目的は「地球は一つの国であり、人類はその市民である」という意識を育て、全世界をより良くするために愛と奉仕を捧げるように、子供たちを養育することにあらねばなりません。このような教育法が世界中で採用されれば、人類の和合は速やかに達成されるでしょう。

教育に関して、バハオラは次のように処方しています。

「神の書中に記されている報いと罰によって子供たちに禁制を侵させず、法の衣で装わせるよう、学校は先ず宗教の諸原則をもって訓育を行なわなければならない。しかし、これも子供たちを無知な狂信や頑迷に陥らせないような方法で行なわなければならない。」

つまり、顕示者によって伝えられた精神的価値観こそがあらゆる教育の基礎でなくてはなりません。精神的な啓発によってのみ、人は一層幸福な生涯を送ることができるのです。それは、隣人に対して何らの偏見も持たず、将来に対して希望と確信に満ちた生活を送ることを学ぶからであります。

教育というものは私たちを迷信や偏見、そして物質偏重のわなから解放し、自由を与えるものでなくてはなりません。このことについてアブドル・バハは次のように書いています。

「バハオラの教えの中に人間の自由ということがあります。即ち、理想なる神の威力によって人は自然界から解放されなければなりません。人は自然のとりこである限り、猛獣に等しいのです。つまり、生存競争は逃れることのできない自然界の状況なのです。生存競争こそがすべての災難の源となり、最大の苦悩ともなるからです。」

バハイは決して、真の知識を学ぶ機会を子供から取り上げてはなりません。バハオラの戒めに従って子供の教育を真剣に考えていかなければなりません。

「知識は人間の生存の翼であり、高所に登るはしごである。知識を得ることはすべての者の義務である。ただし、その知識とは世の人々に利益を与えるような学問をいうのであって、単に言葉に始まり言葉に終るようなものをいうのではない。科学や芸術を究めた者は、世の人々の間にあって大きな特権を得よう。実に、知識こそが人間の真の宝である。知識は栄誉、繁栄、歓喜、喜悦、幸福、喜びを生み出すものである。」

科学と宗教の調和

人と動物の違いはどこにあるのでしょうか。神は人間のみに思考力を与えました。人はその思考力を使って、時代と共に社会を進歩させて行くことができました。私たちは、数百年前の先祖とは非常に違った生活をしています。新しい発明や発見のおかげで、人々はより快適に暮らすことができるようになり、病気や無知と戦うことも可能になりました。しかし、物質的な進歩は、私たちが同様に精神的にも進歩しなければ何の役にも立ちません。宗教のない科学は多くの危険をもたらし、科学のない宗教もまた災いの原因となり得ます。人類が真に進歩するためには科学と宗教の両者が必要なのです。科学と宗教とは手に手をとって行かなければなりません。

科学は私たちに道具を提供し、宗教は私たちにその使い方を教えます。斧や鎌は、それを正く使えば、非常に有用なものです。しかし殺人者が斧や鎌を握れば、その同じ有用な道具が危ない武器となります。今日、世の中に起こっている多くの争いは、科学が人々のために道具を提供しているのに、人々はそれを武器として用いているからです。その理由は、人々がそれらの道具の最も良い利用法を教える宗教を持っていないからです。他方、もし私たちが科学を捨て理性を用いることを止めるならば、宗教は無知と迷信以外の何物でもなくなり、世の人々に有害なものとなるでしょう。昔は、人々は宗教と科学は協調できないものと考えていましたが、バハオラは真の宗教は真の科学と同調するものであることを教えています。人間の精神と理性は、同じ真理を受け入れることができると教えています。

科学と宗教についてアブドル・バハは次のように述べています。

「神は宗教と科学とを我々の理解の尺度とされたのです。このようなすばらしい力を無視しないように注意せよ。すべてのものをこの天秤にかけなさい。信仰を科学と調和させなさい。真理は一つであり、矛盾はあり得ないのです。宗教が迷信や因襲や無知な独断をしりぞけて、科学と一致を示す時、世の中に偉大な統合力、浄化力が生れるでしょう。その力は、世の中から戦争や不和や争いごとを一掃し、人類を神の愛の力で統合させるでしょう。」

極端な貧富の差の解消

バハオラによれば、世界で最も貴重なのは正義です。

「おお精霊の子よ。我が見るすべてのもののうちで、最も愛するものは正義である。もし、汝が我を欲するならば、正義から眼をそらすな。」

また、アブドル・バハは次のように書いています。

「バハオラの教えの中で、最も重要な原則の一つはこれです。人は皆、生活に必要な日々の糧を得る権利があり、このことは生活手段の平準化を意味します。人々の境遇を調節して貧困をなくし、各人が自分の立場や状況に応じて、できるだけ安らかに暮らせるようにしなければなりません。世の中には富を山と積んだ人々があるかと思えば、無一物で飢えている不幸な人々もいます。いくつもの豪邸を持っている人がいる反面、寝る場所もない人もいます。ある者は高価なおいしい食物をいく品も食べているかと思えば、他の者は命をつなぐに必要なパンの切れ端さえ得られない有様です。ある者は毛皮や高価な衣類に身を包み、他の者は寒さをしのぐ衣服にもこと欠くのです。こういう状態は間違っているから改善されなければなりません。この状況を改善するための仕組が必要です。貧困をも克服すると同様に、富を制限することも重要な課題です。両極端はいずれもよろしくないのです。

貧困が飢餓の状態に到るまで放って置かれるのを見ると、どこかに虐政が行なわれているものです。こういう事態に直面するとき、人々は奮起しなければなりません。そして、非常に多数の人々が貧困の苦痛に打ちひしがれている状態を改善するのに、もはやためらってはなりません。」

極端な貧富の差のない釣り合いのとれた社会を創ることに関して、バハオラは数々の素晴らしい原則や教えを残しています。これらの原則の多くは世界各国で実行されなければなりません。しかし、経済問題の根本的な解決は、精神的原則と人道的価値に見いだされ、そしてその実行は各人の努力にかかっています。バハイは物質的にも精神的にも進歩することができるよう、努力を尽くすようすすめられています。しかし、バハイはバハオラのこういう言葉を決して忘れてはなりません。

「富の本質は私に対する愛情である。私を愛する者はすべての所有者であり、愛さない者は実に困窮者である。」

従って、バハイにとって真の富は自分の心の中にある神への愛情です。人間がこの偉大な宝を発見したとき、物質的な富などは色あせてしまいます。そして、物質的な富と違い、神の愛は誰にも奪いとられることはありません。

「おお我が侍女の子よ。貧困を思い煩う。富を信頼するな。貧困には富が次ぎ、富には貧困が続くものなれば。」（バハオラ）

ひとたび私たちの心が、この世の物質的な富から離れれば、貧困にあえぐ人々に私たちの富を分け与えることは容易なこととなります。これはバハオラが、彼の教えを受け入れる人々に期待することでもあります。アブドル・バハの書簡の一つに次のように書かれています。

「バハオラの教えの中に、自分の所有物を他人に自発的に分け与えるという項があります。自発的に分かち合うことは、平等にも優るものです。自分自身よりも他人を優先し、むしろ他人のために自分の生命や財産を捧げるべきなのです。しかし、このことは法律で強制されるものではありません。否、むしろ人は自発的に自ら選んでその所有物や生命を他人のために犠牲にすべきなのです。」

どんなに貧しい生活を強いられていても、自分以上に貧しい人を見い出すことができます。そういう人と自分の所有物を分け合うことができます。裕福な人々に対してバハオラは次のように警告しています。

「おお汝ら世の富める人々よ。汝らの中にいる貧者は、我が預りものである。汝ら我が預りものを保護せよ。そして、汝自身の安逸にのみ熱中することなかれ。」

「おお塵埃の子よ。貧者が夜半に嘆息していることを富者に語れ。不注意が彼らを破滅の道に導き、富の木を彼らから奪うことなきように。物を施し寛大であることは我が属性である。我が美徳をもって身を飾る者は幸なるかな。」

自分の富を他人と分かち合うことは奨励されていますが、バハオラは逆に、たとえ貧しくても物乞いをしてはならないと強く禁止しています。貧しい者は、神に信頼を置き、自分自身の生計を得るよう努力しなければならないとバハオラは教えています。人は誰でも仕事を通じて社会に貢献して行かなければならないのです。同時に、自分より恵まれている人を決してうらやんだりしてはならないとバハオラは次のように強調しています。

「おお地上の子よ。羨望のなごりがその心の中に少しでもまだ残っている者は、我が永遠の王国に到達することはできないし、神聖なる我が王国より発散するかぐわしい浄き香をかぐことも

きない。」

「おお我が僕よ。汝の心を悪意から浄化せよ。そして羨望を抱かず神聖な神の宮廷に入れ。」

私たちは富そのものは美徳ではないことを知らなければなりません。そして、富は危険なものになる可能性もあります。「神は人を黄金でためす。ちょうど黄金が火で試されるように」と、バハオラは書いています。バハオラはまた、次のように言われています。

「汝ら誠に次のことを知れ。富は求道者とその目標との間に立ちはだかり、愛する者と愛される者を隔てる大きな障壁である。極少数を除いて、富者は決して神の宮廷に到達し、満足とあきらめの都に入ることはできないであろう。自らの富が原因となって、永遠の王国への入場を阻まれ、不滅の領土を奪われることのない富者は幸いなり。最大名に誓って。かような富者の放つ光輝は、太陽が地上の人々を照らすように天国の住民を照らすであろう。」

従って、私たちの人生の目的は、富を積み上げてこの世での短い生涯を安楽に過すことではありません。物質的な富は私たちが精神的な富を得、己を知りこの世での人生の目的を知るようになって初めて、私たちの役に立つものです。バハオラは次のように書いています。

「人は己を知り、高きに導くものと、下道に導くものと、恥に導くものと、栄光に導くものと、富裕に導くものと、貧困に導くものとを知らなければならない。人は自らの存在を認識し、円熟の域に達した後において、初めて富を必要とする。この富が技術や職業によって得られたものであれば、聡明なる人々はそれを肯定し賞賛するであろう。特に世を鍛え、各国民の精神を美化しようと立ち上がった僕らの場合はなおさらそうである。」

私たちはこの世の富を持っていようがいまいが、もし神の愛を心の中に採り入れるならば、全員精神的な富者となることができることを心に明記しましょう。このことは神がバハオラを通して、私たち全員に語られていることです。

「われ、汝を豊かに創れるに、何故汝自ら貧しくするや。気高くわれ汝を創れるに、何故汝自ら卑しくするや。知識の精華もて、われ汝を現わしたるに、汝何故にわれより他の者に教化を求めるや。愛の粘土もて、われ汝を創りしに、汝何故に他のものに没頭するや。汝の眼を汝自らに向けよ。さらば汝、汝のうちに威光に輝やき力強く且つ自存しつつ在るわれを見い出さん。」

第五章、顕示者から私たちへの提言

幸福

バハオラの大きな恩恵の一つは、バハオラを知ることによって私たちの心に芽生える喜びと幸福です。神の愛が心に宿る時、私たちは幸福となれるのです。この世の短い生活の意義と目的を知って幸福となれるのです。敬愛するものを見い出し、彼の創造的言葉の影響によって世界の人々と平和に暮らしているから、私たちは嬉しいのです。バハオラは次のように呼びかけています。

「おお塵の上に住む友らよ。天の住居にいそぎ、福音を汝自身に伝えよ。『最愛なる者は到来した。そして、神の啓示の栄光を自らの冠とし、古来の楽園を人々に開放した。』すべての目を喜ばしめ、すべての耳を楽しませよ。今や彼の美を見つめる時であるから。今や彼の声に耳傾ける時であるから。あこがれに胸はずませるすべての愛する者に伝えよ、『見よ。汝の最も愛する者が人々の間に現われた』と。また、愛の王者の使者に音信をかく告げよ、『見よ。あがめられる者が豊かな栄光に身を飾って現われた』と。おお彼の美を愛する者よ。汝が彼から遠ざかりし苦悩を転じて永遠の再会の喜びに振り向けよ。」

敬愛する者を認め、顕示者の声に耳傾ける喜びは、すべてのバハイの心に満ちあふれています。この大いなる恵みは、敬愛する者のためには貴い命を喜んで投げ出した何千というバハイの殉教者たちによって感じとられました。真の喜びが心に宿るなら、この地上の何ものも私たちを失望させ不幸にさせることはできません。貧困も病気も苦難も神とその創造物に対する愛が私たちの心にある限り、忘れ去ることができます。

アブドル・バハは獄中にあって非常な逆境にさらされていた時でさえ、この絶え間ない喜びを失ったことはなかったと語っています。

「私は獄中にあっても幸福でした。私の投獄は私の犯した罪のためではなく、神の道における投獄だったのです。従って私は喜びの中にありました。私は神の大業のための囚人であって、私の生涯が空しく浪費されず、神への奉仕のために費やされたことを私は喜びとしました。神に栄光あれ。誰の目にも私は囚人として映ることはありませんでした。彼らは喜びに満ち、深く感謝し、

健康にも恵まれ、牢獄に全くとらわれていない私を見たのです。」

私たちが神や私たちの隣人に対して抱く愛によって生じる幸福は永遠のものです。

人間の心は神の座であるとバハオラは教えています。敬愛する者を受け入れる喜びを心で知った時、地上のどんな幸福もこれと比べものにはなりません。世界中のどんな富もこの幸福にまさることはできません。世俗の楽しみをもたらす喜びは真の幸福ではありません。それは長続きがしません。バハオラはそれによって左右されるなと諭しています。

「おお人の子よ。汝繁栄の中にあるとも喜ぶな。汝またおちぶれるとも悲しむな。二つながら過ぎ去り、消え去るものなれば。」

このことをアブドル・バハは次のように説明しています。

「人は喉がかわけば水を飲み、お腹がすけば食物を食べます。しかし、喉がかわいていない時には、水は何ら楽しみを与えません。空腹が既に満たされていれば、食物はおいしくありません。心の喜びはこんなものではありません。精神的な快感は常に喜びを伴います。神の愛は限りない幸福をもたらします。それ事態が喜びの真髄であり、単なる気晴しでないからです。神は我々のなかに気高い精霊を作りたまいました。神は人間に、自然にまさる知力を備えた霊魂を与えたのです。この霊魂の能力によって我々は至上の喜びを知り、輝ける世を見ることができるのです。この能力は人間を他のすべての創造物から区別するものです。なのになぜ、人はこの能力を物質的なもののみに費やすのでしょうか。この能力は、神の恩恵を取得し、神の恩恵を現わすために使われなければならないのです。この地上に神の王国を建設し、眼に見える世界、眼に見えぬ世界を通じて幸福を築くために使われなければならないのです。」

不滅の魂

私たちの寿命は短いものです。若い時には、２０年とか３０年は長い時間のように見えるかも知れませんが、それらの年月が過ぎ去った後からふりかえって見ると、どうしてこんなに早く過ぎ去ったのだろうと驚くほどです。前方にある歳月もまたはかない瞬間のように過ぎ去り、死が必ず訪れます。死というものは、私たちにとってすべての終りなのでしょうか。いや、そうではありません。死が終りでないことをバハオラは教えています。それは「初め」にすぎないのです。バハオラは次

のように言われています。

「おお至高なるものの子よ！われ死を汝への歓びの使者とした。汝いかなれば死を悲しむや。われ汝を照らすために光を造った。何故に汝その光から自身をおおうや。」

死というものは神に向う私たちの精神的旅路の出発点なのです。それは新しい生命の始まりなのです。私たちの魂が肉体を離れると、それは神の王国において生きながらえ、発展して行くのです。しかし、それは決して物質的な形では、再び地上に戻って来ません。

いつも籠の中で暮らしている一羽の鶯は、籠の外の世界を知りません。籠の格子を通して、花園をちらっと見る事はあるでしょう。しかし、この閉じ込められた可愛そうな鳥は、自由というものがなにものかも知らず緑の森や開けた野原を飛び回る喜びすら知らないのです。もし、籠の扉を開いてその鳥を放してやろうとすると、その鳥は籠の隅にかくれて出て来ようとしません。そこで、手を入れて鳥を出そうとすると驚いて手から逃れようとします。しかし、一旦鳥が外へ出ると、空高く舞い上がり緑の木々の間で歌います。その鳥は花咲く牧場や、かおり漂よう森の中を住処として、黄金の籠を差し出しても二度と籠にはもどっては来ないでしょう。

同様に、魂がこの肉体という籠から放たれると、神の王国のことも、この世を去った後に待ち受けている喜びをも知らない魂は、死が非常につらい悲しいことだと思います。その訳は、魂が籠のことしか知らず、神の愛や永遠の恵みを受けられる天国のことを知らないからです。神の顕示者を認めた人々は、霊魂の不滅と永遠の生命を確信します。ある人がバハオラに死後の生命についてたずねた時、バハオラの答はこうでした。

「さて、人間の魂とその死後の生存に関する質問について。魂は肉体から分離後、年代と世紀のめぐりも、この世の変遷と偶然も変え得ない状態で神の面前に達するまで進歩しつづけるという事実を知れ。魂は、神の王国、神の主権、神の統治権と威力がつづく限りつづくのである。魂は神の諸々のしるしと神の諸々の属性を顕わし、神の慈悲と恩寵を顕わす。これほど高遠な地位の崇高さと栄光を適切に述べようとする時、わがペンの動きはとどまる。」

死というものは私たち一人一人にとって、精神的な生まれかわりであります。ですから、死がいつ私たちのドアをノックしても、「喜びの使者」として迎え入れる準備をしておかなければなりません。

天国と地獄

もし、植物を適当な時期に畑に植え、規則正しく水をやり害虫を防ぐなら、豊かな収穫が得られるでしょう。しかし、もし種を適当な時期に蒔かず畑に水をやる事を怠るならば、良い収穫を望むことはできません。採り入れの時期が来ると怠慢の報いを受けることになります。そして、その損失の原因を作ったのは、本人以外の何者でもないのです。

報奨と罰は世界の秩序を保つ上で必要です。報奨と罰は私たち自身の行為から来る自然の結果なのです。過去におけるすべての顕示者は、この世で私たちの行なうことはこの世での生涯に影響を及ぼすばかりでなく、死後にまでその影響が続くものであることを、私たちに悟らせようとしました。もし、私たちの行ないが良ければ良い結果を生じ、永遠の幸福の源となるでしょう。もし、行ないが悪ければ、悪い結果を生じ、私たちに永遠の苦悩をもたらすでしょう。このことは悪事を行なった人々に神が報復しようと望んでいるのではなく、悪い行為から良い結果が得られないことによるのです。ちょうど花園に雑草を植れば、美しい花が得られないようなものです。このことは報奨と罰の意味になります。しかし、すべての宗教において説かれているこの真理は、多くの場合誤解されてきています。

神の顕示者たちは報奨と罰の存在を象徴的に、また、寓話的に説明してきました。顕示者は完全な教育者です。そして、完全な教育者は必ず生徒が理解できるような方法で教えければなりません。でなければ、教育の目的は達成されません。この世での生涯が終った後も、自分のしてきた行為に対して責任をとらなければならないことを人々に理解させるために、顕示者たちは善人に対しては喜びや楽みに満ちた死後の生を描き、悪人に対しては苦悩や悲惨について語って来ました。死後の生について人々に理解させる唯一の方法として、顕示者たちは歓喜と苦難について説いたのです。

「知識とは何か」とたずねる小さな子供に対して、親は「今までに味わったあらゆるものよりももっとおいしいものだ」と言って聞かせるかも知れません。親は勿論こう言ったからとて、知識は味わうことのできる一種の食物だというつもりではありません。子供が大きくなった時に、親が与えたこの言葉が何を意味するかが分かるようになるでしょう。この世の大部分の人々は、神の顕示者たちが死後の生命について用いた象徴や寓話を、全く文字通りに解釈しています。そして、顕示者たちは精神的な諸経験を説明しているのだということが分かっていません。ですから、人々

は空間としての天国と地獄を想像してきました。ある人は、地獄は恐ろしい所で火ぜめや疫病があり、恐ろしい鬼がいて悪人たちを永久に苦しめる所だと信じています。また、天国はおいしい果実が実り、世俗の快楽に満ちた楽園だと言っています。他の人は、私たちの霊魂は死後この世に再び帰って来ると信じています。全宇宙は私たちのこの小さな惑星以外には存在しないと考えて、死後はこの世界に再びもどって来るものと信じています。私たちは違った形をしてこの世に生まれ変って来て、この世でなした罪業によっては動物となって生まれて来ることさえあると言っています。

過去の顕示者たちは、死後私たちが経験することを象徴的な言葉で述べなければならなかったのです。しかしバハオラは、現代の人々は天国と地獄の真の意味を理解しようとしなければならないと言いました。そこで、私たちが記憶に止めて置かなければならない二つの重要な事柄があります。

(1) 人間の魂は不滅であり、肉体が亡びた後も生き続けるものであること。

(2) この世における行為は、魂が肉体から離れた後々までも影響を及ぼすものであること。

肉体から離れた後に魂の入る世界は、私たちが見慣れているこの地上での生活とは全く違ったものです。アブドル・バハは、子供が生まれる前の母親の胎内の世界と、我々がいま生きている世界が違うように、死後の世界は、我々の知るいまの世界とは全く異なると説明しています。子供が胎内にいる間は、必要でなくともこの世に出てから生活を送るために必要な眼や耳や手足等を胎内にいる間に発育させておくのと同様に、私たちもまたこの世を去った後に、私たちの魂が生きていく次の世界での幸福な生活のためには、この世にいる間に準備を整えて置かなければなりません。次の世界に行っては私たちはもはや肉体的な眼や耳を必要としません。現世で、神の使者から、私たちに送られた神の教えに従うことによって得られる精神的な特質、この特質が次の世では必要となるでしょう。

しかし、胎内にいる胎児とこの世に住んでいる人間の状態の間には、大きな相違があります。胎児には自らを発育させる責任はありません。その訳は、胎児には選択の能力もなく、また、自立することなど到底できないからです。しかしこの世においては、私たちは正邪、善悪のいずれかを選ぶ能力が与えられています。従って、私たちには自らの精神を高める責任がある訳です。もし、精神的に強く健康的に育つことができなければ、次の世界でみじめな生活を送ることになるでしょう。この不幸な状態を地獄というのです。反対に私たちが神の掟を理解し、これに服従しよ

うと努力することは、次の世界において幸福に暮らせるよう準備していることになるのです。そして、この世を去った後に、天国とか極楽とかいわれている状態を経験することができるようになるでしょう。バハオラは天国とは神への接近であり、地獄とは神の恩寵を奪われた状態であると説明しています。そこで、バハオラは私たち一人一人に、次の世で待たれている永遠の祝福を受ける資格を作るよう努力せよと呼びかけているのです。

「おお恩恵の子よ。無のくずよりわが命令の粘土もて、われ汝を出現させた。そして汝を訓練するために、存在するあらゆる原子と、あらゆる創造物の本質を定めた。かくて汝が、母の胎内より生まれ出る前に、われ汝のために、輝く乳を出す二つの泉と、汝を見守るために眼を、汝を愛するために心を前もって定めておいた。わが慈悲心から、わが慈愛の木蔭で、われ汝を育て、わが恵みと好意の精髄もて汝を保護した。すべてこれらのことは、汝をして、わが永遠の国土に達せしめ、わが見えざる贈与を受ける資格をもたらしめるためである。」

奇跡

神の顕示者には偉大な力が与えられています。彼らは他の人々が成しえないことをすることができます。顕示者の行う最大の奇跡は彼らの説く教えであり、彼らの生き様であり、彼らがこの世を去った後幾世紀もの間、人々の心に与えた彼らの言葉の影響であります。これらの奇跡はすべての神の顕示者に共通するものです。

神の顕示者は、人々に影響を及ぼすような世俗的な手段や力は持っていません。そしてどの時代においても、社会は顕示者を異端視し、権力者や学者は彼らに反対しました。顕示者に最初に信仰を捧げるのは、社会的に何の地位もなく、財力も学識もない人々でした。神の教えはこのような無力な人々によって広められ、やがて世界を征服し、新しい文化を築いたのです。顕示者がこの世に現われるごとにこの状況はくり返され、各顕示者の到来と共に、新しい文化が世界に建設されました。古代のヒンズー文化あるいはユダヤ教徒やキリスト教徒やイスラム教徒が過去において展開した文化について考えるたびに、私たちはこれらの偉大な教祖たちは、その時代時代にあって、全世界の力に単独で立ち向かい、ついに勝利を得た神の顕示者であったことを思い起こさなければなりません。神の顕示者の真実を証明し得るこれ以上の奇蹟は存在するでしょうか。

しかし、多くの場合、人々が顕示者に期待する証拠は普通ではあり得ないような「超自然的」な奇蹟です。そして、どの宗教においても教祖の真実の証拠とされるそのような逸話が数多く語り継がれています。例えば、ヒンズー教では幼児のクリシュナの足がジャムナ川の水にふれて、水がたちまちに引いて無事に対岸に渡れたという話があります。キリスト教では、キリストが数個のパンで何百という人々の飢えを満たしたとあります。同様の奇跡が、ゾロアスターにも釈迦にも、モーゼにも、モハメッドにも、それぞれの信徒たちによって語り継がれています。

このような奇蹟についてバハイは次のように考えます。すべての神の顕示者は奇蹟を起こす力をもっています。しかし、奇蹟に関する逸話は、信仰をもたない人を納得させることはできないし、また、顕示者の真実の証明にもなり得ないのです。例えば、キリスト教徒がユダヤ教徒や仏教徒に向かって、キリトは死者をよみがえらせたと話しても、キリストに信仰を持っていない人々には、何らの影響も与えないでしょう。キリストが神の顕示者であったということすら全く信じないでしょう。逆に、それを作り話として払いのけるかも知れません。キリスト時代に生きていた人々でさえも、キリストが奇跡を行なったから彼を信じたのではありませんでした。しかし、もしキリストの美しい教えが精神的に死んでいる幾百万の人々に、如何に永遠の生命を注ぎ込んだかということを指摘するならば、即ち幾世代の人類の心に感動を与えたキリスト自身の聖なる生涯に言及するならば、誰もこれを否定することはできません。キリストの生涯と、彼の教えとは二、三人の人間を蘇生させて、数年間生きながらえさせ、そして再び死んだということよりも遙に大きな奇跡なのです。

神の顕示者たちは聖なる医者なのです。顕示者に期待するものは、人々の精神的な病気を癒す処方箋です。顕示者の証明として超自然的な奇蹟を望むのは愚かなことです。患者のために、療法を指示するためにやって来た医者に、屋根から飛び降りさせて、彼の技量を試そうとするものはいないでしょう。医者が口で言っているほどの技量があるかないかを試す唯一の方法は、患者を治療できるかどうか見極めることにあります。バハオラは多くの奇蹟を行ったにもかかわらず、その事実を彼の偉大さの証拠として人々に話すことを禁じました。

バグダット滞在中のバハオラの話に次のものがあります。議論や理屈でバハオラの真理を否定できないことを悟ったイスラム教の僧侶たちが、ある日、バハオラに何か一つ奇跡をやって見せるように要求しました。もし、バハオラが拒否すれば、そのことがバハオラを非難する絶好の口実が得られると思ったからです。僧侶たちは代表を一人選んでバハオラにこの要求を伝えました。バハオラの返答はこうでした。「神の大業はおもちゃでもなければ、人々の気まぐれや好奇を満た

すための見せ物でもない。しかし、奇跡をなし遂げたら私を「約束された者」と認めるのであれば、奇蹟を行ってもよい。どれほど難しい奇蹟でもよいので、相談の上で何か一つ奇蹟を指定しなさい。」

僧侶たちは結局その条件を受け入れませんでした。バハオラが奇跡を行なったら、その主張を否定する口実がなくなることを恐れたからです。そして、彼らはバハオラに奇跡を要求せずに退散してしまいました。このことは、奇跡がもしなされたとしても、神の顕示者の真理を頭から否定しようとかかっている人々には、何の証明にもならないことを明かに物語っています。判断が正しく、進んで理解しようとしている人々にとっては、神の顕示者の教えは、それ自身が真理であり、永遠の奇跡なのです。

道徳的倫理的教義

バハオラの教えの原則の一つに、すべての宗教はその根源において同一であるということがあります。明らかに、道徳的教えはすべての宗教に共通する基礎をなすものです。

バハオラの教えの中に非常に高い水準の行動倫理の指針を見い出すことができます。そして、バハオラの教えの大部分は、人間の在り方、行動、態度に関係するものです。バハオラの啓示を構成する何千というバブ、バハオラ及びアブドル・バハによって書かれた書簡、また、ショーギ・エフェンディの書かれた書の中には、純潔な心と言動に基づくバハイ生活の規範が示されています。そのいくつかをここに紹介します。

「繁栄の中にあっては寛大であれ。逆境に際しては感謝する者であれ。隣人が汝に信頼を置くにふさわしい者であれ。明るく、親しみのある顔をもって隣人を見よ。貧しき者には宝庫であれ。富めるものには警告者であれ。困窮者の叫びに答える者であれ。汝の誓約の神聖を守る者であれ。判断に公正であれ。発言に慎重であれ。何者にも不公平であってはならない。如何なる者にも全く謙虚であれ。暗闇の中を歩む者には明りであれ。悲しみに打ちひしがれた者には喜びとなれ。渇きにあえぐ者には大洋であれ。苦悩に溺れる者には避難所であれ。圧制の犠牲者には、その支持者となり、その擁護者であれ。汝のすべての行動を、誠実さと高潔さとをもっ

て際立たせよ。異邦人には住家であれ。苦しみにある者の慰めであれ。亡命者には力みなぎる砦であれ。盲目なる者には眼となり、過てる者にはその歩みを導く光であれ。真理の面を飾る装飾であれ。忠誠の額に置かれた冠であれ。正義の殿堂の支柱であれ。人類の身体には生命の息吹であれ。正義の軍勢の旗印であれ。美徳の地平線上に輝く光体であれ。人の心の土壌を潤す露であれ。知識の大洋に浮かぶ箱船であれ。恩恵の天上に光る太陽であれ。英知の王冠の宝石であれ。汝の世代の天界にきらめく光であれ。そして、謙遜の樹に実る果実であれ。」 ご自分の息子に宛てたバハオラの言葉 （落穂集１３０番）

「人は皆、常に進歩し続ける文明を前進させるために生まれて来たのである。山野を横行する野獣の如く振舞うことは、人間にはふさわしくない。人間の尊厳にふさわしい徳は、地上のすべての人類同胞に向けられる寛容、慈悲、同情及び慈愛の心である。」バハオラの言葉 （落穂集１０９番）

「神は慈善を愛し、受け入れたもう。慈善は、あらゆる善行の中でも最高のものに類する。自分よりも、他を先に置く者は幸いなり。かような者こそはバハの民である。」 バハオラの言葉

「富める者は貧窮者に対して最善の配慮を払わなければならない。何故ならば、貧しい中にあってゆるまず忍耐する者に対し、神は大いなる栄誉を準備したもう。神が御心により与えたもう栄誉以外に、この栄誉に比較し得るものはない。忍耐強く耐え、自らの苦しみを覆い隠す貧しき人々を待ち受ける祝福は大いなるものなり。同様に、自らの富を貧窮者に分け与え、彼らを自分自身に優先させる富裕者は幸いなり。」 バハオラの言葉 （落穂集１００番）

「病人を見舞うことは最も重要な義務の一つです。病人に対し、友らは実に最高の親切心をもって、命を捧げて奉仕すべきです。」 アブドル・バハ

「誠に、我々は礼儀を選び、それを神に近い者のしるしとした。実に、礼儀は老いも若きも万人にふさわしい衣服である。礼儀をもってわが身を飾る者は幸いなり。そして、この偉大な賜物を奪われた者は哀れなり。おお神の人々よ。我は汝に礼儀をすすめる。礼儀は第一位にあって、

すべての徳の王者である。礼儀の光で照らされ、高潔さのマントを着る者は幸いなり。礼儀をもって行動する者は、大いなる地位を授かっているのである。」 バハオラの言葉

「隣人を差し置いて、自らを優先させることのないよう注意せよ。汝の行いを通じて正義の証が我が忠実なる僕らに示されるよう、自分に対しても、他人に対しても公平であれ。人間の持ち得る徳の中にあって、最も基本的なものは公正である。あらゆる事柄の評価は公正によらなければならない。言挙げよ。おお、理解力を持つ心を有する人々よ、汝らの判断に公正であれ。判断に公正を欠く者は、実に、人間の地位を特徴づける特性を欠く者である。」 バハオラの言葉

「我が御心の楽園に汝らが常に融和と一致をもって交わるのを見、汝らの行動より親愛と和合、慈愛と友情の芳香を感知することを我は愛す。我は常に汝らと共にある。汝らの友好の芳香を嗅ぐことにより我が心は必ず喜びに満たされよう。また、それ以外に我を満足させ得るものはなにもない。」 バハオラの言葉 (落穂集146番)

「汝らの中にいる貧者は、我が信託である。汝ら、我が信託を擁護せよ。そして汝自身の安楽のみに熱中するな。もし、汝ら、貧しき者に出会うとも、軽蔑してはならない。汝らは、それぞれ哀れな胚種から創られている。」 バハオラ

「思いやりのある舌は、心を引く磁石である。それは魂の糧であり、言葉に意味を与えるものである。それは知恵と理解の光の源である。」 バハオラ

「人は、他人の魂の中に映った神の美を見、自分との共通点を発見し、互いに愛をもって引かれ合うのです。この愛は、人類を一つの海の波となし、一つの天に輝く星、一つの木に熟する実となすでしょう。この愛は、真の調和の実現と、誠の和合の基礎をもたらすでしょう。愛は果てしなく無限であり、無窮なのです。それに対し、物質には制限があり、有限なのです。限られた物質的な絆は普遍的愛を適切に表現するには不十分であることは明白です。人類に対する偉大なる無私の愛は、このような不完全な、半ば利己的なものに制限されるものではありません。これは唯一の完全無欠の愛であり、すべての人間が持ち得るものですが、聖霊の力によって

のみ築き上げられるのです。」

アブドル・バハ

「汝の隣人の資産を不誠実な心で扱うな。汝らは、地上において信頼に値するものとなれ。神の恵みによって、汝に与えられたものを貧者に与えることを控えるな。誠に、神は、汝の所有する倍のものを汝に授けるであろう。」

バハオラ

「良き言葉と正直は、地位と階級の高きにあって、知識の天の水平線から昇った太陽の如くである。」

バハオラ

第六章、バハイの運営機構

運営機構

過去の社会には、宗教のかかわることを専門の僧侶に任せざるを得なかった時代がありました。それは、一般の人々が無学であったり、宗教について深く学ぶ機会がなかった時代でした。そのような社会では僧侶が大きな役割を果たしました。彼らは学問に没頭し、それを職業とし、宗教の教えや掟を守るよう人々を指導しました。過去の宗教にはほとんど例外なくこのような僧侶がいました。

しかし、バハイには僧侶はいません。過去とは違い、現代においては僧侶はもはや不要であるとバハオラは説いています。私たちは他人の目ならぬ自分自身の目で見、自分自身の耳で聞き、自分自身の理解力で判断し、各人は自分自身で真理を探究するようバハオラは求めています。

真理を探究するにあたって、バハイは自らの努力によって自分の宗教に関して十分な知識を得ようとします。この点、僧侶から指導を受けようとする宗教とは根本的に違います。バハオラの教えにおいては、各人が自分で祈らなければなりません。僧侶に報酬を払い、自分に代わって祈りを上げてもらう習慣が多くの宗教にありますが、バハイではそういうことはしません。バハイは、自分自身の祈りを通じて神の恵みや許しを直接お願いします。そこでは儀式や式典は不要です。各バハイは、神の顕示者を通して神と接することができます。私たちとバハオラとの間には、仲介者は不必要です。

各宗教には多くの良い僧侶がいるものの、過去の長い時代を通じて僧侶たちは多くの障害を生みだしたのも事実です。次のようなことが頻繁に起こりました。同じ町に住む二人の僧侶が、宗教に関しいつも論争していました。そして、二人の意見の相違が町の人々の間に不和と争いをもたらしました。ある人はこちらの僧侶が正しいと信じ、他の人はあちらの方が正しいと思うようになっていました。やがてこの不和は教会の分裂にまで発展してしまいました。このようにして次第に多くの分派が生じ、聖典の違った解釈が、お互いの争いや流血の原因にさえなりました。

バハイではこのようなことが起こらないよう、様々な工夫がなされています。まずはバハイには僧侶はいませんし、ある個人が自分の意見を盾に賛同者や支持者を結成することもありません。

バハイでは、すべての人は平等です。第二に、バハオラの教えや聖典を解釈する権限は誰も与えられていません。この権限は、バハオラによってアブドル・バハのみに与えられ、アブドル・バハの後は、解釈の権限はショーギ・エフェンディのみに与えられました。

過去の歴史を見ると、神の顕示者がこの世に現われる度に、顕示者に最も激しく敵対し反対したのは既存の宗教の僧侶たちでした。それはなぜでしょう。僧侶たちは新しい顕示者を認めることによって彼らの地位、財産及び物質的な安楽を犠牲にしなければならないことを知っていたからです。従って、新しい宗教が彼らの間に現われるや否や、それを根絶しようと最善を尽くしました。仏教は、ヒンズー教の僧侶たちによって、発祥の地であるインドから追い出されました。キリストは、ユダヤ教の僧侶たちの反対に会い、十字架にかけられました。バブの教えの広がりに恐れをなしたイスラム教の僧侶たちはバブを処刑しました。バハオラは、イスラム教の神学者たちが、政府をそそのかして当時の人々に新しい神の大業に反対して立ち上がるよう扇動しました。その結果、バハオラは生涯のほとんどを追放と苦しみの中で過ごすことを強いられました。

むろん例外もありました。バブやバハオラの時代に生きた多くの博学な僧侶は、この二人の顕示者を受け入れ、その教えを広めるために自らの命をも捧げました。しかし、バブやバハオラを認めるということは、それまでの自分の僧侶としての職業を去ることを意味しました。バハイになることによって、彼らは神の大業の一介の僕となり、生計を得るために他の職業についたのです。彼らは宗教と金銭、神の信教と俗世の職業を混同しませんでした。

僧侶を置かない代わりに、バハイ信教には共同体の運営を行うための機構が築き上げられています。そして、共同体の全員が平等の立場で共同体の運営に参加することができるのです。バハイの運営機構は、バハオラの他のすべての教えと同様、その源は神にあります。

バハイの運営機構

農地を耕すために川から水を引いてくる場合、どうすればよいでしょうか。まず、農地全域に灌漑するに十分な水を引くために、川岸に大きな水路を掘ります。次に、農地の各部分に水を引くために、中位の水路を掘ります。そして最後に、末端の畑に水を引くためにたくさんの細い溝を張り巡らせます。一連の溝が完成すれば、川の水を引いてすべての農地を耕し、生命を育むことが

可能になります。

ショーギ・エフェンディによれば、バハイの運営機構は上述の一連の水路に例えられます。大業の聖霊は、運営機構という水路を介して世界中に散在するバハイ共同体に注がれるということです。

過去の時代においては、共同体に生命の水を運ぶ役割は僧侶たちに委ねられていました。しかし、彼らの力には限界がありました。例えて言えば、僧侶たちは自分の手に持てるだけの水しか運べなかったのです。そして、この重労働は僧侶たちが必要な体力と熱意を持っていた間だけしか続きませんでした。しかし、バハオラはこの仕事を個人に任せませんでした。生命の水を自然と人類の畑に導入するための素晴らしい水路網を企画したのでした。その全体計画はバハオラの世界秩序と呼ばれ、バハイの運営機構はその重要な一部を構成するものです。

バハオラはこの世界秩序の基礎を築き、その大綱を示しました。後にアブドル・バハがこの聖なる計画を説明し、その詳細を私たちに示し、その建設に着手しました。そして、バハイの運営機構を実際に着々と築き上げ、散存していた共同体を一つにまとめ、統一のとれた有機体としたのは、ショーギ・エフェンディの終生の努力の賜物でした。バハイの機構は、信者たちの手によって後日作られたものでないため、他の宗教の形式とは違うものとなっています。この機構は顕示者バハオラを通して私たちに与えられた神の計画であり、全人類の間に秩序と平和とを打ち立てる目的のもとに作られたものです。

バハイの機構は多くの部分から成っており、すべてが互いに関連しあっています。その主な柱は次のような三段構成からなっています。まず、各町や村のバハイが集まって自分たちの町や村のバハイの世話をする機構として地方精神行政会を選挙によって選びます。次に、各国ごとに、その国のバハイの中から全国精神行政会をやはり選挙によって選びます。最後に、各国の全国精神行政会のメンバーが選挙人となってバハイの最高機関である万国正義院を選びます。地方精神行政会を、運河の水を一つ一つの畑に運ぶ小川に例えると、全国精神行政会は川そのものから水を流し込む大きな運河と小川とを結びつける小運河に当たりましょう。そして、万国正義院は主要な運河ということになります。神の導きが世界中の各部分に流れ込むのは、万国正義院を通じてであります。

これら各部分の任務と責任に入る前に、バハイの機構は、バハオラの他の教えから決して切り離すことのできないものであることをはっきりさせて置かなければなりません。バハオラを神の顕

示者として受け入れる者は、同時にバハオラによって定められた機構と運営体系を受け入れ、それを通じて活動しなければなりません。神の教えが顕示者によってもたらされたのは、人間一人一人の幸福のためだけではなく、社会の和合の達成と福祉の増進のためでもあるのです。上の図は、バハイの機構を分かり易く図解したものです。

この図解から分かるように、社会の中の個人は、畑の中の穀粒みたいなものです。穀粒一つ一つは取るに足らない存在にすぎないかもしれません。しかし、一つ一つの穀粒は、畑全体のために引かれた水から生命を受け、活気づくのです。個人の幸福は、個人の結合体である社会の福祉の中にあるのですから、人類の未来の期待がかかっているバハオラの機構の強化に努力しなければならないのです。

精神行政会の選挙

「アグダスの書」においてバハオラは、成人のバハイが九名以上いる所では、精神行政会が選挙によって結成されなければならないと定めました。この精神行政会は一団となって、共同体のために働き、奉仕するのです。では、地方精神行政会はどのようにして成立するのでしょうか。

例えばバハイが六十人いるAという町があり、そこで地方精神行政会を選挙しようとしていると、仮定しましょう。まず、知って置かなければならない点がいくつかあります。

(1) 成立の時期。地方精神行政会の成立の時期は決まっていて、一年中いつでも選挙を行える訳ではありません。その成立の時期とは、バハオラの宣言の記念日に当たる4月21日です。1863年のこの日、バハオラはバグダッドのレズワンの園で、自らが「その出現が約束された者」であることを宣言されました。4月21日はレズワンの期間の第一日目であり、原則として、精神行政会を選出できるのはこの日だけです。もし、精神行政会が4月20日の日没から4月21日の日没までの24時間内に選出されなかったら、翌年の4月21日に、再び選挙日が巡って来るまで待たなければなりません。

(2) 選挙権・被選挙権。21才以上のバハイのみが、精神行政会を選び、また選ばれることができるのです。例えば、もし、A町に住んでいる60名のバハイのうち、35人の男女の人が21才以上であるとしますと、この35人だけが精神行政会を選挙することが出来ます。また、精神行政会の

メンバーは、この３５人の男女の中から選出されなければなりません。
(3) 投票の形式。投票する各人は、精神行政会に選ばれるに最もふさわしいと考えられる男女の9人の名を書かなければなりません。9人以下、または9人以上書かれた投票は無効になります。
(4) 選ばれるべき人の条件。共同体の中で名声が高いとか、社会的地位があるとか、あるいは親切にしてもらったことがあるとかは選ぶときの理由にはなりません。選ばれるべき人の条件として上げられるのは、神の大業に対して忠誠であること、献身的に共同体に奉仕していること、奉仕する能力があることなどです。投票するとき、共同体内に属する人々の品性や精神的素質を考慮し、「精神行政会の任務に最も適した人を選ぶことができますようお導き下さい」と、神に向かって祈らなければなりません。
(5) 他薦・自薦の禁止。バハイの選挙ではあらゆる形の他薦・自薦が禁止されています。また、あらゆる形の「選挙運動」も禁止されています。選挙は秘密投票によって行われ、他人が誰に票を入れたかを詮索することも許されません。たとえ夫婦間であっても、親友間であっても、選ぼうとする人物に関して相談することはできません。各人は、神からのみ援助を求むべきで、他人の意見によって影響を受けることなく、投票に関しては自分自身で決めなければなりません。但し、字が書けない人が自分で述べた名前を信頼できる人に書いてもらうことだけは許されます。

以上の点を念頭に置き、A町のバハイはその年の精神行政会のメンバー選挙にとりかかります。選挙を行うために、全員が一定の場所に集合します。出席できない人は、予め投票用紙に記入し送付します。会は祈りで始まり、この重要な任務を正しく行えるよう神に嘆願します。祈りが終わると投票を行い、それが終了するとこんどは予め選んでおいた開票係りが開票の作業に入り、選挙結果を発表します。一番多い票を得た9名がその年の精神行政会のメンバーとして選出されます。

このようにしてA町のバハイは、世界各地のバハイ共同体と同時に、また同じ手続きをへて自分たちの代表となる地方精神行政会メンバーを選ぶのです。翌年のレズワンの期間の第一日が来ると、同様の方法で世界中のバハイが次の年の地方精神行政会のメンバーを選ぶのです。

地方精神行政会の任務

精神行政会の任務に関して、バハオラは次のように書いておられます。

「彼らは人々の中の慈悲深き御方の信託人となり、地上に住むすべての者のために、神より任命された擁護者として自らを見なければならない。共に協議し、神の僕らの利益を神のために、ちょうど自分たちの利益を考慮するように考慮すること、そして適切な選択を行なうことが彼らの義務である。汝らの主なる神はこのように命令された。神の書簡に明確に啓示されているものをなおざりにすることのないよう、汝ら注意せよ。神を畏れよ、おお感知する者らよ。」　（「アグダスの書」より）

つまり、各市町村の地方精神行政会は、その地域のバハイにとって有益なものを追い求めなければなりません。そして、各地方精神行政会の最も重要な仕事は、バハイ共同体が神の大業を広め・強化するのを援助することです。バハオラの教えはすべての人類に対する祝福の源です。そして、精神行政会は、この大きな神の恩恵が世界各地の人々に到達し得るような水路とならなければなりません。従って、精神行政会が成立すると、その主要な仕事として、いかにこの大業を人々に理解してもらうかについて協議し、積極的な活動を通じてその目標に向かわなければなりません。

精神行政会のもう一つの重要な任務は、バハイの間に愛と親睦を高めるということです。精神行政会は共同体に調和の雰囲気を創り出さなければなりません。共同体の中にあって各人が幸福になれるように面倒を見なければなりません。もし、共同体に何らかの不和が生じた場合には、それを取り除くよう努力するのが精神行政会の任務です。各精神行政会はその地域のバハイにとって、寛大な親のように活動しなければなりません。精神行政会の任務に関したショーギ・エフェンディは次のように書いています。

「彼らは困窮者、病人、障害者、孤児、寡婦などを、肌の色や階級や信条にかかわりなく助けるよう、常に最善を尽くさなければなりません。」

各精神行政会は、自らの活動を支えるための基金を置き、共同体のメンバーから献金を受けることができます。そして、自発的な献金によって成り立つ基金を利用し、精神行政会は共同体の発展のために活動します。共同体の人々が精神行政会の経済状態を豊かにしておけば、逆に精神行政会は彼らが必要とする時に援助を提供することができるのです。

バハイの子供やユースの教育もまた精神行政会の重要な責任の一つです。ショーギ・エフェン

ディの言葉を借りれば、「青年の物質的並びに精神的啓発を促し、子供の教育の方法、でき得るならバハイの教育機関を設立し、組織し、その仕事を管理し、その進歩発展のために最善を尽くさなければなりません。」

精神行政会のなおもう一つの重要な任務は、「バハイの友の定期集会、十九日毎のフィースト、聖なる日のための特別な会、並びにバハイの友の社会的、知的、精神的利益に奉仕し、これを増進させるよう計画された特別の集会を準備する」ことです。

上に述べたことは、地方精神行政会の重要な機能の内のいくつかに過ぎません。精神行政会のメンバーは、彼らに託されている重要な任務を怠ることのないよう注意し、バハオラの次のような言葉を常に念頭に置かなければなりません。「彼らは、人々の中の慈悲深き神の信託人となり、神のためにそのしもべたちの利益を追及する義務がある。」

地方精神行政会の役員

精神行政会のメンバーは年に一度の選挙によって選ばれます。成人バハイが選挙に参加し、票数の一番多い九人が精神行政会を構成することになります。メンバーが決まって最初にすることは、第一回目の会合をできるだけ早い機会に持つことです。初回の召集をするのは、選挙で最高の票数を得た人です。

集会は先ず祈りをもって始められます。大業の前進に貢献できることを神に嘆願し、彼らを選んだ共同体に充分な奉仕ができるよう神に援助をお願いするのです。それから、その年度の精神行政会の役員を選挙します。各精神行政会は議長一名、副議長一名、書記一名、会計一名を互選します。

議長の仕事は会を運営し、精神行政会が結論に到達するよう協議を導くことです。ただメンバーが集合し話し合って解散するだけなら、精神行政会の本来の目的は果たせません。議長は検討すべき問題に対して全員の意見を聞き、合意の形成に努力し、必要なら採決によって結論に到達するようにします。（より詳しくは以下の「協議」の節を参照）副議長は、議長の欠席の場合、議長に代わって精神行政会の会合を運営します。

書記の仕事は「記録」と「通信」に大きく分けることができます。書記は、精神行政会の議事録や

事務の記録を作成します。また、精神行政会が発信するあらゆる手紙や通信の担当でもあります。各地方精神行政会が、バハイ世界の他の機関と接触を保つのも、書記を通して行われます。

会計は、精神行政会の資金の事務を取り扱います。基金に献金した人々に領収書を出し、精神行政会が企画した費用は、この基金から支払いをします。

精神行政会の役員を選出するに当たっては、各人の特徴や能力を見きわめ、誰がこれらの任務に適しているかをよく考えなければなりません。精神行政会のメンバーを選ぶ時に考慮されたと同様の原則が、その役員の選挙の時にも適用されます。従って、この選挙も投票によって行われ、その間いかなる選挙運動も宣伝も許されません。役員は、その社会的地位やその他の特別な地位のために選ばれるものではありません。例えば、敬老の精神の強い文化であっても、年齢を基準に役員を選ぶべきではありません。逆に、女性の社会進出が遅れている国であっても、女性を精神行政会の役員からはずす理由にはまったくなりません。選ぶ基準はあくまでもその人の能力と献身の態度なのです。一方、精神行政会の役員は、その共同体内では何ら特別の地位を占めるものではありません。例えば、議長はその共同体の指導者でもなければ、最も尊敬される人物でもありません。精神行政会以外におけるその人の地位は、共同体の他の人々と同等なのです。

これらのことを例をあげて考えて見ましょう。ある村で井戸を掘ることにしました。村長さんは村人に尊敬されているものの、井戸の掘りかたについては良く知りません。ところが一人の青年がいて、特別な地位にはついていませんが、井戸掘りに関しては多くの経験を持っていたとします。村人たちは、この重要な仕事を二人のうちのどちらに依頼するでしょうか。仕事を任せられるのは若者の方です。そして村長は、率先して若者を指名するでしょう。井戸を掘っている間は、すべての村人たちはもちろん、村長自身も若者の指図に従うでしょう。このことはもちろん、その若者が村の一切を指揮する者になったとか、村長が共同体内で地位を失ったとかいうことを意味するものではありません。ここで重要なのは協力の精神であり、この協力の精神こそが共同体のすべての構成員を利するのです。

バハイ共同体が精神行政会を選び、精神行政会がその役員を互選することも、協力と和合を愛する精神に根差した行為なのです。ショーギ・エフェンディはこのことを次のように表現しています。「精神行政会のメンバーは、最も謙虚な気持ちをもって任務に当たり、片寄りのない広い心、

正義と義務に対する熱意、素直さ、淑やかさにより、また、バハイの友らとバハイの大業、そして全人類の福祉と利益に完全に貢献する態度によって、彼らの奉仕する共同体の人々からの信頼、支持、そして敬意ばかりでなく、尊敬と真の愛情をも受けられるよう努力しなければなりません。」

精神行政会の活動（1）

精神行政会の活動を「愛野市」のバハイ共同体を例にとって見てみましょう。共同体の人々は、4月21日のレズワンの日に集まって新しい年の精神行政会を投票で選びました。9名のメンバーが決まると、一番票数の多かった山田さんが召集者となって、第一回の会合を開く場所と日時を相談のうえ決めて皆に連絡しました。

当日、精神行政会のメンバーがそろうと山田さんの簡単な挨拶に続き2、3人が開始の祈りをします。この祈りの雰囲気の中で、精神行政会の議長の選出に移ります。投票用紙をくばると、「議長として最も適任と考える人の名前を書いて下さい」と山田さんが言います。投票が終わると、今度は開票係を2人任命して開票の作業に入り、結果を発表します。結果は、鈴木さんが五票、山田さんが三票、吉川さんが一票とりました。従って、鈴木さんが議長に選ばれたことになります。役員選挙の場合、投票で過半数をとる人がいなければ、投票を繰り返します。

さて、鈴木さんが議長に選ばれたので、残りの役員の選挙は新議長の責任の下で行われます。鈴木さんは、召集者の役目を果たした山田さんにこれまでのことに感謝の意を表し、副議長の投票に移ります。議長選挙と同じ手続きが他の役員選挙にも適用されます。選挙の結果は高橋さんが副議長、山田さんが書記、岡田さんが会計に決まりました。

そこで議長は書記に、精神行政会の第一回会合で行われたことを記録するように依頼します。時間もかなり遅くなっていたので、次回の会合の日時を決めて閉会することになりました。バハイの集会でいつもするように終会の祈りでこの会合は終わりを告げました。

協議

協議は、バハイ共同体の運営における最も基本的な原則であり、共同体のあらゆる活動に適用されます。協議こそは十九日毎のフィースト、地方精神行政会の会合、全国年次大会、全国精神行政会の会合、または各種委員会の運営を貫くバハイの揺るぎない原則なのです。すべての人が同等の立場で参加する協議を通じて最善の道が発見されるのです。ただし、協議にはいくつかのルールがあり、その中でも最も愛と和合の精神をもって他人の意見に接することです。

バハイの会合に出席する時、バハオラが私たちと共におられるということを常に意識しなければなりません。この意識は素晴らしい精神的雰囲気を創造し、協議の推進に大いに役立ちます。あらゆる協議の場でバハオラの隣席を意識するならば、私たちは大業への奉仕を最優先する僕として利己主義を抑え、建設的でない言葉を慎むでしょう。そうすることで不誠実な心が協議に侵入することを避けると共に、真実以外の何ものも語らないでしょう。バハオラは次のように忠告しています。

「おお軽率なるものらよ。心の秘密が隠されていると思うな。否、むしろそれらは確かに明朗な字もて刻まれ、神の御前に公然と現わされていることを知れ。」

バハイの協議に参加する時、各人が自分の意見を自由に述べることが肝心です。意見を述べる者は大業の利益のみを考え、他の者と自分との関係を忘れてかからなければなりません。例えば、夫婦が二人とも精神行政会のメンバーである場合、協議をしたり投票をしたりする時、同一行動をとるのは本当の協議ではありません。バハイの協議に参加する人は誰であれ、バハオラにのみに責任をもつのです。また、個人的感情が信教の利益を阻害してはならないことに常に留意しなければなりません。従って、誠意をもって協議に挑み、なおも意見が違うのであれば、それをはっきりと述べなければなりません。また、夫婦だからと言って、一方が自分の意見を他方に押し付けようとしてはなりません。同様に、相手に意見を合わせることによって相手に喜んでもらおうというのも間違っています。結局、協議の場では一人一人の真の意見が究めて貴重であり、忌憚のない意見のやりとりの中から真理が現われて来るのです。

さらに、協議の場に個人的な感情を持ち込まないよう注意しなければなりません。例えば、あなたが知人に何かお願いしても知人は時間をさいてくれなかったとしましょう。その知人が協議の場で何か良い提案を出しても、前に持った反感から、その提案に素直に賛同できないというようなこ

とがないよう注意しなければなりません。ここでもバハオラが隣席されていることを思い起こし、大業への奉仕の妨げとなるような感情を排除しなければなりません。バハイが共に集う時、「一つの手の指の如く」また、「一つの海の水滴の如く」でなければなりません。

協議の場で自分の意見に固執してはなりません。同様に、自分の意見を他の人々に押しつけようとしてもいけません。お互いに自分の方が正しくて、相手の方が間違っていると言い張るのは子供の喧嘩の常です。その喧嘩はいつまでたっても何ら得る所はありません。しかし、そこに子供たちの親が現われると、親に対する愛と尊敬の念から、張り上げた声は静まり、問題は解決に向かうのです。バハオラの面前で協議を行っているという認識をもてば、ふさわしくないあらゆる言動を慎むでしょう。

バハイはそれぞれ協議の場で自分の意見を述べることは自由です。そして最終的には過半数をもって結論に到ります。一旦決定がなされると、それが自分の意見と異なるものであっても、各人はその決定を尊重しなければなりません。金子さんは精神行政会のメンバーだとしましょう。彼はレズワンの祝祭の１２日目の集まりを、5月2日の午前中に開こうと提案します。しかし、メンバーの大部分は前日の夜に集まると言います。金子さんの提案には非常に良い理由があったかも知れませんが、精神行政会がそれと違う決定をした以上は、金子さんの出した意見に固執せず、精神行政会の決定を心から受け入れ、会合の準備に最善を尽くすでしょう。アブドル・バハは次のように書いておられます。

「この時代においては精神行政会の協議は最も重要で、欠くことのできないものです。精神行政会に服従することは大切であり、また義務でもあります。そのメンバーたちは、悪感情や不和が生じないように十分に注意しながら協議を進めなければなりません。このことは、各人が自分の意見を自由に述べ合い、議論を尽くすことによって初めて達成できるのです。自分の出した意見が反対されても、決して気を悪くしてはならないのです。問題が十分討議されて初めて正しい方向が示されるのです。真理の光を放つ火花は、種々異なった意見の衝突の中から現われるのです。討論の後に、決定が満場一致でなされれば、それは大変すばらしいことです。しかし、意見のまとまらない場合は、多数決によって決定がなされるのです。」

精神行政会のメンバーによって出された種々の意見を、おいしいシチューの中の色々の素材に例えることができます。おいしいシチューを作ろうとする時には、たくさんの材料を混ぜ合わせて、良く煮込みます。色々な材料が良く混ぜ合わされた時に、初めておいしくなります。つまり、それ

ぞれの素材の持ち味がシチューの風味を高めるのです。しかし、素材を別々に口にしてもそれほど美味しくはないかも知れません。同様に、バハイの会合に参加した各人の意見は、協議の過程を経て最終的な決定に何らかの貢献をするのです。ただし、決定そのものは誰のものでもなく、全員が共有する結果なのです。

アブドル・バハの次の言葉は、バハイの協議の方法を示すものです。

「互いに協議する人々にとって、最も重要な条件は純粋な動機、輝ける精神、神以外のすべてのものからの離脱、神の芳香に心魅せられていること、神の愛し給う人々に向かって謙虚であること、困難に直面した時の忍耐と我慢強さ、そして聖なる敷居に対する奉仕の精神です。これらの属性を彼らが取得するならば、目に見えぬ神の王国から彼らに勝利が授けられるでしょう。

第一の条件は、精神行政会のメンバーの間の完全な愛と調和です。彼らの間に疎外感があってはならないのです。彼らは神の和合を表わす存在でなければなりません。何故なら、彼らは一つの海の波であり、一つの川の水滴、一つの天の星、一つの太陽の光線、一つの果樹園の木、一つの花園の花であるからです。思考の調和と完全な和合が存在しなければ、その集いは散会し、その会合は何の役にも立たないでしょう。第二の条件として、彼らが集合する時には高きにある王国に顔向け、栄光の領土から助けを乞わなければなりません。意見を述べる時は、最高の献身、礼儀、威厳、配慮、中庸をもってしなければなりません。彼らは何事によらず真理を追及し、自己の意見に固執してはならないのです。何故なら、自分の意見に固執し、それを通そうとすれば、それは結局不和や論争の原因となり、真理が隠されたままになってしまうからです。メンバーたる者は、自分の意見を全く自由に述べなければなりません。また、他人の意見を決して軽んじてはならないのです。メンバーたる者は中庸をもって真実を述べなければなりません。意見の相違がある場合は、多数決でものごとを決め、全員がそれに服従しなければならないのです。メンバーたる者は既に決定された件に関して、その決定が正しいものでないにしても、議場の内外を問わず、それに反対したり非難したりすることは許されません。何故ならば、このような批判はいかなる決議に対しても、実施の妨げとなるからです。要約すると、どんなことでも和合と愛と純潔な動機をもって行われたことは、その結果は光明であり、疎外感が少しでも存在するならば、その結果は暗黒の上になおも暗黒となるでしょう。これらの原則が遵守されれば、その精神行政会は神に属するものとなるでしょう。さもなければ、悪魔より発生する冷酷さと不和が生じるでしょう。

討議は精神的な課題に限定されなければなりません。つまり、人々の魂の育成、子供の教育、貧困の救済、世の中のあらゆる階級にある弱者への援助、すべての人々への親切、神の芳香の発散、神の聖なる言葉の高揚など限定されなければなりません。これらの条件を満たそうと努力するならば、聖霊の恩寵は彼らに授けられ、その精神行政会は神の祝福の中心となり、天来の確証の軍勢が彼らの援助に現れ、日々彼らに聖霊が新しく降り注がれるでしょう。」

精神行政会の活動(2)

愛野市の精神行政会の9人のメンバーは、4月25日に再び集合しました。議長はメンバー中の数人に祈りをするよう依頼しました。祈りはバハオラ及びアブドル・バハによって示されたものでした。その内のあるものは、特に会合の時に祈るように示されたものでした。開始の祈りの後で、議長は書記に記録の中から前回の会合の時の記録を読むように頼みました。以下が書記が読み上げた記録です。

「愛野市の第一回目の精神行政会の会合が、4月22日の午後6時に開催された。開始の祈りがなされ、山田氏が会議の前半を司会した。議長選挙が行われ、鈴木氏が議長に選ばれた。山田氏は彼に会議の後半を司会するよう依頼した。精神行政会の選挙が引き続き行われ、次のメンバーが選挙された。

高橋夫人　　副議長
岡田氏　　会計
山田氏　　書記

次回の精神行政会の会合を4月25日に開催することを決めた。会議は午後八時、終わりの祈りをもって閉会された。」

書記が読み終わると、議長は前回の会合の議事録を承認しますかと他のメンバーに尋ねました。そこで各メンバーは議事録は正しいと承認しました。それから議長は、精神行政会の主な目的は神の教えを広め、自分たちの生活の中で実践していくことにあるから、この会合でこの事柄を取り上げて討議したいと宣言しました。そこで議長は各メンバーにこの問題に関する各人の意見を述べるように促しました。各人が皆それぞれ意見を述べ終った時に、議長はそれを次のよう

に要約しました。

⑴ 我々自身もっとバハイについて知る必要がある。

⑵ 我々は文献が欲しい。

⑶ 我々は資金が欲しい。

⑷ 我々は布教活動を隣町から始めなければならない。

それから、彼らはこれら4つの課題を一つづつ取り上げました。メンバーの中の一人が、この重要な企画について共同体の全員に話し、自分たちがやろうとしている活動に参加できるかどうか聞いてみようと提案しました。一人のメンバーはバハイについて、もっと多くを知るために勉強会を毎週もつ必要があると提案しました。彼らは土曜日の会合をこの目的に用いることができます。彼はこの研修会を指導してもらうために、和光市の渡辺さんに都合を聞いて見ようと提案しました。

議長はこの意見を支持する方はありませんかと尋ねました。清水さんが手をあげました。そこでこの動議は正式に取り上げられ協議されます。しばらく協議した後、議長は土曜日の研修会を指導するために、和光市から渡辺さんを呼ぼうという提案に賛成の方は手をあげて下さいと言いました。

七人が手をあげました。他の二人即ち久保田さんと鈴木さんとは、渡辺さんがはるばるやって来ることは不可能だろうと考えたので、この提案に賛成せず手をあげませんでした。議長はこの議案が多数決で通過したと宣言し、書記にそのことを議事録に記載するよう頼みました

次に議長は渡辺さんの交通費に言及し、愛野市まで来て研修会を指導してもらうには経済的援助が必要になると説明しました。議長は他の人々にこの問題についてどう考えるかと尋ねました。久保田さんは言いました。「我々メンバーは共同体の人々に対して、基金に献金するお手本を示さなければなりません。私は毎月この基金に献金することをお約束します。私は精神行政会に喜んで献金したいと思います。」久保田さんはもともと、この提案には賛成の投票をしませんでしたが、それが地方精神行政会（ＬＳＡ）を通過した以上、彼が今やその決定に支持を与えていることが分かり、他のメンバーたちは非常に喜びました。その訳は精神行政会が決議したら、それに賛成であろうとなかろと、私たちはその決議を受入れ、多数決を尊重しなければなりません。ＬＳＡの他のメンバーもまたいくらかづつ献金しました。この一連の決定を4月２９日に開催する１９日毎のフィーストの席上、共同体全員に発表し、バハイの友の協力を求めることに決まりました。

議長はそれから布教活動に必要な文献の問題に議題を移しました。協議の後、精神行政会はこの問題について、全国精神行政会（ＮＳＡ）に援助を求めなければならないという結論に到りました。

これらの問題が片づくと、議長は次に協議しなければならない課題は、近隣の町々にバハイの教えをどのようにして伝え広めることができるかを検討しなければならないと発言しました。山田さんは日曜毎に交代で隣町の知人を訪問してはどうかと提案しました。他の者もこの提案に賛成しました。

議長はこの問題について、他に何か提案があるかと尋ねました。岡田さんは特別の祭日とか記念日に集会を開いて近隣からバハイでない友人や、親戚を招待するのは良い考えであると発言しました。この提案も支持者を得て、票決にふされ、精神行政会によって承認されました。最後に、彼らは次回のＬＳＡは4月２９日、即ちフィーストの翌日に開催することに決めました。そうすれば、前日のフィーストの時共同体の皆さんから、精神行政会に対して提出された提案を協議することができるからでした。終了の祈りの後、精神行政会のメンバーたちはこれからの活動への期待に胸を踊らせながら家路につきました。

この会合で取り上げられたことは、精神行政会がいかに任務を遂行するか、いかにして協議に入るか、またいかにして有効な決議に到達するかを示した一例です。様々な共同体で取り上げられる問題は同じではありません。各共同体のニーズは必ずしも同一ではありません。各精神行政会は注意深くその任務を考慮し、各共同体での重要度にしたがって、自らの仕事の採否を決めなければなりません。

精神行政会の活動（3）

今日は4月２８日のフィーストの日です。愛野市のバハイは１９日毎のフィーストを祝うために集まりました。精神行政会の議長がフィーストの司会をつとめます。議長が出席できない時は、副議長が代行します。フィーストの最初の部分はいつも祈りに捧げられ、バブやバハオラやアブドル･バハの書かれたものの中から選んで朗読します。祈り及び聖典の朗読中は、出席者は深く心をしずめ、瞑想する気持ちで傾聴します。祈りや朗読の数は、皆を飽きさせない程度に止めなけ

ればなりません。

フィーストのプログラムの第一部が終わると、精神行政会の議長の鈴木さんは、書記の山田さんに精神行政会の報告を読むように頼みました。山田さんは共同体の皆さんに、精神行政会の役員選挙の結果及び隣接地区にバハイの教えを広めるための活動開始の決定について報告しました。山田さんはまた活動に必要な援助と、教師を招いたり、研修会を開くために必要な資金について共同体の皆さんに報告しました。

書記の報告が終わると、議長は共同体の皆さんに向かって、この問題について何か提案を出してくれるように、またどの程度まで援助してもらえるか意見を聞きたいと言いました。参加者は様々な方法で援助することを約束しました。ある人は、研究会毎にお茶と茶菓子を提供しようと言いました。他の人は一ヶ月に一回だけ、教師の旅費の片道分を払いましょうと言い、次の人は布教活動にあたり、一ヶ月に一日奉仕しようと約束しました。これら協力の約束のほかに、彼らが考えてもいなかった2、3の重要な事柄が指摘されました。たとえば、毎週の研修会や布教活動のほかに、これまで時々開かれていた地方の品評会にバハイの教えを紹介する計画を立てるようになりそうです。品評会に参加する人もバハイの文献を持って行って人々に配るようになるでしょう。また、資金を有効に使うために多くの貴重な提案が出されました。書記はフィーストのときに出された提案を全部記録にとって、次回の精神行政会にかけ、協議を行う材料とします。

精神行政会の議長は、今日だされた提案を慎重に考慮し、次回のフィーストのときに共同体の皆さんにその決議の結果を報告すると約束しました。

フィーストのプログラムの第三部は社交親睦の時間です。四家族が共同で各人に茶菓接待をしました。美しい声をした若い人たちの一団が、議長の許しを得て歌い出し、他の人たちも合唱を初めました。一人のバハイの少女が学校で覚えた美しい詩を朗読し、参加者は皆それに聞きほれました。　愛と幸福の気持ちで、愛野市のバハイたちはフィーストを祝い、一同精神的な祝福を心から感じとりました。最後のお祈りの後、彼らは祝福感に胸をふくらませつつ、それぞれの家に帰って行きました。

愛野市の精神行政会はフィーストの翌日に開かれました。開始の祈り、前回の会合の議事録が読まれ、一同これを承認した後に、前日のフィーストのときに皆さんから出された提案について協議が始まりました。検討を重ねた結果、精神行政会は多数決で提案のすべてを承認しました。

レズワンの期間の最終日に当たる5月2日、精神行政会は愛野市の全員のバハイを招待し、布

教や宣布活動を進めるためにいくつかのグループに分かれて日常的に活動する方法について説明することに決まりました。そして、精神行政会の三名のメンバーが担当となり活動の推進のための適切なプログラムを編み出す委員会を作ることになりました。

精神行政会の会合を終える前に、協議することがもう一つありました。愛野市のバハイの二人の間に行き違いがあって、それを解決してほしいと当事者たちから要請があったのです。精神行政会は双方の言い分を別々によく聞きただした後、両者を呼んで、愛と分別の精神をもって相互間の問題の解決に努力してほしい、という申し出をしました。

精神行政会の書記は、その翌日、会合の記録に基づいて次のような報告書を全国精神行政会に送りました。

親愛なる全国精神行政会の皆様、

バハオラの御恵みにより、この度、わが愛野市に地方精神行政会が結成されましたことをご報告できますことは、我々の最も大きな喜びとするところです。地方精神行政会の設立後に提出するようお送り下さいました用紙に、9名のメンバーと4人の役員の住所氏名を記入し、すでにお送り申し上げました。

さて、和光市に住む渡辺さんに、毎土曜日に我々の町に来て、研究会を指導するよう依頼しました。さらにまた、月一回の月曜日に数人のバハイで構成されるグループを組み、様々な活動に取り組むことにしました。

精神行政会内に基金を設立しましたところ、今までにバハイの皆様から○○万円の寄付が集まりました。そして、毎月同額の献金をすることを約束いたしました。このお金は当精神行政会の管理のもとに各活動の促進に利用されます。

我々は相当量の文献が入用ですので、どうぞ多量の小冊子と登録カードをご送付下さるようお願い申し上げます。

信教発展のよい便りが、次便で申し上げられるよう希望しております。

バハオラが我々の歩みを導かれることをお祈りしつつ。

愛野市地方精神行政会書記

山田　五郎

日本バハイ全国精神行政会書記
〇〇殿

全国精神行政会

国内のすべての地方精神行政会は、全国精神行政会の管轄下にあります。

全国精神行政会のメンバーは、毎年レズワンの期間中に開催される全国年次大会において選出されます。選挙権を持つのは各地域で選ばれた代議員です。全国各地から選ばれた代議員が年次大会に集い、全国精神行政会のメンバーを選挙によって選び、様々なテーマについて協議し、新しく選出された全国精神行政会に対する提案や要望をまとめます。前述したバハイの選挙の基本原則は、全国精神行政会の選挙にもそのまま当てはまります。選挙は神聖な義務であって、精神的な性格を持ち、事前の指名や宣伝、選挙活動はまったく行われません。

全国精神行政会の目的は、全国のバハイによって行われる仕事を統括し、その活動を促進することにあります。その任務を進めるに際して、全国精神行政会はしばしば万国正義院の指導をあおぎ、または大陸顧問との協議を重ねます。

すべてのバハイは地方精神行政会を通じて全国精神行政会の協力や指導を仰ぎます。それに対し、全国精神行政会は手紙、回覧、月報などを通じて全国のバハイと連絡を密にし、各地のバハイ活動や世界のバハイ活動の進展状況のニュースを提供します。あるいは、全国的な計画への参加・協力を求め、様々な相談や提案を促します。

全国精神行政会からの通信は、フィーストの席上、地方精神行政会の書記によって読まれます。もし、全国精神行政会から相談して欲しいと要請してきた場合は、各人は進んで自分の意見を述べたり、協力を約束したりします。フィーストの席上で相談した結果は、各地の地方精神行政会から全国精神行政会に送られます。そして、各地から寄せられた提案や意見をもとに全国精神行政会は協議を行い、最終決定を行います。

バハイの数が九名に満たない市町村では地方精神行政会の結成ができませんが、その場合はグループの中から書記を選び、その人が全国精神行政会との連絡を担当します。たった一人

しかバハイがいない場合は、全国精神行政会はその人に直接連絡をとります。

全国精神行政会の任務は多岐にわたるので、それぞれの仕事を援助してもらうために全国精神行政会は各種の全国委員会を任命し、その任務について指導します。例えば、全国精神行政会がバハイセンターを建設しようと決定した場合には、その事業に関する一切の仕事を行う特別委員会を任命し、バハイセンター建設についての指示を与えます。こうした場合、全国精神行政会は委員会のまとめた提案を受け入れようとも、修正しようとも、拒否しようともまったく自由です。地方精神行政会も同様に必要に応じて地方委員会を任命し、特定の任務に当たってもらうことができます。

このようにして任命された全国委員会や地方委員会は、その属する精神行政会に対して直接責任があります。同様に、地方精神行政会は全国精神行政会に責任があり、全国精神行政会は万国正義院に対して責任を持ちます。

全国精神行政会の役員は、地方精神行政会の場合と同様、9名の中から議長、副議長、書記、会計書記を選出します。場合によっては、記録書記を別に置くこともあります。全国精神行政会の役員の任務は地方精神行政会の役員の場合と同様ですが、ただその範囲が全国的になります。

年次大会

全国精神行政会のメンバーの選挙は、間接選挙によって行われます。各地のバハイが自分たちの地区から一定の数の代表者を選挙し、これらの代議員が全国年次大会に集まり、全国精神行政会のメンバーを選挙するのです。代議員の数は各地区のバハイの数に比例して決められます。こうして選ばれた代議員は、レズワンの期間中（4月21日から5月2日まで）に開催される全国年次大会に集合します。

全国年次大会の主な目的は、その年度の全国精神行政会のメンバーを選挙することにあります。それに加えて、全国から集まって来た代議員は、全国精神行政会と、またお互い同志間で、各地域の共同体の発展に関して語り合う機会を持つことになります。

年次大会は祈りをもって開会されると、まず第一に、年次大会の議長を代議員の中から選ばな

ければなりません。議長の任務は、協議を整然と、しかもバハイ精神に満ちた形で行うことにあります。次いで、やはり代議員の中から書記を選びます。書記の任務は年次大会の議事を記録し、代議員から全国精神行政会に向けた提案や要望をまとめることにあります。年次大会でやはり重要な役割を担うのが開票係りです。公正に選挙を進めるために開票係りは代議員に様々な注意を与え、投じられた票を集計し、その結果を発表する義務を負います。通常、複数の代議員が開票係りを務めます。

全国年次大会に関する基礎知識を2、3ここにあげて見ましょう。

⑴ 代議員は、全国の成人バハイの中から全国精神行政会のメンバーを九名、選挙で選びます。つまり、選挙権は代議員にあり、被選挙権はすべての成人バハイにあります。

⑵ 代議員は、年次大会に集い、全国精神行政会の選挙に参加する以外には任務も特権も持っていません。年次大会が終了すると、彼らの任務も終わったことになります。言葉をかえて言えば、年次大会は恒久的な機関でなく、大会が解散すれば代議員の役割も解消します。ただし、その年度中に全国精神行政会に欠員が生じ、補欠選挙が行われるときには同じ代議員たちによって選挙が行われます。

⑶ 年次大会は協議機関です。代議員は新しく選ばれた全国精神行政会に対し、様々な提案や要望を提出することができます。ただし、全国精神行政会はそれらの提案などを受け入れるかどうかは自由です。

⑷ 年次大会は、全国精神行政会に対する指導権を持ちません。全国精神行政会はその国におけるバハイ共同体の最高の権限を持ち、すべての地方精神行政会や個人のバハイはその管轄下にあります。

地方精神行政会に関するいくつかの質問

⑴ 精神行政会の決定に従わなければならないのか。

精神行政会は神の教えに基づいて設立されたものですから、バハイはそれを神聖な機関として尊重しなければなりません。従って、私たちは精神行政会のすべての決定に対し従わなければなりません。アブドル・バハは、精神行政会の決定の中に誤っている点があると分かっていても、

自分はその決定に服従すると言われました。このことは、精神行政会に従うことによって、私たちが神の命に服従することを示すものであります。

(2) 地方精神行政会の決定が正しくないと思った時はどうすべきか。先ずは従わなければなりません。それが神の命であるからです。その上で、地方精神行政会の決定を再考するよう全国精神行政会に訴えることができます。地方、並びに全国精神行政会に従うことによってバハイの機構の基礎を強化することになります。もし各人が精神行政会の決定の中の一部だけに従うとなれば、バハイの間の調和と和合はあり得ないでしょう。

(3) 精神行政会のメンバーの中に気に入らない人がいるから、その決定に従わないことはできるのか。それは非常に間違った態度です。精神行政会に対する私たちの忠誠は、そのメンバーの好き嫌いによるものではありません。それはバハオラの機関であって、メンバーが誰であろうとその機関に忠誠でなくてはなりません。共同体の和合は、メンバーの如何にかかわらず、大業の機関を完全に支持しなければ守れるものではありません。

(4) 精神行政会のメンバーを辞任することはできるのか。健康を害しているか、住居が他の都市に変わったとかという十分な理由なしには辞任することはできません。精神行政会のメンバーに選ばれることによって、神が私たちにその地域の共同体に奉仕する特典を与えられたことを忘れてはなりません。バハオラの教えに対する忠実な心と、バハオラご自身に対する愛情とが、大業への奉仕のためのいかなる責任にも応えることができるよう私たちを励ましてくれるはずです。

(5) 個人的な問題の相談を精神行政会に持ちかけることはできるのか。それはできます。アブドル・バハは、バハイが個人的な問題も含めて精神行政会と相談し、行き違いや不和を解決するよう勧められました。こんなことがあってはなりませんが、もし仮に二人のバハイの間に何かもめごとが起ったとしたら、精神行政会にその問題の解決を依頼することができます。そして精神行政会の決定がなされたとき、両者共それを喜んで受け入れなければならないのです。

(6) 精神行政会はそれを選挙したバハイたちに対して責任があるのか。言わば「選挙民」に対しては責任はありません。地方精神行政会は神に対して責任があり、様々な具体的な事項に関してはその国の全国精神行政会に対して責任を持ちます。精神行政会は、神の大業にとって何が正しいのか、何が有利なのかを判断して行動しなければなりません。また、共同体のメンバー間の問題に当たるときは、正義と公平の原則に沿って処理しなければな

りません。精神行政会が正義によって導かれる限り、共同体がその決定にどのような反応を示すかは問題ではありません。

(7) 精神行政会の権威にまさる権威はあるのか。

バハイには、個人としての指導権はありません。精神行政会の議長や書記であるからといった、個人としての特別な権利は何ら与えられていません。精神行政会の会合以外の所では、その地域共同体の他のバハイより多くの権限を持つということはありません。また、他の人と同様、精神行政会の決定にはすべて従わなければなりません。

万国正義院

バハイ信教独特の機関の一つに、万国正義院があります。そのメンバーは、世界中のバハイ信徒の中から、全国精神行政会によって選挙されます。バハオラはバハイ宗教性の存続する限り、万国正義院を通して、バハイ信徒を導き続けるだろうと、私たちに保障されました。

バハオラは現代に適合した根本的な掟と、神の教えとを私たちにお与え下さいました。しかし、私たちの要求が変化していくにしたがって、だんだんと書き加えられていかなければならない他の社会的な掟が、また必要になって来るだろうと、彼は言われました。バハオラが言われるには、これらの社会的掟や規定は、常に神の正しいお導きの下にある万国正義院によって、書き加えられなければならないということです。

万国正義院についてアブドル・バハは次のように言っておられます。

「それは必要な条件の下に、すべての信徒の中から選出されたメンバーで構成される。その正義院は神のご加護の下にある。もし、その正義院が聖典に書かれていない問題について、満場一致か過半数で決定するならば、その決定や命令は誤りのないものとなるであろう。」

それ故、万国正義院は全ての決定をなす場合、霊感を与えられるでありましょう。また、どのような規定を定めようとも、その時代の要求に対して、完全なものとなるであろうということは明白です。しかし、万国正義院はバハオラによって与えられた基本的な原則でも変更できると私たちは考えてはなりません。万国正義院のなし得ることは、ただバハオラの定められた掟を実行する上に、必要な規定を定めることです。

例えば、バハオラが私たちに世界共通語を持つように命令されましたが、しかし、彼はそれが、どういう言葉でなければならないかということは述べておられません。このことは、万国正義院が決定するように残されているのです。

これに関してバハオラは次のように書いておられます。

「‥‥‥我が書簡の中で、世界共通語は現存の言葉の中のどれか一つを選ぶか、あるいは、また新しい言葉を創るかという問題、また同様に、世界が一つの国、一つの家族となるように、世界中の学童に共通語を教える共通の教科書を採用させるという問題は、正義院の世界共通語委員会に命じてある。」

万国正義院はバハオラによって示された如何なるものでも、変更することはできず、また、アブドル・バハやショーギ・エフエンディの解説中のどれでも、改変することは出来ませんが、四囲の状況が必要とする場合には、正義院自身で決定したものは、これを変更することが出来ます。

アブドル・バハの遺訓集の中に、こう書いてあります。

「もっとも聖なる本（キタビ・アグダスの書）に、各人は顔を向けなければならない。また、その中に明らかに記録されていないものは、全部、万国正義院に照会されなければならない。この機関が満場一致か多数決で決めたことは、真に真理であり、神ご自身の御目的である。それに背く者は誰でも、真に不和を愛するものであり、悪意を示し、聖約の主から顔をそむける者である。」

私たちの敬愛する守護者は、その３６年間の在任中、万国正義院の設立に道を開くため、苦心努力されました。万国正義院は賜物の高楼（ドーム）のようなもので、それを支える強い柱を必要とすると、守護者は言われました。彼の言葉によるとこれらの柱は、世界中の全国精神行政会であります。これらの柱が、地球上のすべての地域に一つ一つ建てられたのは、守護者の弛みない努力の賜でありました。守護者の聖なる指導の下に、バハイ信徒はグループとして、また地方精神行政会として、働く方法を学び、各国は全国精神行政会を通して、一緒に働く方法を会得しました。彼らがここまで到達したところで、守護者は十年計画を与えられました。その計画は、全国精神行政会に世界的企画において協同して働くことを教え、またバハイ信徒が、万国正義院の残りの柱を建てる仕事に援助を与えました。１９６３年十年計画の完成によって万国正義院を設立するに十分な数の全国精神行政会が、全世界に出来ました。

バハイ信教が世界各地にひろまった時に、万国正義院が設立されるであろうとは、アブドル・バハの予言でした。そしてその予言は、十年計画の終了と共に実現されました。国際バハイ理事会

は、万国正義院の前身の役を務めるために選挙されなければならないと、そして、１９６３年万国正義院が設立される時まで信教の世界的中心地ハイファで、９人の理事が仕事を続けておりました。

守護者の十年計画通りに、１９６３年のレズワンの期間に、バハイ信徒のための世界会議が、ロンドンで開かれました。これは守護者の十年計画の完成を祝うばかりでなく、万国正義院の設立を祝うものでもありました。この万国正義院は、実に、神が地上人類に関する万端を導き給う最高の機関であるのです。

バハイ基金

あなたの住む村に洪水が起り、隣の人の家が流されてしまったとします。村の人々は集まって、家を失った家族のために仮の住居を建ててあげようとしています。その時、あなたはどうしますか。自分は貧しいので援助できないと言うか、それとも、困り果てた隣人のために雨を凌ぐ屋根をこしらえてあげようと、小額であっても自分の分担を出そうと申し出ますか。あなたが提供するものはごく小額のお金であったり簡単な建材であっても、それは他の多くの人が出し合うものと合わせれば家を失った家族のために仮住居を建ててあげることができるでしょう。

今日の人類は、戦争の嵐や、何百という災害に遭遇した家なき家族のようなものです。それに対してバハイ共同体は、人類に平和と幸福を提供する避難所でなければなりません。世界中のバハイは、人類のためにこの避難所を建設しようと努力しているのです。私たちもそれぞれ救援にかけつけようではありませんか。

私たちはバハイの諸機関を設立し、多くのセンターや礼拝堂を作り、この教えを世界中の言葉に翻訳し、パンフレットや書物を出版しなければなりません。以上のためにも、また多くの他の計画を実行する上にも、私たちは財源を提供し、人的な援助を続けなければなりません。その目的のために、各地方精神行政会や全国精神行政会では特別な基金を設けています。この基金は、バハイの人々の献金によるものです。

バハイの献金は自発的になされなければなりません。献金したくない人に対して献金を強制することはできません。しかし、バハイ基金への献金は、バハイとしての精神的な義務であって、私

たちの信仰の試金石でもあります。人類が神の大業をどれほど必要としているかをよく知っているバハイは、その機関を建てたり、悩んでいる世の人々に解決法を知らせたりするために、基金に参加し援助を与える特権を自ら放棄することはできません。その意味で、献金の額は問題ではないのです。むしろ、問われるのはバハイ基金に献金しようとする精神、大業の前進に可能な限り力を貸したいという心なのです。

守護者ショーギ・エフェンディは次のように書かれています。

「私たちは、泉や噴水のようでなければなりません。泉からは水が絶えず流れ出ていますが、また同時に、泉は目に見えない水源から絶えず補給されているのです。我々も貧困を恐れてためらうことなく、あらゆる富や幸福の源泉（神）から無尽蔵に御恵みが授けられることを確信して、同胞の福祉のために絶えず与え続けなければなりません。これこそが正しい生活の秘訣なのです。」

各精神行政会は基金を設けなければなりません。そして、バハイ共同体の人々は、自分の自由意志に従って、また自分の能力に応じて献金しなければなりません。神が私たちに授けて下さったものの一部を差し出すことによって、私たちは慈悲深い神に感謝を捧げることができるのです。

献金について、アブドル・バハは次のように言われています。

「おお汝ら神の友らよ。献金の代償として、汝らの営む商業、農業、そして工業が幾倍にもなって祝福されるであろうことを確信せよ。一つの善行をなす者に対し、神は十倍与えて応えるであろう。実在の主は、寛大な心の持ち主を助け確証を授けることに疑いはない。」

第七章、規律と義務

祈り

「ある人が他の人に愛情を感じるならば、その人は相手の人にそのことを告白したいと思うでしょう。自分がその人を愛していることを、相手の人が気づいていると分かっていても、なお、その人は相手の人にはっきりと告白したいと思うでしょう。神は万人の心の望みをすっかり知っておられますが、なお、人が祈りたいという衝動がおこるのは神への愛慕の情から生じる自然の姿です。」

アブドル・バハは、祈りは神との対話であると言われました。アブドル・バハは次のような言葉をも残されています。

「私たちは天の言葉を用いなければなりません。それは魂の言葉です。それは心と精神の言葉なのです。私たちが日常的に使う言葉が、単に吠えたりうなったりする動物の言葉とは違っているように、天の言葉は私たちの日常的な言葉とは違っているのです。神に届く言葉は魂の言葉なのです。祈る時、私たちは自分を外界のあらゆるものから解放し、ひたすら神に顔を向けなければなりません。私たちが心の中に神の御声が聞こえるように感じるのはその時です。言葉なしに私たちは神と対話し、意志を通わせ、神の回答を聞くのです。真に精神的な状態に到達した時、人は誰でも神の御声を聞くことができるのです。」

人間にとって祈りとは精神の糧なのです。祈りを怠るならば、心に栄養が届かず、精神的に強く健康になることはできません。祈りがバハイの義務であるのはこのためです。バハオラはアグダスの書に次のように書いておられます。

「神の聖句を毎朝、毎夕かかさず唱えよ。それを怠る者は、神の聖約とその証言に対する忠誠を怠る者である。この日、これらの聖句から顔を背ける者は、神より永遠に顔を背けた者らの一人である。おお我が僕らよ、皆ことごとく神を畏れよ。神の聖句を大量に読むことや、日夜多くの敬虔な行為を重ねることを誇るな。危急の場の救助者におわし、御自力にて存在したもう神のすべての聖なる書をだらだらと読むよりも、たった一行の聖句を喜びと輝ける心をもって唱える

方が汝らにとって有益なのである。疲れたり、気が滅入らない程度に聖句を読むようにせよ。魂を疲労させ、圧迫するようなことを自らに課してはならない。むしろ、汝らの魂が聖句の翼に乗って神の明白な証の黎明の場に向かって舞い上がることのできるよう、魂を活気づけ、高揚させるものを課すようにせよ。このことが汝らを神の方へと近づけるであろう。もし汝ら、理解するものならば。」アグダスの書、段落149

私たちは、バハオラのこの言葉から多くを学ぶことができます。バハイにとって、祈りは欠かすことのできない必須の条件なのです。また、祈りを一種の儀式や祭式として見なしてはならないということも理解されます。

普段聞きなれない言葉を、その内容も分からないままにただ朗読するだけで立派なお勤めをしていると考える人は少なくありません。一日に聖典を一冊全部読めば、神の恩恵が頂け、何らかのご利益にあずかれると信じる人もなかにはあります。

言葉の意味をまったく理解しないまま、聖典の朗読に多くの時間を費やす人もあります。これは祖先の行った方法を、ただ盲目的にまねれば救われると考えるからでしょう。しかし、バハオラが求めておられるのは言葉だけの祈りや礼拝ではありません。「聖句を喜びと輝ける心をもって唱える」こと、そして「魂を活気づけ、高揚させ」、「魂が聖句の翼に乗って神に向かって舞い上がる」ことこそが祈りの目的であり、真髄なのです。

バハイの書物には、バブ、バハオラ、アブドル・バハによって著わされた何百もの美しい祈りがあります。祈りたい時は、いつでもそれらの中から選んで祈ることができます。バハイの集会は祈りに始まって祈りに終わります。その時の祈りは、一人の人が祈りの言葉を読み、他の人々はその言葉を傾聴し瞑想します。祈りの言葉には、人の心を活性化し奮い立たせる力が備わっています。熱意をもって、また美しい声をもって唱えられた祈りはそれを聞く人の心を引きつけ、精神を高める効果を発揮することができます。

バハイは、自分の置かれている状況や心の状態に則した内容の祈りを自由に選んで唱えることができますが、これら一般の祈りは義務的なものではなく、自主的に行われるものです。それに対して、バハイが日々唱えなければならない必須の祈りがあります。必須の祈りは三種類あり、どれを選ぶかは自由ですが、毎日その内のどれか一つを唱えなければなりません。各必須の祈りにはその長さ、唱える時間帯、一日に唱える回数に多少の違いがあり、自分の生活パターンに

一番合ったものを選ぶことができます。下記の「短い必須の祈り」は、一日に一回、正午から日没までの時間帯に唱えることができます。

「神様、あなたが私を創り給いましたのは、あなたを知り、あなたを崇拝するためでありますことを証言いたします。今こそ私の無力なことと、あなたの御力の大いなることを、また私の貧しさと、あなたの御豊かさをとを証言いたします。あなたの他に神はいまさず、あなたは危難の中の御救いに在し、御自力にて存在し給う御方にまします。」

この祈りを毎日唱えようと心に決めたら、それを暗記しておくと便利です。しかし、私たちがどの祈りを唱えようとする時でも、祈りを捧げる精神が大切であることを忘れてはなりません。このことについてアブドル・バハは次のように説明されています。

「最高の祈りとは、ただ神を愛するが故に捧げる祈りであって、神や地獄を恐れたり、天の恵みを願うためのものではありません。人が恋に陥るとき、恋人の名を呼ばずにおられなくなります。ましてや、人が神を愛するようになったとき、神の御名を呼ぶのをとどまることは不可能です。精神的な人は、神を想起し、神を愛すること以外の何物にも喜びを見い出すことはできないのです。」

断食

バハイには独自の暦があります。一年に19ヶ月あり、一ヶ月に19日あります。これだけで365日には足りませんので、バハイの暦には4日あるいは5日間の「うるう日」の期間があります。この期間は「アヤメハ」と呼ばれ、一年の18番目と19番目の月の間に置かれています。（これは西暦の2月26日から3月1日までの期間に当たります。）アヤメハは一年の中でも特に「慈善と施しの期間」として位置づけられています。この期間中、バハイは様々な慈善事業などを通じて困難や苦しみにあえぐ人々に手を差し伸べたり、人々に食事を振る舞ったりします。アヤメハが終わり、一年の最後の月に入るとそれはバハイの断食の月となっています。断食の19日間は日の出から日没まで（大体午前6時から午後6時まで）一切の飲食を絶ちます。神に祈るために夜明け前に起床し、すべての恵みと祝福に対して感謝を捧げます。それから、太陽が上る前に朝食をとり、太陽が沈むまでの昼間は何も口にしません。日没に祈りを捧げ、その日の断食を終えて夕食を

とります。

断食の１９日間の趣旨は、神により一層近づくことです。バハイは断食を守ることによって神に対する愛の心と、神の命令を忠実に実行することを象徴的な方法で表現しているのです。アブドル･バハは断食について次のように述べておられます。

「断食は一つの象徴なのです。断食することは肉体的欲望を断つことを意味し、欲望を克服しようとする一つの象徴なのです。肉体的欲望を断つと同様に、自我の欲望や自己中心的な考えをも抑えなければならないということを想い起させるのが断食です。物を口に入れないだけの断食であれば、精神に何ら影響も効果もありません。断食は一つの象徴であり、自分に対する戒めなのです。それ以外の意義はないのです。この目的で行う断食では、完全な絶食を長く続けることは不要です。食べ物に関する黄金律は過食、過小食をしないということです。中庸が肝心です。」

結局、断食は忍耐力を養い、飢える人々への慈悲を増し、日常生活の無駄を反省し、精神の向上へと導いてくれるのです。

一日の断食に入るために、日の出前から祈りと瞑想の心構えをしますが、断食期間中に唱えるものとして多くの美しい祈りがあります。これらの祈りを唱え、朝食をとってから日没までの断食に入ります。普段にも増して、断食期間中はバハオラに対する愛慕の気持ちがひしひしと湧いて来ます。そして、バハイが断食をするのは、バハオラを愛するがためであることを常に心に思い浮かべます。日没を迎えるとその日の断食は終わりますが、食事をとる前に聖典の言葉を読み祈りを唱えます。バハオラによって著わされた断食のための祈りの中から一つを次に記します。

「主なる神に賛美あれ。暗黒を光明と化し、人々が絶え間なく集う神殿を築き、書き記された書簡を現わし、繰り広げられた巻物の覆いを取り除いたこの啓示により嘆願いたします。私と、私とともにいる者らに、卓越した御光の天上に舞い上がることを可能ならしめるものを下し与え給え。そして、疑い深い者があなたの唯一性の聖堂に入るのに障害となるような疑念の痕跡を洗い清め得るものを私どもに授け給え。

おお我が主よ、私はあなたの御慈愛の御綱をしっかりと握りしめ、御慈悲と御恩恵の御裾にすがりまつる者であります。私と、私の愛する者らに現世と来るべき世の良きものを授け給え。そして、創造界の最も優れた者に授け給う隠された賜物を彼らに定め与え給え。

おお我が主よ、今はあたなが僕らに断食を守るよう命じ給いました日々であります。あなた以外のすべてのものを完全に超越し、ひたすらあなたのために断食を守る者に祝福あれ。主よ、あな

たに従い、御戒めを守ることができますよう私と他の僕らを共に助け給え。まことに、あなたは欲するがままになし得る御力の御方に在します。
　あなたの他に神はいまさず、あなたは全知にして聡明なる御方に在します。諸々の世の主にましますに神に賛美あれ。」
　断食の期間は、バハイの暦の一年の最後の日にあたる3月２０日まで続きます。明けて3月２１日はバハイの新年の元旦です。これをノウ･ルーズと呼び、この日、バハイは断食の終了と新年の始まりを祝います。

仕事は礼拝である

　バハオラの教えの中に、万人は働かなければならないという規律があります。逆に、怠けた生活を送ることは罪悪とされます。この教えにおいて、働くことは各人の義務です。さらに、社会への奉仕の精神をもって行う仕事は礼拝にも等しいとバハオラは説いておられます。

　「おおバハの人々よ。汝らには、技術や商業など、何らかの職業に従事する義務がある。仕事に従事する汝らのその行為を、我は唯一真実の神の礼拝と同じ地位にまで高めた。おお人々よ、汝らの主の恵みと祝福について熟考し、朝な夕なに主に感謝を捧げよ。」　アグダスの書、段落３３番

　このことについてアブドル･バハは次のような解説を加えておられます。
　「芸術、科学及びすべての技術は礼拝と見なされるのです。良心的に自分の最善の能力を発揮し、全力を傾注して一枚の紙を完成させる人のその行為は神を賛美することと同じなのです。要するに、純粋な動機と人類に対する奉仕の精神を心に抱き、真心から行うすべての努力は礼拝そのものなのです。人類に奉仕し、人々の困窮を助けること、それが礼拝なのです。奉仕は祈りなのです。」
　働くことは礼拝である。これは素晴しい教えです。
　神に祈るとき、喜びと誠実の心をもって礼拝しなければなりません。自分のために、また、他人

のために土地を一生懸命耕す農夫は神を礼拝しているのです。額に汗して物を作る工夫も、心を込めて子供を教育する教師も、患者の治療に奮闘する医者も皆その行為において神に賛美を捧げ神を礼拝しているのです。

バハオラの祝福により、すべての畑は神に賛美を捧げる寺院となり、あらゆる工場は礼拝堂となり得るのです。この祝福によって職場は充実した礼拝の場となり得るのです。また、この教えの導きによってバハイは祈りを捧げると同じ喜びと、誠実さと、素直さをもって仕事に向かうことができるのです。

独りで山奥にこもる行者は、修業を通じて神を礼拝することができると信じ、あらゆる難行苦行をしようと覚悟しています。しかし、難行苦行や僧修行の時代はもはや終わったとバハオラは言われました。バハオラは、難行苦行を神に捧げる代わりに社会にとって有益な仕事や奉仕を通じて神に遣える道を示されたのです。仕事を礼拝の一つの形と見なすことによって、仕事に新たな喜びと充実感を見い出すことができるのです。

バハイでは、世を捨てて孤独な生活を送ることを褒むべきことと評価していません。バハイには僧侶や行者がいないのもこの理由からです。このことに関連してバハオラは次のように言われています。

「おお地上の人々よ。神は、孤独生活や厳しい鍛練を決して良しとしない。英知と洞察力を有する者は、喜びと芳香をもたらすものに向かなければならない。孤独生活や難行苦行は迷信と空想の胎内から生まれるものであり、知識を有する人々にはふさわしいものではない。過ぎ去りし時代には山中の洞窟に住む者や、夜中墓場に通う者もいた。言挙げよ、この虐げられし者の忠言に耳を傾けよ。汝らの握りしめるものを捨て、信頼される助言者の示すことを堅く守れ。汝らのために創られたものを自分から捨てることのないよう注意せよ。」

私たちは職場や畑や工場で神を礼拝しましょう。絶えず良心的に仕事を行うことによって神に賛美を捧げましょう。人類に奉仕することによって宇宙の創造主に真心のこもった祈りを捧げましょう。

神の大業の布教

バハイとしての義務は何かと尋ねられたら、(1) バハオラの教えを勉強すること、(2) その教えを実践すること、(3) その教えを広めること、と答えることができます。「各人は、自分の能力に応じて神の大業を伝え広めなければならない。これはすべての者に課せられた義務である」とバハオラは説かれています。

神の大業を教え広めることが、なぜ私たちにとって必要なのでしょう。

ある人が恐ろしい病気にかかっていたとしましょう。ある時、彼はその病気を癒し、すべての苦痛を直ちに治す薬を発見したとしましょう。素晴しい効能をもつその薬を彼はきっと大切にしまって置くでしょう。しかし、友人が同じ病気に悩んでいることを知った彼はその薬をどうするでしょうか。利己的な考えから薬をしまい込んで友人を悩むがままに放置するでしょうか。そんなはずはありません。彼は喜んで薬を友人のところに持って行き、自分ですでに試して見たから友人の病気も直ぐ治ることまちがいなしといって、その病める友人に勧めるでしょう。

バハオラは「全能の医師」です。そして、バハオラは私たちのあらゆる苦悩を治し得る素晴しい妙薬をこの世に持って来られました。憎悪、迷信、失望、不和という病は世界の人々を破滅の淵に追い立てています。これらの病に効く特効薬を手に入れ、その効力を自らの体験を通じて知ったバハイが、他人の苦悩をどうして見すごすことができましょう。彼は、周辺にいる兄弟姉妹に、自分が神の教えによって得た妙薬を分けてあげるようにしなければなりません。

バハイには僧侶もいなければ、布教を専門に職業とする特定の人もいません。従って、人々を神の大業に導く責任は一人一人のバハイの双肩にかかっています。

神の教えを人々に伝えることによって得るものは一体何でしょう。バハイは物質的利益を得ようと布教するのではありません。ただ他の人々を愛するが故に、また神がこの今の時代に付与された大きな賜物を人々が逃してはならないと思うために教えを伝えるのです。バハイは、バハイの考えを他人に押しつけようとはしませんし、論争もしません。バハオラの教えを受け入れたくないと断わった人に対しても愛を注ぎ続けなければなりません。「あなたは間違っていて、私たちの方が正しい」とは決して言いません。神がバハオラを通して示された教えを、ただ世界の人々に提供するだけなのです。それを受け入れるかどうかは相手の判断です。人々に対するバハイの愛情は、バハオラの教えを受け入れるかどうかに左右されるものではありません。このことについて、

バハオラは次のように注意されています。

「おおバハの人々よ。汝らは神の愛と恩恵の黎明の場である。悪意とののしりの言葉によって汝らの舌を汚すな。また、見る価値のないものから汝らの目を守れ。汝らの所有する真実を人々に明示せよ。それが受け入れられれば、目的は達成されたのである。また、受け入れない者を非難したり干渉したりすることはまったく無益である。受け入れない者はそのままにしておき、自らは、保護者でありご自力にて存在し給う神に向かって進め。人の悲しみの種となってはならない。ましてや、不和や争いの原因に決してなってはならない。汝らが天の恩恵の木陰に育ち、神の望むところに従って行動することを我は希望する。汝らは皆一本の木の葉であり、一つの海の水滴である。」

バハオラは他人に教える前に、まず自分自身に教えることを望んでおられます。つまり、他の人々にバハオラの教えを伝え、彼らがその教えに従うよう望む前に、まず自分自身の生活にバハオラの教えを実践するよう最善を尽くすべきだという意味です。バハオラはこのことを次のように説明されています。

「バハの人々は英知をもって主に仕え、自らの生活によって他の
人々に教え、自らの行いの中に神の光を現わさなければならない。まことに、行いの影響力は言葉の影響力を凌ぐものである。また、教える者の言葉の効力は、その目的の純粋さと、世俗よりの超越にかかっている。言葉を語ることに満足する者もいるが、言葉の真は行動によって試され、生き方の如何に左右される。行為は人の地位を現わすものである。そして、言葉に関して言えば、それは神の御意の口より発せられ聖典に記録されたものによらなければならない。」

自分の周囲の人々の精神的進歩を促し、祝福のもとになることは私たちにとって大きな特権です。恐らく魂の世界では、人々が人生の目的を理解し、普遍的な教えのもとに統合させるのを助けるほど尊い仕事はありません。アブドル・バハはバハイ各人が、少なくとも一年に一人の人をバハオラの教えに導くべきであると言われました。バハオラの大業を教え広めることによって、人類への真の僕であることを立証することができます。真のバハイとしての生活を営み、この時代に下された神の教えを実行するならば、人々はその姿を見て他とは違うことに必ず気付くでしょう。布教の重要性と、布教のもたらす祝福についてアブドル・バハは次のように書かれています。

「神の教えを広める者を、目に見えない天の援助が取り囲むということは明らかに知られている。また、教えを伝える仕事を怠るならば、天の助けは全く断ち切られるであろう。神の友たるものは、

教えの伝道に従事しなければ援助を受けることは不可能である。あらゆる状況下で神の教えを伝え続けなければならないが、常に英知をもって行わなければならない。バハイは魂の教育に従事し、精神の喜びと芳香が得られるよう世の人々を援助する道具とならなければならない。例えば、神の教えを知らない人と友達になり、親切を尽くして良い関係を育み、共に暮らし、また、良い行いと道徳的態度で彼に神聖なる教導を与え、天来の忠言と教えに導いて行くならば、次第に彼は目覚めてその無知は英知に変って行くだろう。」

清潔であること

アグダスの書の中で、バハオラは次のように言っておられます。

「汝ら、人類の間における清潔の真髄となれ。汝らの衣に少しの汚れの跡も残さぬほどの堅固さをもって、洗練さの綱にしっかりとつかまれ。清潔な水に浸かれ。すでに使用された水で沐浴してはならない。まことに我は、汝らを地上における楽園の顕現として眼にしたい。汝ら、神の好意を得る者らの心を喜ばせるような芳香を放散せよ。」（アグダスの書、段落74、106）

バハオラのこの言葉は、清潔の重要性を理解する上で助けとなります。神は私たちが一生を通じて健康で幸福であるよう望んでおられます。もし、私たちが清潔を守らないならば、私たちの健康は脅かされます。また、もし私たちが健康を保てたとしても、本来の十分な幸福を得ることはできません。

世にある病気の多くは、清潔の欠如によることを科学は証明しています。もし私たちが汚れた手で飲食するば、健康に害があります。それは、多くの病原がそうすることによって体内に入るからです。汚れた手で眼をこすれば、眼病を起すでしょう。

自分自身は勿論のこと、衣類や家の中を清潔に保つことは、バハイたる私たちにとって非常に重要なことなのです。なぜなら、それがバハオラの命令であるからです。

アブドル・バハは次のように言われました。

「外見を清潔にすることは、それが単に物質的なものであっても、精神面に及ぼす影響は大で

ある。清浄でよごれのない身体は、人間の精神にも大きな影響を及ぼすものである。」

アルコールの禁止

人間は心と魂を有するが故に動物と違うのです。神は私たちに、これら人類に授けた貴重な賜物を大切にするよう望んでおられます。そのため、私たちは心と魂をできるだけ健全に保つよう努力しなければなりません。

アルコールを飲むと、人間としての地位を忘れ、動物の水準にまで下落するほど心を傷めてしまいます。従って、アルコールを一切用いてはならないとバハオラは教えられました。バハイになる前にアルコールを飲む習慣をもっていた人は大勢います。しかし、バハオラを神の顕示者と認めその教えを受け入れてからは、飲酒を精神的にも、肉体的にも、また経済的にも損失しかもたらさないこの有害な習慣と見なし、その誘惑を逃れてバハオラの愛に避難所を求めたのです。そこで「命の清水」である神の教えを味わった者は日々のわずらわしさを忘れ、心の明るさを取り戻してアルコールを用いる必要がなくなるのです。アルコール以外にも、心や身体に重大な害を及ぼす麻薬や薬物の使用もバハイでは固く禁じられています。

祝祭日

バハイが仕事を休まなければならない特別な祝祭日が年に9日あります。どれもバハイの歴史の重要な出来事を記念する日として普通の日とは違う扱いとなっています。

暦の順番でいうと、最初の祭日はノウ・ルーズ（新年）の祝日です。この日は春分の日の3月21日に祝われ、断食期間の終わりと新年の始まりに当たります。

次の3つの祭日は、バハオラの宣言を祝う「レズワンの期間」（4月21日から5月2日までの期間）にまつわるものです。バハオラは1863年春、追放先のバグダッドを離れてトルコ帝国の首都のコンスタンチノープルに送られることになりました。その際、バハオラはバグダッド郊外の「レズワンの園」に12日間滞在されましたが、バハオラに別れを告げようと多くの友人・知人がこの花

園に集まってきました。この時、バハオラは初めてご自分が神の顕示者であることを公に宣言されました。神の約束された顕示者の出現の喜びに満ちたレズワンの園での１２日間を記念し、バハイは毎年レズワンの祭日を祝います。この期間の最初の日（4月２１日）、９日目（4月２９日）、そして最終日（5月2日）は特に重要な聖なる日として仕事を休んで祝います。

五番目の祭日はバブの宣言にあたる5月２３日です。１８４４年のこの日、バブはご自分の使命をモラ・ホセインに告げることによって初めて宣言をなさいました。

次の特別な日は5月２９日のバハオラの昇天の日です。１８９２年のこの日、バハオラは７５年の生涯を閉じられました。昇天の時刻に合わせて、午前3時に特別な祈りを唱えます。そして、7月9日はバブの殉教の日です。１８５０年、バブは３１歳にしてイラン北西部のタブリズで尊い命を落とされました。殉教の時刻に合わせて、正午に特別な祈りを唱えます。

バハイの暦の後半に相いついでやってくるのがバブの誕生日（１０月２０）とバハオラの誕生日（１１月１２日）です。当時使われていた陰暦では、バブとバハオラは誕生日は一日違いとなっています。バハイの聖地では、いまでも陰暦に従ってバブとバハオラの誕生日は二日連続して祝われています。

以上がバハイの一年の中の九日の聖なる日です。これ以外にも次に上げる重要な日が二日ありますが、この時は仕事を休む義務はありません。先ず、１１月２６日は「聖約の日」として祝われます。そして、１１月２８はアブドル・バハの昇天の日です。やはり昇天の時刻に合わせて、午前一時過ぎに特別な祈りを唱えます。

バハイの一日は日没に終わり、日没に始まります。従って、これらの祭日は前日の日没から始まります。例えば、バハオラの昇天の日は5月２８日の日没に始まり、5月２９日の日没までで終わります。

これらの祭日は、神の大業のために、また人類への奉仕のために何か重要なことを行って他の日と区別しなければなりません。各地のバハイ共同体は、それぞれの能力や状況に応じて特別な活動を行うことができます。個人においても同様にこれらの聖なる日を期により良いバハイとなり、また共同体のより良い一員となるよう心に誓うことができます。このように、バハイの祭日は単に楽しく過ごすだけが目的ではありません。バブの殉教の日およびバハオラの昇天の日は、もちろんバハイにとって悲しみの日です。しかし、神の顕示者に忠誠を示す唯一の方法は、顕示者が生死を賭して奉仕された大業に私たちの生命を捧げることにありますから、嘆き悲しむことはしま

せん。

バハイは祭日には共に集い、特別な祈りを捧げます。これらの集会によって和合と調和の精神が共同体全員の間に打ち立てられ、この精神が天の恵みを引き寄せる力となります。従って、このような精神的集会は非常に重要なものであります。和合についてアブドル・バハは次のように言われています。

「神の友らと、慈悲に満ちたもう御方の侍女たちの間に和合と調和が日増しに増大して行くことを神は望まれています。和合が実現していなければ、どんな方法を講じても万事進展は見ないでしょう。和合をもたらす最大の方法は、精神的な会合を持つことです。これは非常に重要であり、天の確証を引きつける磁石の働きをします。」

結婚

バハイにとって結婚は神聖な制度です。アグダスの書の中で、バハオラはこう言っておられます。「おお人々よ、結婚せよ、我が僕らの間で我れのことを述べる者をもたらすために。これは、汝らに対する我が命令である。自らを助けるためにこの教えに従え。」また、アブドル・バハは次のように言われています。「バハイ結婚とは、お互いの精神生活を向上させるものでなくてはならず、神の諸々の世を通じて永続する融合をもたらす精神と肉体の結びつきでなければなりません。」

では、バハイの結婚はどのように行われるのでしょうか。バハイ結婚にまず必要なのは次の二つのことです。(1) 男女両方が互いに結婚することを望んでいること。(2) 男女双方の両親がその結婚を承認していることです。この点について、バハオラは次のように言われています。

「僕らの間に愛と和合と調和の確立を欲し、そして敵意や恨みが起きないことを欲し、二人の望みが明らかになった後に、結婚について双方の両親の許しを得ることを我は条件とした。」

承諾が得られたら、その旨を所属の地方精神行政会に通知し、結婚立会人の派遣を依頼します。結婚式の当日、数人の立会人を前に、アグダスの書に記された次の誓いの言葉を互いに述べ合います。「まことに、私たちは神の御心に従います。」結婚式に必要なのはこのことだけです。そして結婚が成立したことが地方精神行政会によって登録されます。地方精神行政会のない場所では、数人の立会人の出席の下に新郎新婦によって行うことができます。

アブドル・バハは次のように述べておられます。「バハイの結婚は、両側の完全な同意と承諾のもとに成立します。当人たちは最大の注意を払い、お互いの性格を熟知しなければなりません。二人の間に交される堅い誓約は永遠の絆とならなければなりません。彼らの志は、永遠の融和、友情、融合、及び永遠の生命に向けられなければなりません。」この教えに従う結婚は、物質の世界にとどまることなく、精神の世界に及ぶ神聖な行為です。

さて、バハイはバハイ以外の人と結婚しても良いのでしょうか。バハイはどんな他の宗教のに属する人とも結婚することができます。これに関連して、バハオラは次のように指示されています。

「喜びと好意をもってあらゆる宗教の人々と交われ。正義をもって物事に向かえ。誠意と忠実の原則に従う人々は喜びと好意をもって世界のすべての人々と交わらなければならない。何となれば、交流は常に和合と調和を促進し、和合と調和は世界の秩序と国々の繁栄のもとであるからである。同情と親切を常とし、敵意と憎悪から身を遠ざける者は幸いなり。」

バハイでない人と結婚する場合、相手の人に、自分はバハイであってバハイの規律に従って両親の承諾を得なければならないことをはっきりさせておく必要があります。相手にバハイの結婚式を行うことを求めるとともに、相手の宗教の式も受け入れます。このようにして、バハイの結婚は、人類は一つであることの象徴でもあります。まさに、バハオラの教えは特定の人々のためにあるのではなく、全人類のためにあるのです。

政府への忠誠

バハオラは、社会を害するあらゆる活動を禁止されています。正当でない、あるいは破壊的な活動にバハイは参加してはなりません。このことについてバハオラは次のように言われています。「どの国にあってもこの共同体の人々はその政府に対して忠誠、信頼及び誠実をもって行動しなければならない。」このようにして、バハイたる者は自分の国の法や政府に忠誠を示さなければ、自分の信仰に対して忠実であり得ないのです。

このことについてアブドル・バハは次のように言われています。「政府への忠誠は、重要な社会的原則であり、精神的原則でもあります。これがバハイの見解です。どの地においても、我々はその政府に服従し、好意を持つ者とならなければなりません。より良き社会秩序と経済状態を築

き上げるためには、法と秩序の原則に従わなければなりません。これがバハイ精神の真髄です。」つまり、法の厳守と政府への忠誠の態度は、私たちの人格の一部として育成されなければならず、それなしには社会の前進や発展は望めないのです。また、反逆のどのような行為も罪悪なのです。バハオラは次のように強調されています。「正直と公正をもって、汝のすべての行為を特色づけよ。おお人々よ、真実の言葉をもって汝の舌を美しくせよ。正直をもって汝の魂を飾る装飾とせよ。おお人々よ、二心をもって人を遇することのないよう注意せよ。人々の中の神の信託者となり、神の寛容の象徴であれ。」

これに関連して、バハイが守らなければならないもう一つの重要な点があります。それは政党政治への不干渉の原則です。バハイはどんな政党にも加わることはできません。これは政党に参加している人々に反対する意味でもなければ、特定の政党に恨みを持つという意味でもありません。ただ単に政党や政治活動には一切参加しないのです。バハイには、バハオラによって示された世界秩序を建設するという使命があり、私たちの全エネルギーや資源をその仕事に費やすのです。神はまっすぐな道を我々に示されました。この道は、右にも左にも、東にも西にも傾いていません。それは全人類の和合の道であって、人種、国籍、信条、階級などの分け隔たりを認めない万人共通の道なのです。

バハイが政治運動などに参加しないもう一つの理由があります。守護者ショーギ・エフェンディの書物にその理由の説明を見ることができます。

「世界のどこにあっても我々は皆同じバハイなのです。神に源を発
る新しい世界秩序を全員で築きあげようとしているのです。各バハイがそれぞれ異なった政党に属し、互いにまったく反対の立場を主張するのであれば、この目的は達成不可能です。我々の和合と調和はどうなるでしょうか。政治が我々を分離させてしまうでしょう。これはバハイの本来の目的とまったく逆な結果を生むことになります。バハイが政党を選ぶ自由があって、例えばオーストリアのあるバハイがある政党に入党したとします。日本やアメリカやインドのバハイも同様に政党を選んで行くならば、その目的がいかに良いものでも、結局は主義主張の異なる政党に属することになるのは明白です。その場合、バハイの和合と調和は一体どうなるでしょうか。信仰によって結ばれた精神の兄弟が政治に参加したために（ヨーロッパでキリスト教同士が多くの悲惨な争いを起したように）互いに反対運動を繰り広げるようになるでしょう。バハイが、自分の国や全世界のために奉仕する最上の道は、バハオラの世界秩序建設のために働くことであり、その世界秩

序は次第に人類を統合し、不和を引き起こすような政治形態や宗教上の教義をやがて一掃するでしょう。」

バハイになるには

どうしたらバハイになれるのかという問いをしばしば耳にします。バハイは、人に招かれるのを待って入信するものではありません。また、入信のための特別な儀式や儀礼はなにもありません。肝心なのは、形ではなく心です。バハイになるということは、神の一体性、宗教の一体性、そして人類の一体性を確信することを意味します。また、バハイになることは、宗教は常に進歩を続け、分裂のためではなく和合と調和のために存在することを悟ることなのです。すべての宗教は神から出たものであり、その本質と目的において同一であることを認めることがバハイの信仰の礎です。その上に立って、我々の生きるこの時代における神の顕示者はバハオラであることを認めるのです。過去の顕示者と同様、バハオラは現代に生きる人類のために喜びと調和の新しい時代を開くべく出現されたのです。バハイになるということは、自分の心の中にバハオラの愛を発見し、その愛を大事に育てるということです。この愛を確信できればバハイなのです。儀式も洗礼も、名前の変更も、バハイになるためには必要ではありません。問われるのは信念と行動なのです。アブドル・バハは次のように言われています。「バハオラの教えの通りの生活を送っている者は、既にバハイなのです。」

バハイの目的は、人類に奉仕し、この世に調和と幸福をもたらすことです。バハイは人々の心を変えようと努めています。心を変えるということは、神の言葉の威力に頼る以外には不可能です。アブドル・バハが、ある時「バハイとは何ですか」と尋ねられました。アブドル・バハの答えはこうでした。「バハイであるということは、全世界を愛し、人類を愛し、人類に奉仕しようと努力し、世界平和と地上のすべての人々のために働くことを意味します。」

磨かれた鏡は光を忠実に反射します。しかし、その表面が曇っていれば、なにも反射されません。バハイが他の人々に自分の信じることを伝えようとするのは、偏見、憎悪、敵意の塵を人々の心の鏡から拭い去ろうという試みです。心の純粋な人々が、真理の太陽の光に接する時、彼らは大いに光を吸収し、それを他人に反射するのです。

世の中には、常日頃から現在の新時代にふさわしい新しい教えを追い求めている人が大勢います。心の中では、世界がなにを必要としているかを気付いていても、それをどのようにして現実のものとするかが分からないのです。そうした人がバハオラの教えと出会う時、自分がかねてから求めていたものを発見し、同じ目標を求めて世界的な規模で努力を重ねている活力に満ちた共同体を見い出すのです。バハオラのことはなにも知らずに、彼らは神がこの時代に送るメッセージを既に心の中で聞いていたのです。こうして真理の太陽の光線を受けて、彼らの心の鏡は大いに輝き出すのです。

さて、正式にバハイとなるためには簡単な手続きがあります。登録用紙に住所氏名を記入し署名を添えて、その国の全国精神行政会に届けられます。署名することによって、自分がバハオラに従う者であることを宣言し、世界各地に広がるバハイ共同体の一員として歩み出すのです。署名はまた、バハイの機構を通じて人類に奉仕することの意志表示でもあります。署名済の登録用紙は、地方精神行政会を通じて全国精神行政会に送られます。その市町村に地方精神行政会がない場合は、直接その用紙を全国精神行政会に送付します。

バハイは人類に奉仕し、人類のために祈りを捧げます。数多くの美しい祈りの中からアブドル・バハの「人類のための祈り」を最後に記します。

おお憐れみ深い主よ、あなたは同じ元親からすべての人類を創りたまい、人類が皆一つの家族に属することを定めたまいました。あなたの聖なる御前では、人類はすべてあなたの僕であり、あなたの神殿のもとに守られるものであります。万人はあなたの御恩恵の食卓に集い、あなたの摂理の光に照らされております。

神よ、あなたはすべての者に親切に在し、すべての者を養いたまい、すべての者をかばいたまい、すべてのものに生命を授けたまいました。あなたは万人に例外なく才能と能力を賦与したまい、人類は皆あなたの御慈悲の大海原に浸っております。

おお憐れみ深き主よ、すべての者を一つに結びたまえ。そして人類が皆互いを同族とみなし、全地球を一つの郷とみなしますよう、諸々の宗教を調和させ、国々を一つに結びたまえ。人類が皆完全な調和のうちに住むことができますよう願いまつる。

神よ、人類一体性の旗じるしを高く掲げたまえ。

神よ、最大なる平和を確立したまえ。

神よ、人々の心を一つに結びたまえ。

おお親切なる父にまします神よ、御愛情の芳香により我らの心を喜びに満たしたまえ。御導きの御光により我らの眼を輝かせたまえ。聖なる御言葉のメロディにより我らの耳を楽しませたまえ。あなたの摂理の砦に我ら皆をかくまいたまえ。あなたは許したもう御方に在し、全人類の短所を許したまう御方にまします。

完

新しい花園

フーシュマンド・ファテアザム著

神聖な領土内に一つの新しい花園が出現し、その周囲を、高きにある領土の住者と崇高なる楽園の不滅の住民が取り捲いていることを、確信の子らに宣布せよ。されば、汝ら、その地位に到達し、アネモネより愛の神秘を解きあかし、神の秘密を学び、その永遠の木の実より知恵を完成するよう努力せよ。

バハオラ

目次

一、精神を高めるということ
人生の目的
神を知ることは可能か
神の愛
宗教の一体性
宗教はくり返す
宗教は進歩発展する

二、神の顕示者
神の顕示者たち　(人類の大教育者たち)
クリシュナ
仏陀　(釈迦)
モーゼ
キリスト
モハメッド
バブ
バハオラ

三、聖約とは
アブドル・バハ
ショーギ・エフェンディ(守護者)
万国正義院

四、世界平和への条件
人間社会の調和
偏見の除去

真理の探究
世界共通語
男女の平等
教育の普及
科学と宗教の調和
極端な貧富の差の解消

五、顕示者から私たちへの提言
幸福
不滅の魂
天国と地獄
奇跡
道徳的倫理的教義

六、バハイの運営機構
運営機構
バハイの運営機構
精神行政会の選挙
地方精神行政会の任務
地方精神行政会の役員
精神行政会の活動（1）
協議
精神行政会の活動（2）
精神行政会の活動（3）
全国精神行政会
年次大会
地方精神行政会に関するいくつかの質問
バハイ基金

七、規律と義務

祈り
断食
仕事は礼拝である
神の大業の布教
清潔であること
アルコールの禁止
祝祭日
結婚
政府への忠誠
バハイになるには

第一章　精神を高めるということ

人生の目的

　農地と森林を比べてみたことがありますか。森林は木々が自然のままに伸び、通りぬけることもできないほど灌木類や蔓草がはびこっています。ところが農地は整然とした環境に囲まれ、耕やされた土地に運河や小川が網の目のようにあり、穀物畑や水田が広がっています。

　では、森林と農地の違いは何でしょうか。農地にはあらゆるものに秩序がありますが、森林には、それがありません。農地は注意が行き届き手入れされていますが、森林ではすべてが勝手気ままに雑然と伸びほうだいになっています。

　秩序のあるところには目的があります。

　人は目的もなく耕地を作りませんし、理由もなく運河を通したり、井戸を掘ったりはしません。こういうことをするには、すべて目的があってのことです。目的がなければ、私たちは田畑に手を入れずに風と雨と太陽にさらしたままにしておくでしょう。そうした農地はやがて野性の木々に覆われて森林に戻るでしょう。

　田畑には秩序があり、田畑には目的があります。

　宇宙に目を向けて見ましょう。あらゆるものに完全な秩序があると思いませんか。月もその一例です。決まった周期で月はその美しい姿を変えていきます。月はある秩序に支配され、ある法則に従って運行しているのです。その正確さ故に人間は古来より月を天空の暦と見なし、日にちを数えたのです。季節の移り変わりを伝える太陽の動きについても同じことがいえます。宇宙のあらゆる所に秩序があり、従ってこれらあらゆるものに目的があることが分かります。その秩序の素晴しさを思う時、宇宙は理由もなく存在するものではあり得ないことが直感できるのです。

　では、宇宙や人間の存在の目的は何でしょう。この問いに対するバハイの回答はこうです。人間の創造と存在の目的は、私たちに生命を与えた神を知り、神を礼拝することです。これがすべての出発点です。この認識を基礎にすべての達成があるのです。ランプの目的は光を灯されることです。フルートの目的は美しいメロディを奏でることです。私たちは明りの灯されないランプであってはならないのです、沈黙のフルートになってはならないのです。神を知り、神を意識しながら

前進するのが人間の生きる目的なのです。
バハオラは、次のような祈りの言葉を示しておられます。

「神様、あなたが私を造りたまいましたのは、あなたを知り、あなたを崇拝するためでありますことを証言いたします。いまこそ私の無力なことと、あなたの御力の大いなることを、また、私の貧しさと、あなたの御豊かさとを証言いたします。あなたの他に神はいまさず、あなたは危難の中の御救いに在し、御自力にて存在し給う御方に在します。」

私たちは沈黙のフルートではなく、神を讃えて鳴り響く美しいメロディのフルートになることができるのです。

神を知ることは可能か

人間の生命は、太陽より注がれるエネルギーによって保たれています。その光と熱のエネルギーによって私たちは生命を育むことができるのです。太陽の恩恵が届かないとなれば、地上のあらゆるものは死滅してしまいます。しかし、すべての命の源であるその太陽に私たちは接近することも、見つめることさえもできないのです。接近を試みるなら焼き滅ぼされてしまいます。太陽の光と熱に堪えるには私たちは弱すぎるのです。太陽は、その力や熱や光や生命を光線というかたちで私たちに与えているのです。光線が私たちを太陽に結びつけているのです。
万物の創造主である神は、私たちの想像が遙かに及ばないほど無限に偉大な存在です。人間にとってまさに神は「不可知の本質」なのです。では、人間は自分の努力だけで「不可知の本質」を知ることができるのでしょうか。太陽に接近すれば私たちは焼けこげてしまいます。太陽ですらそうなのに、どうして私たちは輝きにみち、最高なる存在である神に近づくことを望むことができるでしょうか。私たちは神に接近することはできません。しかし、神が私たちに近づくことは可能です。太陽はその力を光線によって私たちに届けてくれます。神の導きと栄光の光は仏陀やキリストやモハメッドやバハオラのような顕示者によって人類にもたらされてきました。神の顕示者というものは私たちを神に近づけ得る唯一の媒体なのです。顕示者の存在がなければ、私たちのこの世

界は暗く、私たちの生命は全く死に等しいものだったでしょう。神の顕示者を認識することによって人間は神を知ることができます。そして、顕示者を否定することは神を否定することになります。このことについてバハオラは次のように説明されています。

「神の知識への扉は、人間の面前で閉ざされてきたし、また未来永劫に閉ざされ続けるであろう。いかなる人間の理解力も神の聖なる宮廷には決して近づき得ないのである。しかしながら、その慈悲のしるし、そしてその慈愛の証拠として、神は人間に聖なる導きの昼の星、神の一体性の象徴を顕わし、これらの聖別された存在者の知識をして神ご自身の知識と同一であると定め給うと。彼ら（神の顕示者）を認める者は神を認める者である。彼らの呼び声に耳を傾ける者は神の声に耳を傾ける者であり、彼らの啓示の真理を証言する者は神そのものの真理を証言する者である。彼らより顔をそむける者は神より顔をそむける者であり、彼らを信じない者は神を信じない者である。彼らのすべてはこの世と天界を結びつける神の道であり、天地の諸々の王国にあるすべての者にとって神の真理の旗標である。彼らは人類間における神の顕示者であり、神の真理の証拠、そして神の栄光のしるしである。」（「落穂集」、２１番）

神の愛

神の顕示者の知恵は、私たちの心に神の愛を創り出します。神の愛は永遠の幸福の源です。愛こそは、バハオラが次のように言っているように、私たちが創られた理由です。

「おお人の子よ。我が無限なる生命と永劫不変なる本質の中で、我れ汝への愛を知った。それ故にこそ我れ汝を創り、汝の上に我が面影を刻み、汝に我が美を示した。」

神は私たちを愛し、そして私たちを創り給うたのです。神は私たちを愛し、これからもずっといつも愛し続け給うのです。神は、決して、私たちを救いのない場所に置き去りにはなさいません。神は時代時代によって、いつも私たちにお姿を現わしておいでになります。これについて、アブドル・バハは次のように言っておられます。

「神の愛の啓示が、いかに広大無辺なものか考えてみよう。この世界に現わされた神の愛のしるしは、まず「曙の光」としての神の顕示者である。無限に深い愛は、これら聖なる顕示者によって、人間に反映されたことを思いみよう。導きのかげで、人々は人間の心のめざめの為に、喜んでその生命を捨てた。そして十字架を背負った。人間の魂が最高の進歩をする為には人々はその限られた生涯中、言語に絶する呵責と困難に出会った。」

「人間が他人の為に、自分の喜びや快適な生活を犠牲にすることが、どんなに珍らしいことか。また、他人の為に、自分の眼を与えたり手足を切断する苦しみに堪える人が、どんなに少いか、よく考えてみよ。しかも、顕示者たちは、すべてその生活も血も投げ出し、生命も楽しさも犠牲にし、あらゆるものを人類の為に捧げつくした。「彼ら」の愛がいかに深いかを思いみよ。それが「彼ら」の輝かしい光でなかったら、それによって人間の魂は輝やき渡らなかったろう。

「彼ら」の愛がいかに力あるものであったことか…。これこそ神の愛のみしるしであり、聖なる実在の太陽の光線である。

「神は我らを愛し給う。神は、また、我らが神を愛しまつることを望み給う。」

バハオラがこう言われます。

「おお不思議なる幻影の子よ。我、汝のうちに我が霊の息吹を吹き込んだ。汝、我が愛する者となり得るために。なぜ、汝、我を捨て、我より他に愛する物ありと思うや。」

「神に愛される者になる。これこそはバハイの生涯にとって唯一の目標である。神を最もちかしい伴侶とし、また最も親しい友とし、たぐいなく愛するものとすることは、神の御前にあって最高の喜びである。神を愛するということは、すべてのもの、すべての人を愛することである。なぜなら、すべてが神のものだから。真のバハイたる者は完全な愛人になろう。神はすべての者を清い心で熱烈に愛し給う。神は唯の一人も憎み給わぬ。神は何人をも侮り給うことはない。なぜなら、神はすべての人々の顔に愛する者の顔を見、どこにでも神御自身の面影を見給うからである。神の愛は、宗派の別も、国別も、階級人種の別も、超越しているのである。」（バハオラと新時代）

もし、神の愛が私たちの心にあるなら、人間同志が愛し合うことは容易なことであります。アブドル・バハは次のように言われました。

「信徒たち同志の心にある愛は、精神が完全に結びついた極致から、もたらされたものである。この愛は、神の知恵を通して達成されたものであり、これによって、人間は彼らの心に反映している聖なる神の愛を知ることが出来るのである。たがいに相手の魂に映された神の美を見合って、その相似に気付き、愛し合うようになるのである。この愛はすべての人々を一つの海の波にするであろう。この愛は彼らを一つの天の星となし、一本の木の果実となすものである。この愛は、真実の融和の実現と真実の統合の基礎になるものである。」

次のような神のお呼びかけを思い出しましょう。

「おお実在の子よ。我を愛せよ。さらば我、汝を愛し得ん。もし汝、我を愛さずば、我が愛は決して汝に達し得ず。おお僕よ。これを知れ。」

宗教の一体性

過去のあらゆる宗教はその根源において聖なるものである。これがバハイの信条です。バハイになるということは、それまでに持っていた宗教を捨てるというよりも、神のすべての宗教の一体性を認めることを意味します。そもそも一つしかない宗教を、神は時代時代によって異なった形で人類に示されたのです。あらゆる時代の宗教を神よりもたらされた神聖な教えとして受け入れることによって、私たちは神への信仰を一層完全なものにすることができます。

一粒の種は根を生やし茎と葉を伸し、花を咲かせ、実をみのらせます。形がどう変ろうともその木は常に同じ木なのです。木はただ成長するだけで、その本質は変っていません。太陽を神の啓示と宗教になぞらえて見ましょう。季節によって太陽は地平線上の違った地点から上がります。多くの人々は、神の過去の啓示の太陽が昔その姿を現わした地点にだけ心の目を向けています。そして、太陽が再びその荘厳な姿を現わす時、過去とは違う黎明の場から昇る太陽に彼らは気

付かず、その光線に背を向けてしまうのです。しかし、天を照らす太陽に顔を向け、その光と熱の威力を実感すれば、それが、昔、他の地平線から上ってこの世を照したと同じ太陽であることが容易に判明するのです。

バハイは過去のすべての顕示者が、その地位においても目的においても等しいものであると信じます。どの国のどの時代の顕示者であれ、顕示者は皆、人類の存在の聖木の成長のために尽力する天来の庭師なのです。バハオラは次のように書いておられます。

「太陽を例にとって考えて見よ。もし太陽が今、『我は昨日の太陽である』といったとしても、それは真実を語っていることになろう。また時の経過を心に抱いて、過去の太陽とは違うといったとしても、それもまた真実を語っていることになろう。同様に、毎日毎日がまったく同一のものでしかないといったとしても、それはまさしく真実である。また、毎日それぞれ特定の呼び名や名称を持つために、同一でないといったとしても、それも真実である。その訳は、そのものがまったく同じであっても尚、人々はそれを別々な呼び方で呼び、その特質や特性に差異を見るからである。従って、聖なる顕示者たちがそれぞれ持っている個性や相違点や共通点について考えてみるならば、すべての名称や属性を創造された御方によって言及された、違っていて同一であるということの不可解な神秘を理解でき、あの永遠の美が、様々な時に御自身を違った名称や称号で呼ばれた理由について、不審に思っていた汝の疑問に対する回答が発見できよう。」（「確信の書」、37-38）

バハオラは、神の顕示者たちの間には特別な違いがないことを繰り返し断言されています。顕示者の名前は異なっていても彼らは同じ一つの真理を説き、同じ玉座に座し、等しく神の御前にある存在なのです。つぎのような言葉を通じてバハオラはすべての顕示者たちを信じることの重要性を私たちに説いておられます。

「おお神の一体性を信ずるものらよ。神の大業の顕示者たちの間に差別をつけようとする気を起したり、また、彼らの啓示に伴って表わされたしるしに区別をつけようとする気を起さないよう警戒せよ。これが実に神の一体性の真の意味である。もし汝ら、この真理を理解し信ずるものらであれば。その上、すべての神の顕示者のなす事業と行為は、いやそれのみか、彼らに関係

のあるあらゆるもの及び未来の顕示者が顕わすであろうものはすべて神より定められたものであり、神の意志と目的の反映であることを確信せよ。彼らの人格、言葉、メッセージ、行為、作法の間にわずかでも区別をつけようとするものは実に、神を信じず、神のしるしを否定し、神の使者たちの大業を裏切るものである。」（「落穂集」、24番）

宗教はくり返す

一年には決まった季節があります。まず、春があらゆる美に輝やいてやって来ます。それから夏と豊かな収穫の季節とが続きます。冬が来ると、やがて自然はその豊かな輝きを失います。しかし、どの年の冬の終りも、新しい春の始めに続くものであり、さらにまた、収穫の季節につながるものです。

太陽もまた、地平線上から毎日姿を現わし、次第に高く上り、頂点に達し、それからまた次第に下って没し去ります。太陽の姿が消えさると、地上のすべてのものは闇におおわれてしまいます。

世界中の蝋燭やランプもこの闇を追い散らすことはできませんが、太陽は必ず再び上って来ます。あの同じ美しさと、あの同じ輝きに満ちた太陽がまた上って来るのです。宗教も太陽と同じような周期をたどるのです。「実在の太陽」（つまり、顕示者）がその姿をこの地上に現わす時、それは栄光に満ちた「新しい日」、「新しい時代」の始まりです。人の世は光に満ち、すべての人々が暗い時代が過ぎ去ったことを喜ぶのです。「新しい日」は始まり、次第にその終焉に向かって進むのです。時代の流れとともに、どの宗教でも「天来の真理」が人間の作った教義に覆い隠されてしまう時がめぐって来ます。人間が神の教えの真髄を忘れれば忘れるほど、人間の精神生活は暗さを増していきます。人間が人間自身の教えを作りだし、自分の利己的な動機に合うように宗教を説くようになると、世界中が暗黒時代を迎えることになります。世の中から「実在の太陽」の光がまったく奪われてしまった後はどうなるのでしょうか。暗い夜の時代、人の世を照らすわずかな光源となるのはあちらこちらに灯される小さなランプや蝋燭にも似た聖人といわれる人々です。これらの小さな光は、次々とともし燃やされますが、世界はついに深い無知の眠りに陥いってしまいます。暗黒が頂点に達したこの時こそ「真理の太陽」が、再び地平線上に姿を現わし、この世に新たな輝やきをもたらす時です。過去においてはこの「真理の太陽」は仏陀やキリストやモハメッドを通して輝きました。現在の暗黒時代にも、また、「真理の太陽」は「神の栄光」であるバハオラを通して再び輝き出したのです。太陽が再び燦然と輝いている今、私たちは人工のランプにもはや満足していてはならないのです。かすかな蝋燭の光を守り通すために締め切った部屋に閉じこもっていてはならないのです。外では春の香りを運ぶ美風がただよい、「真理の太陽」が輝いているのです。めざめましょう。

バハオラはつぎのように宣言しておられます。

「我れまことに言う。この日こそは、人類が約束された者の顔を見、声を聴くことのできる時である。神の呼びかけは発せられ、その御顔の光明は人類に向けられたのである。 従って人は皆、自己の心の書よりあらゆる空虚な言葉の痕跡を消し去り、開かれた公平な心をもって彼の啓示のしるしを見、彼の使命の真を立証するものに向かい、彼の栄光の証を見つめなければならない。」 (「落穂集」、7番)

宗教は進歩発展する

アブドル・バハは次のように言われました。

「実在の種から宗教は一本の木となり、葉を繁らせ、枝を伸ばし、花を咲かせ、実をつける。時を経てこの木は衰え朽ちはてる。葉も花も枯れはて消えてしまい、木は裸に、実も枯れはてる。もし人々が、この老木の力は衰えず、その果実は無比なもの、その存在は永遠なものと主張するとしたら、それは正当な考えではない。実在の種が再び人類の心に蒔かれ、そこから新しい木が育ち、新しい聖果が世界を清新なものにしていくものでなければならない。このことにより、さまざまな宗教によって隔てられてきた民族や国民はやがて一つになり、模倣は捨てられ、世界的な規模で真の連帯が確立されるであろう。人類の間には戦争も争いもなくなり、すべての人々が、神の僕として睦まじくなるであろう。」

宗教を精神の学校に例えることができます。人類はそこで聖なる教えを受け、心身共に発展を遂げるのです。この学校の創立者は神です。人間がもし進歩と幸福を願うならば、この聖なる学校に通わなければなりません。まず最初は小学校に行きます。そこで親切な先生がアイウエオの基礎から教え始めます。そして、先生の丹精で親切な導きにより私たちの心が十分に成長すると、私たちは中学校に進みますが、そこにも先生がいて、私たちが小学校で教えられたことを基にして、しかもその上に更に知識の程度を高めて教えてくれます。こうして私たちの心はこの学校で

何人もの先生の導きのもとに成長して行きます。

異なる段階で教えるこれらの先生たちについて、私たちはどれが劣り、どれが優るといえるでしょうか。私たちは小学校の先生が好きだからといって、中学の先生を嫌って良いものでしょうか。私たちは小学校で教えられたことの方が、中学の授業より良かったといえるでしょうか。むろん、そんなことはありません。これらの異なる段階は皆、同じ学校のものです。先生たちは同じ教え方に従っているのですが、ただ私たちの年齢や能力がそれぞれの段階で違っているのです。六歳の時の私たちの能力は非常に小さかったのです。それ故、賢明な学校の創立者は、先生たちに、生徒の年齢や理解力に見合った知識を与えるように注意されたのです。私たちがその学校で教えられたことは、その年齢で受けることのできる最高のものだったのです。もし、いきなり高等学校のレベルから心の学習を始めようとしても、決して進歩することはできないでしょう。宗教でも同じです。神は一つであり、神の宗教の学校も一つです。違っているのは、時代の経過にそって向上していく人間の能力と理解力です。

神の顕示者たちは、神より人類に贈られた聖なる教師たちであり、すべての顕示者は同じ目的をもってこの世に現われるのです。それは、人間の精神的能力を高め、人類のあらゆる面での進歩を促進させるという目的です。人類は年代と共に啓発され、その能力もそれに沿って向上して来ました。つまり、人類の精神は段階的に進化し、顕示者たちは各段階に見合った知識と指導を人類に与えて来たのです。これが神の摂理なのです。私たちはこの進化の摂理に逆らっていつまでも過去の時代の教えや考え方に執着してはなりません。学校の例で言うと、昔の先生を想うあまり昔のクラスに止まっているとしたら、その行為はその先生を悲しませるだけで、真の愛情を伝えるものではありません。教師は私たちがどんどん進み、次の段階の教師たちから多くを学ぶことを望むものです。これはある教師の知識が、他の教師の知識に劣るという意味ではまったくありません。人類の教師である顕示者は、皆同じ高さの知識を有し、彼らの誰もが同じように賢明で、同じように重要な立場にあるのです。差異があるように見えるとすれば、それは各顕示者が各時代の人々の理解力に合わせた知識を与えたからです。神の顕示者たちはいつも、過去の顕示者を肯定し、未来の顕示者の到来を約束してきました。教師としてはあたりまえのことではないでしょうか。過去の教師たちの努力を賛え、その労をねぎらい、そして私たちが最善を尽くすならば次に出現する教師を通じて、より深い知識と導きを得ることができることを約束しています。

人類は「顕示者たちのリレー」についていかなければならないのです。バトンが次の顕示者にわ

たることを阻止することは誰にもできないのです。そして、はるか昔に走り終えた走者ばかりに注意を向けていては人類の進歩はありえないのです。人は、自分の生きる現代に適した教えをもたらす顕示者に向かい、より高く偉大な知識を授けられるよう努力しなければならないのです。

バハオラはすべての宗教の基礎は一つだと教えています。生徒たちは、学校のどの段階でも正直で真実に満ち親切であることなどを教えられます。より高い段階に進んでも、これらの基本的な法則は変りません。小学校でも、中学校でも、また高校でも、これら清らかな性質は常に賛美されます。それらは永遠の真理であり、あらゆる時代を通じて真実です。これらはすべての基礎をなすものです。しかし、基礎だけでは十分だとは言えません。この基礎の上に立って、時代が要求し、人類が必要とするものが打ち建てられなければなりません。これこそ神の宗教が果たすところで、神の宗教は不変の真理の同じ基盤の上に、人間の成長の段階によって、より高い知識と能力とを発達させるものです。しかも、そうしながら、なお且つ、前に現われた神の顕示者たちによって教えられた知識の基盤の上に、それぞれの法則をおいています。それは、あたかも中学で学ぶ代数が、小学校で勉強した初等算数を基礎にしているようなものです。

さて、今、私たちは人間の能力の新しい周期に生きています。ということは、私たちは今や新時代に生き、未だかってないほどの能力と可能性を持っているということです。この新しい時代に生きる私たちがより高度な知識を得て、より深い精神的な真理に向かうことができるのも過去の顕示者たちのおかげです。

第二章、神の顕示者

神の顕示者たち　(人類の大教育者たち)

　神の教えを携えた顕示者たちは世界各地に現われ、その教導の光を輝かせました。現代にその記録を残す主要な顕示者たちを年代順に並べると次のようになります。

名前	年代	生まれた国	聖典	中心的な教え
クリシュナ (ヒンズー教)	紀元前3000年	インド	バガバットギタ	超越
モーゼ (ユダヤ教)	紀元前1300年	エジプト	旧約聖書	正義
ゾロアスター (ゾロアスター教)	紀元前　570年	ペルシャ	アヴェスタ	公正
仏陀 (仏教)	紀元前　560年	インド	ピタカスラマンパダ	中庸
キリスト (キリスト教)	西暦　30年	イスラエル	新約聖書	愛
モハメッド (イスラム教)	西暦　622年	アラビア	コーラン	服従

バブ　　西暦1844年　　ペルシャ　　バヤン　　平等
（バビ教）

バハオラ　　西暦1863年　　ペルシャ　　ケタベ･アグダス　　和合
（バハイ）

次に、クリシュナ、仏陀、モーゼ、キリスト、モハメッド、バブ、バハオラの生涯について簡単に紹介します。

クリシュナ

クリシュナは牢獄で生れ、奇跡的に牢獄から逃れることができました。この話は、人間は自我というこの世の牢獄に生れ、努力と信仰を通じて自我の牢獄から解放されることができることを暗示するものです。他のすべての顕示者と同様、クリシュナは悪の勢力と対決し、それに打ち勝ちました。人間の傲慢と利己主義を象徴する悪の勢力はいかに強力なものであっても、最終的にはそれは真理の力を有する顕示者を押さえ込むことはできません。顕示者は神御自身の英知の門であり、顕示者の教えは人類に救済と進歩を約束するものであります。にも係わらず、人はクリシュナの教えを否定し、その教導を避けるのです。

クリシュナは人々が彼を理解できなかったことを残念に思い、顕示者が人間の形をして現われるために人々の反感を買うのだとこぼしました。いつの時代にも人は神について空想を描き、神の顕示者についても勝手なイメージを持ち、それに合致しないものをことごとく拒否してきたのです。このことをクリシュナはギタという書物の中で次のように言っています。

「あやまてる人々は、人間の形をもって現われた私を軽蔑し、万物の主としての私の気高い本性を理解することはできなかった。」（ギタ書9章11節）

私たちが神の顕示者を見出してその教えを受け入れる時、顕示者のすべての教えや命令に従わなければなりません。この真理をクリシュナは次のように表現しています。

「自らの意志と行動を我に委ね、我を最高の存在と認め、理解したことにおいて確固であれ。そして、心を常に我に向けよ。肩に掛かった義務を降ろし、我のみに安らぎを求めよ。悲しみ嘆くことをやめよ。我は汝をすべての悪より解放するためにある。」(ギタ書１８章、５７節、６６節)

神の顕示者としてクリシュナは、一つの新しい文明をこの世にもたらし、その教えを通じて人類を悪と悲しみから逃れる道を差し記しました。そして、次のような約束を残してこの世を後にしたのです。

「正義が傾き、不正がはびこる時、我は善を保護し、悪を破り、正義を建てるために再び現われる。まことに、我は時代を隔てて現われる。」(ギタ書第４章７節)

この約束がいかに成就したかは後で明らかになります。

仏陀　(釈迦)

釈迦はインドの北部のヒマラヤの麓を治める王家に生まれました。幼いころの釈迦はゴータマ王子と呼ばれ、父親に非常に可愛がられました。父はゴータマ王子に何でも与え、良い王に育つことを念願していました。しかし、ゴータマは俗界の富や喜びが本当の安らぎを提供するものではないことを知らされました。ある日、ゴータマは一人の老人を見ました。次に、病気に倒れた人を、さらには死んだ人を見ました。若き王子はこのようにしてすべての人間が悩みや死から免がれ得ないものだということを発見したのです。そこで彼は精神的幸福のみが、すべての人々を真に幸せにし得るものだということを直感したのでした。そこでゴータマは宮廷を抜け出し、精神的な真実を求めるために遠い人郷はなれた森の中に行き食物を断ち、楽を捨てました。しかし、身体を弱らせ、精神力もまた衰える苦行だけでは道は開かれませんでした。その後、釈迦は菩提樹の

下で初めて悟りを聞きました。その日を境に釈迦は人類を悩みから救うために、一大伝道を始めました。仏陀は人々に強欲を捨て、不正直をなくし、魂や心を清めるよう説得しました。苦悩のこの娑婆こそが、永遠な精神的喜びや幸福を得るために、自らを鍛える場所であると説かれました。

釈迦はその清い生涯において私たちに一つの貴重な模範を示されました。ある時、瞑想にふけっていると、俗界の富と五感の快楽を提供して釈迦を誘惑しようとするマーラが現われました。しかし、釈迦は悟りを開いたお方であったので、悪魔の誘惑の力に打ち勝ちました。それは精神の力の勝利でした。釈迦の素晴しい教えによって、世界中の数知れない人々が精神的な救いを得ることができました。

釈迦の生きた時代の人々は、自分で作った偶像を神と崇め、勝手に神の名においてお互いに争っていました。釈迦は、真実への道は争いを通じてではなく、顕示者の示す道における融和によってのみ探究できるものであると悟っていました。釈迦は人類の聡明な教育者でした。人々の争いを止めさせるために、真理の顕示者なる彼に、ただ従うよう人々に呼びかけた以外には、神についてほとんど語りませんでした。こういうようにして釈迦は神の名において敵対していた人々を統合することに成功しました。

亡くなる直前、釈迦は弟子たちに向って次のような重大な約束をされました。その弟子たちは釈迦が亡くなられると、この教えは次第に衰退に向かうのではないかと心配していたのです。

「私がこの地上に現われた最初の仏陀でもなく、また最後の仏陀でもない。時が来れば他の仏陀がこの世に現われるであろう。その聖者は最高の英知を有し、天賦の聡明さをもって行動し、吉兆を備え、宇宙万物に精通し、人々の無比の指導者、天使や人々の師となる者である。その者は私があなた方に教えたと同様の永遠の真理を述べるであろう。その教えの原点は栄光に満ち、教えの頂点は光に輝き、教えの究極は光輝にあふれる。教えは、その精神と形の双方において光り輝くものである。彼は私が今示しているような、全く完全で純潔な精神生活を伝えるであろう。私の弟子は何百という数であるのに対し、彼の弟子は何千という数となろう。」

この約束は残された信者たちに希望を与え、やがてこの世に再来するであろう栄光に満ちた仏陀から導きの光を受けられることを確信させたのです。

モーゼ

遠い昔、エジプトの王の支配のもとで奴隷としての悲惨な生活を強いられた人々がいました。彼らは祖国のイスラエルからむりやり連れて来られ、厳しい労働に従事していました。神の顕示者の力のみが彼らを苦悩から救うことができたのです。

そこでモーゼがこれらの人々の救済のために立ち上るよう神から命を受けました。彼はたった一人で世界最強と呼ばれるエジプトの国王に立ち向かい、奴隷たちの自由を勝ち取ることに成功しました。この奇蹟は、神の顕示者が出現する時、地上の如何なる力も抗し得ないような神の偉大な威力を授けられていることを物語っています。モーゼは助けもなく単独で、神の王国の福音を奴隷たちに伝えるために立ち上がったのでした。モーゼが自分は神の顕示者であると宣言した時、イスラエルの奴隷たちは苦難の時が終ったことを知りました。自由の身になった彼らはモーゼに従い聖地イスラエルに向けて出発しました。エジプト国王は権力実力をもってしても、イスラエルの民の脱出を阻止する事はできず、国王率いる軍隊は紅海で溺死してしまいました。

神の言葉の威力はイスラエルの人々の生活を一変してしまいました。奴隷に過ぎなかった彼らが、国を興し、やがて人類に知識や学問を広める役割を果たすにいたりました。各国の哲学者や教育者たちが、モーゼの門弟たちに知識を得たのでした。顕示者が現われる時には、単に私たちに精神的な幸福をもたらすばかりでなく、偉大なる知識や能力をも人類に付与されるのだということが、このことからも分かります。

モーゼは神の教えを十戒としてまとめました。その十戒はすばらしい掟です。神を愛し、神以外の何者を崇拝せず、父母を愛し、両親に従順であれと教えています。また、盗みをせず、他人を傷つけず、純潔で常に清潔であれと諭しています。これらの素晴しい教えの外に、モーゼは人々に次のように約束しました。「時が満つる時、万軍の主がすべての苦難を救うために現われる。」万軍の主が出現する時、イスラエルの民は幾世代もの流離の末に再び聖地に戻り、祖先の土地で再び結ばれるであろうとモーゼは約束しました。

万軍の主の到来は果たされました。バハオラは、昔の多くの聖典が約束した「神の日」が到来したと宣言されています。そして、世界各地に散らばっていたイスラエルの民は約束通り再集合し、イスラエルの国を建国しました。

キリスト

キリストのお話は非常に素晴しいものです。それは神の愛、人類の愛のお話です。

キリストが彼の使命を人類に宣言する前に、バブテスマのヨハネという聖者がいました。ヨハネは、神の顕示者の出現が間近であることを人々に伝えて回りました。しかし、人々は新しい教えの到来を恐れ、祖先から受け継いだ昔ながらの習慣や思想に満足していました。特に僧侶たちは新しい顕示者の出現によって自分たちの地位が失われるのではないかと、あからさまな反感を示しました。約束された顕示者は人々をすべての悲しみから救う、という福音を広めるヨハネを捕え、最後にはその聖者の首をはねてしまいました。神の顕示者の出現の準備を整えるために、ヨハネはこうして自分の命をも捧げたのでした。

さて、キリストは貧しい家に生まれました。父のヨセフは村の大工でした。キリストは子供のころから人々に対し善良で親切でした。そして父と一緒に大工として働いていました。しかし、青年になると、仕事を離れてこう言いました。「天の父の仕事に就く時が来た。」

キリストは荒野に行き、瞑想にふけりました。そして、孤独の日々の中で神より与えられた真の使命を発見したのでした。それ以降、キリストは神の福音を教え広めることに専念しました。ある時、キリストはユダヤ教の聖地に行きました。しかし、そこで見たのはお金の貸し借りや様々な商売に占領された寺院の姿でした。キリストは怒り、店を引き倒し、彼らを聖地から追い払ってしまいました。キリストは「ここは神の家です。あなた方は俗欲をもってそれを汚すべきではない」と言いました。宗教を物質的利欲の場としてはならないということをキリストは示したのです。

キリストは周囲を見渡すと、精神的に病み、精神的に死んだ状態の人が数多くいました。そこで、キリストはそれらの人を神の言葉の力で治療し生命を与えました。やがて、キリストの名声は高まりましたが、それを見た僧侶たちの妬みは増幅する一方でした。人々に新しい生き方を教えていたこの名もない若者が、自分たちの支持者を奪ってしまうのではないかと僧侶たちは恐れおののいていました。キリストが人々に向かって、自分こそが聖書に約束された精神の王であると宣言した時、僧侶たちは非常に腹を立てました。というのは、彼らの期待していた王は、権力とこの世の荘厳さを備えた人物だったのです。ところが、キリストは、一介の卑しい大工に過ぎなかったのです。しかし、キリストはこう言いました。「私はあなた方の真の王なのです。私は新しい王国の

主です。現存の俗界の王たちは、神の永遠の王国に比べたら取るに足らない存在に過ぎない」と。しかし、人々はこの言葉を信じようとはしませんでした。そして、僧侶たちは反対に立ち上がりました。結局、キリストは二人の盗人と共にはりつけにされました。十字架上にあってもなお、キリストは彼に敵対した人たちが許されることを神に祈りました。

人々は聖書の本当の意味を理解していなかったのです。神の顕示者を殺害しても、神の声を静めることはできません。そして、キリストの教えはやがて多くの国に伝わったのです。キリストがこの世を後にした時、彼を信じたのは一握りの弟子たちしかいませんでした。しかし、この無学で何の力もない漁夫や農民たちは、神の顕示者を受け入れることによって、すべてに優る力を得ました。彼らは世界中に遠く広く散らばり、キリストの福音を広めました。彼らの多くはキリストの教えのために命をも捧げました。大困難や剣の脅迫の下にあって、彼らはキリストの福音を異国の人々に伝え、神の王国がキリストによって地上に建設されたことを、声高らかに宣言しました。名もない農夫や漁夫たちでしたが、彼らは全世界の圧力の猛襲におおしく抵抗し、神の言葉によって国々を次から次へと征服したのでした。

キリストはクリシュナやモーゼと同様、時満つれば彼は天なる父の栄光の下に再びこの世に来るであろうということを、世の人々に約束しました。キリストは、「まだほかにたくさん言いたいことはあるが、それを理解させることができない」とその時代の人々に言い残しました。そこでキリストは、将来、偉大な顕示者が現われて、彼の言い果たせなかったことを人々に教えるであろうと約束しました。

バハイは、キリストが父の栄光の下に再び現われたという吉報を、キリスト教の兄弟姉妹に伝えています。「誠に父は来たり、神の王国において、あなた方に約束されたことが成就した。」これは、バハオラがキリスト教の指導者たちに送った言葉です。

モハメッド

砂漠に覆われたアラビアという国の話です。砂漠の厳しい気候のもとに住む当時の人々は、部族間の戦いに明け暮れていました。野蛮な習慣も多く、例えば娘が生まれると生埋めにしたり、女性を奴隷扱いしていました。しかし、如何に残酷でも、彼らもまた神の子であり、神の教育を受

けなければならなかったのです。今から千四百年ほど前、アラビアの砂漠に神の顕示者としてモハメッドが生まれました。

モハメッドは名もない一介の商人でした。彼はアラビアから荷を積んで、他の土地に売りに行くキャラバンの世話をしていました。神の顕示者の多くは普通の人でした。釈迦のように高貴な家柄に生まれた人々でさえも、王侯の生活を捨てて平凡な生活を送りました。これは、顕示者の威力と感化力はすべて神に由来することを示すためのものです。

ある日、モハメッドが、丘に登って祈っていた時、神からの霊感を受けました。モハメッドはまったく無学で自分の名前さえ書くことができませんでしたが、神の啓示を受けたモハメッドはコーランの聖句を著わし始めました。モハメッドはもはやキャラバンの世話人ではなく、神の教えを伝える使者となっていたのです。

彼は神の教えをたずさえて人々のところへ行きました。最初のうちは誰も彼の言うことに耳を傾けませんでした。自分たちで造った偶像を拝むことをやめて、唯一の真実の神を信ずべきだとモハメッドが主張すると、人々は彼に反対して立ち上がりました。しかし、モハメッドは「おお人々よ、私は神の使者です。私はあなた方を救い、真理の道に案内するために来たのです」と言いながらひたすら伝道をつづけました傲慢な人々はこの言葉に大変怒りました。最初の内はモハメッドを大目に見ていた彼らも、次第にモハメッドやその信徒たちを迫害するようになりました。けれども、１３年もの長い苦難の後にでも、モハメッドは、なおも慈悲深い唯一の神に顔を向け、その命令に服従するよう人々に求めました。人々はなぜ昔から祭って来た偶像を棄てなければならないのか分かりませんでした。その上、戦いに明け暮れる彼らにはモハメッドの呼びかけについて深く考える余裕もなかったのです。とうとうモハメッドに対して堪忍袋の緒が切れた彼らは、モハメッドと彼の少数の信徒たちを殺そうと決心しました。しかし、まだモハメッドの使命は終わっていませんでした。モハメッドは生まれ故郷のメッカを後に、メジナと呼ばれている町へ向いました。

神の教えの敵たちは、モハメッドと彼の信徒の一隊を殺害するために、大部隊を編成しました。モハメッドは神の教えを守り、信仰を得た人々を擁護するために追う手と交戦することを許しました。このようにして、光明と暗黒の軍勢が命をかけて戦いました。

モハメッドは聖なる羊飼いでした。自分の無邪気な羊の群れを、野蛮な狼の猛襲から護ってやらなければなりませんでした。最初は苦戦の連続でした。彼らの多くは、敵の激しい襲撃を防いでいる内に殺されてしまいました。

モハメッドと彼の信徒たちが強力な敵に囲まれた時、モハメッドは、「我々は神の聖霊と共にあるが、敵は精神的に死んでいるから、相手はすぐに崩壊する」と予言しました。この予言は的中したのでした。やがて周囲の大帝国もモハメッドに帰依し、その聖なる教えは新しい文明の土台を築くに至りました。一握りのアラブ人がもたらした神の言葉は、地球上の広大な範囲に住む人々の生活を変えたのでした。イスラム文化の黄金時代には多く異なった民族が、一大兄弟姉妹の如く結ばれました。彼らは唯一の神、慈悲深くあわれみ深い神に日々の祈りを捧げました。徳の生活と万能の神への従順を説いている聖なるコーランを彼らは唱えました。今日でも、なお世界中の何千万という人々が同じ祈りを唱え、同じ聖書を読んでいます。モハメッドは過去の多くの顕示者と同様に、偉大な神の使者が自分の後に現れるであろうと、信徒たちに確言しました。彼を通して天から下った神の教えは千年後には神のもとに帰るであろうと、モハメッドは言い残しています。その言葉の意味は、千年も経過するうちに、彼の教えの真髄は忘れられてしまうということです。次に、こうも言っています。「真の宗教の痕跡がこの世から消し去られた時、偉大なるラッパの鳴り響く音が聞えて来るであろう。一度ではなく二度。そして世界の人々は神御自身の御顔を拝るであろう。」ラッパの響きは、神の呼びかけを意味します。モハメッドが予言したように、現代において、神の呼びかけは連続して二度起こりました。イスラム教の啓示が終了してから千年が経過した時にバブが現れました。そして、バブのすぐ後にバハオラが自分の使命を宣言しました。人々を神の方へ呼び集め、神の偉大なる約束を思い出させたのはバブでした。そして、バブの直後に二回目のラッパの音が鳴り響、全人類に対し神の御顔を拝するように求めたのはバハオラだったのです。

バブ

バブとは門という意味です。バブは新しい時代、新しい世界秩序への門でした。バブが神から受けた使命について、人々に初めて語ったのはわずかに２５歳の時でした。シラズと呼はれるイランの南部にある美しい町でバブは生まれました。本名をアリ・モハメッドといい、イスラムの予言者モハメッドに直接つながる家の生まれでした。

バブの父親は、彼が生まれると間もなく亡くなったので、母方の叔父の世話になりました。子供

の頃彼は先生についてコーランを学び初等教育を受けました。しかし、幼少の頃から他の子供と違い、難かしい問題を質問したり、自ら回答を与えたりして長老たちをびっくりさせていました。他の子供たちが遊びに夢中になっている間に、彼はしばしば木陰などに行って祈りにふけっていました。

後に、バブが自分は神の顕示者であると宣言した時、彼の叔父も先生もバブの信者になりました。というのは、彼らは子供時代からバブを知っており、他の子供との相違を見ていたからでした。叔父は、バブによって現わされた神の大業のために殉教しました。

バブが神の使者としての彼の使命をまだ述べない頃、二人の有名な神学者がいて「コーランや聖なる伝承によると、約束されたお方がまもなく現われるであろう」と教えていました。この二人は、シエーク・アーマッドとその弟子のセーエッド・カゼムでした。多くの人々は彼らの言うことを信じ、その約束されたお方を受け入れる準備をしていました。

セーエッド・ガゼムが死んだ時に、彼の弟子たちは約束されたお方を探すために方々に分散して行きました。弟子たちの中にモラ・ホセインという若者がいました。モラ・ホセインは何名かの弟子を引き連れてイランの南部の町、シラズに向かいました。無論、その目的は約束されたお方を探しだすということでした。一行は４０日間を祈りと断食にあて、それからシラズへの道をたどって行きました。

彼らの祈りは答えられました。モラ・ホセインがシラズの町の門に近づくと、見知らぬ青年が彼を出迎えに来ていました。この青年はバブその人であったのです。バブはモラ・ホセインを自分の家に案内しました。そこで１８４４年５月２３日に、自分こそが約束されている者であると宣言しました。

モラ・ホセインはシラズの門の外でバブに視線を注いだその瞬間からバブに引きつけられました。しかし、バブの宣言を聞いたモラ・ホセインはバブに対し、約束された者であるという証拠を示すよう求めたのでした。バブは「神の顕示者が著す聖句こそが最強の証拠である」と答えました。バブはすぐに筆を手にとり目にもとまらぬ速度で書き始めました。そして、書きながらバブは澄んだ優しい声でその内容を唱えていました。バブの筆から洪水のごとく流れでる聖句を見て、モラ・ホセインはもはや何らの証拠も必要とはしませんでした。そして、モラ・ホセインは眼に涙を浮かべて神の顕示者の前にひれ伏し、バブの最初の信者となったのでした。バブは彼に「バーボル・バブ」、つまり「門に通づる門」の称号を与えました。バブの宣言が行われたその夜、それはまさ

に新時代の幕開けでした。バハイの暦もバブの宣言のあった西暦１８４４年を元年としています。

モラ･ホセインに続いて多くの人がバブを信じるようになりました。ある者はバブに直接面会し、ある者は彼の書物を読み、また他の人々は夢や幻影によって彼を認めるに至りました。

神の顕示者は太陽にたとえられます。太陽が上る時にはぐっすりと眠り込んでいる者の他は、精神の地平線上に現われた偉大な存在に気付くのです。眠っている者でも、遅かれ早かれ太陽が照っていることを知るようになります。

やがてバブの回りに１８名の弟子がそろいました。バブは弟子たちの一人一人に新時代の夜明けを告げるための使命を与えました。そして、バブ本人はイスラム世界全体に向けた宣言を行うため、イスラム教の聖地、メッカに向かいました。メッカでは、全世界から集まってきた何万もの巡礼者を前に、自分こそが約束された者であることを告げました。しかし、その宣言には誰も耳を貸しませんでした。宣言を終えたバブは帰路についたのでしたが、郷里のシラズを目前にして逮捕されました。それを仕掛けたのは、新しい教えの普及を止めようと団結した僧侶たちでした。まさに、彼らはバブの胸の中に燃える神の光を消すためであればあらゆる努力を惜しみませんでした。その日からバブは多くの苦難に耐えなければなりませんでした。宣言を終えてからは、バブは残された短い生涯のほとんどを囚われの身として牢獄で過ごしました。バブは極寒の山中の牢獄を点々としながらも神の教えを伝えつづけ、バブの忠実な弟子たちも命を犠牲にしても教えを広めることに全力を注ぎました。結局、どんな鉄鎖も、どんな牢獄も、神の言葉の伝播を妨げることはできませんでした。そして、短い期間に何千という人々が、バブの教えを受け入れてそのために生命をなげうちました。

バブに反対する僧侶たちがバブを殺そうと決心した時、バブはまだ３１歳でした。モラ･ホセインに最初に会ったその日から、バブは自分の殉教を予見していました。世界中の人々が神から授かったそれぞれ人生の目的を理解し、神に顔を向けるために、バブは自分の生命を喜んで捧げたのです。

殉教の日は１８５０年7月9日でした。その朝、執行官がバブを連れに来ると、バブは信者の一人に彼の最後の指示を書き取らせていました。執行官はバブに向かって「処刑の時が来た。兵士たちは命令を実行するために広場に整列している」と告げました。バブは答えて言いました、「弟子との話が終るまで待って下さい。」すると、執行官は「囚人には勝手なまねは許されない」と笑いながらバブを連れて行こうとしました。「この世における私の使命が完全に終わるまで、最後の

言葉を語り終わるまで、地上のいかなる力をもってしても私を傷つけることはできない。」これがバブの言葉でした。しかし、執行官は別に気にもせず、バブを広場に引き立てて行きました。最後までバブのそばを離れようとしなかったアニースという青年もバブと共に処刑されることになりました。

広場では７５０人の兵隊が銃を手に待ち構えていました。そこは大変な人だかりでした。二人の体はロープで吊り上げられ、アニースは自分の頭をバブの胸に置き、最後まで愛する師を守ろうとしていました。群衆がじっと見守る中、太鼓がたたかれラッパが鳴り響きました。ラッパの響きが消え去った時、恐ろしい命令が聞こえました。「撃て！」三列にならんだ兵士たちは狙いを定め、順番に銃を発射して行きました。広場全体が煙雲に覆われ、火薬の臭いが広場に充満しました。しばらくして煙が消え去った時、そこには大きな驚きがありました。バブの姿がそこから消え、彼の忠実な弟子は傷一つ負わずに立っていたからです。どう考えてよいのか、誰も分からなくなってしまいました。多くの人々は奇跡が起こってバブは天国に上がってしまったと言いました。兵隊たちもいまだかつてこのような不思議なことが起こったのを経験したことがありませんでした。「バブを探せ」と、執行官の指示が飛びました。そして、執行官がバブがもといた部屋に行くと、バブは前と同じ場所に平然として腰かけて、中断させられた弟子との話をつづけていました。バブは執行官に向かって笑みを浮かばせながら言いました、「これで私の地上での使命は終った。これでもうあなたの目的も果たされるでしょう。」

バブはもう一度広場に連れて行かれましたが、軍隊の指揮官は二度とバブに銃砲を向けることはできないと言って、早々に部下たちを退場させました。間もなく代わりの部隊が広場に呼ばれ、前回と同じような準備がなされました。「撃て！」の号令が再び広場に響き、今度は何百という銃弾がバブとその忠実な弟子の身体を貫きました。しかし、バブの凛々しい顔は銃弾によって傷つけられず、なおもなごやかな微笑を浮べていました。人類のために新時代の到来を宣言し、そのために生命を捧げた者の平安と幸福がその顔に現われていました。

バブは神の偉大な顕示者でした。そして、バブのすべての聖典に共通する点が一つありました。つまり自分のすぐ後にさらに偉大な顕示者が現われるであろう、という約束でした。バブはその人物を「神が現わすであろう者」と呼び、信者たちにその出現を見逃すことのないよう再三注意しました。「神が現わすであろう者」の出現の知らせを聞いたなら、他のすべての事を捨ててその教えに従いなさい、と指示していました。

バブは多くの祈りの言葉を書き残しました。その中で、心から敬愛する者、即ち「神が現わすであろう者」のために自らの生命を捧げたい、と神に嘆願していました。バブは祈りの中で、バハオラの教えにも言及しています。「バハオラの築く秩序に目を向け、主に感謝するものは幸いなり。」

バブの願いは成就し、約束は果たされました。バブの宣言から数えて１９年目にして、バハオラは、過去の時代においてすべての神の顕示者たちが、その到来を約束した者は自分であることを宣言しました。

バハオラ

１８６３年4月２１日、バハオラは世界に向けて宣言しました。「太古より、神のすべての予言者たちの究極の目的として、また最大の約束として、さらには使者たちが最高の希望として待ちこがれていた啓示が今や人類にその姿を現わしたのである。」この素晴しい宣言を行ったのは、バハオラがトルコ帝国の囚人として、当時最も荒廃した場所として知られていたアッカの牢獄に流される直前でした。

この宣言より約４６年前、バハオラはイランの宮廷の著名な大臣の家に生まれました。バハオラは子供の頃から、他の子供たちとは違っていることを誰もが認めていました。１４歳の時にはすでに宮廷中でバハオラの博学は有名になっていました。２２歳の時に父が亡くなり、政府はバハオラに父親の地位を継ぐように要請しました。しかし、バハオラはその天賦の才を政治や世俗的追及に費やすつもりはありませんでした。バハオラは宮廷の生活と大臣の職を棄て、神の道を歩むことを選びました。

バブがその使命を宣言した時に、バハオラは２７歳でした。彼は直ちにバブを神の顕示者として受け入れ、信者の一人になりました。しかし、二人は生涯会うことはありませんでした。政府や僧侶たちがバブの教えを弾圧した時、バハオラもその迫害の嵐に巻き込まれてしまいました。バハオラは祖国のイランで二度まで投獄され、また足の裏が血まみれになるほど鞭で打たれる仕打ちも受けました。

バブの宣言から九年後、バハオラは「暗黒の穴」と呼ばれる地下牢に入れられました。「暗黒の穴」には１５０人程の罪人がつながれていました。バハオラの首には重い鉄の鎖が捲かれ、自由

に頭をもち上げることさえできませんでした。ここでバハオラは恐ろしい苦難の四ヵ月を過ごされました。しかし、神の啓示を初めて受けたのもこの牢獄の中でした。ある夜、彼は夢の中で、四方から次のような言葉が鳴り響いて来るのを聞いたと書いています。「誠に我は、汝自身と汝のペンによって、汝を勝者とする。」

バハオラは我々のために、また人類の未来のためにこれらすべての困難を堪え忍んだのです。人類が偏見や差別や敵意の鎖から解放されるためにバハオラは牢獄での苦しみを受け入れたのです。

ついにバハオラは「暗黒の穴」から解放されました。しかし、財産は没収され、家族と共に祖国を追放されることになりました。冬の厳寒の中を、バハオラとその家族は隣国の都市、バグダットに向かって出発しました。雪に埋もれたイランの山岳地帯をひたすら歩きつづけました。防寒衣を準備する余地もなかったその旅は非常に辛いものでした。しかし、バグダッド到着後もバハオラの苦悩は終わったわけではありませんでした。バハオラの名声はすぐにバグダットとその周囲に広がりました、そして、多くの人々が彼の祝福を受けようと、この流刑囚の戸口にやって来ました。

バブの殉教によって師を失った信徒たちが導きを求めて各地からバハオラのまわりに集まって来ました。しかし、バハオラの名声を妬む者もいました。その中の一人に、バハオラの弟のヤーヤがいました。ヤーヤは兄のバハオラを追い落とし、自分を指導者の座に据えようと企んでいました。顕示者にそむくことによって、自分の破滅を招くということを彼は理解していませんでした。顕示者が現われる時には、彼に献身的に奉仕することを誓う者のみが、真の偉大な効験を得ることができるのです。バハオラの近親の者でも例外ではありませんでした。

ヤーヤの野望は信徒たちの間に分裂を来たしました。このことをバハオラは非常に悲しみました。ある夜、バハオラは誰にもつげずに、こっそりと家を出て遠く離れたクルジスタンの山中にこもってしまいました。この山中でバハオラは二年間生活し、その間祈りと瞑想にふけっていました。小さな洞穴に住み、食事もごく簡素なものですませました。あたりの村人たちは誰も彼の名前を知りませんでした。またどこから来たのかも分かりませんでした。しかし、暗夜に月が出たように、彼の光はクルジスタン中に照り渡り、あらゆる人が「この名も知れぬ者」の話を聞くようになりました。その間バグダットにいるバハオラの家族も友人たちも、バハオラの消息も得られず、傷心していました。ちょうどその頃、彼らは名も知れぬある聖人がいるということを風の便りに耳にしました。

その人は神から授かった天賦の知識を持っているという評判でした。バハオラの長男、アブドル・バハはこの聖人こそ敬愛する父上に違いないと直感しました。そこでアブドル・バハは使者を送り、家族や信徒たちが待ち受けるバグダッドに帰って来てくれるようバハオラに懇願しました。

こうして二年間を祈りと瞑想に過した後、バハオラはようやくバグダットに帰って来ました。家族や信徒たちは大いに喜んだものの、バハオラに敵対する僧侶たちはバハオラがバグダットに住むことを腹立たしく思いました。その訳はバグダットの近くにはイスラム教の聖地が点在し、そこを訪れる巡礼者たちがバハオラの魅力と人柄に引きつけられることを恐れたからです。そこで彼らは政府に働きかけて、バハオラをもっと遠い場所に移すよう請願しました。結局、バハオラは十年間滞在したバグダットの町を後に、トルコ帝国の帝都、イスタンブールに移されることになりました。バグダットを離れる直前の１８６３年の4月２１日、バハオラは初めて、神の顕示者であることを宣言しました。それまではバブの信従であった人々は、バハオラの宣言を期にバハイ（バハオラに従う者）となりました。

第二の追放先となったイスタンブールにおいてもバハオラの博学と人柄の魅力は多くの人々を引きつけてしまいました。「このままではだめだ。バハオラを地の果てに追放しなければならない。」バハオラの敵たちはこう結論づけました。第三の追放地となったのは、イスタンブールからボスポラス海峡を超えて、ブルガリアの国境の町、アドリアノーブルに決まりました。しかし、ここでも安心できず、四度目の追放令が言い渡されました。そして、一八六八年、バハオラとその家族は地中海に面した要塞の町、アッカに流されました。イスラエル北部に位置するアッカは「囚人の町」として悪名たかく、その環境の悪さにアッカの空を飛ぶ鳥は地に落ちて朽ちる、とさえ言われていました。アッカにおけるバハオラの苦難は、筆舌に尽くし難いものがありました。最初の二年間は独房に入れられ、人と会うこともできませんでした。しかし、バハオラはこの独房から世界の最も有力な王や支配者たちに、自らの使命について手紙を通じて訴えつづけ、「神の使者の言葉に耳を傾け、王中の王の教えに従え」と呼び掛けました。

バハオラは世界平和と人類の和合の旗を高々と牢獄の壁上に掲げました。そして、神の力に支えられ、地上のあらゆる勢力にも勝利することができたのです。バハオラの教えは何万という人々の心に影響を与え、長い間憎しみ合っていた民族や人々が神の言葉の威力によって一つの家族のように結びつくことができました。

バハオラは終身刑の罪人としてアッカに送られましたが、到着後九年目にしてその要塞の町を

出ることができました。バハオラの人徳にうたれ、誰もバハオラを止めるものはいませんでした。バハオラは余生をアッカの郊外に位置するバージで送り１８９２年5月２９日、７５歳にしてこの世を去りました。

バハオラの教えは、過去の多くの宗教が聖地と呼ぶ場所から世界の各地に広がりました。仏教の経典では、聖地は西方浄土、約束された阿弥陀仏の座と呼ばれています。ユダヤ人にとってそこは約束された土地であり、神の掟がそこから世界中に向かって、もう一度出される所であります。キリスト教徒やイスラム教徒もまた、幾世紀もの間彼らの聖地であったこの地に関して不思議な予言を多く持っています。バハオラがアッカに流された時から、過去の宗教の聖地はバハイ信教の聖地ともなり、バハイ世界の中心ともなりました。

- バハオラは偉大な神の顕示者であり、過去のすべての顕示者たちの予言を成就しています。各時代の聖なる宗教は、同じ方向に導き、同じ目標に向って教えています。過去の宗教は大きな川のようなものです。それらはすべて一つの大洋に流れ込みます。それぞれの川は、広大な土地に水を注ぎながら時を刻んできました。バハイ共同体はすべての宗教の信従たちで成り立っています。彼らは地上のあらゆる方角から集まり、今では一つの家族として互いに手を握り合い、一つの信仰のもとに結ばれ、「世界平和の達成」という一つの共通の目的のためにそれぞれが各々の生き方で貢献しています。

第三章、聖約とは

アブドル・バハ

バハオラは聖なる新しい世界の設計者でした。バハオラは人類統合のための素晴らしい設計図を示し、聖なる大計画の堅固な礎石を置き、それに必要な材料を選定しました。しかし、バハオラの昇天後、この素晴らしい設計を実現させるのは誰だったでしょう。設計図が完璧でも、有能な技術者の手に委ねなければ、建造物は崩壊するでしょう。如何に設計が完全であり、建物の基礎が堅固であっても、有能な技師によって適切に監督されなければ、その建物は建築家によって意図された設計とは全く違ったものができ上がるでしょう。

生前、バハオラはその聖なる計画の遂行を彼の息子のアブドル・バハの手に委ねました。バハオラはアブドル・バハを「聖約の中心」と定め、アブドル・バハの指導に従うよう信徒たちに指示しました。アブドル・バハという名前は「バハの僕」という意味です。アブドル・バハは偶然にも、バブの宣言が行われた同じ日、つまり１８４４年5月２３日、バハオラの長男として生まれました。

アブドル・バハがわずか八歳の時に、父バハオラはあの恐ろしい地下牢に投獄されました。幼少の頃からアブドル・バハは、彼の父のすべての苦難を喜んで共にしました。バグダットへの辛い追放の旅も父と共にしました。そして、アブドル・バハは生涯の五十年間を、牢獄や流浪に費しました。アブドル・バハがついに自由の身となった時には、彼はもう老人になっていました。しかし神の愛は生涯の最も暗黒な時においてさえも、彼をいつも幸福にさせました。アブドル・バハは深い精神的な幸福を持っていました。獄舎生活の最も苦しい時でさえ、彼の心の喜びは曇ることはありませんでした。

アブドル・バハは次のように言っています。

「幸福には二種類ある。物質的幸福と精神的幸福。物質的幸福には限りがある。その最高の持続期間も一日か一ヵ月か一年ぐらいしかない。それには結果というものがない。精神的幸福は神の愛によって人の心の中に現われるもので、人間世界の美徳と完成に我々を導くものである。それ故、神の愛の光によってあなたの心のランプを輝かせるよう、できるだけ努力しなさい。」

アブドル・バハは、バグダットで父バハオラを神の顕示者として認めて以降、すべてを犠牲にし

てバハオラの大業のために働きました。父を守り、その教えを確立するためにアブドル・バハは休むことなく奉仕をつづけました。その献身的な態度や力強さは、バハオラに会いにくる多くの信者たちの心を打ち、勇気づけました。そのため、アブドル・バハは万人の愛と尊敬を受け、「師」と呼ばれるようになりましたバハオラが亡くなり、「聖約の書」と呼ばれるバハオラの遺言が開封された時、そこにはアブドル・バハを「聖約の中心」と任命する言葉がありました。このことにより、アブドル・バハはバハオラの教えの権威ある解釈者として、また、教えの推進者としてすべてのバハイの先頭に立つことになりました。

「聖約の中心」の存在は、バハイを過去の宗教と区別する非常に重要な特徴です。過去の宗教は、その創始者の死後、分裂を避けることができませんでした。神の顕示者の亡き後、信者たちは誰に向かい、どの方向に進むか、はっきりした指針を与えられていませんでした。結局、誰もが神の教えを自分の理解に基づき解釈し、その意見の相違が分裂を起こして来ました。この分裂を決定づけるものとして、そこには醜い権力争いが常にありました。しかし、バハイでは事情が全く異なっていました。世界の人々の間からあらゆる不和と不統一を除くために現われたバハオラは、バハイの教えそのものに分裂が生じること避けるための最善の手段を講じたのです。バハオラは文書に明記して、すべてのバハイが教えに関する一切の事柄について指導を受くべき者としてアブドル・バハを指名したのです。この文書、即ち「聖約の書」は過去の宗教に共通する悲劇を予防し、バハイを分裂から救ったのです。

「聖約の書」はバハイの統一を保持しましたが、その和合を脅かすものがいなかった訳ではありません。アブドル・バハの権威に反抗したのは嫉妬に燃えるアブドル・バハの弟のモハメド・アリでした。最大の危機が訪れたのは、アブドル・バハがアッカの近くにあるカルメル山にバブの廟を建設しようとした時でした。バブの遺体は処刑の直後、信者たちの手によって運び去られ、半世紀にわって隠された後に、アッカに運ばれて来たのでした。そして、バハオラの指示に従い、アブドル・バハはカルメル山の中腹にバブの遺体を納める廟を建設しようとしていたのです。そこで弟のモハメド・アリは政府にこのような申し立てを行いました。「アブドル・バハは山頂に要塞を築き、政府に反旗をひるがえそうとしている。」事態を重く見たトルコ政府は調査団を派遣し、アブドル・バハの取り調べを行いました。モハメド・アリの影響下で調査団はアブドル・バハに不利な報告をまとめました。そして、調査団長を務める将軍はアブドル・バハを絞首刑に処するために帰って来ると言い残して、アッカを離れました。誰もが、アブドル・バハは処刑されるか再度追放されるか、

と思っていました。友人たちは、まだ時間がある内に聖地から逃れるように勧めました。しかし、アブドル・バハは応じず、次のように答えました、「私にとって、自由の身であることが投獄に等しく、監禁は解放そのものです。私にとって屈辱は栄光であり、逆境は贈りものであり、死は生命そのものなのです。」その間、アブドル・バハはいつものように大業への奉仕に懸命でした。普段通り、アブドル・バハは世界中のバハイに激励の手紙を書きつづけ、地元では病人を見舞ったり貧困者の世話に忙しく働いていました。

やがて調査団が戻って来ました。一行を乗せた船はアッカに向かい、陸からもはっきりと見える距離まで来ていました。しかし、突然船は進路を変えてアッカから遠のいて行きました。その日、帝都では政変が起こり、調査団はアブドル・バハのことをも忘れて一目散にイスタンブールに帰って行ったのです。

アブドル・バハを絞首刑にしようとした将軍は、まもなく政変に巻き込まれて戦死し、トルコ政府自体も崩壊してしまい、新しい体制が誕生しました。そして、生涯のほとんどを牢獄で過したアブドル・バハに自由の時がやって来ました。

多くの困難や苦しみに堪えつつ、バハオラの教えを広めて来たアブドル・バハはついに自由になったのです。そこで、最初に手がけたことは、諸国を回り、世界中の人々にバハオラの教えを伝えることでした。アブドル・バハは年もとり永年の牢獄生活で身体も弱っていましたが、西洋のバハイたちの招待に応えてヨーロッパやアメリカに旅行することになりました。

西洋を旅行中、アブドル・バハは何千という人々に、バハオラの教えについて語る機会を得ました。一日に何回も講演を行うことも珍しくありませんでした。バハオラの教えを受け入れた者も、そうでない者も、アブドル・バハの霊感に満ちた話を聞きに各地から集まってきました。こうやって、アブドル・バハは早朝から夜遅くまで、大業を教えるために多忙な時を過ごされました。アメリカでは、アブドル・バハは、西洋における最初のバハイ礼拝堂の礎石を置きました。シカゴにあるこの礼拝堂は、今では神の大業の栄光に捧げられた美しい建物となっております。ヨーロッパ及びアメリカにおけるアブドル・バハの旅行は、すばらしい成果を納めました。こうして、多くの国にバハイ共同体が設立されました。

アブドル・バハは、１９２１年１１月２８日、７７歳にして亡くなりました。アブドル・バハのお墓は、生前アブドル・バハが建てたバブの廟の一室にあります。

アブドル・バハは、神の教えの解説者であり、バハオラの書き残した聖典の解釈者であり、また

バハオラの教えの完全な模範でもありました。その素晴しい人柄と能力を賛えて、バハオラはアブドル・バハのことを「神の神秘」と呼びました。

ショーギ・エフェンディ（守護者）

アブドル・バハは約３０年にわってバハイ信教を指導し、その和合を守り、その教えを世界に広める努力をつづけました。そして、この土台を揺るぎないものとするためにアブドル・バハは自らの後継者を選び、「守護者」と呼ばれる後継者にこの神聖なる事業の継続を託したのです。その任命を受けたのはアブドル・バハの孫のショーギ・エフェンディでした。

ショーギ・エフェンディは、アブドル・バハの長女を母にもち、父方からはバブの血を引いていました。そのために、アブドル・バハは彼のことを「二つの波打ち寄せる大海からきらめき出た最も驚くべき、無比の尊い真珠」、または「二本の聖木から出た聖なる枝」などと呼びました。ショーギ・エフェンディはアブドル・バハの監督の下に育ち、将来負うべき任務の準備を着々と進めて行きました。ただし、アブドル・バハの存命中はショーギ・エフェンディの任命の事実はショーギ・エフェンディ本人にも、また他の誰にも明かされていませんでした。

アブドル・バハが亡くなった時、ショーギ・エフェンディは英国に留学中の２４歳の青年でした。彼の最大の希望はアブドル・バハに仕え、バハイの聖典をペルシャ語やアラビヤ語の原典から英語に翻訳することによってバハオラの教えを全世界に知らしめることでした。遠く離れた国でアブドル・バハの悲報に触れた時、ショーギ・エフェンディは非常に大きなショックを受けました。悲しみを堪えて聖地に戻るとショーギ・エフェンディは初めて、守護者という重大な責任を与えられたことを知りました。それからの三十六年間、ショーギ・エフェンディは大業の発展以外のことは何も考えず、その推進に日夜奮闘しました。

バハオラが示した世界秩序をどのようにして樹立するのか、アブドル・バハの示した世界的な布教計画をどのように展開するのか、その方法や方向性を定めたのはショーギ・エフェンディでした。この大いなる目標に向けて、ショーギ・エフェンディは長年の間、世界中のバハイを鍛え、古い時代の思考や習慣を捨て、バハオラの描いたビジョンにふさわしい世界観を育み、機構を打ち建てるよう指導しました。この時期、ショーギ・エフェンディの呼びかけ

に応えて、多くのバハイが祖国を後にして「パイオニア」として世界各地に散らばり、バハイ共同体の拡大に務めました。その結果、アブドル・バハの時代には三十五カ国にしか広まっていなかったバハオラの教えが、ショーギ・エフェンディの指導のもと、世界中のほとんどの国や地域に確立されるに至りました。また、同時期において、バハイの聖典が英語を始めとする世界各国の言語に訳され、バハオラのメッセージが全人類に着実に提供されていきました。

ショーギ・エフェンディの指導のもと、バハイ世界の中心とその聖地が隣接するアッカおよびハイファにおいても大きな進展がありました。アブドル・バハの手によって築かれたバブの廟を囲むように建てられた美しい大理石のドームは１９５３に完成し、つづいてバブとバハオラの聖典やその他の貴重な歴史資料を保存陳列する国際資料館が建てられました。これらの事業は、カルメル山上に今日そびえるバハイ世界本部の礎を築くものとなりました。

ショーギ・エフェンディが最後に取りかかった事業は「十年聖戦」と呼ばれる布教計画でした。その主な目的は、１９６３年までの１０年間で、世界中のすべての国や地域にバハオラの教えを樹立させることでした。ショーギ・エフェンディの呼びかけに応えて、多くのパイオニアが世界各地に散らばり、信教の拡大のペースが大きく加速されました。しかし、計画の中間点を前に、ショーギ・エフェンディは１９５７年１１月４日、旅行先のロンドンで突然亡くなりました。守護者の亡き後、十年計画を成功裏に導いたのはショーギ・エフェンディによって任命された大業の翼成者たちでした。バハオラの教えの普及と保護をその任務とする２７名の大業の翼成者たちの内、９名は常時聖地に留まってバハイ世界本部の仕事を継承し、残りの人々は世界中に散らばって、守護者の十年計画の完成に力をつくしました。

十年計画が終了した１９６３年は、バハイの歴史にとって一つ新しい道しるべとなりました。バハオラの宣言１００周年を祝うこの年、バハイの最高機関である万国正義院のメンバーが始めて選出されました。

万国正義院

バハイ世界の最高機関は万国正義院です。万国正義院は本部をハイファに置き、その九人のメンバーは５年に一度行われる選挙によって世界中のバハイの中から選ばれます。この選挙で

票を投ずるのは世界各地の全国精神行政会のメンバーたちです。

バハオラは現代に適した根本的な原則・規則と、神の教えを私たちに与えました。しかし、世界の状況や私たちの生活様式は絶えず変化しつづけます。それに沿ってだんだんと新しい社会的な規律が必要となって来ます。バハオラによれば、これらの新しい規律や規定は、常に神の導きの下にある万国正義院によって書き加えられなければならないのです。

万国正義院について、アブドル・バハは次のように言われています。

「その正義院は神の加護のもとにある。聖典に書かれていない問題についてその正義院が満場一致か過半数で決定するならば、その決定や命令は誤りのないものである。」

つまり、万国正義院の決定は神に導かれ、誤りのないものであるとバハイは信じるのです。従って、万国正義院の定める規定を、その時代の要求に完全に一致したものとして受け止めるのです。しかし、万国正義院はバハオラによって定められた基本原則を変更することはできません。この点については万国正義院の権限の範囲は、バハオラによって定められた原則を実行する上で必要な補足的な規定を定めることです。

例えば、バハオラの教えの一つに「極端な貧富の差の排除」があります。しかし、バハオラの書物にはこの原則をどのようにして実現させるかは明記されていおらず、具体的な方策を決めるのは万国正義院の仕事です。もう一つの例として上げられるのが「世界共通語」に関するバハオラの教えです。世界は共通の言葉を必要としているとバハオラは説いておられます。しかし、どの言語を選ぶかについては指示はなく、それは万国正義院の決定に委ねられています。このことについてバハオラは次のように書いておられます。

「....我が書簡を通じて、我は正義院の面々に次のように命じた。既存の言語の中から一つを選び、もしくは新たな言語を創り、同様に一つの字体を選択し、それを世界中の学校ですべての学童に教えよ。そして、このことにより世界を一つの国、一つの家族とせよ。」

バハオラによって示されたことを万国正義院は変更できません。同様に、万国正義院はアブドル・バハやショーギ・エフェンディによる解釈に変更を加えることはできません。ただ、世界の状況の変化に応じて万国正義院は自ら決定したことを変更することはできます。

アブドル・バハの遺訓の中に、次のように書かれています。

「すべての者は最も聖なる書（アグダスの書）に向かわなければならない。そしてその聖なる書に明白に記録されていないすべての事柄は万国正義院に照会されねばならない。この正義院が

満場一致または多数決で決定したことは、実に真理であり、神自身の御目的である。それより逸脱する者は真に不和を好む者であり、悪意を示し聖約の主に背を向ける者である。」

第四章、世界平和への条件

人間社会の調和

バハオラは私たちに人類の和合を説いています。人間は皆、等しく神の意志によって命を与えられ、その命には価値の優劣はないのです。すべてが神の子であり、すべてが一つの家族に属する兄弟姉妹なのです。この認識がバハイの求める人間社会の調和の出発点なのです。

和合の光がこの地上を照らすまで、人類は常に他との違いに注目し、自分を他に優る存在、もしくは他に劣る存在であると思いつづけるでしょう。人類は違いの原因にこと欠きません。ある者は皮膚の色で判断して来ました。白は黒を兄弟として認めず、黒は黄色を避け、黄色は白を軽蔑する具合に、憎しみと不信の輪は地上を覆ってしまっています。しかし、バハイの目にはこの皮膚の色の違いは美しいものとして映るのです。人類は地球という花園に咲く花なのです。同色の花に埋もれた花園よりも、多様性と変化に富んだ花園の方が美しいのではないでしょうか。心を魅くのは、多様なるものが互いにゆずり合って調和を作りだしている風景ではないでしょうか。そして、太陽は花園に咲くすべての花に等しくその光を贈るのです。同様に、神の愛の光は皮膚の色に関係なく、地上のすべての人々を区別なく育んでいるのです。神は私たちの皮膚の色がどうあろうと、また、私たちが世界のどこの出身であろうと、区別なく私たちすべてをその愛で覆っているのです。では、その愛を共有する私たちが互いを何故他人と見なすことができるでしょうか。愛の灯火は世界の人々の心の中に灯されています。ただし、その光は古くから伝えられて来た偏見や憎しみによって覆いかくされた状態にあるのです。その覆いが取り外されれば、和合の光は人類を包み込み、世界が一つの国であり、人類は一つの家族であることに人々は気づくでしょう。

バハイの書物の中から：

「おお、愛されし人々よ。和合の聖堂は建てられたのであるから、互いを他人視してはならない。汝らは皆、同じ木になる果実であり、同じ枝になる葉なのである」。

（バハオラ）

バハオラの教えの中に、人類は一つであるという教えがあります。人間はすべて神の羊であり、神は親切な羊飼いです。この羊飼いはすべての羊に対し親切です。これは、神が彼ら全員の創造者であり、彼ら全員を養い訓練し、かつ保護してきたからです。羊飼いはすべての無知なものがあれば、それを教育しなければなりません。もし幼いものがいればその成長を見守ってやらなければなりません。病気のものがあれば、介抱しなければなりません。憎しみや敵意があってはならないのです。無知なもの、病めるものも親切な医師が治療を施すがごとくに育まれなければならないのです。　アブドル・バハ

偏見の除去

国家的偏見であろうと、民族的偏見であろうと、宗教的偏見であろうと、あらゆる偏見は忘れさらなければならないと、バハオラは教えています。人々が偏見にしがみついている限りは、平和は確立されないでしょう。過去のすべての戦争、すべての流血の惨事の根底にはある種の偏見が横たわっていました。人は宗教のことで戦い、世界に破滅をもたらし、何百万という同胞の命を奪って来ました。このことについてアブドル・バハは次のように言っています。

「この偏見や敵意が、宗教が原因で起こったものであれば、宗教は友情の根元となるべきものであり、さもなければ宗教は効果なきものなのであることを知りなさい。この偏見が、国籍上の偏見であるとすれば人類は皆一つの国の市民であり、すべては一本の木から生じていることを考えなさい。国々はその木に茂る枝であり、一人一人の人間はその枝に成る葉や花や実なのです。にもかかわらず、種々の国家が設立され、それによる流血と破壊が絶えないのは、人間の無知と利己主義によるものなのです。

愛国的偏見についていえば、これもまた絶対的無知によるものです。何となれば、地球の表面は人類が共有する一つの祖国であるからです。人は地球のどの部分においても生きることができます。このことからも全世界が人間の生れ故郷であることが分かります。すべての国境や関所は人造のものにすぎません。神の創造には国境などのという境はありません。ヨーロッパは一つの大陸で、アジアも一つの大陸、アフリカも一つの大陸、オーストラリアも一つの大陸であるが、人々は利己的な理由で大陸を分割し、それぞれの国や領土を固有のものと考えたのです。ある

地域を彼らだけの国と考えたのです。神はフランスとドイツの間に国境を作りませんでした。そもそも両国は地続きなのです。初期の時代、人々は利己的な理由で国境や関所を設け、時のたつにつれてその国境がますます重要性を帯び、ついには深い敵意や、流血や、貪欲を起させるに至ったのです。この状態は無限に続き、愛国の心がこのような低次元に留まるならば、それはやがて世界の破滅の主因となるでしょう。正義を愛し、聡明なる人ならば、単なる空想によるこのような区別を肯定することはないでしょう。人は自分の生まれた土地を故郷と呼ぶ訳ですが、地球全体がすべての人間の母国なのであって、限られた土地だけが母国ではないはずです。要するに、我々はほんのわずかな期間この地球上に住み、やがては地中に埋められていくのです。結局、地球は我々の永遠の墓場なのです。この永遠の墓場のために血を流し、互いに争う価値があるでしょうか。否、そのような価値はまったくありません。神はその争いを喜びません。聡明な人もその争いを承認するはずはありません。

考えて見なさい。動物たちには愛国的な争いはありません。彼らは互いに最高の友情を示しています。例えば、東から来た鳩と、西から来た鳩と、南から来た鳩と、北から来た鳩がたまたま同時に一つの場所に到着すると、彼らは直ちに仲よく交わります。しかし、猛獣は違います。出会うやいなや、互いに襲いかかり殺し合いを始めます。猛獣たちは一箇所に集い平和の中に住むことはできないのです。」

真理の探究

ヒンズー教の家庭に生まれた子供はヒンズー教徒になります。両親がイスラム教徒だと子供たちもまたイスラム教徒になります。もし、彼らが仏教徒だと子供たちも仏教徒になります。なぜでしょう。世界の大部分の人々は、祖先をまねて行動しているのです。これは「盲目的模倣」です。これを改めない限り、人類の和合は達成できません。人々はそれぞれの模倣を巡って争っています。人は、自分たちは正しいが、他の人々は皆まちがっていると主張します。しかし、もし違う家に生まれていたら、いま自分が正しいと信じるものとまったく違う方向に進んでいたかも知れないのです。

バハオラは真理は一つだと教えています。もし世界の人々が「盲目的模倣」を止めて、真摯な

態度で真理を探究するならば、そこで得られた結論は、人類の和合を打ち建てる基礎となり得るでしょう。次のような例え話があります。ある家の子供は、様々な色のついた窓ガラス越しにいつも空を見ていました。そして、空の本当の色は何かということでいつも口論になっていました。空は赤いという子がいれば、緑だという子もいました。子供たちは自分の視野を阻むガラスの色で空について判断し、自分の見た色こそが正しいと信じていました。しかし、家を出て空を見上げれば、一目瞭然です。真理に触れる機会さえあれば多くの争いの原因は瞬時にして消滅してしまうのです。

バハオラは人々に対し、代々住み慣れた家を出て、空を見上げるよう呼びかけているのです。目の前から色ガラスを取り除けば、多くの論争の原因も取り除かれるのです。過去の習慣にとらわれることなく、人は自分の責任で真理を探究しなければなりません。そのことによって得られた真理は人類を過去から解放し、新たな融和への出発を可能とします。

このことについてアブドル・バハは次のように述べています。

「神の顕示者たちのもたらす宗教は、それぞれの名前や用語が異なっていても、実際には同一の教えなのです。その教えが地平線のどの地点から発せられたにせよ、人はその光を尊び、愛する者でなければならないのです。バラを愛する者は、そのバラがどこの土壌に育ったかは気にかけません。真理を求める者は、真理がどの方向にあってもそれに向かいます。ランプへの愛着は、その光を愛することとは違います。土への愛着は無意味であって、その土から生まれたバラを楽しむことに価値があるのです。果実を味わうことに意味があり、木そのものを愛しても無益です。逆に、どんな木に成っていようと、果実を味あわなければ何のためにもならないのです。どの口から発せられようと真理の言葉は認められなければならないのです。どんな本に記載されていようと、完全な真理は受け入れられなければならないのです。偏見を抱くならば、それは損失と無知の原因となります。宗教間、国家間、民族間の争いは誤解から起こるものです。種々の宗教の根底に横たわる原理原則を発見しようと調べて見るならば、それらは一致することを見い出すでしょう。つまり、宗教の根本は同じです。その真理には差異はないのです。この認識を持てば、異なる信仰をもつ人々も一致点を発見し、調和を達成することができるのです。」

「宗教の真理は、いつも同一であるにもかかわらず、人類は全く模倣と虚偽に陥っています。真理は迷信によって覆いかくされてしまっています。世界は暗黒に包まれ、宗教の光りは奪われてしまっています。暗闇のなかでは不和や争いが生まれます。宗教は人類の和合のためにあるに

もかかわらず、儀式や教義の違いから宗教間の不和が起こったのです。真の宗教というものは、人類間の愛と和合の源泉であり、徳の高い人格の根源です。しかし、人々はにせ物と模倣にしがみつき、和合に導く本物をなおざりにして来たのです。そのため、人類は宗教の光輝を失い、その光明を奪ったのです。人々は祖先伝来の迷信に従って生きているのです。この事態によって、人々は天与の真理の聖なる光を捨て去り、模倣と空想の暗黒の中に座しているのです。生命力の源となるべきものが、却って死の原因になってしまっているのです。知識の証拠であるべきものが、却って今では無知のしるしとなっています。人間性の崇高さの要素が、却って堕落のもとになっています。そのため、宗教家の領域は次第に狭められ、暗闇に包まれ、逆に物質主義者の領域が広められ前進しています。それは宗教家が模倣と、にせ物に執着し、宗教の神聖さと、聖なる真実性を無視していたからです。太陽が沈むと、こうもりが空を飛び交います。彼らは光りを嫌う夜行性なのです。同様に、宗教の光が失われた時に、物質にすべてを求める人々が現われて来るのです。彼らもまた夜空に舞うこうもりなのです。宗教が没落する時が彼らの活動時期なのです。世界が暗くなり、雲がすべてを覆う時、彼らはなおも陰を追うのです。」

「バハオラは東方の地平線から出現し、太陽の輝きの如くこの世に現われたのです。バハオラは聖なる宗教の真理を映し、模倣の暗黒を追い払い、新しい教えと世界の蘇生の基礎を築いたのです。バハオラの第一の教えは真理の探究です。人は自ら真理を探究し、単に祖先伝来の型を模倣したり、これに執着することは止めなければなりません。国々は真理を求めず、模倣に頼り、種々雑多な模倣によって生じる信仰の相違は、争いや戦いを生むに至ったのです。これらの模倣が存続する限り、人類の和合は不可能です。それ故、我々は光によって雲や暗黒を追いちらすために、真理を探究しなければならないのです。真理は一つであって、真理が多数あることも分割されることもあり得ないことです。もし、国々が真理を探究するならば、彼らは和合し統合するでしょう。バハオラの導きと教えによって真理を探究した結果、多くの人々は一つに結ばれ、今では和合と愛のもとに生きています。彼らの間にはもはや、敵意や闘争の片鱗さえ存在していないのです。」

世界共通語

世界中で誤解の原因の一つに、人々がお互いに言葉を理解できないということがあります。どの国も違った国語を持ち、自国を離れて外国に行くと、まったく見知らぬ他人の中にいることを感じるでしょう。

バハオラは世界の人々すべてを統合し、一つの家族のようにするために出現したのです。従って、バハオラは世界共通語の確立を唱えています。それは各人が自国語を学ぶとともに、世界中で決められた共通の言葉を学ぶということです。これにより、人々はどこの国に行こうと互いに理解し合えて、安心し合うことができます。

言葉の違いは、しばしば誤解を生み、危険な争いに発展することがあります。例えば、神の名前・呼び方を例にとって見ましょう。ヒンズー語では神をイシュワラ、アラビア語ではアラー、英語ではゴッドと呼びます。言葉の違いにとらわれる人は、ゴッドとイシュワラあるいはアラーとはまったく違う存在であると錯覚してしまいます。そして、お互いにこれらの異なる呼び方について争います。もし、人々が一つの世界共通語を学ぶなら、それは彼らが皆呼んでいる同じ創造主であることが容易に理解できるでしょう。このこと事態が、人々の間に多く存在する誤解を取り除くことになるでしょう。さらに、バハオラによると、世界共通語は世界のすべての国々の合意のもとで設定されなければなりません。今日の世界は共通語の必要性を痛感しています。バハオラの予見した全世界参加の国際会議でその共通語を決定する時期が近づきつつあるのではないでしょうか。

男女の平等

鳥は左右の翼を羽ばたくことによって空を飛びます。片方の羽を抜けば、残った翼がいくら強力でも鳥は飛べません。飛ぶには、二つの翼が必要なのです。

アブドル・バハは鳥を例に次のような説明をしています。

「人類は二つの翼を持った鳥によくにています。一方は男性であり、他方は女性です。両翼が強くてその共同の力で推進しなければ、その鳥は天に飛び上がることはできません。」

「神はすべての創造物を対に造られました。人間も、動物も、植物も、すべてこれらには両性があり、その間には平等があります。植物界にも雄木と雌木があり、両方とも同等の権利を持ち、同じ美を誇っています。敢えていうなら、実を結ぶ方の木は、実のならない木よりすぐれていると言えます。動物界においても、雄と雌とは同等の権利を持っています。そして、それらはその種族の発展にそれぞれ分担を担っています。さて、植物界、動物界においては、性の一方が他方に優るという問題は存在しません。しかし、人間社会に及んでは非常に大きな差異が見られます。女性はあたかも劣っているかのように扱かわれ、同等の権利や特権を許されないこともしばしばです。この状態は、自然がそうさせるのでなく、教育の結果によるものです。神は何ら区別していません。神の目から見れば、一方の性が他方に優るということはないのです。」

神は私たちすべてを平等な人間として創造しました。神にとって男女の違いは関係ないのです。愛情に満ちた親にとって息子も娘も同じように大事なのです。

このことについて、バハオラは次のように言っています。

「男女は両方とも人類に属し、神の評価においては同等である。神の創造計画においては、男女は互いを補なう存在である。神の目に映る人間の唯一の違いはその行動の純粋さと正しさである。創造主の精神に最も近く、最も似たものを神は好み給う。」

神の恵みは男性にも女性にも同様に与えられますから、私たちは両性の間に区別を設けてはならないのです。社会における男性の任務は、女性のとは違っているかも知れませんが、権利におては同じでなければなりません。女性の才能が、男性より劣っていると考えるべきではありません。過去においては、男女に同じ教育や機会が与えられませんでした。そのために、特に女性はその能力を十分に発揮することができなかったのです。

バハイ共同体が、毎年精神行政会のメンバーを選挙する時、その選ぶ基準となるのは各人の誠意と能力です。そこには男女の区別はありません。神が見るのは、人の心と性格であり、性別ではありません。私たちもそうでなければなりません。

「考えが純潔で、教養を有し、学術にすぐれ、博愛の行ないに厚い人はそれが男性であろうと女性であろうと、白人であろうと、有色人であろうと等しく認められるのです。そこにはいかなる区別もないのです。」　　（アブドル・バハ）

教育の普及

バハオラの教えの一つに、すべての子供は、男の子も女の子も教育を受けなければならないというのがあります。もし親が自分の子の教育を怠るならば、その親は神の御前に出た時、責任を負わなければなりません。これがバハオラの教えです。

「すべての父親には、読み書きをはじめ、聖なる書簡に示されているあらゆることについて息子や娘を指導する義務がある。命ぜられたことを怠る者については、もしその父親が裕福であれば、信託人らは教育に必要な費用を父親から徴収し、裕福でなければこのことは正義院に委ねられる。まことに、我は正義院を貧しいものや、困窮者の避難所とした。」

従って、子供の教育はすべてのバハイに課せられた義務です。親が子供の教育ができない場合は、教育を受けさせるよう精神行政会が親を指導しなければなりません。そして、貧困のために教育が受けられないのであれば、精神行政会は共同体の資金の中から、子供の教育費を出してやらなければなりません。バハオラの言葉から、子供の教育は神聖な義務であることが明らかです。そして、バハオラはこうも言っています。「自分の息子、あるいは他人の息子を育て上げる者は、我自身の息子を育てたに等しい。」自分の子供を正しく教育し、もしくは人の子供を育てることは、顕示者の子供を育てることと同等であるという訳です。

多くの伝統社会では、家の仕事が忙しいので子供を学校にやれないということがあります。しかし、これはバハイでは許されません。家事を手伝うことがいかに重要であっても、教育を受けることが優先されます。つまり、教育は神の法であるからです。同様に、伝統社会では女性の教育をおろそかにする場合があります。このことについて、アブドル・バハはこう説明しています。「男女の権利は同等であるが、教育においてもし順位をつけなければならないとしたら、女子を先に教育しなければならない。その理由は、女子は将来母となるものであり、母親は次の世代の最初の教育者であるからである。」

バハオラによると、教育はただ読み書きを学ぶだけではありません。子供たちが人類に奉仕し得るよう教育しなければなりません。自分の国のみを愛し、他国を疑い、蔑視するような教育を子供たちに与えてはならないのです。ドイツ人であったり、アラビア人であったり、日本人であったりする前に、世界の市民であることの意識を育むことが求められるのではないでしょうか。人類の和合へと向けて歩みだした今日の世界では、自分の民族、宗教、階級が世界で一番すぐれてい

ると信じさせるような教育は不要なのです。教育の目的は「地球は一つの国であり、人類はその市民である」という意識を育て、全世界をより良くするために愛と奉仕を捧げるように、子供たちを養育することにあらねばなりません。このような教育法が世界中で採用されれば、人類の和合は速やかに達成されるでしょう。

教育に関して、バハオラは次のように処方しています。

「神の書中に記されている報いと罰によって子供たちに禁制を侵させず、法の衣で装わせるよう、学校は先ず宗教の諸原則をもって訓育を行なわなければならない。しかし、これも子供たちを無知な狂信や頑迷に陥らせないような方法で行なわなければならない。」

つまり、顕示者によって伝えられた精神的価値観こそがあらゆる教育の基礎でなくてはなりません。精神的な啓発によってのみ、人は一層幸福な生涯を送ることができるのです。それは、隣人に対して何らの偏見も持たず、将来に対して希望と確信に満ちた生活を送ることを学ぶからであります。

教育というものは私たちを迷信や偏見、そして物質偏重のわなから解放し、自由を与えるものでなくてはなりません。このことについてアブドル・バハは次のように書いています。

「バハオラの教えの中に人間の自由ということがあります。即ち、理想なる神の威力によって人は自然界から解放されなければなりません。人は自然のとりこである限り、猛獣に等しいのです。つまり、生存競争は逃れることのできない自然界の状況なのです。生存競争こそがすべての災難の源となり、最大の苦悩ともなるからです。」

バハイは決して、真の知識を学ぶ機会を子供から取り上げてはなりません。バハオラの戒めに従って子供の教育を真剣に考えていかなければなりません。

「知識は人間の生存の翼であり、高所に登るはしごである。知識を得ることはすべての者の義務である。ただし、その知識とは世の人々に利益を与えるような学問をいうのであって、単に言葉に始まり言葉に終るようなものをいうのではない。科学や芸術を究めた者は、世の人々の間にあって大きな特権を得よう。実に、知識こそが人間の真の宝である。知識は栄誉、繁栄、歓喜、喜悦、幸福、喜びを生み出すものである。」

科学と宗教の調和

人と動物の違いはどこにあるのでしょうか。神は人間のみに思考力を与えました。人はその思考力を使って、時代と共に社会を進歩させて行くことができました。私たちは、数百年前の先祖とは非常に違った生活をしています。新しい発明や発見のおかげで、人々はより快適に暮らすことができるようになり、病気や無知と戦うことも可能になりました。しかし、物質的な進歩は、私たちが同様に精神的にも進歩しなければ何の役にも立ちません。宗教のない科学は多くの危険をもたらし、科学のない宗教もまた災いの原因となり得ます。人類が真に進歩するためには科学と宗教の両者が必要なのです。科学と宗教とは手に手をとって行かなければなりません。

科学は私たちに道具を提供し、宗教は私たちにその使い方を教えます。斧や鎌は、それを正く使えば、非常に有用なものです。しかし殺人者が斧や鎌を握れば、その同じ有用な道具が危ない武器となります。今日、世の中に起こっている多くの争いは、科学が人々のために道具を提供しているのに、人々はそれを武器として用いているからです。その理由は、人々がそれらの道具の最も良い利用法を教える宗教を持っていないからです。他方、もし私たちが科学を捨て理性を用いることを止めるならば、宗教は無知と迷信以外の何物でもなくなり、世の人々に有害なものとなるでしょう。昔は、人々は宗教と科学は協調できないものと考えていましたが、バハオラは真の宗教は真の科学と同調するものであることを教えています。人間の精神と理性は、同じ真理を受け入れることができると教えています。

科学と宗教についてアブドル・バハは次のように述べています。

「神は宗教と科学とを我々の理解の尺度とされたのです。このようなすばらしい力を無視しないように注意せよ。すべてのものをこの天秤にかけなさい。信仰を科学と調和させなさい。真理は一つであり、矛盾はあり得ないのです。宗教が迷信や因襲や無知な独断をしりぞけて、科学と一致を示す時、世の中に偉大な統合力、浄化力が生れるでしょう。その力は、世の中から戦争や不和や争いごとを一掃し、人類を神の愛の力で統合させるでしょう。」

極端な貧富の差の解消

バハオラによれば、世界で最も貴重なのは正義です。

「おお精霊の子よ。我が見るすべてのもののうちで、最も愛するものは正義である。もし、汝が我を欲するならば、正義から眼をそらすな。」

また、アブドル・バハは次のように書いています。

「バハオラの教えの中で、最も重要な原則の一つはこれです。人は皆、生活に必要な日々の糧を得る権利があり、このことは生活手段の平準化を意味します。人々の境遇を調節して貧困をなくし、各人が自分の立場や状況に応じて、できるだけ安らかに暮らせるようにしなければなりません。世の中には富を山と積んだ人々があるかと思えば、無一物で飢えている不幸な人々もいます。いくつもの豪邸を持っている人がいる反面、寝る場所もない人もいます。ある者は高価なおいしい食物をいく品も食べているかと思えば、他の者は命をつなぐに必要なパンの切れ端さえ得られない有様です。ある者は毛皮や高価な衣類に身を包み、他の者は寒さをしのぐ衣服にもこと欠くのです。こういう状態は間違っているから改善されなければなりません。この状況を改善するための仕組が必要です。貧困をも克服すると同様に、富を制限することも重要な課題です。両極端はいずれもよろしくないのです。

貧困が飢餓の状態に到るまで放って置かれるのを見ると、どこかに虐政が行なわれているものです。こういう事態に直面するとき、人々は奮起しなければなりません。そして、非常に多数の人々が貧困の苦痛に打ちひしがれている状態を改善するのに、もはやためらってはなりません。」

極端な貧富の差のない釣り合いのとれた社会を創ることに関して、バハオラは数々の素晴らしい原則や教えを残しています。これらの原則の多くは世界各国で実行されなければなりません。しかし、経済問題の根本的な解決は、精神的原則と人道的価値に見いだされ、そしてその実行は各人の努力にかかっています。バハイは物質的にも精神的にも進歩することができるよう、努力を尽くすようすすめられています。しかし、バハイはバハオラのこういう言葉を決して忘れてはなりません。

「富の本質は私に対する愛情である。私を愛する者はすべての所有者であり、愛さない者は実に困窮者である。」

従って、バハイにとって真の富は自分の心の中にある神への愛情です。人間がこの偉大な宝を発見したとき、物質的な富などは色あせてしまいます。そして、物質的な富と違い、神の愛は誰にも奪いとられることはありません。

「おお我が侍女の子よ。貧困を思い煩う。富を信頼するな。貧困には富が次ぎ、富には貧困が続くものなれば。」（バハオラ）

ひとたび私たちの心が、この世の物質的な富から離れれば、貧困にあえぐ人々に私たちの富を分け与えることは容易なこととなります。これはバハオラが、彼の教えを受け入れる人々に期待することでもあります。アブドル・バハの書簡の一つに次のように書かれています。

「バハオラの教えの中に、自分の所有物を他人に自発的に分け与えるという項があります。自発的に分かち合うことは、平等にも優るものです。自分自身よりも他人を優先し、むしろ他人のために自分の生命や財産を捧げるべきなのです。しかし、このことは法律で強制されるものではありません。否、むしろ人は自発的に自ら選んでその所有物や生命を他人のために犠牲にすべきなのです。」

どんなに貧しい生活を強いられていても、自分以上に貧しい人を見い出すことができます。そういう人と自分の所有物を分け合うことができます。裕福な人々に対してバハオラは次のように警告しています。

「おお汝ら世の富める人々よ。汝らの中にいる貧者は、我が預りものである。汝ら我が預りものを保護せよ。そして、汝自身の安逸にのみ熱中することなかれ。」

「おお塵埃の子よ。貧者が夜半に嘆息していることを富者に語れ。不注意が彼らを破滅の道に導き、富の木を彼らから奪うことなきように。物を施し寛大であることは我が属性である。我が美徳をもって身を飾る者は幸なるかな。」

自分の富を他人と分かち合うことは奨励されていますが、バハオラは逆に、たとえ貧しくても物乞いをしてはならないと強く禁止しています。貧しい者は、神に信頼を置き、自分自身の生計を得るよう努力しなければならないとバハオラは教えています。人は誰でも仕事を通じて社会に貢献して行かなければならないのです。同時に、自分より恵まれている人を決してうらやんだりしてはならないとバハオラは次のように強調しています。

「おお地上の子よ。羨望のなごりがその心の中に少しでもまだ残っている者は、我が永遠の王国に到達することはできないし、神聖なる我が王国より発散するかぐわしい浄き香をかぐことも

きない。」

「おお我が僕よ。汝の心を悪意から浄化せよ。そして羨望を抱かず神聖な神の宮廷に入れ。」

私たちは富そのものは美徳ではないことを知らなければなりません。そして、富は危険なものになる可能性もあります。「神は人を黄金でためす。ちょうど黄金が火で試されるように」と、バハオラは書いています。バハオラはまた、次のように言われています。

「汝ら誠に次のことを知れ。富は求道者とその目標との間に立ちはだかり、愛する者と愛される者を隔てる大きな障壁である。極少数を除いて、富者は決して神の宮廷に到達し、満足とあきらめの都に入ることはできないであろう。自らの富が原因となって、永遠の王国への入場を阻まれ、不滅の領土を奪われることのない富者は幸いなり。最大名に誓って。かような富者の放つ光輝は、太陽が地上の人々を照らすように天国の住民を照らすであろう。」

従って、私たちの人生の目的は、富を積み上げてこの世での短い生涯を安楽に過すことではありません。物質的な富は私たちが精神的な富を得、己を知りこの世での人生の目的を知るようになって初めて、私たちの役に立つものです。バハオラは次のように書いています。

「人は己を知り、高きに導くものと、下道に導くものと、恥に導くものと、栄光に導くものと、富裕に導くものと、貧困に導くものとを知らなければならない。人は自らの存在を認識し、円熟の域に達した後において、初めて富を必要とする。この富が技術や職業によって得られたものであれば、聡明なる人々はそれを肯定し賞賛するであろう。特に世を鍛え、各国民の精神を美化しようと立ち上がった僕らの場合はなおさらそうである。」

私たちはこの世の富を持っていようがいまいが、もし神の愛を心の中に採り入れるならば、全員精神的な富者となることができることを心に明記しましょう。このことは神がバハオラを通して、私たち全員に語られていることです。

「われ、汝を豊かに創れるに、何故汝自ら貧しくするや。気高くわれ汝を創れるに、何故汝自ら卑しくするや。知識の精華もて、われ汝を現わしたるに、汝何故にわれより他の者に教化を求めるや。愛の粘土もて、われ汝を創りしに、汝何故に他のものに没頭するや。汝の眼を汝自らに向けよ。さらば汝、汝のうちに威光に輝やき力強く且つ自存しつつ在るわれを見い出さん。」

第五章、顕示者から私たちへの提言

幸福

バハオラの大きな恩恵の一つは、バハオラを知ることによって私たちの心に芽生える喜びと幸福です。神の愛が心に宿る時、私たちは幸福となれるのです。この世の短い生活の意義と目的を知って幸福となれるのです。敬愛するものを見い出し、彼の創造的言葉の影響によって世界の人々と平和に暮らしているから、私たちは嬉しいのです。バハオラは次のように呼びかけています。

「おお塵の上に住む友らよ。天の住居にいそぎ、福音を汝自身に伝えよ。『最愛なる者は到来した。そして、神の啓示の栄光を自らの冠とし、古来の楽園を人々に開放した。』すべての目を喜ばしめ、すべての耳を楽しませよ。今や彼の美を見つめる時であるから。今や彼の声に耳傾ける時であるから。あこがれに胸はずませるすべての愛する者に伝えよ、『見よ。汝の最も愛する者が人々の間に現われた』と。また、愛の王者の使者に音信をかく告げよ、『見よ。あがめられる者が豊かな栄光に身を飾って現われた』と。おお彼の美を愛する者よ。汝が彼から遠ざかりし苦悩を転じて永遠の再会の喜びに振り向けよ。」

敬愛する者を認め、顕示者の声に耳傾ける喜びは、すべてのバハイの心に満ちあふれています。この大いなる恵みは、敬愛する者のためには貴い命を喜んで投げ出した何千というバハイの殉教者たちによって感じとられました。真の喜びが心に宿るなら、この地上の何ものも私たちを失望させ不幸にさせることはできません。貧困も病気も苦難も神とその創造物に対する愛が私たちの心にある限り、忘れ去ることができます。

アブドル・バハは獄中にあって非常な逆境にさらされていた時でさえ、この絶え間ない喜びを失ったことはなかったと語っています。

「私は獄中にあっても幸福でした。私の投獄は私の犯した罪のためではなく、神の道における投獄だったのです。従って私は喜びの中にありました。私は神の大業のための囚人であって、私の生涯が空しく浪費されず、神への奉仕のために費やされたことを私は喜びとしました。神に栄光あれ。誰の目にも私は囚人として映ることはありませんでした。彼らは喜びに満ち、深く感謝し、

健康にも恵まれ、牢獄に全くとらわれていない私を見たのです。」

私たちが神や私たちの隣人に対して抱く愛によって生じる幸福は永遠のものです。

人間の心は神の座であるとバハオラは教えています。敬愛する者を受け入れる喜びを心で知った時、地上のどんな幸福もこれと比べものにはなりません。世界中のどんな富もこの幸福にまさることはできません。世俗の楽しみをもたらす喜びは真の幸福ではありません。それは長続きがしません。バハオラはそれによって左右されるなと諭しています。

「おお人の子よ。汝繁栄の中にあるとも喜ぶな。汝またおちぶれるとも悲しむな。二つながら過ぎ去り、消え去るものなれば。」

このことをアブドル・バハは次のように説明しています。

「人は喉がかわけば水を飲み、お腹がすけば食物を食べます。しかし、喉がかわいていない時には、水は何ら楽しみを与えません。空腹が既に満たされていれば、食物はおいしくありません。心の喜びはこんなものではありません。精神的な快感は常に喜びを伴います。神の愛は限りない幸福をもたらします。それ事態が喜びの真髄であり、単なる気晴しでないからです。神は我々のなかに気高い精霊を作りたまいました。神は人間に、自然にまさる知力を備えた霊魂を与えたのです。この霊魂の能力によって我々は至上の喜びを知り、輝ける世を見ることができるのです。この能力は人間を他のすべての創造物から区別するものです。なのになぜ、人はこの能力を物質的なもののみに費やすのでしょうか。この能力は、神の恩恵を取得し、神の恩恵を現わすために使われなければならないのです。この地上に神の王国を建設し、眼に見える世界、眼に見えぬ世界を通じて幸福を築くために使われなければならないのです。」

不滅の魂

私たちの寿命は短いものです。若い時には、２０年とか３０年は長い時間のように見えるかも知れませんが、それらの年月が過ぎ去った後からふりかえって見ると、どうしてこんなに早く過ぎ去ったのだろうと驚くほどです。前方にある歳月もまたはかない瞬間のように過ぎ去り、死が必ず訪れます。死というものは、私たちにとってすべての終りなのでしょうか。いや、そうではありません。死が終りでないことをバハオラは教えています。それは「初め」にすぎないのです。バハオラは次

のように言われています。

「おお至高なるものの子よ！われ死を汝への歓びの使者とした。汝いかなれば死を悲しむや。われ汝を照らすために光を造った。何故に汝その光から自身をおおうや。」

死というものは神に向う私たちの精神的旅路の出発点なのです。それは新しい生命の始まりなのです。私たちの魂が肉体を離れると、それは神の王国において生きながらえ、発展して行くのです。しかし、それは決して物質的な形では、再び地上に戻って来ません。

いつも籠の中で暮らしている一羽の鶯は、籠の外の世界を知りません。籠の格子を通して、花園をちらっと見る事はあるでしょう。しかし、この閉じ込められた可愛そうな鳥は、自由というものがなにものかも知らず緑の森や開けた野原を飛び回る喜びすら知らないのです。もし、籠の扉を開いてその鳥を放してやろうとすると、その鳥は籠の隅にかくれて出て来ようとしません。そこで、手を入れて鳥を出そうとすると驚いて手から逃れようとします。しかし、一旦鳥が外へ出ると、空高く舞い上がり緑の木々の間で歌います。その鳥は花咲く牧場や、かおり漂よう森の中を住処として、黄金の籠を差し出しても二度と籠にはもどっては来ないでしょう。

同様に、魂がこの肉体という籠から放たれると、神の王国のことも、この世を去った後に待ち受けている喜びをも知らない魂は、死が非常につらい悲しいことだと思います。その訳は、魂が籠のことしか知らず、神の愛や永遠の恵みを受けられる天国のことを知らないからです。神の顕示者を認めた人々は、霊魂の不滅と永遠の生命を確信します。ある人がバハオラに死後の生命についてたずねた時、バハオラの答はこうでした。

「さて、人間の魂とその死後の生存に関する質問について。魂は肉体から分離後、年代と世紀のめぐりも、この世の変遷と偶然も変え得ない状態で神の面前に達するまで進歩しつづけるという事実を知れ。魂は、神の王国、神の主権、神の統治権と威力がつづく限りつづくのである。魂は神の諸々のしるしと神の諸々の属性を顕わし、神の慈悲と恩寵を顕わす。これほど高遠な地位の崇高さと栄光を適切に述べようとする時、わがペンの動きはとどまる。」

死というものは私たち一人一人にとって、精神的な生まれかわりであります。ですから、死がいつ私たちのドアをノックしても、「喜びの使者」として迎え入れる準備をしておかなければなりません。

天国と地獄

もし、植物を適当な時期に畑に植え、規則正しく水をやり害虫を防ぐなら、豊かな収穫が得られるでしょう。しかし、もし種を適当な時期に蒔かず畑に水をやる事を怠るならば、良い収穫を望むことはできません。採り入れの時期が来ると怠慢の報いを受けることになります。そして、その損失の原因を作ったのは、本人以外の何者でもないのです。

報奨と罰は世界の秩序を保つ上で必要です。報奨と罰は私たち自身の行為から来る自然の結果なのです。過去におけるすべての顕示者は、この世で私たちの行なうことはこの世での生涯に影響を及ぼすばかりでなく、死後にまでその影響が続くものであることを、私たちに悟らせようとしました。もし、私たちの行ないが良ければ良い結果を生じ、永遠の幸福の源となるでしょう。もし、行ないが悪ければ、悪い結果を生じ、私たちに永遠の苦悩をもたらすでしょう。このことは悪事を行なった人々に神が報復しようと望んでいるのではなく、悪い行為から良い結果が得られないことによるのです。ちょうど花園に雑草を植れば、美しい花が得られないようなものです。このことは報奨と罰の意味になります。しかし、すべての宗教において説かれているこの真理は、多くの場合誤解されてきています。

神の顕示者たちは報奨と罰の存在を象徴的に、また、寓話的に説明してきました。顕示者は完全な教育者です。そして、完全な教育者は必ず生徒が理解できるような方法で教えければなりません。でなければ、教育の目的は達成されません。この世での生涯が終った後も、自分のしてきた行為に対して責任をとらなければならないことを人々に理解させるために、顕示者たちは善人に対しては喜びや楽みに満ちた死後の生を描き、悪人に対しては苦悩や悲惨について語って来ました。死後の生について人々に理解させる唯一の方法として、顕示者たちは歓喜と苦難について説いたのです。

「知識とは何か」とたずねる小さな子供に対して、親は「今までに味わったあらゆるものよりももっとおいしいものだ」と言って聞かせるかも知れません。親は勿論こう言ったからとて、知識は味わうことのできる一種の食物だというつもりではありません。子供が大きくなった時に、親が与えたこの言葉が何を意味するかが分かるようになるでしょう。この世の大部分の人々は、神の顕示者たちが死後の生命について用いた象徴や寓話を、全く文字通りに解釈しています。そして、顕示者たちは精神的な諸経験を説明しているのだということが分かっていません。ですから、人々

は空間としての天国と地獄を想像してきました。ある人は、地獄は恐ろしい所で火ぜめや疫病があり、恐ろしい鬼がいて悪人たちを永久に苦しめる所だと信じています。また、天国はおいしい果実が実り、世俗の快楽に満ちた楽園だと言っています。他の人は、私たちの霊魂は死後この世に再び帰って来ると信じています。全宇宙は私たちのこの小さな惑星以外には存在しないと考えて、死後はこの世界に再びもどって来るものと信じています。私たちは違った形をしてこの世に生まれ変って来て、この世でなした罪業によっては動物となって生まれて来ることさえあると言っています。

過去の顕示者たちは、死後私たちが経験することを象徴的な言葉で述べなければならなかったのです。しかしバハオラは、現代の人々は天国と地獄の真の意味を理解しようとしなければならないと言いました。そこで、私たちが記憶に止めて置かなければならない二つの重要な事柄があります。

(1) 人間の魂は不滅であり、肉体が亡びた後も生き続けるものであること。

(2) この世における行為は、魂が肉体から離れた後々までも影響を及ぼすものであること。

肉体から離れた後に魂の入る世界は、私たちが見慣れているこの地上での生活とは全く違ったものです。アブドル・バハは、子供が生まれる前の母親の胎内の世界と、我々がいま生きている世界が違うように、死後の世界は、我々の知るいまの世界とは全く異なると説明しています。子供が胎内にいる間は、必要でなくともこの世に出てから生活を送るために必要な眼や耳や手足等を胎内にいる間に発育させておくのと同様に、私たちもまたこの世を去った後に、私たちの魂が生きていく次の世界での幸福な生活のためには、この世にいる間に準備を整えて置かなければなりません。次の世界に行っては私たちはもはや肉体的な眼や耳を必要としません。現世で、神の使者から、私たちに送られた神の教えに従うことによって得られる精神的な特質、この特質が次の世では必要となるでしょう。

しかし、胎内にいる胎児とこの世に住んでいる人間の状態の間には、大きな相違があります。胎児には自らを発育させる責任はありません。その訳は、胎児には選択の能力もなく、また、自立することなど到底できないからです。しかしこの世においては、私たちは正邪、善悪のいずれかを選ぶ能力が与えられています。従って、私たちには自らの精神を高める責任がある訳です。もし、精神的に強く健康的に育つことができなければ、次の世界でみじめな生活を送ることになるでしょう。この不幸な状態を地獄というのです。反対に私たちが神の掟を理解し、これに服従しよ

うと努力することは、次の世界において幸福に暮らせるよう準備していることになるのです。そして、この世を去った後に、天国とか極楽とかいわれている状態を経験することができるようになるでしょう。バハオラは天国とは神への接近であり、地獄とは神の恩寵を奪われた状態であると説明しています。そこで、バハオラは私たち一人一人に、次の世で待たれている永遠の祝福を受ける資格を作るよう努力せよと呼びかけているのです。

「おお恩恵の子よ。無のくずよりわが命令の粘土もて、われ汝を出現させた。そして汝を訓練するために、存在するあらゆる原子と、あらゆる創造物の本質を定めた。かくて汝が、母の胎内より生まれ出る前に、われ汝のために、輝く乳を出す二つの泉と、汝を見守るために眼を、汝を愛するために心を前もって定めておいた。わが慈悲心から、わが慈愛の木蔭で、われ汝を育て、わが恵みと好意の精髄もて汝を保護した。すべてこれらのことは、汝をして、わが永遠の国土に達せしめ、わが見えざる贈与を受ける資格をもたらしめるためである。」

奇跡

神の顕示者には偉大な力が与えられています。彼らは他の人々が成しえないことをすることができます。顕示者の行う最大の奇跡は彼らの説く教えであり、彼らの生き様であり、彼らがこの世を去った後幾世紀もの間、人々の心に与えた彼らの言葉の影響であります。これらの奇跡はすべての神の顕示者に共通するものです。

神の顕示者は、人々に影響を及ぼすような世俗的な手段や力は持っていません。そしてどの時代においても、社会は顕示者を異端視し、権力者や学者は彼らに反対しました。顕示者に最初に信仰を捧げるのは、社会的に何の地位もなく、財力も学識もない人々でした。神の教えはこのような無力な人々によって広められ、やがて世界を征服し、新しい文化を築いたのです。顕示者がこの世に現われるごとにこの状況はくり返され、各顕示者の到来と共に、新しい文化が世界に建設されました。古代のヒンズー文化あるいはユダヤ教徒やキリスト教徒やイスラム教徒が過去において展開した文化について考えるたびに、私たちはこれらの偉大な教祖たちは、その時代時代にあって、全世界の力に単独で立ち向かい、ついに勝利を得た神の顕示者であったことを思い起こさなければなりません。神の顕示者の真実を証明し得るこれ以上の奇蹟は存在するでしょうか。

しかし、多くの場合、人々が顕示者に期待する証拠は普通ではあり得ないような「超自然的」な奇蹟です。そして、どの宗教においても教祖の真実の証拠とされるそのような逸話が数多く語り継がれています。例えば、ヒンズー教では幼児のクリシュナの足がジャムナ川の水にふれて、水がたちまちに引いて無事に対岸に渡れたという話があります。キリスト教では、キリストが数個のパンで何百という人々の飢えを満たしたとあります。同様の奇跡が、ゾロアスターにも釈迦にも、モーゼにも、モハメッドにも、それぞれの信徒たちによって語り継がれています。

このような奇蹟についてバハイは次のように考えます。すべての神の顕示者は奇蹟を起こす力をもっています。しかし、奇蹟に関する逸話は、信仰をもたない人を納得させることはできないし、また、顕示者の真実の証明にもなり得ないのです。例えば、キリスト教徒がユダヤ教徒や仏教徒に向かって、キリトは死者をよみがえらせたと話しても、キリストに信仰を持っていない人々には、何らの影響も与えないでしょう。キリストが神の顕示者であったということすら全く信じないでしょう。逆に、それを作り話として払いのけるかも知れません。キリスト時代に生きていた人々でさえも、キリストが奇跡を行なったから彼を信じたのではありませんでした。しかし、もしキリストの美しい教えが精神的に死んでいる幾百万の人々に、如何に永遠の生命を注ぎ込んだかということを指摘するならば、即ち幾世代の人類の心に感動を与えたキリスト自身の聖なる生涯に言及するならば、誰もこれを否定することはできません。キリストの生涯と、彼の教えとは二、三人の人間を蘇生させて、数年間生きながらえさせ、そして再び死んだということよりも遙に大きな奇跡なのです。

神の顕示者たちは聖なる医者なのです。顕示者に期待するものは、人々の精神的な病気を癒す処方箋です。顕示者の証明として超自然的な奇蹟を望むのは愚かなことです。患者のために、療法を指示するためにやって来た医者に、屋根から飛び降りさせて、彼の技量を試そうとするものはいないでしょう。医者が口で言っているほどの技量があるかないかを試す唯一の方法は、患者を治療できるかどうか見極めることにあります。バハオラは多くの奇蹟を行ったにもかかわらず、その事実を彼の偉大さの証拠として人々に話すことを禁じました。

バグダット滞在中のバハオラの話に次のものがあります。議論や理屈でバハオラの真理を否定できないことを悟ったイスラム教の僧侶たちが、ある日、バハオラに何か一つ奇跡をやって見せるように要求しました。もし、バハオラが拒否すれば、そのことがバハオラを非難する絶好の口実が得られると思ったからです。僧侶たちは代表を一人選んでバハオラにこの要求を伝えました。バハオラの返答はこうでした。「神の大業はおもちゃでもなければ、人々の気まぐれや好奇を満た

すための見せ物でもない。しかし、奇跡をなし遂げたら私を「約束された者」と認めるのであれば、奇蹟を行ってもよい。どれほど難しい奇蹟でもよいので、相談の上で何か一つ奇蹟を指定しなさい。」

僧侶たちは結局その条件を受け入れませんでした。バハオラが奇跡を行なったら、その主張を否定する口実がなくなることを恐れたからです。そして、彼らはバハオラに奇跡を要求せずに退散してしまいました。このことは、奇跡がもしなされたとしても、神の顕示者の真理を頭から否定しようとかかっている人々には、何の証明にもならないことを明かに物語っています。判断が正しく、進んで理解しようとしている人々にとっては、神の顕示者の教えは、それ自身が真理であり、永遠の奇跡なのです。

道徳的倫理的教義

バハオラの教えの原則の一つに、すべての宗教はその根源において同一であるということがあります。明らかに、道徳的教えはすべての宗教に共通する基礎をなすものです。

バハオラの教えの中に非常に高い水準の行動倫理の指針を見い出すことができます。そして、バハオラの教えの大部分は、人間の在り方、行動、態度に関係するものです。バハオラの啓示を構成する何千というバブ、バハオラ及びアブドル・バハによって書かれた書簡、また、ショーギ・エフェンディの書かれた書の中には、純潔な心と言動に基づくバハイ生活の規範が示されています。そのいくつかをここに紹介します。

「繁栄の中にあっては寛大であれ。逆境に際しては感謝する者であれ。隣人が汝に信頼を置くにふさわしい者であれ。明るく、親しみのある顔をもって隣人を見よ。貧しき者には宝庫であれ。富めるものには警告者であれ。困窮者の叫びに答える者であれ。汝の誓約の神聖を守る者であれ。判断に公正であれ。発言に慎重であれ。何者にも不公平であってはならない。如何なる者にも全く謙虚であれ。暗闇の中を歩む者には明りであれ。悲しみに打ちひしがれた者には喜びとなれ。渇きにあえぐ者には大洋であれ。苦悩に溺れる者には避難所であれ。圧制の犠牲者には、その支持者となり、その擁護者であれ。汝のすべての行動を、誠実さと高潔さとをもっ

て際立たせよ。異邦人には住家であれ。苦しみにある者の慰めであれ。亡命者には力みなぎる砦であれ。盲目なる者には眼となり、過てる者にはその歩みを導く光であれ。真理の面を飾る装飾であれ。忠誠の額に置かれた冠であれ。正義の殿堂の支柱であれ。人類の身体には生命の息吹であれ。正義の軍勢の旗印であれ。美徳の地平線上に輝く光体であれ。人の心の土壌を潤す露であれ。知識の大洋に浮かぶ箱船であれ。恩恵の天上に光る太陽であれ。英知の王冠の宝石であれ。汝の世代の天界にきらめく光であれ。そして、謙遜の樹に実る果実であれ。」 ご自分の息子に宛てたバハオラの言葉 （落穂集１３０番）

「人は皆、常に進歩し続ける文明を前進させるために生まれて来たのである。山野を横行する野獣の如く振舞うことは、人間にはふさわしくない。人間の尊厳にふさわしい徳は、地上のすべての人類同胞に向けられる寛容、慈悲、同情及び慈愛の心である。」バハオラの言葉 （落穂集１０９番）

「神は慈善を愛し、受け入れたもう。慈善は、あらゆる善行の中でも最高のものに類する。自分よりも、他を先に置く者は幸いなり。かような者こそはバハの民である。」 バハオラの言葉

「富める者は貧窮者に対して最善の配慮を払わなければならない。何故ならば、貧しい中にあってゆるまず忍耐する者に対し、神は大いなる栄誉を準備したもう。神が御心により与えたもう栄誉以外に、この栄誉に比較し得るものはない。忍耐強く耐え、自らの苦しみを覆い隠す貧しき人々を待ち受ける祝福は大いなるものなり。同様に、自らの富を貧窮者に分け与え、彼らを自分自身に優先させる富裕者は幸いなり。」 バハオラの言葉 （落穂集１００番）

「病人を見舞うことは最も重要な義務の一つです。病人に対し、友らは実に最高の親切心をもって、命を捧げて奉仕すべきです。」 アブドル・バハ

「誠に、我々は礼儀を選び、それを神に近い者のしるしとした。実に、礼儀は老いも若きも万人にふさわしい衣服である。礼儀をもってわが身を飾る者は幸いなり。そして、この偉大な賜物を奪われた者は哀れなり。おお神の人々よ。我は汝に礼儀をすすめる。礼儀は第一位にあって、

すべての徳の王者である。礼儀の光で照らされ、高潔さのマントを着る者は幸いなり。礼儀をもって行動する者は、大いなる地位を授かっているのである。」 バハオラの言葉

「隣人を差し置いて、自らを優先させることのないよう注意せよ。汝の行いを通じて正義の証が我が忠実なる僕らに示されるよう、自分に対しても、他人に対しても公平であれ。人間の持ち得る徳の中にあって、最も基本的なものは公正である。あらゆる事柄の評価は公正によらなければならない。言挙げよ。おお、理解力を持つ心を有する人々よ、汝らの判断に公正であれ。判断に公正を欠く者は、実に、人間の地位を特徴づける特性を欠く者である。」 バハオラの言葉

「我が御心の楽園に汝らが常に融和と一致をもって交わるのを見、汝らの行動より親愛と和合、慈愛と友情の芳香を感知することを我は愛す。我は常に汝らと共にある。汝らの友好の芳香を嗅ぐことにより我が心は必ず喜びに満たされよう。また、それ以外に我を満足させ得るものはなにもない。」 バハオラの言葉 (落穂集146番)

「汝らの中にいる貧者は、我が信託である。汝ら、我が信託を擁護せよ。そして汝自身の安楽のみに熱中するな。もし、汝ら、貧しき者に出会うとも、軽蔑してはならない。汝らは、それぞれ哀れな胚種から創られている。」 バハオラ

「思いやりのある舌は、心を引く磁石である。それは魂の糧であり、言葉に意味を与えるものである。それは知恵と理解の光の源である。」 バハオラ

「人は、他人の魂の中に映った神の美を見、自分との共通点を発見し、互いに愛をもって引かれ合うのです。この愛は、人類を一つの海の波となし、一つの天に輝く星、一つの木に熟する実となすでしょう。この愛は、真の調和の実現と、誠の和合の基礎をもたらすでしょう。愛は果てしなく無限であり、無窮なのです。それに対し、物質には制限があり、有限なのです。限られた物質的な絆は普遍的愛を適切に表現するには不十分であることは明白です。人類に対する偉大なる無私の愛は、このような不完全な、半ば利己的なものに制限されるものではありません。これは唯一の完全無欠の愛であり、すべての人間が持ち得るものですが、聖霊の力によって

のみ築き上げられるのです。」

アブドル・バハ

「汝の隣人の資産を不誠実な心で扱うな。汝らは、地上において信頼に値するものとなれ。神の恵みによって、汝に与えられたものを貧者に与えることを控えるな。誠に、神は、汝の所有する倍のものを汝に授けるであろう。」

バハオラ

「良き言葉と正直は、地位と階級の高きにあって、知識の天の水平線から昇った太陽の如くである。」

バハオラ

第六章、バハイの運営機構

運営機構

過去の社会には、宗教のかかわることを専門の僧侶に任せざるを得なかった時代がありました。それは、一般の人々が無学であったり、宗教について深く学ぶ機会がなかった時代でした。そのような社会では僧侶が大きな役割を果たしました。彼らは学問に没頭し、それを職業とし、宗教の教えや掟を守るよう人々を指導しました。過去の宗教にはほとんど例外なくこのような僧侶がいました。

しかし、バハイには僧侶はいません。過去とは違い、現代においては僧侶はもはや不要であるとバハオラは説いています。私たちは他人の目ならぬ自分自身の目で見、自分自身の耳で聞き、自分自身の理解力で判断し、各人は自分自身で真理を探究するようバハオラは求めています。

真理を探究するにあたって、バハイは自らの努力によって自分の宗教に関して十分な知識を得ようとします。この点、僧侶から指導を受けようとする宗教とは根本的に違います。バハオラの教えにおいては、各人が自分で祈らなければなりません。僧侶に報酬を払い、自分に代わって祈りを上げてもらう習慣が多くの宗教にありますが、バハイではそういうことはしません。バハイは、自分自身の祈りを通じて神の恵みや許しを直接お願いします。そこでは儀式や式典は不要です。各バハイは、神の顕示者を通して神と接することができます。私たちとバハオラとの間には、仲介者は不必要です。

各宗教には多くの良い僧侶がいるものの、過去の長い時代を通じて僧侶たちは多くの障害を生みだしたのも事実です。次のようなことが頻繁に起こりました。同じ町に住む二人の僧侶が、宗教に関しいつも論争していました。そして、二人の意見の相違が町の人々の間に不和と争いをもたらしました。ある人はこちらの僧侶が正しいと信じ、他の人はあちらの方が正しいと思うようになっていました。やがてこの不和は教会の分裂にまで発展してしまいました。このようにして次第に多くの分派が生じ、聖典の違った解釈が、お互いの争いや流血の原因にさえなりました。

バハイではこのようなことが起こらないよう、様々な工夫がなされています。まずはバハイには僧侶はいませんし、ある個人が自分の意見を盾に賛同者や支持者を結成することもありません。

バハイでは、すべての人は平等です。第二に、バハオラの教えや聖典を解釈する権限は誰も与えられていません。この権限は、バハオラによってアブドル・バハのみに与えられ、アブドル・バハの後は、解釈の権限はショーギ・エフェンディのみに与えられました。

過去の歴史を見ると、神の顕示者がこの世に現われる度に、顕示者に最も激しく敵対し反対したのは既存の宗教の僧侶たちでした。それはなぜでしょう。僧侶たちは新しい顕示者を認めることによって彼らの地位、財産及び物質的な安楽を犠牲にしなければならないことを知っていたからです。従って、新しい宗教が彼らの間に現われるや否や、それを根絶しようと最善を尽くしました。仏教は、ヒンズー教の僧侶たちによって、発祥の地であるインドから追い出されました。キリストは、ユダヤ教の僧侶たちの反対に会い、十字架にかけられました。バブの教えの広がりに恐れをなしたイスラム教の僧侶たちはバブを処刑しました。バハオラは、イスラム教の神学者たちが、政府をそそのかして当時の人々に新しい神の大業に反対して立ち上がるよう扇動しました。その結果、バハオラは生涯のほとんどを追放と苦しみの中で過ごすことを強いられました。

むろん例外もありました。バブやバハオラの時代に生きた多くの博学な僧侶は、この二人の顕示者を受け入れ、その教えを広めるために自らの命をも捧げました。しかし、バブやバハオラを認めるということは、それまでの自分の僧侶としての職業を去ることを意味しました。バハイになることによって、彼らは神の大業の一介の僕となり、生計を得るために他の職業についたのです。彼らは宗教と金銭、神の信教と俗世の職業を混同しませんでした。

僧侶を置かない代わりに、バハイ信教には共同体の運営を行うための機構が築き上げられています。そして、共同体の全員が平等の立場で共同体の運営に参加することができるのです。バハイの運営機構は、バハオラの他のすべての教えと同様、その源は神にあります。

バハイの運営機構

農地を耕すために川から水を引いてくる場合、どうすればよいでしょうか。まず、農地全域に灌漑するに十分な水を引くために、川岸に大きな水路を掘ります。次に、農地の各部分に水を引くために、中位の水路を掘ります。そして最後に、末端の畑に水を引くためにたくさんの細い溝を張り巡らせます。一連の溝が完成すれば、川の水を引いてすべての農地を耕し、生命を育むことが

可能になります。

ショーギ・エフェンディによれば、バハイの運営機構は上述の一連の水路に例えられます。大業の聖霊は、運営機構という水路を介して世界中に散在するバハイ共同体に注がれるということです。

過去の時代においては、共同体に生命の水を運ぶ役割は僧侶たちに委ねられていました。しかし、彼らの力には限界がありました。例えて言えば、僧侶たちは自分の手に持てるだけの水しか運べなかったのです。そして、この重労働は僧侶たちが必要な体力と熱意を持っていた間だけしか続きませんでした。しかし、バハオラはこの仕事を個人に任せませんでした。生命の水を自然と人類の畑に導入するための素晴らしい水路網を企画したのでした。その全体計画はバハオラの世界秩序と呼ばれ、バハイの運営機構はその重要な一部を構成するものです。

バハオラはこの世界秩序の基礎を築き、その大綱を示しました。後にアブドル・バハがこの聖なる計画を説明し、その詳細を私たちに示し、その建設に着手しました。そして、バハイの運営機構を実際に着々と築き上げ、散存していた共同体を一つにまとめ、統一のとれた有機体としたのは、ショーギ・エフェンディの終生の努力の賜物でした。バハイの機構は、信者たちの手によって後日作られたものでないため、他の宗教の形式とは違うものとなっています。この機構は顕示者バハオラを通して私たちに与えられた神の計画であり、全人類の間に秩序と平和とを打ち立てる目的のもとに作られたものです。

バハイの機構は多くの部分から成っており、すべてが互いに関連しあっています。その主な柱は次のような三段構成からなっています。まず、各町や村のバハイが集まって自分たちの町や村のバハイの世話をする機構として地方精神行政会を選挙によって選びます。次に、各国ごとに、その国のバハイの中から全国精神行政会をやはり選挙によって選びます。最後に、各国の全国精神行政会のメンバーが選挙人となってバハイの最高機関である万国正義院を選びます。地方精神行政会を、運河の水を一つ一つの畑に運ぶ小川に例えると、全国精神行政会は川そのものから水を流し込む大きな運河と小川とを結びつける小運河に当たりましょう。そして、万国正義院は主要な運河ということになります。神の導きが世界中の各部分に流れ込むのは、万国正義院を通じてであります。

これら各部分の任務と責任に入る前に、バハイの機構は、バハオラの他の教えから決して切り離すことのできないものであることをはっきりさせて置かなければなりません。バハオラを神の顕

示者として受け入れる者は、同時にバハオラによって定められた機構と運営体系を受け入れ、それを通じて活動しなければなりません。神の教えが顕示者によってもたらされたのは、人間一人一人の幸福のためだけではなく、社会の和合の達成と福祉の増進のためでもあるのです。上の図は、バハイの機構を分かり易く図解したものです。

この図解から分かるように、社会の中の個人は、畑の中の穀粒みたいなものです。穀粒一つ一つは取るに足らない存在にすぎないかもしれません。しかし、一つ一つの穀粒は、畑全体のために引かれた水から生命を受け、活気づくのです。個人の幸福は、個人の結合体である社会の福祉の中にあるのですから、人類の未来の期待がかかっているバハオラの機構の強化に努力しなければならないのです。

精神行政会の選挙

「アグダスの書」においてバハオラは、成人のバハイが九名以上いる所では、精神行政会が選挙によって結成されなければならないと定めました。この精神行政会は一団となって、共同体のために働き、奉仕するのです。では、地方精神行政会はどのようにして成立するのでしょうか。

例えばバハイが六十人いるAという町があり、そこで地方精神行政会を選挙しようとしていると、仮定しましょう。まず、知って置かなければならない点がいくつかあります。

(1) 成立の時期。地方精神行政会の成立の時期は決まっていて、一年中いつでも選挙を行える訳ではありません。その成立の時期とは、バハオラの宣言の記念日に当たる4月21日です。1863年のこの日、バハオラはバグダッドのレズワンの園で、自らが「その出現が約束された者」であることを宣言されました。4月21日はレズワンの期間の第一日目であり、原則として、精神行政会を選出できるのはこの日だけです。もし、精神行政会が4月20日の日没から4月21日の日没までの24時間内に選出されなかったら、翌年の4月21日に、再び選挙日が巡って来るまで待たなければなりません。

(2) 選挙権・被選挙権。21才以上のバハイのみが、精神行政会を選び、また選ばれることができるのです。例えば、もし、A町に住んでいる60名のバハイのうち、35人の男女の人が21才以上であるとしますと、この35人だけが精神行政会を選挙することが出来ます。また、精神行政会の

メンバーは、この３５人の男女の中から選出されなければなりません。
(3) 投票の形式。投票する各人は、精神行政会に選ばれるに最もふさわしいと考えられる男女の9人の名を書かなければなりません。9人以下、または9人以上書かれた投票は無効になります。
(4) 選ばれるべき人の条件。共同体の中で名声が高いとか、社会的地位があるとか、あるいは親切にしてもらったことがあるとかは選ぶときの理由にはなりません。選ばれるべき人の条件として上げられるのは、神の大業に対して忠誠であること、献身的に共同体に奉仕していること、奉仕する能力があることなどです。投票するとき、共同体内に属する人々の品性や精神的素質を考慮し、「精神行政会の任務に最も適した人を選ぶことができますようお導き下さい」と、神に向かって祈らなければなりません。
(5) 他薦・自薦の禁止。バハイの選挙ではあらゆる形の他薦・自薦が禁止されています。また、あらゆる形の「選挙運動」も禁止されています。選挙は秘密投票によって行われ、他人が誰に票を入れたかを詮索することも許されません。たとえ夫婦間であっても、親友間であっても、選ぼうとする人物に関して相談することはできません。各人は、神からのみ援助を求むべきで、他人の意見によって影響を受けることなく、投票に関しては自分自身で決めなければなりません。但し、字が書けない人が自分で述べた名前を信頼できる人に書いてもらうことだけは許されます。

以上の点を念頭に置き、A町のバハイはその年の精神行政会のメンバー選挙にとりかかります。選挙を行うために、全員が一定の場所に集合します。出席できない人は、予め投票用紙に記入し送付します。会は祈りで始まり、この重要な任務を正しく行えるよう神に嘆願します。祈りが終わると投票を行い、それが終了するとこんどは予め選んでおいた開票係りが開票の作業に入り、選挙結果を発表します。一番多い票を得た9名がその年の精神行政会のメンバーとして選出されます。

このようにしてA町のバハイは、世界各地のバハイ共同体と同時に、また同じ手続きをへて自分たちの代表となる地方精神行政会メンバーを選ぶのです。翌年のレズワンの期間の第一日が来ると、同様の方法で世界中のバハイが次の年の地方精神行政会のメンバーを選ぶのです。

地方精神行政会の任務

精神行政会の任務に関して、バハオラは次のように書いておられます。

「彼らは人々の中の慈悲深き御方の信託人となり、地上に住むすべての者のために、神より任命された擁護者として自らを見なければならない。共に協議し、神の僕らの利益を神のために、ちょうど自分たちの利益を考慮するように考慮すること、そして適切な選択を行なうことが彼らの義務である。汝らの主なる神はこのように命令された。神の書簡に明確に啓示されているものをなおざりにすることのないよう、汝ら注意せよ。神を畏れよ、おお感知する者らよ。」　（「アグダスの書」より）

つまり、各市町村の地方精神行政会は、その地域のバハイにとって有益なものを追い求めなければなりません。そして、各地方精神行政会の最も重要な仕事は、バハイ共同体が神の大業を広め・強化するのを援助することです。バハオラの教えはすべての人類に対する祝福の源です。そして、精神行政会は、この大きな神の恩恵が世界各地の人々に到達し得るような水路とならなければなりません。従って、精神行政会が成立すると、その主要な仕事として、いかにこの大業を人々に理解してもらうかについて協議し、積極的な活動を通じてその目標に向かわなければなりません。

精神行政会のもう一つの重要な任務は、バハイの間に愛と親睦を高めるということです。精神行政会は共同体に調和の雰囲気を創り出さなければなりません。共同体の中にあって各人が幸福になれるように面倒を見なければなりません。もし、共同体に何らかの不和が生じた場合には、それを取り除くよう努力するのが精神行政会の任務です。各精神行政会はその地域のバハイにとって、寛大な親のように活動しなければなりません。精神行政会の任務に関したショーギ・エフェンディは次のように書いています。

「彼らは困窮者、病人、障害者、孤児、寡婦などを、肌の色や階級や信条にかかわりなく助けるよう、常に最善を尽くさなければなりません。」

各精神行政会は、自らの活動を支えるための基金を置き、共同体のメンバーから献金を受けることができます。そして、自発的な献金によって成り立つ基金を利用し、精神行政会は共同体の発展のために活動します。共同体の人々が精神行政会の経済状態を豊かにしておけば、逆に精神行政会は彼らが必要とする時に援助を提供することができるのです。

バハイの子供やユースの教育もまた精神行政会の重要な責任の一つです。ショーギ・エフェン

ディの言葉を借りれば、「青年の物質的並びに精神的啓発を促し、子供の教育の方法、でき得るならバハイの教育機関を設立し、組織し、その仕事を管理し、その進歩発展のために最善を尽くさなければなりません。」

精神行政会のなおもう一つの重要な任務は、「バハイの友の定期集会、十九日毎のフィースト、聖なる日のための特別な会、並びにバハイの友の社会的、知的、精神的利益に奉仕し、これを増進させるよう計画された特別の集会を準備する」ことです。

上に述べたことは、地方精神行政会の重要な機能の内のいくつかに過ぎません。精神行政会のメンバーは、彼らに託されている重要な任務を怠ることのないよう注意し、バハオラの次のような言葉を常に念頭に置かなければなりません。「彼らは、人々の中の慈悲深き神の信託人となり、神のためにそのしもべたちの利益を追及する義務がある。」

地方精神行政会の役員

精神行政会のメンバーは年に一度の選挙によって選ばれます。成人バハイが選挙に参加し、票数の一番多い九人が精神行政会を構成することになります。メンバーが決まって最初にすることは、第一回目の会合をできるだけ早い機会に持つことです。初回の召集をするのは、選挙で最高の票数を得た人です。

集会は先ず祈りをもって始められます。大業の前進に貢献できることを神に嘆願し、彼らを選んだ共同体に充分な奉仕ができるよう神に援助をお願いするのです。それから、その年度の精神行政会の役員を選挙します。各精神行政会は議長一名、副議長一名、書記一名、会計一名を互選します。

議長の仕事は会を運営し、精神行政会が結論に到達するよう協議を導くことです。ただメンバーが集合し話し合って解散するだけなら、精神行政会の本来の目的は果たせません。議長は検討すべき問題に対して全員の意見を聞き、合意の形成に努力し、必要なら採決によって結論に到達するようにします。（より詳しくは以下の「協議」の節を参照）副議長は、議長の欠席の場合、議長に代わって精神行政会の会合を運営します。

書記の仕事は「記録」と「通信」に大きく分けることができます。書記は、精神行政会の議事録や

事務の記録を作成します。また、精神行政会が発信するあらゆる手紙や通信の担当でもあります。各地方精神行政会が、バハイ世界の他の機関と接触を保つのも、書記を通して行われます。

会計は、精神行政会の資金の事務を取り扱います。基金に献金した人々に領収書を出し、精神行政会が企画した費用は、この基金から支払いをします。

精神行政会の役員を選出するに当たっては、各人の特徴や能力を見きわめ、誰がこれらの任務に適しているかをよく考えなければなりません。精神行政会のメンバーを選ぶ時に考慮されたと同様の原則が、その役員の選挙の時にも適用されます。従って、この選挙も投票によって行われ、その間いかなる選挙運動も宣伝も許されません。役員は、その社会的地位やその他の特別な地位のために選ばれるものではありません。例えば、敬老の精神の強い文化であっても、年齢を基準に役員を選ぶべきではありません。逆に、女性の社会進出が遅れている国であっても、女性を精神行政会の役員からはずす理由にはまったくなりません。選ぶ基準はあくまでもその人の能力と献身の態度なのです。一方、精神行政会の役員は、その共同体内では何ら特別の地位を占めるものではありません。例えば、議長はその共同体の指導者でもなければ、最も尊敬される人物でもありません。精神行政会以外におけるその人の地位は、共同体の他の人々と同等なのです。

これらのことを例をあげて考えて見ましょう。ある村で井戸を掘ることにしました。村長さんは村人に尊敬されているものの、井戸の掘りかたについては良く知りません。ところが一人の青年がいて、特別な地位にはついていませんが、井戸掘りに関しては多くの経験を持っていたとします。村人たちは、この重要な仕事を二人のうちのどちらに依頼するでしょうか。仕事を任せられるのは若者の方です。そして村長は、率先して若者を指名するでしょう。井戸を掘っている間は、すべての村人たちはもちろん、村長自身も若者の指図に従うでしょう。このことはもちろん、その若者が村の一切を指揮する者になったとか、村長が共同体内で地位を失ったとかいうことを意味するものではありません。ここで重要なのは協力の精神であり、この協力の精神こそが共同体のすべての構成員を利するのです。

バハイ共同体が精神行政会を選び、精神行政会がその役員を互選することも、協力と和合を愛する精神に根差した行為なのです。ショーギ・エフェンディはこのことを次のように表現しています。「精神行政会のメンバーは、最も謙虚な気持ちをもって任務に当たり、片寄りのない広い心、

正義と義務に対する熱意、素直さ、淑やかさにより、また、バハイの友らとバハイの大業、そして全人類の福祉と利益に完全に貢献する態度によって、彼らの奉仕する共同体の人々からの信頼、支持、そして敬意ばかりでなく、尊敬と真の愛情をも受けられるよう努力しなければなりません。」

精神行政会の活動（1）

精神行政会の活動を「愛野市」のバハイ共同体を例にとって見てみましょう。共同体の人々は、4月21日のレズワンの日に集まって新しい年の精神行政会を投票で選びました。9名のメンバーが決まると、一番票数の多かった山田さんが召集者となって、第一回の会合を開く場所と日時を相談のうえ決めて皆に連絡しました。

当日、精神行政会のメンバーがそろうと山田さんの簡単な挨拶に続き2、3人が開始の祈りをします。この祈りの雰囲気の中で、精神行政会の議長の選出に移ります。投票用紙をくばると、「議長として最も適任と考える人の名前を書いて下さい」と山田さんが言います。投票が終わると、今度は開票係を2人任命して開票の作業に入り、結果を発表します。結果は、鈴木さんが五票、山田さんが三票、吉川さんが一票とりました。従って、鈴木さんが議長に選ばれたことになります。役員選挙の場合、投票で過半数をとる人がいなければ、投票を繰り返します。

さて、鈴木さんが議長に選ばれたので、残りの役員の選挙は新議長の責任の下で行われます。鈴木さんは、召集者の役目を果たした山田さんにこれまでのことに感謝の意を表し、副議長の投票に移ります。議長選挙と同じ手続きが他の役員選挙にも適用されます。選挙の結果は高橋さんが副議長、山田さんが書記、岡田さんが会計に決まりました。

そこで議長は書記に、精神行政会の第一回会合で行われたことを記録するように依頼します。時間もかなり遅くなっていたので、次回の会合の日時を決めて閉会することになりました。バハイの集会でいつもするように終会の祈りでこの会合は終わりを告げました。

協議

協議は、バハイ共同体の運営における最も基本的な原則であり、共同体のあらゆる活動に適用されます。協議こそは十九日毎のフィースト、地方精神行政会の会合、全国年次大会、全国精神行政会の会合、または各種委員会の運営を貫くバハイの揺るぎない原則なのです。すべての人が同等の立場で参加する協議を通じて最善の道が発見されるのです。ただし、協議にはいくつかのルールがあり、その中でも最も愛と和合の精神をもって他人の意見に接することです。

バハイの会合に出席する時、バハオラが私たちと共におられるということを常に意識しなければなりません。この意識は素晴らしい精神的雰囲気を創造し、協議の推進に大いに役立ちます。あらゆる協議の場でバハオラの隣席を意識するならば、私たちは大業への奉仕を最優先する僕として利己主義を抑え、建設的でない言葉を慎むでしょう。そうすることで不誠実な心が協議に侵入することを避けると共に、真実以外の何ものも語らないでしょう。バハオラは次のように忠告しています。

「おお軽率なるものらよ。心の秘密が隠されていると思うな。否、むしろそれらは確かに明朗な字もて刻まれ、神の御前に公然と現わされていることを知れ。」

バハイの協議に参加する時、各人が自分の意見を自由に述べることが肝心です。意見を述べる者は大業の利益のみを考え、他の者と自分との関係を忘れてかからなければなりません。例えば、夫婦が二人とも精神行政会のメンバーである場合、協議をしたり投票をしたりする時、同一行動をとるのは本当の協議ではありません。バハイの協議に参加する人は誰であれ、バハオラにのみに責任をもつのです。また、個人的感情が信教の利益を阻害してはならないことに常に留意しなければなりません。従って、誠意をもって協議に挑み、なおも意見が違うのであれば、それをはっきりと述べなければなりません。また、夫婦だからと言って、一方が自分の意見を他方に押し付けようとしてはなりません。同様に、相手に意見を合わせることによって相手に喜んでもらおうというのも間違っています。結局、協議の場では一人一人の真の意見が究めて貴重であり、忌憚のない意見のやりとりの中から真理が現われて来るのです。

さらに、協議の場に個人的な感情を持ち込まないよう注意しなければなりません。例えば、あなたが知人に何かお願いしても知人は時間をさいてくれなかったとしましょう。その知人が協議の場で何か良い提案を出しても、前に持った反感から、その提案に素直に賛同できないというようなこ

とがないよう注意しなければなりません。ここでもバハオラが隣席されていることを思い起こし、大業への奉仕の妨げとなるような感情を排除しなければなりません。バハイが共に集う時、「一つの手の指の如く」また、「一つの海の水滴の如く」でなければなりません。

協議の場で自分の意見に固執してはなりません。同様に、自分の意見を他の人々に押しつけようとしてもいけません。お互いに自分の方が正しくて、相手の方が間違っていると言い張るのは子供の喧嘩の常です。その喧嘩はいつまでたっても何ら得る所はありません。しかし、そこに子供たちの親が現われると、親に対する愛と尊敬の念から、張り上げた声は静まり、問題は解決に向かうのです。バハオラの面前で協議を行っているという認識をもてば、ふさわしくないあらゆる言動を慎むでしょう。

バハイはそれぞれ協議の場で自分の意見を述べることは自由です。そして最終的には過半数をもって結論に到ります。一旦決定がなされると、それが自分の意見と異なるものであっても、各人はその決定を尊重しなければなりません。金子さんは精神行政会のメンバーだとしましょう。彼はレズワンの祝祭の１２日目の集まりを、5月2日の午前中に開こうと提案します。しかし、メンバーの大部分は前日の夜に集まると言います。金子さんの提案には非常に良い理由があったかも知れませんが、精神行政会がそれと違う決定をした以上は、金子さんの出した意見に固執せず、精神行政会の決定を心から受け入れ、会合の準備に最善を尽くすでしょう。アブドル・バハは次のように書いておられます。

「この時代においては精神行政会の協議は最も重要で、欠くことのできないものです。精神行政会に服従することは大切であり、また義務でもあります。そのメンバーたちは、悪感情や不和が生じないように十分に注意しながら協議を進めなければなりません。このことは、各人が自分の意見を自由に述べ合い、議論を尽くすことによって初めて達成できるのです。自分の出した意見が反対されても、決して気を悪くしてはならないのです。問題が十分討議されて初めて正しい方向が示されるのです。真理の光を放つ火花は、種々異なった意見の衝突の中から現われるのです。討論の後に、決定が満場一致でなされれば、それは大変すばらしいことです。しかし、意見のまとまらない場合は、多数決によって決定がなされるのです。」

精神行政会のメンバーによって出された種々の意見を、おいしいシチューの中の色々の素材に例えることができます。おいしいシチューを作ろうとする時には、たくさんの材料を混ぜ合わせて、良く煮込みます。色々な材料が良く混ぜ合わされた時に、初めておいしくなります。つまり、それ

ぞれの素材の持ち味がシチューの風味を高めるのです。しかし、素材を別々に口にしてもそれほど美味しくはないかも知れません。同様に、バハイの会合に参加した各人の意見は、協議の過程を経て最終的な決定に何らかの貢献をするのです。ただし、決定そのものは誰のものでもなく、全員が共有する結果なのです。

アブドル・バハの次の言葉は、バハイの協議の方法を示すものです。

「互いに協議する人々にとって、最も重要な条件は純粋な動機、輝ける精神、神以外のすべてのものからの離脱、神の芳香に心魅せられていること、神の愛し給う人々に向かって謙虚であること、困難に直面した時の忍耐と我慢強さ、そして聖なる敷居に対する奉仕の精神です。これらの属性を彼らが取得するならば、目に見えぬ神の王国から彼らに勝利が授けられるでしょう。

第一の条件は、精神行政会のメンバーの間の完全な愛と調和です。彼らの間に疎外感があってはならないのです。彼らは神の和合を表わす存在でなければなりません。何故なら、彼らは一つの海の波であり、一つの川の水滴、一つの天の星、一つの太陽の光線、一つの果樹園の木、一つの花園の花であるからです。思考の調和と完全な和合が存在しなければ、その集いは散会し、その会合は何の役にも立たないでしょう。第二の条件として、彼らが集合する時には高きにある王国に顔向け、栄光の領土から助けを乞わなければなりません。意見を述べる時は、最高の献身、礼儀、威厳、配慮、中庸をもってしなければなりません。彼らは何事によらず真理を追及し、自己の意見に固執してはならないのです。何故なら、自分の意見に固執し、それを通そうとすれば、それは結局不和や論争の原因となり、真理が隠されたままになってしまうからです。メンバーたる者は、自分の意見を全く自由に述べなければなりません。また、他人の意見を決して軽んじてはならないのです。メンバーたる者は中庸をもって真実を述べなければなりません。意見の相違がある場合は、多数決でものごとを決め、全員がそれに服従しなければならないのです。メンバーたる者は既に決定された件に関して、その決定が正しいものでないにしても、議場の内外を問わず、それに反対したり非難したりすることは許されません。何故ならば、このような批判はいかなる決議に対しても、実施の妨げとなるからです。要約すると、どんなことでも和合と愛と純潔な動機をもって行われたことは、その結果は光明であり、疎外感が少しでも存在するならば、その結果は暗黒の上になおも暗黒となるでしょう。これらの原則が遵守されれば、その精神行政会は神に属するものとなるでしょう。さもなければ、悪魔より発生する冷酷さと不和が生じるでしょう。

討議は精神的な課題に限定されなければなりません。つまり、人々の魂の育成、子供の教育、貧困の救済、世の中のあらゆる階級にある弱者への援助、すべての人々への親切、神の芳香の発散、神の聖なる言葉の高揚など限定されなければなりません。これらの条件を満たそうと努力するならば、聖霊の恩寵は彼らに授けられ、その精神行政会は神の祝福の中心となり、天来の確証の軍勢が彼らの援助に現れ、日々彼らに聖霊が新しく降り注がれるでしょう。」

精神行政会の活動(2)

愛野市の精神行政会の9人のメンバーは、4月25日に再び集合しました。議長はメンバー中の数人に祈りをするよう依頼しました。祈りはバハオラ及びアブドル・バハによって示されたものでした。その内のあるものは、特に会合の時に祈るように示されたものでした。開始の祈りの後で、議長は書記に記録の中から前回の会合の時の記録を読むように頼みました。以下が書記が読み上げた記録です。

「愛野市の第一回目の精神行政会の会合が、4月22日の午後6時に開催された。開始の祈りがなされ、山田氏が会議の前半を司会した。議長選挙が行われ、鈴木氏が議長に選ばれた。山田氏は彼に会議の後半を司会するよう依頼した。精神行政会の選挙が引き続き行われ、次のメンバーが選挙された。

高橋夫人　　副議長
岡田氏　　会計
山田氏　　書記

次回の精神行政会の会合を4月25日に開催することを決めた。会議は午後八時、終わりの祈りをもって閉会された。」

書記が読み終わると、議長は前回の会合の議事録を承認しますかと他のメンバーに尋ねました。そこで各メンバーは議事録は正しいと承認しました。それから議長は、精神行政会の主な目的は神の教えを広め、自分たちの生活の中で実践していくことにあるから、この会合でこの事柄を取り上げて討議したいと宣言しました。そこで議長は各メンバーにこの問題に関する各人の意見を述べるように促しました。各人が皆それぞれ意見を述べ終った時に、議長はそれを次のよう

に要約しました。

⑴ 我々自身もっとバハイについて知る必要がある。

⑵ 我々は文献が欲しい。

⑶ 我々は資金が欲しい。

⑷ 我々は布教活動を隣町から始めなければならない。

それから、彼らはこれら4つの課題を一つづつ取り上げました。メンバーの中の一人が、この重要な企画について共同体の全員に話し、自分たちがやろうとしている活動に参加できるかどうか聞いてみようと提案しました。一人のメンバーはバハイについて、もっと多くを知るために勉強会を毎週もつ必要があると提案しました。彼らは土曜日の会合をこの目的に用いることができます。彼はこの研修会を指導してもらうために、和光市の渡辺さんに都合を聞いて見ようと提案しました。

議長はこの意見を支持する方はありませんかと尋ねました。清水さんが手をあげました。そこでこの動議は正式に取り上げられ協議されます。しばらく協議した後、議長は土曜日の研修会を指導するために、和光市から渡辺さんを呼ぼうという提案に賛成の方は手をあげて下さいと言いました。

七人が手をあげました。他の二人即ち久保田さんと鈴木さんとは、渡辺さんがはるばるやって来ることは不可能だろうと考えたので、この提案に賛成せず手をあげませんでした。議長はこの議案が多数決で通過したと宣言し、書記にそのことを議事録に記載するよう頼みました

次に議長は渡辺さんの交通費に言及し、愛野市まで来て研修会を指導してもらうには経済的援助が必要になると説明しました。議長は他の人々にこの問題についてどう考えるかと尋ねました。久保田さんは言いました。「我々メンバーは共同体の人々に対して、基金に献金するお手本を示さなければなりません。私は毎月この基金に献金することをお約束します。私は精神行政会に喜んで献金したいと思います。」久保田さんはもともと、この提案には賛成の投票をしませんでしたが、それが地方精神行政会（ＬＳＡ）を通過した以上、彼が今やその決定に支持を与えていることが分かり、他のメンバーたちは非常に喜びました。その訳は精神行政会が決議したら、それに賛成であろうとなかろと、私たちはその決議を受入れ、多数決を尊重しなければなりません。ＬＳＡの他のメンバーもまたいくらかづつ献金しました。この一連の決定を4月２９日に開催する１９日毎のフィーストの席上、共同体全員に発表し、バハイの友の協力を求めることに決まりました。

議長はそれから布教活動に必要な文献の問題に議題を移しました。協議の後、精神行政会はこの問題について、全国精神行政会（ＮＳＡ）に援助を求めなければならないという結論に到りました。

これらの問題が片づくと、議長は次に協議しなければならない課題は、近隣の町々にバハイの教えをどのようにして伝え広めることができるかを検討しなければならないと発言しました。山田さんは日曜毎に交代で隣町の知人を訪問してはどうかと提案しました。他の者もこの提案に賛成しました。

議長はこの問題について、他に何か提案があるかと尋ねました。岡田さんは特別の祭日とか記念日に集会を開いて近隣からバハイでない友人や、親戚を招待するのは良い考えであると発言しました。この提案も支持者を得て、票決にふされ、精神行政会によって承認されました。最後に、彼らは次回のＬＳＡは4月２９日、即ちフィーストの翌日に開催することに決めました。そうすれば、前日のフィーストの時共同体の皆さんから、精神行政会に対して提出された提案を協議することができるからでした。終了の祈りの後、精神行政会のメンバーたちはこれからの活動への期待に胸を踊らせながら家路につきました。

この会合で取り上げられたことは、精神行政会がいかに任務を遂行するか、いかにして協議に入るか、またいかにして有効な決議に到達するかを示した一例です。様々な共同体で取り上げられる問題は同じではありません。各共同体のニーズは必ずしも同一ではありません。各精神行政会は注意深くその任務を考慮し、各共同体での重要度にしたがって、自らの仕事の採否を決めなければなりません。

精神行政会の活動（3）

今日は4月２８日のフィーストの日です。愛野市のバハイは１９日毎のフィーストを祝うために集まりました。精神行政会の議長がフィーストの司会をつとめます。議長が出席できない時は、副議長が代行します。フィーストの最初の部分はいつも祈りに捧げられ、バブやバハオラやアブドル･バハの書かれたものの中から選んで朗読します。祈り及び聖典の朗読中は、出席者は深く心をしずめ、瞑想する気持ちで傾聴します。祈りや朗読の数は、皆を飽きさせない程度に止めなけ

ればなりません。

フィーストのプログラムの第一部が終わると、精神行政会の議長の鈴木さんは、書記の山田さんに精神行政会の報告を読むように頼みました。山田さんは共同体の皆さんに、精神行政会の役員選挙の結果及び隣接地区にバハイの教えを広めるための活動開始の決定について報告しました。山田さんはまた活動に必要な援助と、教師を招いたり、研修会を開くために必要な資金について共同体の皆さんに報告しました。

書記の報告が終わると、議長は共同体の皆さんに向かって、この問題について何か提案を出してくれるように、またどの程度まで援助してもらえるか意見を聞きたいと言いました。参加者は様々な方法で援助することを約束しました。ある人は、研究会毎にお茶と茶菓子を提供しようと言いました。他の人は一ヶ月に一回だけ、教師の旅費の片道分を払いましょうと言い、次の人は布教活動にあたり、一ヶ月に一日奉仕しようと約束しました。これら協力の約束のほかに、彼らが考えてもいなかった2、3の重要な事柄が指摘されました。たとえば、毎週の研修会や布教活動のほかに、これまで時々開かれていた地方の品評会にバハイの教えを紹介する計画を立てるようになりそうです。品評会に参加する人もバハイの文献を持って行って人々に配るようになるでしょう。また、資金を有効に使うために多くの貴重な提案が出されました。書記はフィーストのときに出された提案を全部記録にとって、次回の精神行政会にかけ、協議を行う材料とします。

精神行政会の議長は、今日だされた提案を慎重に考慮し、次回のフィーストのときに共同体の皆さんにその決議の結果を報告すると約束しました。

フィーストのプログラムの第三部は社交親睦の時間です。四家族が共同で各人に茶菓接待をしました。美しい声をした若い人たちの一団が、議長の許しを得て歌い出し、他の人たちも合唱を初めました。一人のバハイの少女が学校で覚えた美しい詩を朗読し、参加者は皆それに聞きほれました。　愛と幸福の気持ちで、愛野市のバハイたちはフィーストを祝い、一同精神的な祝福を心から感じとりました。最後のお祈りの後、彼らは祝福感に胸をふくらませつつ、それぞれの家に帰って行きました。

愛野市の精神行政会はフィーストの翌日に開かれました。開始の祈り、前回の会合の議事録が読まれ、一同これを承認した後に、前日のフィーストのときに皆さんから出された提案について協議が始まりました。検討を重ねた結果、精神行政会は多数決で提案のすべてを承認しました。

レズワンの期間の最終日に当たる5月2日、精神行政会は愛野市の全員のバハイを招待し、布

教や宣布活動を進めるためにいくつかのグループに分かれて日常的に活動する方法について説明することに決まりました。そして、精神行政会の三名のメンバーが担当となり活動の推進のための適切なプログラムを編み出す委員会を作ることになりました。

精神行政会の会合を終える前に、協議することがもう一つありました。愛野市のバハイの二人の間に行き違いがあって、それを解決してほしいと当事者たちから要請があったのです。精神行政会は双方の言い分を別々によく聞きただした後、両者を呼んで、愛と分別の精神をもって相互間の問題の解決に努力してほしい、という申し出をしました。

精神行政会の書記は、その翌日、会合の記録に基づいて次のような報告書を全国精神行政会に送りました。

親愛なる全国精神行政会の皆様、

バハオラの御恵みにより、この度、わが愛野市に地方精神行政会が結成されましたことをご報告できますことは、我々の最も大きな喜びとするところです。地方精神行政会の設立後に提出するようお送り下さいました用紙に、9名のメンバーと4人の役員の住所氏名を記入し、すでにお送り申し上げました。

さて、和光市に住む渡辺さんに、毎土曜日に我々の町に来て、研究会を指導するよう依頼しました。さらにまた、月一回の月曜日に数人のバハイで構成されるグループを組み、様々な活動に取り組むことにしました。

精神行政会内に基金を設立しましたところ、今までにバハイの皆様から○○万円の寄付が集まりました。そして、毎月同額の献金をすることを約束いたしました。このお金は当精神行政会の管理のもとに各活動の促進に利用されます。

我々は相当量の文献が入用ですので、どうぞ多量の小冊子と登録カードをご送付下さるようお願い申し上げます。

信教発展のよい便りが、次便で申し上げられるよう希望しております。

バハオラが我々の歩みを導かれることをお祈りしつつ。

愛野市地方精神行政会書記

山田　五郎

日本バハイ全国精神行政会書記
〇〇殿

全国精神行政会

国内のすべての地方精神行政会は、全国精神行政会の管轄下にあります。

全国精神行政会のメンバーは、毎年レズワンの期間中に開催される全国年次大会において選出されます。選挙権を持つのは各地域で選ばれた代議員です。全国各地から選ばれた代議員が年次大会に集い、全国精神行政会のメンバーを選挙によって選び、様々なテーマについて協議し、新しく選出された全国精神行政会に対する提案や要望をまとめます。前述したバハイの選挙の基本原則は、全国精神行政会の選挙にもそのまま当てはまります。選挙は神聖な義務であって、精神的な性格を持ち、事前の指名や宣伝、選挙活動はまったく行われません。

全国精神行政会の目的は、全国のバハイによって行われる仕事を統括し、その活動を促進することにあります。その任務を進めるに際して、全国精神行政会はしばしば万国正義院の指導をあおぎ、または大陸顧問との協議を重ねます。

すべてのバハイは地方精神行政会を通じて全国精神行政会の協力や指導を仰ぎます。それに対し、全国精神行政会は手紙、回覧、月報などを通じて全国のバハイと連絡を密にし、各地のバハイ活動や世界のバハイ活動の進展状況のニュースを提供します。あるいは、全国的な計画への参加・協力を求め、様々な相談や提案を促します。

全国精神行政会からの通信は、フィーストの席上、地方精神行政会の書記によって読まれます。もし、全国精神行政会から相談して欲しいと要請してきた場合は、各人は進んで自分の意見を述べたり、協力を約束したりします。フィーストの席上で相談した結果は、各地の地方精神行政会から全国精神行政会に送られます。そして、各地から寄せられた提案や意見をもとに全国精神行政会は協議を行い、最終決定を行います。

バハイの数が九名に満たない市町村では地方精神行政会の結成ができませんが、その場合はグループの中から書記を選び、その人が全国精神行政会との連絡を担当します。たった一人

しかバハイがいない場合は、全国精神行政会はその人に直接連絡をとります。

全国精神行政会の任務は多岐にわたるので、それぞれの仕事を援助してもらうために全国精神行政会は各種の全国委員会を任命し、その任務について指導します。例えば、全国精神行政会がバハイセンターを建設しようと決定した場合には、その事業に関する一切の仕事を行う特別委員会を任命し、バハイセンター建設についての指示を与えます。こうした場合、全国精神行政会は委員会のまとめた提案を受け入れようとも、修正しようとも、拒否しようともまったく自由です。地方精神行政会も同様に必要に応じて地方委員会を任命し、特定の任務に当たってもらうことができます。

このようにして任命された全国委員会や地方委員会は、その属する精神行政会に対して直接責任があります。同様に、地方精神行政会は全国精神行政会に責任があり、全国精神行政会は万国正義院に対して責任を持ちます。

全国精神行政会の役員は、地方精神行政会の場合と同様、9名の中から議長、副議長、書記、会計書記を選出します。場合によっては、記録書記を別に置くこともあります。全国精神行政会の役員の任務は地方精神行政会の役員の場合と同様ですが、ただその範囲が全国的になります。

年次大会

全国精神行政会のメンバーの選挙は、間接選挙によって行われます。各地のバハイが自分たちの地区から一定の数の代表者を選挙し、これらの代議員が全国年次大会に集まり、全国精神行政会のメンバーを選挙するのです。代議員の数は各地区のバハイの数に比例して決められます。こうして選ばれた代議員は、レズワンの期間中（4月21日から5月2日まで）に開催される全国年次大会に集合します。

全国年次大会の主な目的は、その年度の全国精神行政会のメンバーを選挙することにあります。それに加えて、全国から集まって来た代議員は、全国精神行政会と、またお互い同志間で、各地域の共同体の発展に関して語り合う機会を持つことになります。

年次大会は祈りをもって開会されると、まず第一に、年次大会の議長を代議員の中から選ばな

ければなりません。議長の任務は、協議を整然と、しかもバハイ精神に満ちた形で行うことにあります。次いで、やはり代議員の中から書記を選びます。書記の任務は年次大会の議事を記録し、代議員から全国精神行政会に向けた提案や要望をまとめることにあります。年次大会でやはり重要な役割を担うのが開票係りです。公正に選挙を進めるために開票係りは代議員に様々な注意を与え、投じられた票を集計し、その結果を発表する義務を負います。通常、複数の代議員が開票係りを務めます。

全国年次大会に関する基礎知識を2、3ここにあげて見ましょう。

⑴ 代議員は、全国の成人バハイの中から全国精神行政会のメンバーを九名、選挙で選びます。つまり、選挙権は代議員にあり、被選挙権はすべての成人バハイにあります。

⑵ 代議員は、年次大会に集い、全国精神行政会の選挙に参加する以外には任務も特権も持っていません。年次大会が終了すると、彼らの任務も終わったことになります。言葉をかえて言えば、年次大会は恒久的な機関でなく、大会が解散すれば代議員の役割も解消します。ただし、その年度中に全国精神行政会に欠員が生じ、補欠選挙が行われるときには同じ代議員たちによって選挙が行われます。

⑶ 年次大会は協議機関です。代議員は新しく選ばれた全国精神行政会に対し、様々な提案や要望を提出することができます。ただし、全国精神行政会はそれらの提案などを受け入れるかどうかは自由です。

⑷ 年次大会は、全国精神行政会に対する指導権を持ちません。全国精神行政会はその国におけるバハイ共同体の最高の権限を持ち、すべての地方精神行政会や個人のバハイはその管轄下にあります。

地方精神行政会に関するいくつかの質問

⑴ 精神行政会の決定に従わなければならないのか。

精神行政会は神の教えに基づいて設立されたものですから、バハイはそれを神聖な機関として尊重しなければなりません。従って、私たちは精神行政会のすべての決定に対し従わなければなりません。アブドル・バハは、精神行政会の決定の中に誤っている点があると分かっていても、

自分はその決定に服従すると言われました。このことは、精神行政会に従うことによって、私たちが神の命に服従することを示すものであります。

(2) 地方精神行政会の決定が正しくないと思った時はどうすべきか。先ずは従わなければなりません。それが神の命であるからです。その上で、地方精神行政会の決定を再考するよう全国精神行政会に訴えることができます。地方、並びに全国精神行政会に従うことによってバハイの機構の基礎を強化することになります。もし各人が精神行政会の決定の中の一部だけに従うとなれば、バハイの間の調和と和合はあり得ないでしょう。

(3) 精神行政会のメンバーの中に気に入らない人がいるから、その決定に従わないことはできるのか。それは非常に間違った態度です。精神行政会に対する私たちの忠誠は、そのメンバーの好き嫌いによるものではありません。それはバハオラの機関であって、メンバーが誰であろうとその機関に忠誠でなくてはなりません。共同体の和合は、メンバーの如何にかかわらず、大業の機関を完全に支持しなければ守れるものではありません。

(4) 精神行政会のメンバーを辞任することはできるのか。健康を害しているか、住居が他の都市に変わったとかという十分な理由なしには辞任することはできません。精神行政会のメンバーに選ばれることによって、神が私たちにその地域の共同体に奉仕する特典を与えられたことを忘れてはなりません。バハオラの教えに対する忠実な心と、バハオラご自身に対する愛情とが、大業への奉仕のためのいかなる責任にも応えることができるよう私たちを励ましてくれるはずです。

(5) 個人的な問題の相談を精神行政会に持ちかけることはできるのか。それはできます。アブドル・バハは、バハイが個人的な問題も含めて精神行政会と相談し、行き違いや不和を解決するよう勧められました。こんなことがあってはなりませんが、もし仮に二人のバハイの間に何かもめごとが起ったとしたら、精神行政会にその問題の解決を依頼することができます。そして精神行政会の決定がなされたとき、両者共それを喜んで受け入れなければならないのです。

(6) 精神行政会はそれを選挙したバハイたちに対して責任があるのか。言わば「選挙民」に対しては責任はありません。地方精神行政会は神に対して責任があり、様々な具体的な事項に関してはその国の全国精神行政会に対して責任を持ちます。精神行政会は、神の大業にとって何が正しいのか、何が有利なのかを判断して行動しなければなりません。また、共同体のメンバー間の問題に当たるときは、正義と公平の原則に沿って処理しなければな

りません。精神行政会が正義によって導かれる限り、共同体がその決定にどのような反応を示すかは問題ではありません。

(7) 精神行政会の権威にまさる権威はあるのか。

バハイには、個人としての指導権はありません。精神行政会の議長や書記であるからといった、個人としての特別な権利は何ら与えられていません。精神行政会の会合以外の所では、その地域共同体の他のバハイより多くの権限を持つということはありません。また、他の人と同様、精神行政会の決定にはすべて従わなければなりません。

万国正義院

バハイ信教独特の機関の一つに、万国正義院があります。そのメンバーは、世界中のバハイ信徒の中から、全国精神行政会によって選挙されます。バハオラはバハイ宗教性の存続する限り、万国正義院を通して、バハイ信徒を導き続けるだろうと、私たちに保障されました。

バハオラは現代に適合した根本的な掟と、神の教えとを私たちにお与え下さいました。しかし、私たちの要求が変化していくにしたがって、だんだんと書き加えられていかなければならない他の社会的な掟が、また必要になって来るだろうと、彼は言われました。バハオラが言われるには、これらの社会的掟や規定は、常に神の正しいお導きの下にある万国正義院によって、書き加えられなければならないということです。

万国正義院についてアブドル・バハは次のように言っておられます。

「それは必要な条件の下に、すべての信徒の中から選出されたメンバーで構成される。その正義院は神のご加護の下にある。もし、その正義院が聖典に書かれていない問題について、満場一致か過半数で決定するならば、その決定や命令は誤りのないものとなるであろう。」

それ故、万国正義院は全ての決定をなす場合、霊感を与えられるでありましょう。また、どのような規定を定めようとも、その時代の要求に対して、完全なものとなるであろうということは明白です。しかし、万国正義院はバハオラによって与えられた基本的な原則でも変更できると私たちは考えてはなりません。万国正義院のなし得ることは、ただバハオラの定められた掟を実行する上に、必要な規定を定めることです。

例えば、バハオラが私たちに世界共通語を持つように命令されましたが、しかし、彼はそれが、どういう言葉でなければならないかということは述べておられません。このことは、万国正義院が決定するように残されているのです。

これに関してバハオラは次のように書いておられます。

「‥‥‥我が書簡の中で、世界共通語は現存の言葉の中のどれか一つを選ぶか、あるいは、また新しい言葉を創るかという問題、また同様に、世界が一つの国、一つの家族となるように、世界中の学童に共通語を教える共通の教科書を採用させるという問題は、正義院の世界共通語委員会に命じてある。」

万国正義院はバハオラによって示された如何なるものでも、変更することはできず、また、アブドル・バハやショーギ・エフエンディの解説中のどれでも、改変することは出来ませんが、四囲の状況が必要とする場合には、正義院自身で決定したものは、これを変更することが出来ます。

アブドル・バハの遺訓集の中に、こう書いてあります。

「もっとも聖なる本（キタビ・アグダスの書）に、各人は顔を向けなければならない。また、その中に明らかに記録されていないものは、全部、万国正義院に照会されなければならない。この機関が満場一致か多数決で決めたことは、真に真理であり、神ご自身の御目的である。それに背く者は誰でも、真に不和を愛するものであり、悪意を示し、聖約の主から顔をそむける者である。」

私たちの敬愛する守護者は、その３６年間の在任中、万国正義院の設立に道を開くため、苦心努力されました。万国正義院は賜物の高楼（ドーム）のようなもので、それを支える強い柱を必要とすると、守護者は言われました。彼の言葉によるとこれらの柱は、世界中の全国精神行政会であります。これらの柱が、地球上のすべての地域に一つ一つ建てられたのは、守護者の弛みない努力の賜でありました。守護者の聖なる指導の下に、バハイ信徒はグループとして、また地方精神行政会として、働く方法を学び、各国は全国精神行政会を通して、一緒に働く方法を会得しました。彼らがここまで到達したところで、守護者は十年計画を与えられました。その計画は、全国精神行政会に世界的企画において協同して働くことを教え、またバハイ信徒が、万国正義院の残りの柱を建てる仕事に援助を与えました。１９６３年十年計画の完成によって万国正義院を設立するに十分な数の全国精神行政会が、全世界に出来ました。

バハイ信教が世界各地にひろまった時に、万国正義院が設立されるであろうとは、アブドル・バハの予言でした。そしてその予言は、十年計画の終了と共に実現されました。国際バハイ理事会

は、万国正義院の前身の役を務めるために選挙されなければならないと、そして、１９６３年万国正義院が設立される時まで信教の世界的中心地ハイファで、９人の理事が仕事を続けておりました。

守護者の十年計画通りに、１９６３年のレズワンの期間に、バハイ信徒のための世界会議が、ロンドンで開かれました。これは守護者の十年計画の完成を祝うばかりでなく、万国正義院の設立を祝うものでもありました。この万国正義院は、実に、神が地上人類に関する万端を導き給う最高の機関であるのです。

バハイ基金

あなたの住む村に洪水が起り、隣の人の家が流されてしまったとします。村の人々は集まって、家を失った家族のために仮の住居を建ててあげようとしています。その時、あなたはどうしますか。自分は貧しいので援助できないと言うか、それとも、困り果てた隣人のために雨を凌ぐ屋根をこしらえてあげようと、小額であっても自分の分担を出そうと申し出ますか。あなたが提供するものはごく小額のお金であったり簡単な建材であっても、それは他の多くの人が出し合うものと合わせれば家を失った家族のために仮住居を建ててあげることができるでしょう。

今日の人類は、戦争の嵐や、何百という災害に遭遇した家なき家族のようなものです。それに対してバハイ共同体は、人類に平和と幸福を提供する避難所でなければなりません。世界中のバハイは、人類のためにこの避難所を建設しようと努力しているのです。私たちもそれぞれ救援にかけつけようではありませんか。

私たちはバハイの諸機関を設立し、多くのセンターや礼拝堂を作り、この教えを世界中の言葉に翻訳し、パンフレットや書物を出版しなければなりません。以上のためにも、また多くの他の計画を実行する上にも、私たちは財源を提供し、人的な援助を続けなければなりません。その目的のために、各地方精神行政会や全国精神行政会では特別な基金を設けています。この基金は、バハイの人々の献金によるものです。

バハイの献金は自発的になされなければなりません。献金したくない人に対して献金を強制することはできません。しかし、バハイ基金への献金は、バハイとしての精神的な義務であって、私

たちの信仰の試金石でもあります。人類が神の大業をどれほど必要としているかをよく知っているバハイは、その機関を建てたり、悩んでいる世の人々に解決法を知らせたりするために、基金に参加し援助を与える特権を自ら放棄することはできません。その意味で、献金の額は問題ではないのです。むしろ、問われるのはバハイ基金に献金しようとする精神、大業の前進に可能な限り力を貸したいという心なのです。

守護者ショーギ・エフェンディは次のように書かれています。

「私たちは、泉や噴水のようでなければなりません。泉からは水が絶えず流れ出ていますが、また同時に、泉は目に見えない水源から絶えず補給されているのです。我々も貧困を恐れてためらうことなく、あらゆる富や幸福の源泉（神）から無尽蔵に御恵みが授けられることを確信して、同胞の福祉のために絶えず与え続けなければなりません。これこそが正しい生活の秘訣なのです。」

各精神行政会は基金を設けなければなりません。そして、バハイ共同体の人々は、自分の自由意志に従って、また自分の能力に応じて献金しなければなりません。神が私たちに授けて下さったものの一部を差し出すことによって、私たちは慈悲深い神に感謝を捧げることができるのです。

献金について、アブドル・バハは次のように言われています。

「おお汝ら神の友らよ。献金の代償として、汝らの営む商業、農業、そして工業が幾倍にもなって祝福されるであろうことを確信せよ。一つの善行をなす者に対し、神は十倍与えて応えるであろう。実在の主は、寛大な心の持ち主を助け確証を授けることに疑いはない。」

第七章、規律と義務

祈り

「ある人が他の人に愛情を感じるならば、その人は相手の人にそのことを告白したいと思うでしょう。自分がその人を愛していることを、相手の人が気づいていると分かっていても、なお、その人は相手の人にはっきりと告白したいと思うでしょう。神は万人の心の望みをすっかり知っておられますが、なお、人が祈りたいという衝動がおこるのは神への愛慕の情から生じる自然の姿です。」

アブドル・バハは、祈りは神との対話であると言われました。アブドル・バハは次のような言葉をも残されています。

「私たちは天の言葉を用いなければなりません。それは魂の言葉です。それは心と精神の言葉なのです。私たちが日常的に使う言葉が、単に吠えたりうなったりする動物の言葉とは違っているように、天の言葉は私たちの日常的な言葉とは違っているのです。神に届く言葉は魂の言葉なのです。祈る時、私たちは自分を外界のあらゆるものから解放し、ひたすら神に顔を向けなければなりません。私たちが心の中に神の御声が聞こえるように感じるのはその時です。言葉なしに私たちは神と対話し、意志を通わせ、神の回答を聞くのです。真に精神的な状態に到達した時、人は誰でも神の御声を聞くことができるのです。」

人間にとって祈りとは精神の糧なのです。祈りを怠るならば、心に栄養が届かず、精神的に強く健康になることはできません。祈りがバハイの義務であるのはこのためです。バハオラはアグダスの書に次のように書いておられます。

「神の聖句を毎朝、毎夕かかさず唱えよ。それを怠る者は、神の聖約とその証言に対する忠誠を怠る者である。この日、これらの聖句から顔を背ける者は、神より永遠に顔を背けた者らの一人である。おお我が僕らよ、皆ことごとく神を畏れよ。神の聖句を大量に読むことや、日夜多くの敬虔な行為を重ねることを誇るな。危急の場の救助者におわし、御自力にて存在したもう神のすべての聖なる書をだらだらと読むよりも、たった一行の聖句を喜びと輝ける心をもって唱える

方が汝らにとって有益なのである。疲れたり、気が滅入らない程度に聖句を読むようにせよ。魂を疲労させ、圧迫するようなことを自らに課してはならない。むしろ、汝らの魂が聖句の翼に乗って神の明白な証の黎明の場に向かって舞い上がることのできるよう、魂を活気づけ、高揚させるものを課すようにせよ。このことが汝らを神の方へと近づけるであろう。もし汝ら、理解するものならば。」アグダスの書、段落149

私たちは、バハオラのこの言葉から多くを学ぶことができます。バハイにとって、祈りは欠かすことのできない必須の条件なのです。また、祈りを一種の儀式や祭式として見なしてはならないということも理解されます。

普段聞きなれない言葉を、その内容も分からないままにただ朗読するだけで立派なお勤めをしていると考える人は少なくありません。一日に聖典を一冊全部読めば、神の恩恵が頂け、何らかのご利益にあずかれると信じる人もなかにはあります。

言葉の意味をまったく理解しないまま、聖典の朗読に多くの時間を費やす人もあります。これは祖先の行った方法を、ただ盲目的にまねれば救われると考えるからでしょう。しかし、バハオラが求めておられるのは言葉だけの祈りや礼拝ではありません。「聖句を喜びと輝ける心をもって唱える」こと、そして「魂を活気づけ、高揚させ」、「魂が聖句の翼に乗って神に向かって舞い上がる」ことこそが祈りの目的であり、真髄なのです。

バハイの書物には、バブ、バハオラ、アブドル・バハによって著わされた何百もの美しい祈りがあります。祈りたい時は、いつでもそれらの中から選んで祈ることができます。バハイの集会は祈りに始まって祈りに終わります。その時の祈りは、一人の人が祈りの言葉を読み、他の人々はその言葉を傾聴し瞑想します。祈りの言葉には、人の心を活性化し奮い立たせる力が備わっています。熱意をもって、また美しい声をもって唱えられた祈りはそれを聞く人の心を引きつけ、精神を高める効果を発揮することができます。

バハイは、自分の置かれている状況や心の状態に則した内容の祈りを自由に選んで唱えることができますが、これら一般の祈りは義務的なものではなく、自主的に行われるものです。それに対して、バハイが日々唱えなければならない必須の祈りがあります。必須の祈りは三種類あり、どれを選ぶかは自由ですが、毎日その内のどれか一つを唱えなければなりません。各必須の祈りにはその長さ、唱える時間帯、一日に唱える回数に多少の違いがあり、自分の生活パターンに

一番合ったものを選ぶことができます。下記の「短い必須の祈り」は、一日に一回、正午から日没までの時間帯に唱えることができます。

「神様、あなたが私を創り給いましたのは、あなたを知り、あなたを崇拝するためでありますことを証言いたします。今こそ私の無力なことと、あなたの御力の大いなることを、また私の貧しさと、あなたの御豊かさをとを証言いたします。あなたの他に神はいまさず、あなたは危難の中の御救いに在し、御自力にて存在し給う御方にまします。」

この祈りを毎日唱えようと心に決めたら、それを暗記しておくと便利です。しかし、私たちがどの祈りを唱えようとする時でも、祈りを捧げる精神が大切であることを忘れてはなりません。このことについてアブドル・バハは次のように説明されています。

「最高の祈りとは、ただ神を愛するが故に捧げる祈りであって、神や地獄を恐れたり、天の恵みを願うためのものではありません。人が恋に陥るとき、恋人の名を呼ばずにおられなくなります。ましてや、人が神を愛するようになったとき、神の御名を呼ぶのをとどまることは不可能です。精神的な人は、神を想起し、神を愛すること以外の何物にも喜びを見い出すことはできないのです。」

断食

バハイには独自の暦があります。一年に19ヶ月あり、一ヶ月に19日あります。これだけで365日には足りませんので、バハイの暦には4日あるいは5日間の「うるう日」の期間があります。この期間は「アヤメハ」と呼ばれ、一年の18番目と19番目の月の間に置かれています。（これは西暦の2月26日から3月1日までの期間に当たります。）アヤメハは一年の中でも特に「慈善と施しの期間」として位置づけられています。この期間中、バハイは様々な慈善事業などを通じて困難や苦しみにあえぐ人々に手を差し伸べたり、人々に食事を振る舞ったりします。アヤメハが終わり、一年の最後の月に入るとそれはバハイの断食の月となっています。断食の19日間は日の出から日没まで（大体午前6時から午後6時まで）一切の飲食を絶ちます。神に祈るために夜明け前に起床し、すべての恵みと祝福に対して感謝を捧げます。それから、太陽が上る前に朝食をとり、太陽が沈むまでの昼間は何も口にしません。日没に祈りを捧げ、その日の断食を終えて夕食を

とります。

断食の１９日間の趣旨は、神により一層近づくことです。バハイは断食を守ることによって神に対する愛の心と、神の命令を忠実に実行することを象徴的な方法で表現しているのです。アブドル･バハは断食について次のように述べておられます。

「断食は一つの象徴なのです。断食することは肉体的欲望を断つことを意味し、欲望を克服しようとする一つの象徴なのです。肉体的欲望を断つと同様に、自我の欲望や自己中心的な考えをも抑えなければならないということを想い起させるのが断食です。物を口に入れないだけの断食であれば、精神に何ら影響も効果もありません。断食は一つの象徴であり、自分に対する戒めなのです。それ以外の意義はないのです。この目的で行う断食では、完全な絶食を長く続けることは不要です。食べ物に関する黄金律は過食、過小食をしないということです。中庸が肝心です。」

結局、断食は忍耐力を養い、飢える人々への慈悲を増し、日常生活の無駄を反省し、精神の向上へと導いてくれるのです。

一日の断食に入るために、日の出前から祈りと瞑想の心構えをしますが、断食期間中に唱えるものとして多くの美しい祈りがあります。これらの祈りを唱え、朝食をとってから日没までの断食に入ります。普段にも増して、断食期間中はバハオラに対する愛慕の気持ちがひしひしと湧いて来ます。そして、バハイが断食をするのは、バハオラを愛するがためであることを常に心に思い浮かべます。日没を迎えるとその日の断食は終わりますが、食事をとる前に聖典の言葉を読み祈りを唱えます。バハオラによって著わされた断食のための祈りの中から一つを次に記します。

「主なる神に賛美あれ。暗黒を光明と化し、人々が絶え間なく集う神殿を築き、書き記された書簡を現わし、繰り広げられた巻物の覆いを取り除いたこの啓示により嘆願いたします。私と、私とともにいる者らに、卓越した御光の天上に舞い上がることを可能ならしめるものを下し与え給え。そして、疑い深い者があなたの唯一性の聖堂に入るのに障害となるような疑念の痕跡を洗い清め得るものを私どもに授け給え。

おお我が主よ、私はあなたの御慈愛の御綱をしっかりと握りしめ、御慈悲と御恩恵の御裾にすがりまつる者であります。私と、私の愛する者らに現世と来るべき世の良きものを授け給え。そして、創造界の最も優れた者に授け給う隠された賜物を彼らに定め与え給え。

おお我が主よ、今はあたなが僕らに断食を守るよう命じ給いました日々であります。あなた以外のすべてのものを完全に超越し、ひたすらあなたのために断食を守る者に祝福あれ。主よ、あな

たに従い、御戒めを守ることができますよう私と他の僕らを共に助け給え。まことに、あなたは欲するがままになし得る御力の御方に在します。
　あなたの他に神はいまさず、あなたは全知にして聡明なる御方に在します。諸々の世の主にましますに神に賛美あれ。」
　断食の期間は、バハイの暦の一年の最後の日にあたる3月２０日まで続きます。明けて3月２１日はバハイの新年の元旦です。これをノウ･ルーズと呼び、この日、バハイは断食の終了と新年の始まりを祝います。

仕事は礼拝である

　バハオラの教えの中に、万人は働かなければならないという規律があります。逆に、怠けた生活を送ることは罪悪とされます。この教えにおいて、働くことは各人の義務です。さらに、社会への奉仕の精神をもって行う仕事は礼拝にも等しいとバハオラは説いておられます。

　「おおバハの人々よ。汝らには、技術や商業など、何らかの職業に従事する義務がある。仕事に従事する汝らのその行為を、我は唯一真実の神の礼拝と同じ地位にまで高めた。おお人々よ、汝らの主の恵みと祝福について熟考し、朝な夕なに主に感謝を捧げよ。」　アグダスの書、段落３３番

　このことについてアブドル･バハは次のような解説を加えておられます。
　「芸術、科学及びすべての技術は礼拝と見なされるのです。良心的に自分の最善の能力を発揮し、全力を傾注して一枚の紙を完成させる人のその行為は神を賛美することと同じなのです。要するに、純粋な動機と人類に対する奉仕の精神を心に抱き、真心から行うすべての努力は礼拝そのものなのです。人類に奉仕し、人々の困窮を助けること、それが礼拝なのです。奉仕は祈りなのです。」
　働くことは礼拝である。これは素晴しい教えです。
　神に祈るとき、喜びと誠実の心をもって礼拝しなければなりません。自分のために、また、他人

のために土地を一生懸命耕す農夫は神を礼拝しているのです。額に汗して物を作る工夫も、心を込めて子供を教育する教師も、患者の治療に奮闘する医者も皆その行為において神に賛美を捧げ神を礼拝しているのです。

バハオラの祝福により、すべての畑は神に賛美を捧げる寺院となり、あらゆる工場は礼拝堂となり得るのです。この祝福によって職場は充実した礼拝の場となり得るのです。また、この教えの導きによってバハイは祈りを捧げると同じ喜びと、誠実さと、素直さをもって仕事に向かうことができるのです。

独りで山奥にこもる行者は、修業を通じて神を礼拝することができると信じ、あらゆる難行苦行をしようと覚悟しています。しかし、難行苦行や僧修行の時代はもはや終わったとバハオラは言われました。バハオラは、難行苦行を神に捧げる代わりに社会にとって有益な仕事や奉仕を通じて神に遣える道を示されたのです。仕事を礼拝の一つの形と見なすことによって、仕事に新たな喜びと充実感を見い出すことができるのです。

バハイでは、世を捨てて孤独な生活を送ることを褒むべきことと評価していません。バハイには僧侶や行者がいないのもこの理由からです。このことに関連してバハオラは次のように言われています。

「おお地上の人々よ。神は、孤独生活や厳しい鍛練を決して良しとしない。英知と洞察力を有する者は、喜びと芳香をもたらすものに向かなければならない。孤独生活や難行苦行は迷信と空想の胎内から生まれるものであり、知識を有する人々にはふさわしいものではない。過ぎ去りし時代には山中の洞窟に住む者や、夜中墓場に通う者もいた。言挙げよ、この虐げられし者の忠言に耳を傾けよ。汝らの握りしめるものを捨て、信頼される助言者の示すことを堅く守れ。汝らのために創られたものを自分から捨てることのないよう注意せよ。」

私たちは職場や畑や工場で神を礼拝しましょう。絶えず良心的に仕事を行うことによって神に賛美を捧げましょう。人類に奉仕することによって宇宙の創造主に真心のこもった祈りを捧げましょう。

神の大業の布教

バハイとしての義務は何かと尋ねられたら、(1) バハオラの教えを勉強すること、(2) その教えを実践すること、(3) その教えを広めること、と答えることができます。「各人は、自分の能力に応じて神の大業を伝え広めなければならない。これはすべての者に課せられた義務である」とバハオラは説かれています。

神の大業を教え広めることが、なぜ私たちにとって必要なのでしょう。

ある人が恐ろしい病気にかかっていたとしましょう。ある時、彼はその病気を癒し、すべての苦痛を直ちに治す薬を発見したとしましょう。素晴しい効能をもつその薬を彼はきっと大切にしまって置くでしょう。しかし、友人が同じ病気に悩んでいることを知った彼はその薬をどうするでしょうか。利己的な考えから薬をしまい込んで友人を悩むがままに放置するでしょうか。そんなはずはありません。彼は喜んで薬を友人のところに持って行き、自分ですでに試して見たから友人の病気も直ぐ治ることまちがいなしといって、その病める友人に勧めるでしょう。

バハオラは「全能の医師」です。そして、バハオラは私たちのあらゆる苦悩を治し得る素晴しい妙薬をこの世に持って来られました。憎悪、迷信、失望、不和という病は世界の人々を破滅の淵に追い立てています。これらの病に効く特効薬を手に入れ、その効力を自らの体験を通じて知ったバハイが、他人の苦悩をどうして見すごすことができましょう。彼は、周辺にいる兄弟姉妹に、自分が神の教えによって得た妙薬を分けてあげるようにしなければなりません。

バハイには僧侶もいなければ、布教を専門に職業とする特定の人もいません。従って、人々を神の大業に導く責任は一人一人のバハイの双肩にかかっています。

神の教えを人々に伝えることによって得るものは一体何でしょう。バハイは物質的利益を得ようと布教するのではありません。ただ他の人々を愛するが故に、また神がこの今の時代に付与された大きな賜物を人々が逃してはならないと思うために教えを伝えるのです。バハイは、バハイの考えを他人に押しつけようとはしませんし、論争もしません。バハオラの教えを受け入れたくないと断わった人に対しても愛を注ぎ続けなければなりません。「あなたは間違っていて、私たちの方が正しい」とは決して言いません。神がバハオラを通して示された教えを、ただ世界の人々に提供するだけなのです。それを受け入れるかどうかは相手の判断です。人々に対するバハイの愛情は、バハオラの教えを受け入れるかどうかに左右されるものではありません。このことについて、

バハオラは次のように注意されています。

「おおバハの人々よ。汝らは神の愛と恩恵の黎明の場である。悪意とののしりの言葉によって汝らの舌を汚すな。また、見る価値のないものから汝らの目を守れ。汝らの所有する真実を人々に明示せよ。それが受け入れられれば、目的は達成されたのである。また、受け入れない者を非難したり干渉したりすることはまったく無益である。受け入れない者はそのままにしておき、自らは、保護者でありご自力にて存在し給う神に向かって進め。人の悲しみの種となってはならない。ましてや、不和や争いの原因に決してなってはならない。汝らが天の恩恵の木陰に育ち、神の望むところに従って行動することを我は希望する。汝らは皆一本の木の葉であり、一つの海の水滴である。」

バハオラは他人に教える前に、まず自分自身に教えることを望んでおられます。つまり、他の人々にバハオラの教えを伝え、彼らがその教えに従うよう望む前に、まず自分自身の生活にバハオラの教えを実践するよう最善を尽くすべきだという意味です。バハオラはこのことを次のように説明されています。

「バハの人々は英知をもって主に仕え、自らの生活によって他の
人々に教え、自らの行いの中に神の光を現わさなければならない。まことに、行いの影響力は言葉の影響力を凌ぐものである。また、教える者の言葉の効力は、その目的の純粋さと、世俗よりの超越にかかっている。言葉を語ることに満足する者もいるが、言葉の真は行動によって試され、生き方の如何に左右される。行為は人の地位を現わすものである。そして、言葉に関して言えば、それは神の御意の口より発せられ聖典に記録されたものによらなければならない。」

自分の周囲の人々の精神的進歩を促し、祝福のもとになることは私たちにとって大きな特権です。恐らく魂の世界では、人々が人生の目的を理解し、普遍的な教えのもとに統合させるのを助けるほど尊い仕事はありません。アブドル・バハはバハイ各人が、少なくとも一年に一人の人をバハオラの教えに導くべきであると言われました。バハオラの大業を教え広めることによって、人類への真の僕であることを立証することができます。真のバハイとしての生活を営み、この時代に下された神の教えを実行するならば、人々はその姿を見て他とは違うことに必ず気付くでしょう。布教の重要性と、布教のもたらす祝福についてアブドル・バハは次のように書かれています。

「神の教えを広める者を、目に見えない天の援助が取り囲むということは明らかに知られている。また、教えを伝える仕事を怠るならば、天の助けは全く断ち切られるであろう。神の友たるものは、

教えの伝道に従事しなければ援助を受けることは不可能である。あらゆる状況下で神の教えを伝え続けなければならないが、常に英知をもって行わなければならない。バハイは魂の教育に従事し、精神の喜びと芳香が得られるよう世の人々を援助する道具とならなければならない。例えば、神の教えを知らない人と友達になり、親切を尽くして良い関係を育み、共に暮らし、また、良い行いと道徳的態度で彼に神聖なる教導を与え、天来の忠言と教えに導いて行くならば、次第に彼は目覚めてその無知は英知に変って行くだろう。」

清潔であること

アグダスの書の中で、バハオラは次のように言っておられます。

「汝ら、人類の間における清潔の真髄となれ。汝らの衣に少しの汚れの跡も残さぬほどの堅固さをもって、洗練さの綱にしっかりとつかまれ。清潔な水に浸かれ。すでに使用された水で沐浴してはならない。まことに我は、汝らを地上における楽園の顕現として眼にしたい。汝ら、神の好意を得る者らの心を喜ばせるような芳香を放散せよ。」（アグダスの書、段落74、106）

バハオラのこの言葉は、清潔の重要性を理解する上で助けとなります。神は私たちが一生を通じて健康で幸福であるよう望んでおられます。もし、私たちが清潔を守らないならば、私たちの健康は脅かされます。また、もし私たちが健康を保てたとしても、本来の十分な幸福を得ることはできません。

世にある病気の多くは、清潔の欠如によることを科学は証明しています。もし私たちが汚れた手で飲食するば、健康に害があります。それは、多くの病原がそうすることによって体内に入るからです。汚れた手で眼をこすれば、眼病を起すでしょう。

自分自身は勿論のこと、衣類や家の中を清潔に保つことは、バハイたる私たちにとって非常に重要なことなのです。なぜなら、それがバハオラの命令であるからです。

アブドル・バハは次のように言われました。

「外見を清潔にすることは、それが単に物質的なものであっても、精神面に及ぼす影響は大で

ある。清浄でよごれのない身体は、人間の精神にも大きな影響を及ぼすものである。」

アルコールの禁止

人間は心と魂を有するが故に動物と違うのです。神は私たちに、これら人類に授けた貴重な賜物を大切にするよう望んでおられます。そのため、私たちは心と魂をできるだけ健全に保つよう努力しなければなりません。

アルコールを飲むと、人間としての地位を忘れ、動物の水準にまで下落するほど心を傷めてしまいます。従って、アルコールを一切用いてはならないとバハオラは教えられました。バハイになる前にアルコールを飲む習慣をもっていた人は大勢います。しかし、バハオラを神の顕示者と認めその教えを受け入れてからは、飲酒を精神的にも、肉体的にも、また経済的にも損失しかもたらさないこの有害な習慣と見なし、その誘惑を逃れてバハオラの愛に避難所を求めたのです。そこで「命の清水」である神の教えを味わった者は日々のわずらわしさを忘れ、心の明るさを取り戻してアルコールを用いる必要がなくなるのです。アルコール以外にも、心や身体に重大な害を及ぼす麻薬や薬物の使用もバハイでは固く禁じられています。

祝祭日

バハイが仕事を休まなければならない特別な祝祭日が年に9日あります。どれもバハイの歴史の重要な出来事を記念する日として普通の日とは違う扱いとなっています。

暦の順番でいうと、最初の祭日はノウ・ルーズ（新年）の祝日です。この日は春分の日の3月21日に祝われ、断食期間の終わりと新年の始まりに当たります。

次の3つの祭日は、バハオラの宣言を祝う「レズワンの期間」（4月21日から5月2日までの期間）にまつわるものです。バハオラは1863年春、追放先のバグダッドを離れてトルコ帝国の首都のコンスタンチノープルに送られることになりました。その際、バハオラはバグダッド郊外の「レズワンの園」に12日間滞在されましたが、バハオラに別れを告げようと多くの友人・知人がこの花

園に集まってきました。この時、バハオラは初めてご自分が神の顕示者であることを公に宣言されました。神の約束された顕示者の出現の喜びに満ちたレズワンの園での１２日間を記念し、バハイは毎年レズワンの祭日を祝います。この期間の最初の日（4月２１日）、９日目（4月２９日）、そして最終日（5月2日）は特に重要な聖なる日として仕事を休んで祝います。

五番目の祭日はバブの宣言にあたる5月２３日です。１８４４年のこの日、バブはご自分の使命をモラ・ホセインに告げることによって初めて宣言をなさいました。

次の特別な日は5月２９日のバハオラの昇天の日です。１８９２年のこの日、バハオラは７５年の生涯を閉じられました。昇天の時刻に合わせて、午前3時に特別な祈りを唱えます。そして、7月9日はバブの殉教の日です。１８５０年、バブは３１歳にしてイラン北西部のタブリズで尊い命を落とされました。殉教の時刻に合わせて、正午に特別な祈りを唱えます。

バハイの暦の後半に相いついでやってくるのがバブの誕生日（１０月２０）とバハオラの誕生日（１１月１２日）です。当時使われていた陰暦では、バブとバハオラは誕生日は一日違いとなっています。バハイの聖地では、いまでも陰暦に従ってバブとバハオラの誕生日は二日連続して祝われています。

以上がバハイの一年の中の九日の聖なる日です。これ以外にも次に上げる重要な日が二日ありますが、この時は仕事を休む義務はありません。先ず、１１月２６日は「聖約の日」として祝われます。そして、１１月２８はアブドル・バハの昇天の日です。やはり昇天の時刻に合わせて、午前一時過ぎに特別な祈りを唱えます。

バハイの一日は日没に終わり、日没に始まります。従って、これらの祭日は前日の日没から始まります。例えば、バハオラの昇天の日は5月２８日の日没に始まり、5月２９日の日没までで終わります。

これらの祭日は、神の大業のために、また人類への奉仕のために何か重要なことを行って他の日と区別しなければなりません。各地のバハイ共同体は、それぞれの能力や状況に応じて特別な活動を行うことができます。個人においても同様にこれらの聖なる日を期により良いバハイとなり、また共同体のより良い一員となるよう心に誓うことができます。このように、バハイの祭日は単に楽しく過ごすだけが目的ではありません。バブの殉教の日およびバハオラの昇天の日は、もちろんバハイにとって悲しみの日です。しかし、神の顕示者に忠誠を示す唯一の方法は、顕示者が生死を賭して奉仕された大業に私たちの生命を捧げることにありますから、嘆き悲しむことはしま

せん。

バハイは祭日には共に集い、特別な祈りを捧げます。これらの集会によって和合と調和の精神が共同体全員の間に打ち立てられ、この精神が天の恵みを引き寄せる力となります。従って、このような精神的集会は非常に重要なものであります。和合についてアブドル・バハは次のように言われています。

「神の友らと、慈悲に満ちたもう御方の侍女たちの間に和合と調和が日増しに増大して行くことを神は望まれています。和合が実現していなければ、どんな方法を講じても万事進展は見ないでしょう。和合をもたらす最大の方法は、精神的な会合を持つことです。これは非常に重要であり、天の確証を引きつける磁石の働きをします。」

結婚

バハイにとって結婚は神聖な制度です。アグダスの書の中で、バハオラはこう言っておられます。「おお人々よ、結婚せよ、我が僕らの間で我れのことを述べる者をもたらすために。これは、汝らに対する我が命令である。自らを助けるためにこの教えに従え。」また、アブドル・バハは次のように言われています。「バハイ結婚とは、お互いの精神生活を向上させるものでなくてはならず、神の諸々の世を通じて永続する融合をもたらす精神と肉体の結びつきでなければなりません。」

では、バハイの結婚はどのように行われるのでしょうか。バハイ結婚にまず必要なのは次の二つのことです。(1) 男女両方が互いに結婚することを望んでいること。(2) 男女双方の両親がその結婚を承認していることです。この点について、バハオラは次のように言われています。

「僕らの間に愛と和合と調和の確立を欲し、そして敵意や恨みが起きないことを欲し、二人の望みが明らかになった後に、結婚について双方の両親の許しを得ることを我は条件とした。」

承諾が得られたら、その旨を所属の地方精神行政会に通知し、結婚立会人の派遣を依頼します。結婚式の当日、数人の立会人を前に、アグダスの書に記された次の誓いの言葉を互いに述べ合います。「まことに、私たちは神の御心に従います。」結婚式に必要なのはこのことだけです。そして結婚が成立したことが地方精神行政会によって登録されます。地方精神行政会のない場所では、数人の立会人の出席の下に新郎新婦によって行うことができます。

アブドル・バハは次のように述べておられます。「バハイの結婚は、両側の完全な同意と承諾のもとに成立します。当人たちは最大の注意を払い、お互いの性格を熟知しなければなりません。二人の間に交される堅い誓約は永遠の絆とならなければなりません。彼らの志は、永遠の融和、友情、融合、及び永遠の生命に向けられなければなりません。」この教えに従う結婚は、物質の世界にとどまることなく、精神の世界に及ぶ神聖な行為です。

さて、バハイはバハイ以外の人と結婚しても良いのでしょうか。バハイはどんな他の宗教のに属する人とも結婚することができます。これに関連して、バハオラは次のように指示されています。

「喜びと好意をもってあらゆる宗教の人々と交われ。正義をもって物事に向かえ。誠意と忠実の原則に従う人々は喜びと好意をもって世界のすべての人々と交わらなければならない。何となれば、交流は常に和合と調和を促進し、和合と調和は世界の秩序と国々の繁栄のもとであるからである。同情と親切を常とし、敵意と憎悪から身を遠ざける者は幸いなり。」

バハイでない人と結婚する場合、相手の人に、自分はバハイであってバハイの規律に従って両親の承諾を得なければならないことをはっきりさせておく必要があります。相手にバハイの結婚式を行うことを求めるとともに、相手の宗教の式も受け入れます。このようにして、バハイの結婚は、人類は一つであることの象徴でもあります。まさに、バハオラの教えは特定の人々のためにあるのではなく、全人類のためにあるのです。

政府への忠誠

バハオラは、社会を害するあらゆる活動を禁止されています。正当でない、あるいは破壊的な活動にバハイは参加してはなりません。このことについてバハオラは次のように言われています。「どの国にあってもこの共同体の人々はその政府に対して忠誠、信頼及び誠実をもって行動しなければならない。」このようにして、バハイたる者は自分の国の法や政府に忠誠を示さなければ、自分の信仰に対して忠実であり得ないのです。

このことについてアブドル・バハは次のように言われています。「政府への忠誠は、重要な社会的原則であり、精神的原則でもあります。これがバハイの見解です。どの地においても、我々はその政府に服従し、好意を持つ者とならなければなりません。より良き社会秩序と経済状態を築

き上げるためには、法と秩序の原則に従わなければなりません。これがバハイ精神の真髄です。」つまり、法の厳守と政府への忠誠の態度は、私たちの人格の一部として育成されなければならず、それなしには社会の前進や発展は望めないのです。また、反逆のどのような行為も罪悪なのです。バハオラは次のように強調されています。「正直と公正をもって、汝のすべての行為を特色づけよ。おお人々よ、真実の言葉をもって汝の舌を美しくせよ。正直をもって汝の魂を飾る装飾とせよ。おお人々よ、二心をもって人を遇することのないよう注意せよ。人々の中の神の信託者となり、神の寛容の象徴であれ。」

これに関連して、バハイが守らなければならないもう一つの重要な点があります。それは政党政治への不干渉の原則です。バハイはどんな政党にも加わることはできません。これは政党に参加している人々に反対する意味でもなければ、特定の政党に恨みを持つという意味でもありません。ただ単に政党や政治活動には一切参加しないのです。バハイには、バハオラによって示された世界秩序を建設するという使命があり、私たちの全エネルギーや資源をその仕事に費やすのです。神はまっすぐな道を我々に示されました。この道は、右にも左にも、東にも西にも傾いていません。それは全人類の和合の道であって、人種、国籍、信条、階級などの分け隔たりを認めない万人共通の道なのです。

バハイが政治運動などに参加しないもう一つの理由があります。守護者ショーギ・エフェンディの書物にその理由の説明を見ることができます。

「世界のどこにあっても我々は皆同じバハイなのです。神に源を発
る新しい世界秩序を全員で築きあげようとしているのです。各バハイがそれぞれ異なった政党に属し、互いにまったく反対の立場を主張するのであれば、この目的は達成不可能です。我々の和合と調和はどうなるでしょうか。政治が我々を分離させてしまうでしょう。これはバハイの本来の目的とまったく逆な結果を生むことになります。バハイが政党を選ぶ自由があって、例えばオーストリアのあるバハイがある政党に入党したとします。日本やアメリカやインドのバハイも同様に政党を選んで行くならば、その目的がいかに良いものでも、結局は主義主張の異なる政党に属することになるのは明白です。その場合、バハイの和合と調和は一体どうなるでしょうか。信仰によって結ばれた精神の兄弟が政治に参加したために（ヨーロッパでキリスト教同士が多くの悲惨な争いを起したように）互いに反対運動を繰り広げるようになるでしょう。バハイが、自分の国や全世界のために奉仕する最上の道は、バハオラの世界秩序建設のために働くことであり、その世界秩

序は次第に人類を統合し、不和を引き起こすような政治形態や宗教上の教義をやがて一掃するでしょう。」

バハイになるには

どうしたらバハイになれるのかという問いをしばしば耳にします。バハイは、人に招かれるのを待って入信するものではありません。また、入信のための特別な儀式や儀礼はなにもありません。肝心なのは、形ではなく心です。バハイになるということは、神の一体性、宗教の一体性、そして人類の一体性を確信することを意味します。また、バハイになることは、宗教は常に進歩を続け、分裂のためではなく和合と調和のために存在することを悟ることなのです。すべての宗教は神から出たものであり、その本質と目的において同一であることを認めることがバハイの信仰の礎です。その上に立って、我々の生きるこの時代における神の顕示者はバハオラであることを認めるのです。過去の顕示者と同様、バハオラは現代に生きる人類のために喜びと調和の新しい時代を開くべく出現されたのです。バハイになるということは、自分の心の中にバハオラの愛を発見し、その愛を大事に育てるということです。この愛を確信できればバハイなのです。儀式も洗礼も、名前の変更も、バハイになるためには必要ではありません。問われるのは信念と行動なのです。アブドル・バハは次のように言われています。「バハオラの教えの通りの生活を送っている者は、既にバハイなのです。」

バハイの目的は、人類に奉仕し、この世に調和と幸福をもたらすことです。バハイは人々の心を変えようと努めています。心を変えるということは、神の言葉の威力に頼る以外には不可能です。アブドル・バハが、ある時「バハイとは何ですか」と尋ねられました。アブドル・バハの答えはこうでした。「バハイであるということは、全世界を愛し、人類を愛し、人類に奉仕しようと努力し、世界平和と地上のすべての人々のために働くことを意味します。」

磨かれた鏡は光を忠実に反射します。しかし、その表面が曇っていれば、なにも反射されません。バハイが他の人々に自分の信じることを伝えようとするのは、偏見、憎悪、敵意の塵を人々の心の鏡から拭い去ろうという試みです。心の純粋な人々が、真理の太陽の光に接する時、彼らは大いに光を吸収し、それを他人に反射するのです。

世の中には、常日頃から現在の新時代にふさわしい新しい教えを追い求めている人が大勢います。心の中では、世界がなにを必要としているかを気付いていても、それをどのようにして現実のものとするかが分からないのです。そうした人がバハオラの教えと出会う時、自分がかねてから求めていたものを発見し、同じ目標を求めて世界的な規模で努力を重ねている活力に満ちた共同体を見い出すのです。バハオラのことはなにも知らずに、彼らは神がこの時代に送るメッセージを既に心の中で聞いていたのです。こうして真理の太陽の光線を受けて、彼らの心の鏡は大いに輝き出すのです。

さて、正式にバハイとなるためには簡単な手続きがあります。登録用紙に住所氏名を記入し署名を添えて、その国の全国精神行政会に届けられます。署名することによって、自分がバハオラに従う者であることを宣言し、世界各地に広がるバハイ共同体の一員として歩み出すのです。署名はまた、バハイの機構を通じて人類に奉仕することの意志表示でもあります。署名済の登録用紙は、地方精神行政会を通じて全国精神行政会に送られます。その市町村に地方精神行政会がない場合は、直接その用紙を全国精神行政会に送付します。

バハイは人類に奉仕し、人類のために祈りを捧げます。数多くの美しい祈りの中からアブドル・バハの「人類のための祈り」を最後に記します。

おお憐れみ深い主よ、あなたは同じ元親からすべての人類を創りたまい、人類が皆一つの家族に属することを定めたまいました。あなたの聖なる御前では、人類はすべてあなたの僕であり、あなたの神殿のもとに守られるものであります。万人はあなたの御恩恵の食卓に集い、あなたの摂理の光に照らされております。

神よ、あなたはすべての者に親切に在し、すべての者を養いたまい、すべての者をかばいたまい、すべてのものに生命を授けたまいました。あなたは万人に例外なく才能と能力を賦与したまい、人類は皆あなたの御慈悲の大海原に浸っております。

おお憐れみ深き主よ、すべての者を一つに結びたまえ。そして人類が皆互いを同族とみなし、全地球を一つの郷とみなしますよう、諸々の宗教を調和させ、国々を一つに結びたまえ。人類が皆完全な調和のうちに住むことができますよう願いまつる。

神よ、人類一体性の旗じるしを高く掲げたまえ。

神よ、最大なる平和を確立したまえ。

神よ、人々の心を一つに結びたまえ。

おお親切なる父にまします神よ、御愛情の芳香により我らの心を喜びに満たしたまえ。御導きの御光により我らの眼を輝かせたまえ。聖なる御言葉のメロディにより我らの耳を楽しませたまえ。あなたの摂理の砦に我ら皆をかくまいたまえ。あなたは許したもう御方に在し、全人類の短所を許したまう御方にまします。

完